VIRINA REKONSTRUO

女性改造

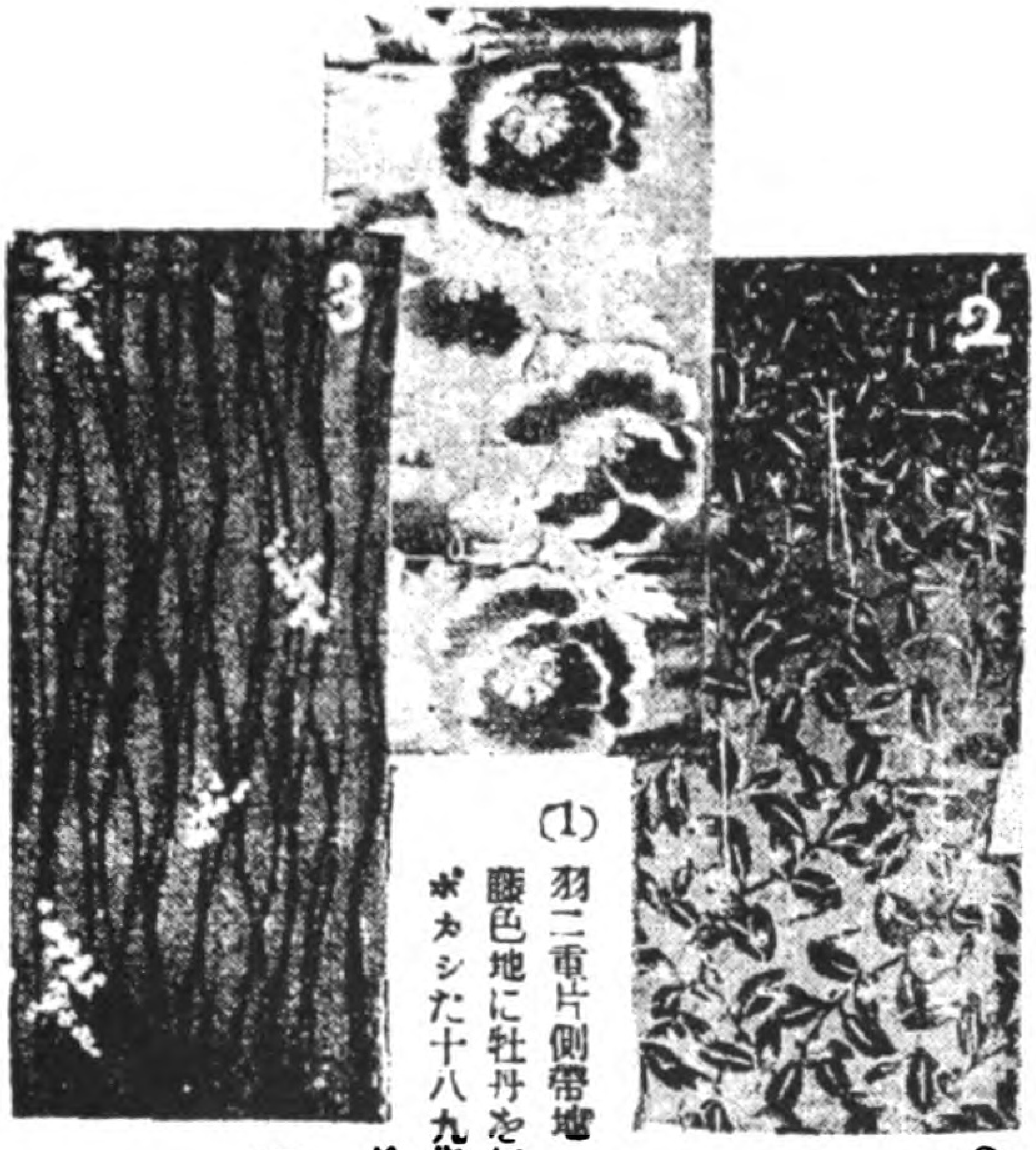
大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十一年十一月一日發行大正十一年十月十七日印刷納本

第一卷第二號

十一月號

1922

秋のお好み



(1)
羽二重片側帯地
鴇色地に牡丹を無線燕脂で
ボカシた十八九歳御令嬢向
拾六圓貳拾錢

(2)
小紋綿紗
花小豆色地へ渡り鳩羽の
栗葉を無線に共色にボカ
シた二十二三歳御婦人お
羽織向
卅六圓卅錢

(3)
小濱小紋綿紗
紫蘇色に共色の濃い無線
ボカシを竪に應用し鼠り
んさうの色合ひの蔦を飛
び模様に配ひ廿歳位御婦
人お羽織向
卅五圓八拾錢

東京今川橋

松屋呉服店



女性改造 十一月號 目次

口繪
ラブレーター……(三色版)
ゴトキン夫人……(寫眞版)

生のプログラム……卷頭言 一
黎明期の第一聲……厨川白村 二
自然教育の提唱……醫學博士 ストーナー 一六

結婚難と離婚流行の社會的研究
近代の社會進化と性の制度の頽廢……長谷川如是閑 二一
結婚難は離婚と一致か……神近市子 二六
離婚流行の英國……室伏高信 三三
法律道德の缺陷のみ……京大教授 宮本英雄 三五

時評
奴隷としての女……室伏高信 四三
武器問題の早わかり



印度古畫（ラヴ・レター）



ウオルストンクラフト女史（ゴドヰン夫人）
（ジヨン・オピー筆）

文學博士 米田庄太郎著（拾四版）

現代文化人の心理

定價貳圓七拾錢
送料十九錢◇四六判

文化主義、文化生活等凡そ文化なる語は今や思想界の流行語となつた。其百般の文化的事象、文化的概念を尤も平易に解説した快著。つまり現代文化を研究する人の第一に手にすべき文化哲學の手引の樣な著書。

文學博士 米田庄太郎著

リッケルトの歴史哲學

九版
定價四圓七拾錢
送料廿三錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

改造社出版目錄

◇文學博士 醫學博士 榊保三郎著
學齡より丁年迄の 精神發育研究

定價四圓 送料廿七錢 四六倍版上製

四版

著者が十一ヶ年を費して研究した世界的權威の大著子で、六歳より廿一歳までの兒童の精神發育を研究した空前の大名著、小學校、中學校には一書を備付くる要がある。本書によりてのみ兒童精神の推移は判明すれば也。

◇片山潜著
自傳

定價壹圓八拾錢 送料拾五錢 四六版上製

四版

赤色露西亞に於てレニン、トロツキーと同等待遇を受けつゝあつた氏は最近第三インタナショナルの南北亞米利加の總指揮官となつた、我有史以來主義の爲めしかも無産者の味方として世界的活躍をなせるものは氏を置いて他にない。本書は氏の自傳だ。

◇理學博士 石原純著
相對性理論の諸斷面（全五冊）

第一輯 定價八拾錢 送料拾壹錢

新刊

アインスタイン全集と共に今回石原純博士によつて企劃されたる、パンフレツト「相對性理論の諸斷面」はアインスタインの學說を研究するものゝ何人も一讀すべき有益の書であります。

◇ラッセル原著 宮本鐵之助著
數理哲學概論

定價貳圓八拾錢 送料拾九錢 四六版上製

新刊

本書は努めて數學專門語を避け明快通俗に記述し、何人にも理解し易からしめたものである。文化科學と自然科學の理念と其成果を完全に認識せんとせば、先づ數理哲學の門を叩くの外はない。

◇理學博士 桑木彧雄著
物理學と認識

定價壹圓五拾錢 送料十五錢 四六版上製

新刊

アインスタインの原理は科學と哲學とを密接な關係にまで導きよせたこの物理學上の新原理が惹起した空間や、時間の考方の變化は明かに哲學上の問題である、本書は實に科學と哲學との密接な關係につき博士が蘊奧を傾けたものだ。

◇文學博士 米田庄太郎著
リッケルトの歷史哲學
文化哲學叢書第一篇

定價四圓七拾錢 送料廿三錢 四六版上製

八版

新獨逸の青年をして、眞に蘇生の思をなさしめたのは新理想主義哲學だ、ハイデルベルヒの彼の講座には、單に新獨逸青年のみならず實に世界の碩學が雲集してをる、彼の哲學を我が米田博士が懇切に解說されたのが本書だ。

◇文學士 板垣鷹穗著
新カント派の歷史哲學
文化哲學叢書第二篇

定價壹圓五十錢 送料拾五錢 四六版上製

四版

本書は歷史哲學の入門書として書かれ、從來の歷史哲學が辿つて來た大體の徑路を瞥見し、新カント派の學說を中心として現代の歷史哲學を概觀したものだ、著者は若き哲學者として鐵中の錚々たる人である。

VIRINA REKONSTRUO

NOVEMBRO 1922

生のプログラム

何れの國の女性とここに特定して云ふのではないが、女性は男性に比して獨立、自由の思想に缺けてゐるのは爭はれぬ事實です。『あなたは生涯どんなにして生きますか』とか『一生にどれ丈けの事業を遂げらるるつもりですか』と質問したとき、立ち處に一生のプログラムの解答の出來る人があらうか。また、數百萬の女性中に豫じめ全生涯のプログラムを構へ、そこに向つて自分を出發してゐる女性が幾人あらうか。

ただ單に、母としての責務のためとか、御國のためとか、人類のためとか曖昧な抽象的な行進曲に向つて、その日その日を歩いてゐるのではなからうか。こんなことでいつになつて眞に自分の姿を摑み得ようか、奥深い眞理の發見ができませうか。

講演會の流行、文化と名のつく圖書の賣れ行が殆んど空前であるのは嬉しいが、さてその窮極にどんな影響を見せてゐるでせう。ただ〳〵『物識り』になつた以外に、深刻に自分がどれほど社會的に意義づけられたでせう。日本の知識階級の人々が、實行力に乏しいのはただ知識を知識として歸納するの弊から生ずる。それを自分のものとし、自分の血液となし得ぬ短所が日本女性に著しく感じられる。

私はすべての女性にできるだけ早く一生涯に執行すべき事業の豫定案をお立てなさることをお奬めする。そしてそれを推敲し、精錬する事によつて自分の姿と自分のなすべき事業が明確に把握さるることと思ひます、ボンヤリしてゐては一生涯自分と云ふものを見出すことは出來ません。自分を見出すことの出來ぬ女性には自由も、解放も永遠に訪れて來ないでせう。



黎明期の第一聲

―ゴドヰン夫人ウオルストンクラフトを憶ふ―

厨川白村

時として私は考へた、社會改造への唯一の道と手段とは、先づ婦人の新生、向上、擴大、强壯に待つべきだと。

―ウオルト・ホヰトマン―

女もまた人類の一部として、自らを改造する事によつて、世界を改造すべく努力すべき時が來た。

―ゴドヰン夫人―

一

人間は賢さうに見えても意外に馬鹿な者である。しばく〜自分たちが人間である事を忘れて、道具になつたり、畜生になつたり、奴隷になつたりして平氣でゐる。文藝復興期(ルネツサンス)は人間發見の時代だと人は云ふが、古來三千年の文化發達史は要するに人間が、自分たちの人間である事を忘れたり思ひ出したりして來た歴史を語るに過ぎない。もし近世史を人間解放の歴史なりと言ひ得べくんば、更に遠く溯つて三千年四千年の歴史を回顧せよ。誰しも夫れが束縛幽囚と自由解放との交錯である事を見ると共に、同時にまた此歴史が人間忘却と人間發見といふ奇怪至極な事實の交互錯列である事を知るであらう。

今しばらく他の點は措く。婦人と子供とが立派な人間であると云ふ明確な事實を發見して以來、まだ百年あまりにしきやならないとは、考へて見ると驚くべき事だ。すべての近代思想の源泉だと目ざされるルッソォですら、女はやはり男の道具であるとしきや考へてゐなかつた。盛に人類の自由平等を說きながら、婦人も亦た人である事に氣づかなかつたルッソォは、今日普通選擧を叫びながら、婦人參政を問題外におく者と先づ同じ程度のあたまであつた事は、一寸面白い。『女こども』『女子と小人、』さう云はれて、恰も人間以外の者のやうに扱はれながら、愛犬の如くに可愛がられ甘やかされつつ、侮蔑せられ無視せられてゐた婦人と小兒とが、貴き人間であると云ふ大發見をするに至つたのは、西洋では十八世紀後半ロマンティシズム勃興時代以後の事だ。日本では、……さあ何と書いて可からうか、まあ三年か五年か、それとも、も少し前からか。否な今日でも、『まだ』と答へて可いのかも知れない。

かう云ふ大發見をなし得たものは、勿論文藝上の偉大なる天才であつた。それは、小兒の無邪氣さに、偉大なる神性をみとめた神祕詩人ヰリアム・ブレエクであり、『小兒は大人の父なり』と歌つた自然詩人ワァズワァスであつた。生れてから日なほ淺く、天國に近く生きつつある小兒は、やがて年を經て大人となる。天堂に近く生きてゐた子供時代のたふとき自由性と美しき人間性とは、人の世の穢れに揉まれ絆(きづな)に縛られて、日ごとに年ごとに失はれて行く。さかしらな俗惡な大

人に於て見られなくなつた自然愛慕のこゝろ、生活享樂のよろこびは、無邪氣な小兒時代に於てこそ見られ得べきだ。ちかごろ日本でも、急に思ひ出したやうに、兒童の自由畫や、童謠に深い意味を見出すやうになつたのも、つまりは十八世紀以後ロマンティシズムの文藝思潮の末流を掬むものに他ならない。

人は幾千年前から雷鳴を聞き電光を見ながら、それが陰陽の電氣である事を知らなかつたやうに、『女こども』が人間である事にも氣附かなかつたのだ。婦人と子供とが人間だと云ふ事を知るに至つた此發見は、前世紀以來の思想文化の上に現はれた多くの價値轉換の一つではあるが、發見としては確かに、ラヂイウムや電氣や電子運動の發見よりも、更に驚くべく偉大なるものであつた。

二

婦人もまた男子と同じく人間であるからには、解放せられなければならない。この事を最初に考へた者は、哲學の方面に於て佛蘭西のコンドルセエのやうな自由思想家があつた。しかしながら、實際の婦人運動のうへに最初の動機を與へ、一卷の著書によつて忽ちにして電波のごとき感激を一代の人心に傳へた其最初の第一人者は女であつた。十八世紀の終に近くすべての自由解放思想の黎明期とも云ふべきロマンティシズム勃興時代に、その時代の思潮が生んだ一人の女性であつた。婦人解放絶叫の第一聲が先づ婦人から出たと云ふ此事實は、女が先づ女の力によつて解放せられなければならないと云ふ一個の眞理を語るものとして興味あるのみならず、また動もすれば挫け易からんとする後代の弱き女性を警しめ勵ますに足る者であらう。

その一人の女性とは、メリイ・ウォルストンクラフト(Mary Wollstonecraft 1759—1797) 即ち後のゴドヰン夫人であつた。彼女の一卷の著書『女權擁護論』"A Vindication of the Rights of Woman"(一七九二年)は、婦人參政、女子教育、婦

人勞働、結婚、母性などのすべての問題にわたつて、後の婦人運動のために最初の暗示と啓發とを與へた點に於て、近世の思想史上最も注目すべき述作の一つである。日本でも最近に起らんとしつゝある婦人運動が、若し上すべりの空騒ぎでないならば、先づこの運動の源流に溯ぼつて、その史的意義を明確にしてかゝる必要があるだらう。すべての溯源的研究を學徒の閑事業に過ぎずと見るが如き淺薄輕佻の態度を以てして果して何が出來るだらう。

しかし文藝の研究者たる私をして、いま此メリイ・ウオルストンクラフトに就て語るに至らしめたのには、また別の由來がある。

ことし千九百二十二年七月八日は、世界最大の抒情詩人であり、革命思想の巨人であつたシエリイが、伊太利の海に溺れて死んだ百年祭に當る。このシエリイの細君メリイは、即ちウオルストンクラフトと、その良人たる社會改造論の先驅者ゴドヰンとの間に生れた娘であつた。今日私たちがシエリイの詩篇を少し詳しく讀まうとするとき、その夫人の筆に成つた註疏（ノオツ）が、此上もなき研究資料である事は、英文學を學んだ人の誰しも知る所である。また彼女が年わづかに十七歳のとき、ゼネヴァの湖畔で、バイロンやシエリイと懸賞で競爭して作つた小說『フランケンスタイン』は、鬼氣人を襲ふ妖怪談として、今日なほ忘れられて居ない作品である。私がこゝに語らうとするウオルストンクラフト女史は、即ちこの才藻ゆたかなシエリイ夫人を生んだ母であつたのだ。そして娘を生むお產の爲に、女史は早く死んだのであつた。

次にウオルストンクラフトの良人であり、またシエリイ夫人の父であるヰリアム・ゴドヰンに就ては社會問題に關する研究の盛な今日、わたくしが玆に說くまでもなからう。ゴドヰンの著『政治的正義（ポリテカルジヤスチス）』は、當時に於て一代の民心を聳動した雄篇であつた。殊にまた彼が遺した一篇の小說『ケイレブ・ウヰリアムズ』は、その藝術的價値は兎に角として、殺人事件の背後に潛む複雜な正義觀念の描寫として、また此種の心理小說の先驅として、文學史上の意義を失つてゐない。殊にゴドヰンの自由正義論は、他の多くの殺風景な社會改造說を唱へた思想家の夫れとはちがつて、たゞ理窟ばかりを列べた樣な

物ではなかつた。ゴドヰンの説には常に『愛』が改造論の基調をなして居た。愛を根本とした自由な新社會を彼は理想としたが故に、ゴドヰンの所説には必ず『詩』があつた。此點が詩人シエリイに向つて最も偉大な感化を與へた所以だ。シエリイの妻メリイは、かくの如き父を有し、ウオルストンクラフトのごとき母を有し、そしてまた世界最大の革命詩人をその良人としたのであつた。先天的にはその血統に於て、後天的にはその周圍を繞る人々の感化によつて、シエリイ夫妻は、かれ等の生命の藝術を大成し得たのだ。

三

荊棘を切り開いて新しい道を行かうとする先驅者の生涯は、いつも苦悶苦鬪の一生だ。思想と愛慾と物質との間に悩みつゝ悶えつゝ、かれらの實生活それ自らが既にいつも血と涙で書き上げられた悲慘な藝術品である。殊に全然無理解な世間を相手にして、弱き一人の女性が自分の新しい道を進まうとするとき、運命と社會との恐るべき迫害は免る可からざる者であつた。前世紀以後の婦人解放運動のため、先づその最初の道を拓いたウオルストンクラフト女史の閲歴は、即ち斯くの如き悲慘を極めたものの一つであつた。

婦人覺醒のために最初の第一聲を放つたやうな女は、おほかた例の殺風景な理窟ばつた『第三性（サード・セクス）』の婦人であつたらうなぞと思ふ讀者があるならば、それは大間違ひで、ウオルストンクラフトの生涯は、愛の一生であつた。その『愛』のためにこそ、彼女は最も多く苦しみ悶えたのであつた。

ウオルストンクラフトは、一七五九年の春に、英京倫敦の町はづれホツクストンに生れた。彼女の父は大酒飲みで近所の評判も悪く、その三男三女ある子供の教育に留意しなかつた事は勿論、養育の義務すら完全には果さなかつた。こんなわけでウオルストンクラフト女史は、十九の歳から家庭教師やら學校教員やらを勤めて、辛くも生計の道を講じなければ

ならなかつた。文筆を以て世に立つことは、彼女のかねぐの志望であつたが、年三十に達するや、いよ〳〵飜譯と著述の傍ら、或る雜誌の校正係をして、見すぼらしい生活を營むことになつた。前に云つた『女權擁護論』の世に出たのは一七九二年、卽ち彼女が三十二歳のことであつた。

この年の終りに彼女は巴里へ赴いた。目的とする所は、佛蘭西大革命の視察と、佛蘭西語の學習とであつた。おもへば當時の歐羅巴は一つの大きな轉換期に臨んで居たのだ。世界は米國獨立戰爭と佛蘭西革命と、この二つの大動亂によつて、つぶさに人生の痛苦を味つて居た。米國獨立戰爭が勃發するや、若き血に燃えた佛蘭西の新思想家たちは、身を挺してその救援に赴いた。そして米國の獨立が愈よ確保されるや、彼等が眼前に目睹し來つて大西洋彼岸の美しい新理想を、大西洋のこなた——彼等が祖國の佛蘭西に於ても、建設したいとの希望から、あの血腥い佛蘭西革命が起つたのである。今度の世界大戰に於て、佛蘭西が獨逸軍國主義の脅威を蒙るや、米國が敢然としてその救援に赴いたのは、その建國當時に於ける佛蘭西の好意に報いたのだとも云はれてゐる。

話が少しく橫道に這入つたが、佛蘭西革命當時に於ける米國人に對する佛人の熱狂さは今日ではとても想像も附かぬほど烈しいものであつた。この樣な雰圍氣の中に住んで居たウォルストンクラフトは、ギルバート・イムレーといふ米國の退職軍人といつしか熱烈な戀に落ちた。イムレーは悧巧な拔目のない男で、當時の動亂を當て込んで、一攫千金の利を夢みながら佛蘭西へ渡つて來た男であつた。熱い接吻がいつしか二人の共棲となり、やがてファンニーと云ふ兒をさへ擧げた。しかし二人の樂しい夢はいつまでも續かなかつた。イムレーは早くも彼女に秋風がさすと共に、一再ならず仇し女をこしらへた。

ウォルストンクラフト女史は、愛兒ファンニーの爲には、夫の無情をもぢつと辛抱して來たが、夫の不行跡がいよ〳〵動かすべからざる事實であることが確められたとき、彼女は遂に自ら死を決した。

それは木枯し吹きすさぶ十一月の或る夜であつた。最愛の夫に振り捨てられて今は生き甲斐もない彼女は、テムズ河畔のバターシーの橋のたもとに立つて、人なき折を窺つて居た。いつまで待つても絶間のない行人の足音に、彼女は遂に意を決して端艇を借り入れパットニーまで漕ぎ出した。身に沁むやうな雨交りの秋風に吹き曝されて彼女は橋上を幾度となくさまよつた。これは降りしきる雨で衣服を濡れ重らせてから水底深く身を沈めんが爲めであつた。かくまで思ひつめて決行した覺悟の自殺ではあつたが、彼女は遂に道行く人に救ひ上げられて、復もや死にまさる苦惱に滿ちた實生活の行路に呼び戻されたのであつた。この事あつて後數週にして彼女はイムレーに對する思慕の情を斷つて、永久に彼と夜を別つ事となつた。

いま乳呑子を一人かゝへて、さびしい人生の行路に行き暮れた彼女は、またもや文筆によつて糊口の資を得るほかはなかつた。幸にして當時の文壇は、このあはれにも又うつくしき、獨創の才ゆたかな彼女を迎へるに吝なるものではなかつた。即ち彼女の第二の良人ヰリアム・ゴドヰンに會つて、そこに『愛』の新しい生活が開かれるに至つたのは此時からであつた。さきの夫のやうな輕薄才子とちがつて、ゴドヰンは即ち上に述べたやうな一代の思想家であつた。

二人は幸福に滿ちた結婚生活を倫敦のかたほとりサマアズに營んだ。しかしゴドヰンは飽くまでもその自由と個人主義の主張を以て立てる人、世人のするやうな因襲結婚の形式はとらなかつた。婚禮などといふ儀式は固より排斥した。ゴドヰンが其『政治的正義』のうちに説ける結婚論から云へば、結婚は個人の自由を奪ひ、女を一つの財産として所有する事だ。結婚制度の廢止は何等の惡結果を齎す虞れは無いと云つてゐる。それを彼は自ら勇敢に實行して、世の因襲に向つて激烈に挑戰した。彼は隨分極端に考へたもので、夫妻同棲するからこそ、鼻にもつけば、また夫婦お互に餘計な干渉をして、双方の個性を傷つけるのだと云つて、最初は女史と別に、その近所の或家に部屋借りをして居た。晝のうちは互に手紙をとりかはし、また各々自分たちの文筆の業に從事し、おそく晩餐の食卓だけを共にするのであつた。だから今日傳へられ

てゐる二人のあひだの遣り取りの手紙は、實に類ひなきばかり奇妙な物で、夫婦の間でありながら、『あなたの御本を拜借いたしたいのです』だの『今夜はお遊びにいらつしやい』だのと、これが夫妻關係の生活とは、とても思はれないやうな言葉に滿ちて居る。中でも特に奇拔なのは、ウォルストンクラフトからゴドキンに與へた次の一文である。『わが友ゴドキン樣。昨夜は芝居でお目にかゝつたわ、ね。わたしの方を向いてお笑ひになつたやうでしたが、でも振り向きもなさらずにお出ましだつたわ。けふは四時半にきつといらつしやい。お待ち申して居ります。』

しかしこんな生活も長くは續かなかつた。一七九七年三月二十九日彼等は敎會で正式の結婚式を擧ぐるの已むなきに至つた。と云ふわけは彼等の愛の結晶が產れたために、それを『私生兒』となすに忍びなかつたからである。彼等は遂にその所信の一部を枉ぐるに至つた次第をこまぐ〵と述べて、友人達に結婚の披露をしたのであつた。

一七九九年八月三十日ウォルストンクラフト女史は第二の兒を擧げた。その名はメリー、是れが卽ち前述のシエリイ夫人となつた婦人である。しかしウォルストンクラフトは、この產褥から再び起つ事が出來なかつた。夫の手篤い介抱も知りあひの醫師の親切な看護も、遂に施すすべがなかつた。出產後十日にしてゴドキン夫人は溘焉として世を去つた。歲わづかに三十八歲。夫ゴドキンの遣る瀨なき悲痛の思ひは、彼が友人に送つた當時の手紙に、今もなほ後人の袖を絞らせる。

彼女の遺骸は、オールド・セント・パンクラス寺院の境內に葬られた。後年彼女の忘れ形見のメリーと詩聖シエリーとが甘い戀を囁き合つたのは、その母なる才女の墓畔に暗い影を落す枝垂柳の蔭であつたと傳へられて居る。

四

私は上にウォルストンクラフトの一生を略述したが、これ丈では、ごく上つつらから見た彼女の外的閱歷を語つたに過ぎない。痛ましい慘めな、然しながらまた輝かしい彼女の內生活には、まだ說き及ぼさなかつた。いま私は更に史乘に殘

された彼女の經歷を辿りその裏面に潜める內面生活を採る事によつて、更に新しい光によつて彼女の悲痛苦惱の生涯を眺めたいと思ふ。

先づ第一に私は言ふ、彼女の生涯を貫いたものは「愛」の一字であつた。波瀾曲折に富める其一生を通じて、常に博大宏遠なる人間の愛が、思索に於ても實行に於ても、その基調をなして居た。しかし女として最も偉なりとすべきところは、彼女が徒らに空疏な大風呂敷を擴げて、遂に人間愛の何たるを知らない凡常な人道主義者流に墮ちなかつたことである。彼女は謂ふ所の博大な人間愛が、先づ個人愛から出發しなければならないことを信じて、之を强調して居た。先づ彼女の言ふ所を聞くと、

『人間愛といひ博愛といふも、常に個人愛に基礎を置かなければならない。でなければ、それは闇夜の空に尾を曳く流星のやうに果敢ないもので、眺め讃へる隙もなう消え失せる。私は信じてゐる。自分の父母、自分の兄弟姉妹、自分の家畜をも愛しないやうな人から、どうして人類愛を期待することが出來ようぞ。』

これは彼女の著書『女權擁護』第十二章にある言葉であるが、彼女はその實生活の上に於ても、これを文字通りに實行し敢行した女であつた。

曩に私は、彼女の父が大酒家で子女の敎育すら碌々出來ず其養育にも事を缺いたことを說いたが、この亂暴な父と不幸な一家族との間に立つて、陰になり日向になつて、幼い弟や妹を保護した者こそ、後年婦人解放の最初の絕叫者たるべき彼女であつた。又泥醉の父が母を打擲せんとしたとき、身を以て母を庇ひ、その鐵拳を引き受けたのも彼女であつた。父の暴行はその愛娘をも容赦しなかつたので、彼女は度々起る家庭波瀾の仲裁者たるべく、夢まどかならぬ幾夜を寢室の戶口に佇んだことであつたらう。

弟妹が漸く長じて、しかも糊口の道に窮するや、常に縋り附いたものは、姉なる彼女の恩惠であつた。彼女の深き愛の

心は、親友ファンニー●ブラッドが葡萄牙リスボンに病を得たとき、敢然彼地に赴いて友の臨終の床を看護するに至らしめた。彼女が家庭教師として一時身を寄せてゐたキンズバラ家の令孃が、後年ヤウントキヤセル夫人となつてピサに遊び偶々彼女の遺子であるシエリー夫人即ちメリーと邂逅するや、往年の恩師の面影を偲び出で、涙に暮れたと云ふ話も、ウオルストンクラフト女史の愛が、どれほどまで其周圍に深くまた遠く及んで居たかを明確に證する者だと思ふ。

イムレーに對する報はれなかつた愛の痛ましい物語は玆に再び繰返す必要はないが、前述した通りその不幸な戀愛の形見であるファンニーに對する深き母性愛の爲めには、イムレーの無情をも堪へ忍び、又第二女メリーに對する愛のためには平素の主義主張をも枉げて、結婚の形式をさへ履んだのであつた。

しかし彼女の愛の一生に、最も輝かしい光彩を放つものは、何と云つてもゴドヰンとの戀愛關係である。はじめ彼女がゴドヰンに出會つたのは三十七歳のとき、そしてゴドヰンの方は四十歳であつた。ふたりともに齡すでに不惑に近く、ゴドヰンは、社會改造論の急先鋒として、極端な個人主義の熱心な提唱者として、又その忠實な遵奉者として、負けじ魂と不羈獨立の精神とを以て一世を動かした人。ウオルストンクラフトもまたホレス●ウオルポオルをして『女裝の山犬（ハイエナ・イン・ペチコウツ）』と罵しらしめた程に自尊心の高い婦人であつた。之を思ふとき、二人の戀愛史は、浮はついた青年男女の戀でなかつた丈けにそれが吾等に敎ふるところも亦た多いのである。

『われら二人の間に萌ざした愛の芽は、同じ速度を以て二人の心の中に生長して行つた。いかに鋭い觀察者にとつても、二人のうちいづれが先きにいづれが後に愛したか、それを斷言する事は困難であつたらう。……かくして機漸く熟し、互の胸のうちを明かし合ふ段になつても、或る意味に於ては、ふたり共に明かし合ふべき事柄は何も無かつたと云つてよい。』

此言葉はゴドヰンが當時の追懷であるが、二人の間に成り立つた愛が、如何に自然な徑路をとり、又どんなに個人の自由の上に基礎を置いた至醇なものであつたかが、之によつて十分に知られると思ふ。

かく理想的な事情の下に成立したふたりの結婚生活は、それがまた理想的なもので、妻は夫に渾身の愛を捧げ、夫は又妻を敬愛し尊重し、自分の誇ともして居たのであつた。後年ゴドヰンは當時の結婚生活を次のごとくに言ひ現した。

『われ等は人類に許される限りの幸福を味つた。しかし記憶せよ、われ等が幸福であつたのは、私が彼女の智力と高尙で寬大な彼女の氣質を尊敬して居たからこその話であつた。われ等が味つた幸福と云ふものは、とても世間並みの愛情ばかりで達成されるやうなたちの者ではなかつた。』

私は、ふと沙翁の悲劇『リヤ王』の一節を思ひ出す。頑迷な老王リヤの怒りを買つた美しいコオデリアに對して、彼女を引取らうと申し出でたフランス王が、尊敬こそは愛の基礎であると說く所があるが、尊敬とは、云ひ換へれば相手の人格を認めると云ふことである。かゝるとき兩性關係は夫唱婦隨などと云ふ不平等關係から離脫して、人格あり個性ある『人』と『人』との對等關係に移るのである。この自由と平等との光輝に祝福された結婚生活こそは、私の常に說く人格を基礎として全我的戀愛の賜であつたのだ。

ウオルストンクラフト女史の『愛の一生』は、特に兩性間の相愛を以て人間性の根本的事實となし、又『人間生活に於ける至高の悅び』(ゴドヰンの言葉)となしたことによつて、いよ〳〵光彩を加へたのである。

ウオルストンクラフト女史の戀愛生活には、彼女がイムレーと別れてのち、そしてまだゴドヰンとの戀に落ちない前にも一つ、畫家フユゼリに想を寄せた痛ましい失戀の挿話が傳へられてゐる。そのころ出版所のジヨンスンの家には、多くの文士や美術家が出入してゐた。彼女がゴドヰンと初めて相識つたのも此處であつたが、その前にフユゼリに切なる思を寄せたのであつた。しかしそれは遂に此畫家によつて報いられなかつた悲しい失戀の物語として終つてゐる。約一世紀を隔てゝ後、大詩人ロバアト・ブラウニングが、この挿話を材料として、女史の此失戀の心持を書いた、一篇がある。それは必ずしも嚴密なる史實に據つたものではないが、あの激しい婦人解放の絕叫者が、その半面に於ていかにも『愛』に生きる女ら

しい悲戀の心境を示すものとして、わたくしは今その一節を引用する。

Oh but is it not hard, Dear?
　Mine are the nerves to quake at a mouse;
If a spider drops I shrink with fear:
　I should die outright in a haunted house·
While for you did the danger dared bring help—
From a lion's den I could steal his whelp,
With a serpent round me, stand stoch-still,
Go sleep in a churchyard,—so would will
Give me the power to dare and do
Valiantly——just for you!——　R.Browning, *Mary Wollstonecraft an Fuseli.*

（大意）　あゝ、されど、君、そは難きにあらずや。鼠を見てすら震ふはわが心。蜘蛛の落ちろを見てさへ恐れ、幽靈屋敷にも入らば忽ちに死なんわれなり。しかし、君が爲とあらば、——危險を冒す事が甲斐あるわざならば、——虎穴に入つても虎兒を得む。蛇を身に卷いても、ずつと立つを得べく、墓原にて眠る事をも得るなるべし。かく無理にも押して爲し得る力をわれは得べけむ雄々しくも。そは唯だ君がため。

絶間なく胸奥に燃えてゐた愛の靈光は、彼女が遭遇した千波の浮世の荒浪も、之を消すことが出來なかつた。その最後に至るまでも保持した溫い深い愛の心は、睿智に輝く此女の麗容に著るしく現はれた。詩人サウジは彼女の明眸を讃へ、夫ゴトキンは、その魅するが如き慈愛の微笑（ほゝゑみ）を讃嘆した。いま英國國民肖像畫堂の壁上を飾れる彼女の溫容は當時の畫壇の異才ジョン・オピイの筆に成れる物だ。また寫眞といふ物のなかつた時代に、彼女の生き〱した姿が、此偉大な肖像畫家の筆に描かれて不朽に傳へられてゐる事は、獨り婦人解放史を語るものゝ喜びのみではない。（卷頭挿繪　照）

五

ウォルストンクラフト女史の述作は、『娘の教育に就ての考察』と題した小冊子(パンフレット)をはじめとして幾種かあるが、眞に近世婦人運動の源泉となつたものは、云ふまでもなく前掲の『女權擁護論』である。いま此名著の内容を紹介するに先きだつてわたくしは玆に二三の興味ある事實に讀者の注意を促したい。

『女權擁護論』は一七九二年の刊行だから、彼女がまだゴドヰンと結婚する前に書かれた物である。從つてその夫たる立派な思想家の感化と助言とを得て出來た物でない事は遺憾に思はれる點ではあるが、それだけまた強く彼女の個性と獨創性とが此書に現はれてゐるわけである。おもへば、近世の思想史上に大波瀾を捲き起した婦人運動――しかも其の第一頁を飾れる此論著が、毫も男子の力を借りないで、しかもまた日本ならば『女大學』時代に相當すべき十八世紀の英國に於て純然たる一人の女性の力によつて書き上げられたと云ふ壯快なる事實には甚大の意義があると思ふ。殊にまた彼女の閲歷を想うて此一卷の論著に對するとき、思想と實行とを發行せしめる事に極めて雄々しい勇敢な生活態度を執つた女史その人を憶うて、讀者は誰しも肅然として襟を正さざるを得ないだらう。まことに此書は、あれ程までに慘澹たる實生活の苦みを嘗め盡したウォルストンクラフトが、みづからの體驗と思索とを血と涙とを以て書いた生命の記錄だ。そこに空理空論は見られない。(たやすく此名著の原書を得たいと思ふ人に、私は「The Scott Library」の第七十卷目にある廉價版をお薦めする)

婦人解放と云へば、誰しも先づイブセンの『人形の家』を想ひ起すであらう。そしてあのノラがヘルマアに向つて云ふ言葉、『自分が自分に對する義務です』の一語が想ひ當るであらう。そして此言葉を以てウォルストンクラフトの名著の次の一節と對比せられよ。

『女性全般に就て云へば、かれらの第一の義務は合理的な生物として、彼等自身に對する義務である。………この義務を遂行せずに濟ますやうな種類の生活は、必然的に女性を墮落せしめて、單なる人形となす者である。』(『女性擁護論』第九章)

囚はれた女を『人形』と呼び、『自分が自分に對する義務』といふが如き言葉は、今日に於てこそ極めて陳腐平凡であるが右の一節によつて此等の語の出典がいづくにあるやを知るとき、そこにはじめて此思想の源流をも突きとめる事が出來る。英語の書に精通する事ふかき批評家ブランデスを通うして、イブセンはミルの『女性の屈從』を見、更に溯つてウォルストンクラフトの著にも接したのであらう。

此『人形』といふやうな言葉が今日すでに少しも珍しくないと同じやうに、ウォルストンクラフトの名著も亦た、今日にして之を見れば、誰でも考へてゐるやうな、何の奇も無いわかり切つた内容の物に過ぎない。これが當時に於て矯激の論議と見なされたことの方が寧ろ不可思議だと見ゆる迄に、常套の語に滿ちてゐる。しかしながらまた他の一面から云へばルッソオのごとき大思想家ですら婦人の解放の事に氣づかなかつた十八世紀末の西歐は、日本の維新以前と多く異る所なき奴隷婦人の時代であつた。さう云ふ時代に生き、さういふ周圍の中に身を置きながら、よくも之だけの事を考へた彼だと思ふとき、また特にその説く所を自分の實生活の上にも敢行し得た一個の先覺者だとして見るとき、誰しもウォルストンクラフトの氣魄と天才とに多大の敬意を拂はざるを得ないであらう。

ゴドキンの傳ふるところに據れば、女史の『女權擁護論』は僅に六週間にして書き上げられたと云ふ。文體の如きも直截な所もあればまた十八世紀特有の美辭麗句を聯ねた所もあり、内容の排列の如き甚しく不整頓であり、また精疎一ならずして、屢々本題以外に走り、全體に統一均整を缺くところ、如何にも急いで書き上げられた一氣呵成の作だと云ふ感じがある。唯だその文字の背後に閃めく暗示と啓發とに至つては、一世紀を隔てゝオリヴ・シュライナア女史の婦人勞働論となり、ギルマン夫人の女子經濟論となり、エレン・カイの結婚論となり、パンカアストの參政運動となつて強く現代の女性を動かしてゐるのである。ハヴロック・エリスが此名著を評して『近代の女權擴張論者と雖も、これ以上何等補正すべき必要を見ないだらう』と云ひ、婦人參政論者として名高いフォセット夫人もまた、この一卷の名著が婦人運動に與へた貢獻は、アダム・スミスの經濟學に比すべき物なりとまで激賞したのは、必ずしも溢美の言ではないと思ふ。

おもふに女史が、その夫、その子、その姉妹兄弟に注いだ個人愛が、更に大きく更に廣く『人間愛に向つて波打つた』ところに、此一卷が成つた事を想ふとき、たとひ其内容が今日から見て何等の警策新意を藏しないに拘はらず、私どもは、婦人解放の黎明期を告げた此第一聲に、たとへ樣もなき熱意と底力のこもれる事を認めざるを得ない。まことに此一卷こそは、十九世紀以後の新世界を建設した大きい礎石の一つであつた。そしてその礎は誰の力をも借りないで、ただ一人のかよわい女の手一つで据ゑられたのであつた。

自然教育の提唱

醫學博士 ウイニフレッド、サツクヴイユ、ストーナー

世の中には所謂自然教育が直に、一つの豫定をきめた教育制度を意味すると考へる者もある。しかし、私が私の最初の著書『自然教育』と書いたときに、私はさういふ印象を與へようとは考へてゐなかつた。

自然教育とは自然的なる教育に外ならぬ、卽ち實際的教育常識的教育である、搖籃から墓穴に至るまで、遊戯のうちに目的を達せんとする教育である。そして子供を自然的に、卽ち『母なる自然』の法則に從つて教育するがためには、先づ母親自身が教育されねばならないことを私は信ずる。母は人生の二つの大きな科目を學ばなければならない、それは自制と、義務のよろこびとである。そしてその義務を果すためには親として訓練されねばならないのは當然のことである。いろいろ職業を習ふためには吾々は學校へ行つたり、工場へ行つたりするにも拘らず、この世の中で最大の職業——親たることについて、何の敎へられるところもないといふことは恥かしいやうに思はれる。自然は吾々に料理の仕方や、靴直しや、辯護士、醫師になることを敎へはしなかつたが、吾々を生れながら『親』として作つたものと考へられてゐるものゝやうだ。これを見れば、わが國に生れた子供のうち八人に一人が、最初の誕生日にならないうちに死に、世界中に生れる子供の半分が、十二ケ月まで生き續けないといふことも何の驚くことがあらうか。また初生兒の三分の一が、その弟妹より劣つてゐるといふことを統計が示しても、それに何の不思議があらうか。彼等はどうして劣等兒にならないことが出來よう。彼等は必然的に、唯一つの試驗たるよりほかないのである。

私たちは學校へ行つて、クワキユトル●インヂアンや、探檢の屆かない國々の土人について十分に習ふ、また(若し吾吾が敎養ある人と云はれようとするならば)一生の三分の一を費して、話すこともない言葉を學び、實用にならない定理

や公理を研究する、しかも、すぐ眞近にゐる、或は、自分自身の家にまでゐる小兒の世話については何一つとして習はないのである。

今日に於て焦眉の急を要するものは、母親養成の學校である。そして幼稚園に隨伴する母教師會（Parent Teacher Associations）は、學校と連絡をとつてこの種の訓練を與へる唯一の機關である。それ故、私は「神の惠が幼稚園の保姆の上に最も豐かなやうに（總ての教師たちが惠まれないやうにといふわけではないが）、そして、神樣が國中すべての町や田舍にある母教師會の榮えを助けて下さるやうに」といふ。最近マサチユセッツのスプリングフィールドで講演した時に無鐵砲な私は、若い男の人たちに、一番いゝ奥さんは幼稚園の先生だといつた、またわが國で一番いゝ母親たちは、母教師會の會員だといつた。

しかし母親たちがこの會に屬するといふ丈では十分でない唯一つ眞に完全なる思想は男と女との心から生れ出なければならない。父親が母親や先生と共同して子供たちを善導する最もよい機會を與へるといふことが必要である。母教師會が組織されるまでは、自分の子供たちを教へる先生に一度も會つた事がない親たちもあつた。このやうな親たちでもその子供が病氣の時に診察してもらふ醫者については實に氣を揉むのであらうが、人格を作りあげる人であり、子供たちをよくするか惡くするかについて第一の助手であるところの教師は顧慮する必要もないと考へられてゐたのである。今やすべてが變化した。親たちと先生と學校に於ても家庭に於ても結合せしめる、この大組織によつて、子供たちは親からも先生からも、より善く了解されつゝある。そしてこれが「自然教育」であるのである。何となれば、これによつて知識への道は、教師にとつても生徒にとつても、奴隷勞働の苦しさを失ひ、歡喜の歩みとなるからである。

『教育のやうに人間中で尤もよい事がこのやうに一般に嫌はれるのは何故であらうか』とは、私が常に論じ來つたところである。子供たちが活動寫眞に行くと同樣に學校へ行くことを喜んではならないといふことが、どうしてあらうか。そしてまたよい活動寫眞をすべての學校に輸入して、子供たちを喜ばせ、子供たちの心に溌剌とした印象を與へ、視覺の記憶を訓練し、また生徒にも先生にも多くの時間を節約させることが、いけない理由はちつともないのである。時間の節約者は、生活の節約者である。子供たちに面白い映畫を見せたりまたその映寫されたものを自分の作つた道具立で演出させた

りすれば、世界の諸國やその古今の出來事について知識を與へることが出來るのに、歷史や地理を習ふために幾年をも浪費すべき理由がどこにあらう。また吾々は、次の學級へ上れば忘れるやうなことを何故子供たちに敎へるのだらう。近頃私は小さな子が、四年級で習つたことを皆忘れてしまつたことを得意氣に話して、自分が立派な五年生になつたと思つてゐるらしいのを見た。敎師たちも、休暇中に子供たちが學校で習つたことを忘れてしまふのを認めてゐる。また私はこんな簡單な質問を出して見ようか。私たちは何故、九ケ月の間は木に水を灌ぎながら殘りの月の間日乾しにして置くのだらう。眞の敎育とは物の性質とその利用とを習ふことである。そして日々絕えずこの知識を獲て、それを實際に用ひるといふことは實に必要である。

敎室にゐる生徒の數が減ぜられ、周圍の美しさと、學習方法の面白さと、また授業時間の短縮によつて、靜かな樂しさが保たれてゐるならば、丁度嬰兒が乳房を求めて泣くやうにこの知識を渴望するだらう。ところが多勢の子供が一つの部屋に寄せ集められ、しかもその部屋は惡臭がするほど不潔で醜穢である。敎師は鼻糞のやうな、僅かな俸給を貰つて過度な勞働をするので、自然潑剌たることなぞは出來なくなる。子供たちは時々、箱詰の鰯か、籠の中の雛のやうに詰め込まれてゐる。彼等の呼吸をするだけの餘地も、坐る所さへもない。彼等がずる休みをすることに何の不思議があらう。

敎師は合衆國政府の最高給を受ける傭人でなくてはならない。彼等は光榮の冠に値するけれども、地上に於ては數弗を受けなければならないのである。子供たちは獨立の個性たる機會を與へられねばならない。藝術的作品の如くでなしに、腸詰の切身のやうにどれもこれも同じやうに作り出す機械の中へ押し込んではならない。吾々は敎育制度にもつと個性を入れることを必要とする。一本の樹にも、丁度同じ葉が二枚とはないのに、二人の子供たちがすべての點について同樣な訓練を必要とするとは、どうして考へることが出來よう。今日の世界に天才の缺乏してゐるのは型に箝つた敎育制度の結果である。制度は精神的遊惰者を作る、自分自身で考へることなしに、羊のやうに指導者に隨ふ人々を作る。實際或る有名な心理學者は、今日の世界の人間の八分の七はこの部類に屬する、辻强盜と、銀行の頭取と新聞通信員、またはすべての事柄に於ける指導者だけが別だと云ふ。吾々すべてが指導者にはなり得ないかも知れない。しかし少くとも吾々は吾々自身に考へて、吾々の先人の狹い轍から脫することが出來る。

子供たちは試驗で虐められねばならないものだといふやう

な、矢つ張り立派な先人の見解をも棄てねばならないことを私は序に云つて置きたい。何故私達はこんな糺問の遺物を以て子供たちを苦めるのだらう。この呪ふべき試みが、世界のすべての戰爭よりも多くの人を死なしめたといふ事を私には疑ひなく思へる。現在私たちの周圍にゐる子供たちを見た、小學校の兒童のうちに、健康な幸福なもの〻、何といふ少いことであらう。試驗の時に子供たちが十分に營養を攝り、十分に眠るか否かを母親たちに問うて見よ。これらの神經を絞り取る試驗は吾々の子供たちの爲に作られたものではない。吾々は力を戮せて、彼等をこの苦惱から救ひ、また同時に、知識の旅行を面白くする妖精を連れて來て子供たちの勉强を助けてやらう。反覆音といふ妖精は記憶を助ける妖精のうちで最上のものである。毎月の日數を覺えるために「九月は三十日」を唱へない人は殆んどない。外の必要な事柄を記憶するために何故この同じ妖精を使はないのだらう。そしてこの「反覆音」を使ふ人は忘れないものなのだ。忘れるといふことは覺えるといふことではない、反覆音は覺えることを助けるのだ。

次にまた、典型的な問題——云ひ換へれば一つ一つの定理について一つの問題がしつかりと學習され記憶される時にはそれは兒童の記憶に殘るものであるが、いろ／＼の問題が、中心も無しに提出されることは唯苦しみであるばかりで、記憶はされない。學校に於ても、家庭に於ても、目的を持つて遊ぶこと、目標のある遊戲、卽ち、子供たちの興味を惹きつけて、學校の時間外にも喜んでやらせるやうな遊戲は、自然敎育の祕訣である。

しかし、子供たちを幸福に、聰明にするために最も緊要なるものは環境であると思ふ。遺傳と環境といづれが重要であるかについては多くの議論がある。一挺の鋏の二つの刃のやうに、兩方ともに有用なものではあるが、環境は遺傳を作るものである。何となれば、吾々の五感に觸れたもの、一つとして吾々に印象を殘さないものはない。美しいもの〻、醜いもの〻、高いもの低いもの、音の銳いもの低いもの、また香のあるもの、無いもの、ありとあらゆるものは、その痕を吾々のうへに殘して行く。そして實際、子供部屋も敎室も共に、唯淸潔であるばかりでなしに美しくしなければならない。敎育のための一番い〻道具をそろへた場所でなければならない何となれば、環境が遺傳を作るやうに、道具卽ち玩具は環境を作るものだからである。

もし、吾々が總ての國民の歷史を通觀するならば、子供たちは、その親たちが或は建設的な、或は破壞的な目的のために用ひた玩具を持つて遊んでゐたといふ事實を發見する。また有名な人々の傳記を調べて見ると、彼等が子供の時に弄んだ玩具が、彼等の一生の決定的因素であつたことを知るのである。ナポレオンは子供の時に大好きな遊び道具として玩具の大砲をもつてゐた。大砲は彼一生を通じての玩具であつた。モツアルトは五つの時に小さなヴアイオリンを弄び、死に到

るまでヴァイオリンを弄びつゞけた。ティチアンは子供の時に果物の汁で繪を描き遂に偉大なる畫家となつた。吾々の玩具に應じて吾々は作られる。最近の戰爭の間に、私たちは子供たちに建設的なものよりも破壞的な玩具を與へ過ぎた。玩具の劍や、ピストルは憎惡、死、破壞の金持を惹き起すものである。これ等にすべてあらゆる子供部屋から取り除かれ、その代りに建設的な玩具がとり入れられなければならない。次の反覆音の歌で、私はよい少年少女を、一番よい建設的な玩具で敎育する祕訣を歌つて見た。

We need the best for girls and boys
Fcod, mugic, pictures, clothes, books, toys
And Sonta says best toys I find
to train the body, spirit, mind,
etc
etc
......

お孃樣にも坊ちやんにも一番よいものをあげませう。
食べ物、音樂、繪本や着物
それから御本や玩具まで。
サンタクロスのいふことにや
體も、心も、魂もみんなよくする玩具には
タイプライタア、物いふ人形、
シヤトクア●デスク、縮緬紙、
ボールや繪具、色鉛筆、
鋸、木ぎれ、顯微鏡、
よい御本だの、粘土や滑車、
蓄音器まで使ふなら、
授業も遊戯になりませう。
もう少しつけ加へれば、——戰爭などは無くならう。

手提げタイプライタアで通常のキイボオドのあるものは、ブリキの兵隊の箱と同樣に、子供にも持ち運び出來るが、子供らしい考への基礎を與へるうへに於て、ブリキの兵隊よりどの位よいか知れない。タイプライタアは、たしかに、今までにない立派な敎育玩具である。子供の頭と筋肉との協同動作をさせ、讀むばかりでなしに字を綴る練習をさせるからである。この字を綴ることは、アメリカの公立學校の生徒の大部分が出來ないことなのである。タイプライタアは子供の面白いと思ふことを書きとめさせる妖精だ。この妖精は、昔の文法、——子供に規則を說きたてるばかりで、言葉を正しく話すことを敎へない文法といふものを追ひのけなければならない。若しトミイが一つの文章を十回タイプライタアで打てば、彼は言葉の正しい置き場所を覺え込んで、前置詞を文章のお終ひに持つて行くやうなことはしないだらう。

戰艦を作るよりはタイプライタアを作れ。大砲よりは人形を、彈丸よりはボールを。これが、私が總ての國民——文化に貢獻せんとする諸國民に贈る赤心より出た忠告の言葉である。

結婚難と離婚流行

社會的研究

近代の社會進化と性の制度の頽廢

長谷川如是閑

一

近代文明の特徴の一として屢結婚難と離婚の増加とが數へられる。これを單純に男女の心的傾向の進化に原因すると考へれば、それは倫理學上の問題たるに止まるのであるが、此の問題は元來性的生活の制度の進化に關聯して考察すべきもので、決して單なる道徳上の問題ではないのである。男女が互に、その倫理的感覺の發達の爲め、自由意志を壓迫されるやうな結婚の形式に不滿を感じるに至つたといふやうなことが、今までの形式による結婚を困難にして、男女の結合關係を紛亂せしめるに至つたのであるといふ風に考へるのは餘りに事態を『心的』に片づけ過ぎた誤である。性的生活の制度は、その時代の社會組織に關聯して、必然の形式を採るものであつて、此の必然の形式が、男女の性的心理を規定するものなのである。卽ち、男女は先天的に性的生活に對する一定の心理を賦與されてゐるものではなく、社會の進化に伴つて、その時代々々に於ける社會組織と一定の關係に於て成立する性的制度に依屬して、その性的心理が構成されるのである。一言でいへば、性の道徳は、性の制度それ自からを作り上げるものではなく、反對に、性の制度が性の道徳を作り上げるものなのである。而して、その性の制度は、一般社會組織と必然の關係に於て成立するもので、決してそれ自體孤立して定められるものではない。近代文明に於ける結婚の困難について考察するには、溯つて、社會組織一般と性の制度

との關係を考察する必要があるのである。

元來、結婚の制度なるものは、決して結婚を困難にする筈のものではない。結婚の制度は、夫れに依つて結婚が、此の時代に適應した形式で行はるゝ事を約束するものなのであるから、此の約束即ち制度に從ふ事が、結婚を最も安全に、而して間違ひなく實行し得る方法なのである。其の制度が可なり難かしいいろ〳〵の約束を有つてゐるのは、それが結婚を六かしくするのではなく、元來結婚と云ふ事が社會的に安全に行はれるのが中々困難である爲めに、さういふ複雜な制度が要求される譯なのである。色々の嚴重の約束は、寧ろ結婚を可能ならしめる爲めに必要とするところのものなのである。

結婚を生物學上の現象として見た時には、夫れは非常に困難な仕事なのであつて、多くの場合には、殆んど命懸けなのである。或生物が、人類に於て結婚と言はれてゐる行爲を行はふとする場合には、非常の危險を冒し、殆んど命懸けの奮闘をするのが普通で、往々それが爲めに戰爭狀態を惹起す。雌雄の結合は概ねさういふ困難の下に行はれるのである。多くの動物に於ては、結婚は戰爭なしでは行はれない。集團的の生活をしてゐる動物に於ては、其の戰爭が集團的に行はれ、孤立的の生活をして居る動物例へばゴリラのやうなものゝ間に於ては猛烈な一騎討ちの眞劍勝負が行はれる。一體、動物の爭ひは、多くの場合結婚を中心として起るのである。此の事情は生物學的に何を意味するかといへば、種の保存が強者に依屬するといふ事なのである。それは彼等の種が強いものの系統をひく事に依つて、ヨリ有力に發達して行く過程なのである。動物の結婚戰爭に於ては、必ず腕力の強い、精力の絕倫な強者が、弱者を郤けし結婚行爲を行ふ。其の結果、其の種は強者の系統に依り維持さるゝ事になつて、始めて其の種が安全に、有力に保存されると云ふ事になるのである。

人間に於ても其の事は同樣で、結婚の原始的の形式は、必ず種族的の鬪爭を伴つてゐたのである。而して、其の強者が女子を掠奪して結婚行爲を行つたのである。此の戰鬪的行爲が結婚に何う役立つかと云ふと、矢張り動物の場合と同じく種の保存を強者の系統に據らしむると云ふ事になるである。即ち人間の中から弱者を淘汰し、其の種の將來の發達を鞏固にすると云ふのが、原始的結婚に於ける戰鬪行爲の重要なる關係なのである。

其の後此の掠奪結婚が次第に、強力に依つて掠奪する代りに、經濟力に依つて買收するといふ形式に遷て行つた。即ち掠奪行爲は賣買行爲に變じて、今度は強者が女子を占有するのではなくて、富者が女子を占有するやうになつた。之れ

は生物學的單純を以て支配されてゐた人類社會が、次第に複雜化して、經濟關係か社會的に其の重大さを增して來た結果である。そこでは人類の社會的生存が、經濟力の發展に依賴することゝなり、軍事上の强者と雖も、同時に經濟上の强者たるにあらざれば、社會的生存に於ける適者であることを得ない情勢となつたのである。唯、腕力ばかり强い者が勝つと云ふ動物的社會狀態が、次にはもつと複雜な能力である所の經濟力の優秀な働きを伴はなければならない事になつたのである。で、其の經濟上の優者は、其の經濟力を利用して彼等の生活を進めて、生物學的優者の企て及ばないやうな人間的優秀を產み出す事が出來たのである。而して性の生活の上に於ても、此の經濟上の優者は豐富なる經濟力に委せて、いくらでも女子を占有する事が出來ると云ふ狀態に進んだのである。然かも此の經濟力による女子征服は、決して過去の現象ではなく、近頃まで——寧ろ今日までの結婚狀態を基礎づけてゐる事情なのである。經濟的見地から觀れば、今日の結婚は、決して賣買結婚の時代を遠く去つたものではない。此經濟時代の特徵は、男子の女子所有、卽ち女子は男子の所有物といふ狀態にあることであつたが、此の狀態は、今日と雖も、決して過去のそれとなつてしまつてはゐないのである。一夫一婦といふ制度の發生に拘らず、女子の地位は、古代のそれとどれだけ隔つてゐるか、餘程問題なのである。制度としてでなく社會事實として、之れを觀ると、一夫一婦なるものは決して今日の社會に完全にも不完全にも成立して居るとは言はれない。一人の男子は多數の女子に對し、經濟事情の許す限り其の力を伸してゐると云ふ事が、世界に於けるすべての文明國の今日の狀態なのである。

二

近代の社會狀態は複雜な進化を遂げて、制度の上にも古來のそれに比べて種々の變化を持ち來してゐるが、然し、結婚に對しては、根柢的の變化を來したと云ふことは出來ないのである。一夫多妻が廢されたのも極めて近年のことだが、それも名目上で、事實は少しも變つてはゐない。此事は社會の進化を觀察する者に對して一種の暗示を與へるのである。結婚制度のみならず他の一般社會事情、例へば國家の組織にしろ、家族の組織にしろ、又法律、道德、宗敎そんなものが二千年餘の永い年月を經て來ながら、猶ほさう根柢的に違つたものになつて居ない事實がある。枝葉の點に於て、激しい進化があつても、根本の事情に至つて、さうたいして變つてゐないのである。プラトーやアリストートルや釋迦や孔孟やの敎が、今も通用してゐるといふことだけでも、根本の社會

事情にさう變化のないことが想はれる。然るに近代に至つて此の根本事情に一種の變化が起り、そこに根柢的の動搖を持來したと云ふ事實が現はれたのである。而してそこに種々なる近代的現象を發生せしめたのである。

數千年來變化のなかつた根本事情が近代に至つて根柢的の變化を來したといふのは、主として經濟的條件である。數千年の歷史には、國家的、社會的に激しい變化はあつたが、然し、之れを經濟的に觀ると、概ね神武以來、希臘以來、堯舜以來の、經濟組織の上に立つて居つたのであつて、其の事情の變化を通じてそこに數千年來共通の根據をもつて居たと云へるのである。所が、此の一、二世紀の間に起つた變化は、右の基礎的事情に對して動搖を與へるところの變化であつて、全く新しい事態が、新しい經濟的條件の上に働き出したのである。夫れは、卽ち近代資本主義の發達である。

此の資本主義の發達が、近代社會に及ぼした精神的並に物質的變化に就ては既に色々の方面から考察されて居るが、其の基調は、社會の經濟的構成を、各個人個人の自由なる慾望の上に築き上げると云ふ事である。之れは、夫れまで神とか國家とかいふ絕對權力の下に人類始め、あらゆる生物無生物を奴隸としたのとは正反對の現象なのである。何故そんな正反對な事態が發生したかといへば、つまりそのやうな全體の組立てが社會進化を行き詰らせた爲めに、其の正反對の組立の上に社會が動いて行くことによつて活路を發見しようとしたのである。斯樣な進化は全く經濟組織に於ける有機的の展開であつて、決して其の他の事情を動機としてゐるものではない。社會自體の生活が經濟的に行詰まつたので、更らに經濟的に展開すべく有機的に働き出したのである。個人主義の哲學とか、自由主義の哲學とか云ふやうなものは、凡て此の經濟事情の進化の後に生れたものであつて、決して夫れに先驅するものではない。平たく言へば現代人の氣持ちが近代的現象を惹起したのではなく、近代的現象が、現代人の氣持ちを喚び起したのである。而して此の近代現象の特徵は、卽ち經濟的進化そのものなのであるから、畢竟、現代人の心理は現代的經濟組織の所產に外ならないといふべきである。そこで、結婚が近代に至つて何等かの變化を受けたとしたならば夫は矢張り近代的經濟現象の結果であると認むる外はない。

で、結婚難も矢張り近代的經濟事情の、當然の結果であると認めない譯に行かない。男女が自由戀愛を望むとか、戀愛の神聖を主張するとか云ふやうな事は、此の經濟事情が齎らした一般心的變化が、性の生活に現はれたのであつて、言はば結婚に對する近代生活の影響を精神的に言ひ現はしたに過ぎない。それが、現代の結婚に關する形式の進化の動機でも

なければ、先驅的現象でもない。

何故に近代の經濟事情が男女をして、性的にそんな心理狀態に導いたかと言へば、夫れは、卽ち前に述べた近代社會の經濟生活に於て、全然個人的慾望の自由——夫れを哲學的に自我の自由にまで昂進せしめたところの——に生活の基點を置いたことに基くといひ得るのである。經濟上に於ける此の現象は、もと〳〵神とか國家とかいふもので個人を壓迫した爲めに、產業が衰へ社會自體の生存が、生活の上から行き詰つたのを囘復せしむるべく、社會がその生活を更正して、新たな、經濟的構成を持つに至つたのであるが、吾々の生活に於て第一次的の生活である所の生產狀態を支配する事情は、自ら他の一般の社會事情に影響する事は言ふ迄でもない。元來生產狀態を如何に組立てられるかと云ふ事は、卽ち其の社會組織を何う組立てるかと云ふ事と同じ問題なのである、從つて生產的組織に伴ふ心的狀態は、他の社會生活の精神的構成の根柢になるのである。單純な時代に於ては、何う云ふ組織で食物——獸や魚等の獲物なり單純な農產物なり——を得るかと云ふ事が、其の社會組織の構成樣式を決定したのである。從つて其の社會の精神生活の如きも、その構成に伴つて發達したのである。例へば日本の古代に於ては米を作る爲めに祭事が行はれたが、此祭事は生活の第一次的條件たる米を得るためのものであつたが、それが社會的構成の基點を爲したのである。卽ち其の祭事を司る者が同時に政治上の支配者であると云ふことになつて、その經濟的生活の上に成り立つた制度が、社會の組織的構成の根柢となつたのである。之れを一言で言へば、一定の經濟狀態に伴ふ心的傾向は、其の社會の心理的基礎を形作るといひ得るのである。だから、近代の產業が、個人的慾望の自由を基調としたと云ふ事は、一般社會生活に於て個人の自由が貴ばれると云ふ精神上の一般狀態を導き出した眞個の動機なのである。而して結婚は矢張りその精神狀態に支配されて、男女が彼等自身の個人的自由を尊重する事となつたのである。

三

然し乍ら、問題の結婚難は、此の個人的自由に基いたものではない。無論個人的自由が、在來の家族主義の結婚制度と撞着して、種々なる困難を生ぜしめたのは事實であるが、今日發生して居る結婚難の現象は、さう云ふ主觀的事情に依るものではなく、今日の經濟狀態の客觀的事情に由つて居るのである。前にも述べた如く、今日までの結婚制度は、寧ろ買婚の延長とも認められる位で、男子の經濟上の勢力に依賴して居つたものである。卽ち經濟上の優者が女子を、其の所有

物の如くに、維持し、保護する事であつた。かやうに家族制度の下に於ける結婚は、家長が妻子を其の經濟力に依つて維持すると云ふ事が、結婚を可能ならしむる必須の條件なのであつたが、近代の經濟組織の進化が、斯樣な男子の經濟上の地位に變化を與へたと云ふ事が、結婚を困難ならしむる殆んど唯一の事情なのである。近代の經濟的進化は、男子をして女子の所有者又は保護者としての地位を、在來のやうな形式で保つて居る事を困難ならしむるに至つたのである。資本主義以前の社會では、男子は女子を扶養する經濟力を缺いては居らなかつたが、資本主義以降の社會に於ては多數の男子は其の經濟上の自主的の地位から逐はれて、使用人若くは勞働者の地位に移る事となつたが、此の使用人及び勞働者は、今日の經濟組織の支配者でない爲めに、資本主義の經濟上の目的の爲め、換言すれば利潤を生む爲めの道具となつてしまつたのである。その結果、彼等の所得は、彼等の生活を標準としないで、資本主義的産業組織の目的によつて決定される事となつた。而して資本主義的産業組織は、巨大の資本的集團を作ることを目的とする組織であるから、多數の使用人及び勞働者の生活は、此の目的の爲めに犧牲とせられ、彼等の生活の必要は最低限度にまで限定される事となつた。そこで社會の多數者は生活の一般的窮乏に陷ると同時に、相當の時期に結婚する經濟力がなく、結婚したものも、其の妻子を養ふ經濟力に乏しいと云ふ事情に立至つた。その結果が卽ち近代文明の特徴たる晩婚及び未婚となつて現はれ、又同じく文明の特徴たる一種の亂婚となつて現はれたのである。多數人は制度に依る結婚が困難となつた爲めに、自ら其の性的慾望を、他の方法で充たすと云ふ必然の事情に迫られた。此の必然の事情は、卽ち性の道德を無視する行動となり此行動は、性の道德を無視する心理となるといふのは、極めて當り前の話で、貧者が泥棒するのと同じ必然性を有つた現象なのである。而してその亂婚は一方では自由放漫な結合となり他方では賣淫の猖獗を招くのである。

自由の結合は、始めには道德的の形で現はれた。卽ち結婚は、男女の自由意志に依らなければならぬと云ふ道德の發生であつた。これは前述の通り、近代の經濟的進化に基く一般精神の反映であつたが、次第に之れが昂奮して、もつと自由な一時的結合が繁昌する事となつた。此の一時的結合も始めは道德的に、夫れを一種の社會的約束として成立たしめようとする運動のやうな形で現はれた。卽ち結婚には時期を附するがいゝとか、離婚をもつと自由にするがいゝとか云ふ運動は、要するにその秩序的の現はれであつた。が困難な經濟事情が愈よ進むに從つて、その心理的昂進の度を加へて、もつ

と亂雜な關係に陷らうとして居る。經濟事情が、社會道德の上に如何に強い影響を持つかと云ふ事は之れに依つても考へられる。

四

以上の事情から考へて觀ると、結婚の困難及び離婚の增加と云ふ事は、近代的經濟事情が生み出した生活組織の進化が性の制度に及ぼした、必然の結果であつて、物質的の生活難と、精神的の個人的自由とが相並んでそれに影響してゐると見なければならない。自我の哲學のみをその先天的動機とすることは、原因、結果の顚倒である。從つて今日の經濟組織がこのまゝに、維持される限り、此の男女結合の頽廢を防ぐ事は絕對に不可能である。一方では多數の男女が使用人及び勞働者となり、經濟上の自主的生活より逐はれて、牛馬と同じく他人の目的の爲めに使役されることになつてゐては、到底彼等の生活の經濟的充足を來す道はない。彼等はたゞ與へられた生活資料に賴るの外に生きる途はない。而してその資料は、たゞ彼等の現在を辛じて維持するに止まつてゐて、その將來を保障するものではない。從つて妻を持ち、兒を生むと云ふ事は、益す彼等を困難なる生活に陷れると云ふ事になるので、自ら一時的性質の男女結合に依賴する外仕方がなくなる。同時に他方に於ては、個人の自我的發展がその心的生活の基調を爲してゐる爲めに從來の制度による拘束は、全く男女を羈束する力を失つてしまつてゐる。離婚はその當然の歸決でなければならない。

かやうな頽廢の狀態に對して、性の道德を鼓吹することによつてその混亂した運命から脫れることが出來ると思ふのは氣の毒なほど見當違ひの見地であるといはねばならぬ。始めにいつた如くそれは倫理上の問題ではなく、社會組織そのもののの頽廢が性の制度に反映したに過ぎないのである。卽ちそれは根柢的には社會組織そのものゝ問題なのである。今日の資本主義的組織を續けて行つて而かも在來の家族制度を維持しようといふのは、家族制度が家長の經濟的自主生活を基點とするものである限り、全く出來ない相談である。今の經濟組織は、家長から全くその經濟的自主生活を奪つてゐるのであつて、いはゞ家族制度の基礎を突きくづしてゐるのである。性の制度も亦同じく、その根柢を、今の經濟組織そのものゝ爲めに震り搖かされてゐるのであつて、此の組織の革新の成就しない限り、此の動搖を押し鎭める方法は全くないと言つていゝのである。一種の亂婚狀態に陷つてゐる目下の性的頽廢は、全く世界的現象である。それは今の經濟組織が世界共通だからである。而て此の性の生活の世界的頽廢は、旣に缺陷から崩壞へと進みつゝある今日の組織が根柢的進化を見るに至つた曉でなければ決して救はれるものでないことを斷言することが出來る。

結婚難は離婚と一致か

神近市子

一

結婚難と離婚増加の現象とは、相並んで現はれる性質を有するもので、その一が單獨に形を現はすと云ふ場合は殆どないと云つても差支へはあるまい。結婚難と離婚とその表はす言葉は異つてゐるが、結局はこれらを生ずる經濟上、心理上の原因は兩者とも同じ困難に出立してゐるものである。如上の理由から、私は離婚の増加と云ふことは結婚難と同一のものと見て話を進める方が分りがよくはないかと考へる。

二

全體、在來の結婚はそれがどんな形式によるものであつても必ず何等かの形で經濟的意識を伴つてゐたものである。この事は人間が理性を有する動物である以上、決して不自然でもなければ恥辱とすべき事柄でもない。何故なれば結婚と云ふことはその儘に男女の結合を意味し、夫婦の結合は直ぐに子孫の出生を思はせる筈であるからである。そして子孫の出生は又直ちにこれに與へるべき食物とか教育とかが經濟上の負擔となり問題となるものであるから、この意味から所有觀念發生當初の原始時代の男女にあつてすら——特に女にあつては——經濟上の意識がそれ〴〵の原始的な形でその結婚に影響を與へてゐたと云ふことも事實であるやうに考へられる。結婚と經濟との關係には、この通りに密接な分ち難いものがある。

凡て何時の世の中にも社會の存在するところに特權階級があることは事實である。そしてこの特權階級を有する社會ではその反對に下層の階級にある人々が、不合理な經濟上の負擔を負ふことゝなり、その爲めに苦しむことも誤りのない事實である。そして社會の下層に行けば行くほど經濟上の困難が生じ、經濟上の困難が多ければ多いほど結婚難を苦しむこ

とも亦明かである。

歴史を見ても古代ギリシャ及び羅馬の經濟上の負擔を一番多く負うたものは、彼等が征服した國民——即ち戰勝の彼等の所有となつた奴隷であつた。これらの奴隷は、彼等の持主の特別の取計ひがない限り結婚は許されなかつた。その後になつては露西亞の農奴や支那や印度の賤民階級があつた。露西亞の農奴は結婚を禁ぜられてこそゐなかつたが、實際上で彼等の結婚がどんなに困難であつたか又結婚後の生活がどんなに悲慘なものであつたか、多くの露西亞の小説がよくその間の消息を語つてゐる。支那及び印度の賤民階級の狀態は、世界の各國に出稼ぎする彼等の團體が最もよくそれを證明してゐる。彼等は妻を購ふ資金を得なくては郷里に歸つて家を爲すことは出來なかつた。

近代文明の發達は、その何れの點から云つても人類の歴史上始めての驚異すべき出來事であるに相違なかつた。この文明の最も主要な部分であり且つ多くの影響を生ずるその根柢となつた科學上の發見は、人類の物質的と精神的との方面に殆ど程度の知れない變革を齎したものであつた。この科學的發見の影響によつて生じたもの丶中に、資本主義の經濟組織があることは、今私がこゝで事新しく云ふ迄もない事である。この經濟組織の下にあつて、多數の人は資本家に驅使される憐むべき生物に過ぎなくなつて了つた。そして器械による生産と近代の資本家的自由思想の發現たる個人の權利尊重の法律との間に板挾みとなつて、この階級は未曾有の巨大な群團を爲し乍ら然も甚しく貧困な所謂プロレタリア階級を生ずることゝなつた。

日本にあつては、この階級の發生は比較的近來のことに屬してゐる。從つてこの階級の發生に伴ふ各種の現象も非常に眼新しい事として見られることは當然である。然し歐羅巴各國にあつてはこの階級の發生は略々二世紀の以前であり、從つてその發生に伴ふ現象の研究もよく行はれ、特にこの階級の結婚難と多くの賣笑婦の出現とは同じ缺陷に原因す 二個の惡現象として久しく論議されたところであつた。

過般の歐洲戰爭は、歐洲各國の經濟生活を殆ど根本から動搖せしめて了つた。そして戰爭後思想的にはプロレタリア階級の權利と價値とを認めようとする氣運は非常に促進されたことは事實であるが、實際上ではこの階級の經濟上の困難は一般經濟界の不況の影響を蒙つて、戰前とは更にその度を高めてゐる。從つて勞働階級の結婚難も戰前に比較して倍加されてゐると云はれてゐる。戰前には、英國著名の婦人論者チヨージ氏の云ふところによれば、英國のみで三百四十七萬の壯年男子の大部分が經濟上の理由の爲めに獨身であつた。こ

れらの男子が獨身である結果として略同數の婦人は配偶者を得られぬ爲めに結婚不可能に陷つたと見られてゐる。而も既に戰爭前に英國の婦人の數は男子に比較して百十八萬超過してゐた。これを事實とすれば英國では當時既に八百十二萬の男女が獨身生活を營んでゐた筈であつた。そして戰爭後はこゝに詳しく述べる餘裕はないが、種々の事情の爲めにその數は又急激に增加してゐる筈である。そしてこの事情は他の歐洲各國に於ても全く同樣である。

三

今日これらの國家に於いて婦人勞働組合が急激な發達を遂げつゝあることは、前述の事情を裏書するものとして報ぜられてゐるところである。婦人勞働組合は、歐洲各國に於いて長く不成功に了つて來てゐた。これは婦人勞働者の自覺がまだ充分でなかつたこともその原因とはなつてゐるが、然し一方に於いて婦人の勞働は結婚迄の極く短期の一時的のもので所謂「扶養しうる」男子を得るや否やこれを放擲する性質のものであつた爲め、繼續してその組合を支持する者が少なかつたのもその一の原因であつた。然るに戰爭後、多數の婦人勞働者は自分達とその配偶たるべき多數の男子勞働者との苦境を否應なく意識せしめられた。そして結婚に達することの到底不可能であることを知ると同時に、工場その他の勞働から自分達は到底解放され得ないことを學ぶやうになつた。その結果として報酬の多寡と勞働條件の好惡等の問題が痛切な現實として感じられるやうになり、始めて團結の必要に目覺め來つたものであつた。そしてこのことは多數の婦人が眞に經濟組織の改善を翹望するに至る必要な道程であることはこゝに改めて云ふ迄もないところである。

四

最近日本に結婚減少の傾向を見出した者があつたとしても資本主義の經濟組織を學んでゐる國家としてそれは當然過ぎる事であつて、少しも驚くところはない筈である。そしてこれは現在の現象だけに止らず、將來もこれ迄の經濟組織の上に立つて發展して行かうとする限り、凡ゆる點で先進各國に起つたと同じ現象が襲來することを覺悟してゐなくてはならないものである。

極度の結婚難はその後に人口の減少と云ふ現象を伴ふものであるが、今は問題が多岐にわたるを避けてこゝには暫時それを他の機會に讓ることゝする。然し單に人道的の立場のみから見ても、多くの個人がその自然な生活慾を不合理な社會組織の爲めに阻まれてゐると云ふことは、悲慘な重大問題で

あると言はなければならない。

この問題を緩和する爲めと、主としては人口減少から生ずる國家の頽廢を恐れて、歐米各國の政事家は既に各種の政策を捻出した。その代表的なものとしては佛蘭西に於ける獨身税の徵收と結婚の奬勵及び妊婦産婦の保護に關する各種の制度がある。然し乍ら、これらの制度なり設備なりがどの程度迄この世界的現象を阻止することが出來るものであるか所謂社會政策なるもの丶効果に就いては多數の人は多くを期待してはゐないやうである。

結婚の實行に經濟上の事情が非常に多く預かると云ふことは、人生にとつて最も悲しむべき矛盾の一である。人生からこの矛盾をとり去つて、何人もその好む時に結婚して幸福に生活出來るやうな社會を生むことは人間の義務である。そしてその社會はある階級又はある團體のみに經濟上の負擔がかかることなく、全體としての人類が全體としての人類の經濟的負擔を分つ時に始めて生れるものである。

五

日本人の結婚數が統計の上でどんな風に減少してゐるか私は少しも知らない。然し前述の原則としての減少と相俟つて現代日本人の間に自由主義思想が急激に浸潤したことも、一分の原因となつてゐることは看過することは出來ない。實際に於いて舊時代は今や忘られようとしてゐる。新しく時代に目覺めた人々の間では、合法の結婚を主な結婚形式とした常識は捨てられ、相互間の正しい理解による自由結婚のみが新しい正しい殆ど唯一の形式として次第に認められようとしてゐる。このことは勞働者階級の經濟上の困難による原因と相交錯して益々合法ならざる結婚を増加し、結婚減少の現象を實際よりも稍々誇大にして示してゐることはないかと私に想像させるのである。



離婚流行の英國

室伏高信

結婚難といふことは、どこの國へ行つても聞きます。資本主義の國では、失業と結婚難とは附き物になつてゐます。獨身者は、性的意味の失業者です。少くとも、失業者と獨身者とは同じ經濟的原因の所産であるのです。一定の財產のないものは、結婚する資格のないものだとされます。ブルジョアの社會では、財產が萬物の尺度であるのですから、財產のないものは一人前のものではなく、從つて一人前の人間に許される結婚も不可能なことになつてゐます。特に世界戰爭の結果、女が過剩になつたために、女の未婚者は非常に增加してゐます。淫賣婦がヨオロッパを通じて――ロシヤもこの例にもれなく――非常に增加したことは近頃の著るしい事實であるのです。しかし大部分の未婚女は、職業婦人になつてゐます。そしてその職業婦人の非常に大きな割合が獨身女だといふことができます。そしてそれがもう當然のやうに思つてゐます。晝は每日事務所に通ひ、日曜には一日を寢て通す男女が、非常に多いのです。私は倫敦に居た時に、町の南端に近いある素人家に下宿してゐましたが、こゝに家族が四人、下宿人が二人ゐました。そのうち家族は四人とも女で、またその四人とも獨身者でした。家婦は一度結婚した女でしたが良夫に死別してから獨身で通し、二人の女の兒は、何れも三十過ぎてゐましたが、これも獨身、それから家婦の姉が五十五六歲位ゐでこれも一生獨身でした。それから下宿人の二人は男で何れも四十歲前後でしたがそれも獨身、そして日曜には矢張り皆が別々の室に一日寢そべつて、サンデー。ピクトリアルのやうなものを讀んで日を潰してゐました。それでゐてみなが平氣でゐます。性的衝動なぞは、この人たちにはないかのやうに、みな平氣で獨身の寂しさを樂しむでゐるやうに見えました。

この結婚難――性的失業者の夥しい社會に、離婚の問題がまた非常に八釜しくなつてゐます。結婚が少なくて離婚が多いのです。離婚の數は、英國では戰爭前の一九一三年には五百七十七であつたのだが、戰後の一九二〇年には三千〇九

十になつてゐます。ところがこの數字は裁判所の判決の數ですから、裁判の問題にならず、事實上の離婚をしてゐるものを加へたなら、もつと遙に大きな數になり、且つ戰前に比べての增加率も非常に大きくなつてゐることと思ひます。

英國では離婚は、裁判の判決によらなくてはできないことになつてゐます。そしてこの離婚問題を取扱ふために特別の裁判所、離婚裁判所といふものができてゐます。この裁判も無論公開します。で裁判の記事が始終新聞に出ます。新聞は毎日離婚法廷の記事を揭げます。特に戰爭後はこの離婚法廷の記事が新聞紙の最も重要な記事になり、夕刊新聞などは、離婚の記事で賣れてゆくといふやうな有樣です。タイムスのやうな大新聞でさへ、離婚の問題に、可成りのページを割かなくてはゐられないほどに、この問題が重要な社會上の問題となつてゐるのです。

離婚裁判の記錄は、人間の歷史のうちで最も闇黑なものの一つだと思ひます。そこには、人間の性慾的衝動生活が赤裸々に現はれてゐます。ある醫者が、その患者の一人の女に戀して、その手に接吻したとか、ある貴族が白耳義へ行つてゐる間に、夜は宿屋に歸らず、晝は毎日宿に歸つて寢てばかりゐたとか、さうした事件は、所謂「良家」の家庭へ入つてはならないやうな事實が、毎日離婚法廷で陳述され、そしてそれが毎日の新聞紙に揭げられる。離婚法廷の前には、人間が、最も多く、飾らず、僞らずに現はれるのです。そこでは人々は性慾人として立つてゐるやうに見えるのです。性慾生活が人性の凡てであるかのやうに見えるのです。しかしまたある場合には、戀愛のやうな、人間の感情のうちで最も純粹に近いものまで、經濟的關係に支配されてゐることを證明するやうな幾つかの事件をも見ることができます。デーリー・ニウスの一記者がアメリカの離婚流行の原因を觀察して、戰時及戰後特に米國で離婚の多くなつたのは（アメリカでは一九〇一年から一九一〇年までの間に離婚件數七十三萬餘件であつたのが、一九一〇年から一九二〇年までの間には、百十四萬九千餘件となつてゐます）戰時及び戰後に、成金が增加し、その成金が糟糠の妻に滿足ができないで離婚する場合が最も多いといつてゐますが、英國でも、貧困な良夫を捨てて金持ちのもとに走つたり、若しくは良夫が貧困で指環を買つてくれないからといふやうな理由で離離を要求するものさへも出てきてゐるのです。

戰後の世界を通じて見られることは、人心が全く不安に陷

つてゐるといふことです。カアライルが、今日の時代は懷疑の時代だといふたことがありますが、今日こそ全く懷疑の時代だといふの感を覺えるのです。どこへ行つて見ても迷信が行はれてゐます。人心が迷ひ、疑つてゐるのです。古るき一切の道德が破壞されたのです。性的關係でも、この古るき道德が破壞されたのです。現實の悲しみに打つかつて、古るき道德が空虛であつたことが分つてきたのです。古るき男女關係、古るき結婚道德が、現實の前に、たゞ僞りであつたことが分つてきたのです。そして人々はこの古るき、性的道德關係から自由の性的關係へと、解放されることを求めてゐます。その性的解放は、同性愛の流行にまで及んでゐます。同性愛は伯林が流行の中心地であり、そしてこれを禁ずるために特に法律まで設けなければならなくなつてゐるのです。この同性愛の流行の現象も、戰後の一現象であり、そして、古るき性的關係の規範が、新しきものによつて置き換へられることを求めてゐる一つの僞らざる要求の現はれかと思はれます。

結婚難、離婚流行は、同時に賣淫の流行をもちきたしてゐます。賣淫婦は、倫敦でも、伯林でも、巴里でも、ヨオロツパの大都會の往來に滿ちてゐます。日本人さへ見るときつと呼びかけます。彼等は日本人は賣淫買ひにヨオロッパへ行つてゐるかのやうに心得てゐます。無論、一般のヨオロッパ人は、賣淫をよきものとは思つてゐない。賣女自身でさへも、彼女が賣女であることを誇りとしてゐるわけではない。しかし、賣淫が何故に不道德であるかといふことを、權威をもつて語りうるものは今日の社會には存在してゐないのです。何故なら、何人も、今日の社會では、自分の人格を金に換へなくては生活してゆくことはできないからです。

かういふわけで男女關係は、世界を通じ非常に亂れてゐます。革命期に入つてゐます。ブルジョア社會は、男女關係においても行きつまりになつてゐます。勞働者が資本家に叛いてゐるやうに、女は夫に叛き、男は妻に叛いてゐるのです。この革命期から、新らしい男女關係が生れてくるのではないかと思ひます。

法律道德の缺陷のみ

京大教授 宮本英雄

米國は有名な離婚國であり、歐洲に於ても大戰後は頓に離婚の數が增して來たと云ふことである。其にも拘らず我が國は依然離婚數に於て諸外國を凌駕して居る有樣であるのは洵に憂ふべき事實である。謂ふ迄もなく現代社會の基礎は夫婦に在る。家長制度の時代には家を以て社會の基礎としたのであつて我國法は今も尙ほ家長制度を認めて居るから我國に於ては依然として社會の基礎は家に存し個人主義の下に見るが如く夫婦を以て社會の基礎と見ることは出來ないと謂ふ者も無いとも限らぬ。否な我が民法を說明する法律家は殆んど異論なく左樣謂うて居るのであるが、今日一般社會の人々は家と謂ふが如き抽象的な觀念に重きを措いては居ないし、又何人も家長萬能を是認せないのであるから、社會の基礎は事實上、夫婦に在ると謂はなければならぬ。面倒な理窟は暫く措くも、誰が考へて見ても健全な社會の成立つて行く爲めには健全な家庭がなければならぬと謂ふことになるであらう。然かも此健全なる家庭は獨り家長さへあらば立派に出來上ると云ふものではない。法律上の家と云ふ樣なものは戶主があつて戶主權を持つて居れば其で成立するのであるが、事實の上に於て健全な家庭なるものが產れるには先づ夫婦があり其上其夫婦の關係が健全なものでなければならぬ。從て健全なる夫婦關係が益々減ずる、或は維持されないと云ふことは之れ即ち社會を不健全ならしむるものに外ならない。此意味に於て離婚の多いと云ふことは甚だ憂ふべきであると思ふのである。其故諸外國に於ても離婚の事實に就ては深甚な注意を拂つて、其原因を調査し之に對して相當の方法を講じ、成る可く離婚を防止しようとして居る。然るに我國に於ては前にも謂うた如く世界第一の離婚國であるにも拘らず、世間一般に是を等閑に附して居る傾がある。無論穗積敎授の如き深甚なる注意と熱心なる研究とを此問題に加へて居られる方もあるとではあるが、斯の如き問題は獨り法律家のみならず宗敎家

も教育家も亦廣く男女を問はず一般人も共に注意して各方面から考へて見なければならぬ重大なものであると思ふ。私は固より一介の法律書生に過ぎないから此問題に就ても自然、法律上の見解以上に出て意見を述べることは今の自分に採つては餘裕の無いことであるけれども、問題自體は決して法律家に一任せらるべき性質のものではないと考へるのである。

私は離婚の多いことは憂ふべき社會現象であると謂ふのであるが、之に就ては無論有力な反對論のあることを想像することが出來る。由來離婚の弊害として擧けられて居るものを見るに(イ)婚姻を輕視する傾向を釀すこと(ロ)夫婦生活の圓滿を害すべき事情を誘發すること(ハ)夫婦の一方をして其子を教養すべき義務を免れしむること(ニ)子の不幸を釀すこと(ホ)嚴格なる一夫一婦主義に反すること。と謂つた様なものである。然し絕對に離婚を許さないと謂ふことは其結果に於て婚姻を強制すると殆んど同じことであつて到底是認せらるべきことではない。到底圓滿に遣つて行けない夫婦の共同生活を已むを得ず形式的に營んで行くと謂ふよりも寧ろ離婚をするが適當である。夫婦の間に愛も何も無いと謂ふ程度を通り越して憎惡の念すら生じて居る様な疵のある夫婦關係を無理にも繼續せなければならぬと云ふことは無論婚姻其自體の本來の目的にも反する譯である。其故離婚は必要的害惡であるとして現今多數の國家に於ては之を認容して居る。離婚禁止主義を採用して居るオーストリア、イタリア、イスパニア、メキシコ、チリー、ペルー、ブラジル諸國ですら尙ほ別居制度を認めて居るのは此邊の消息を語るものである。然ればと謂うて勞農露國の樣に、單意離婚主義を認め夫婦何れか一方の申出あるときは當然に離婚が成立するものとすることの可否如何は大に考究の餘地がある。離婚は或場合には必要なことであるには違ひないが、離婚の原因を定めず全然自由離婚を認め而かも其自由離婚は一方の申出に因りて成立するものと謂はねばならぬ。戀愛と謂ふもののみが夫婦の羈であり、又羈であらねばならぬとする一派の人々の考に依ると、戀愛の無い男女の間に婚姻を繼續をすべき理由はないことになり從つて一方が他の一方に對して愛を持たなくなつた時には其申出に因つて夫婦關係を立所に解消さすると云ふことが合理的であるかも知れない。又斯うすれば姦通と云ふ樣な忌しい犯罪は自然に消滅する、さすれば貞操の強要が妻に對してのみ認められて居るのが不都合だとか不平等だとか云ふ方面の問題も自然に解決がつく譯である。けれども戀愛のみが果して夫婦關係の羈であらうか、世間總ての夫婦が戀愛を以て始終して居るものであらうか、又一時でも戀愛がなくなつた場合に尙ほ夫婦關係を繼續さすることはそんなに不合理なもの

であり、野蠻なことなのだらうか、假りに夫婦の一方のみが他方に對して愛を持たないからと云うて離婚するのが正しいとしても、其場合相手方が愛を持つて居る場合には其者に對する關係に於て果して離婚が是認されるであらうか、戀愛至上主義論者の言ふ所は如何かすると、愛を持たなくなつた一方のみを眼中に置いての論であつて其相手方を全然看過して居る樣なことがある。更に最う一歩退いて、戀愛で進退することは當事者に就て云へば如何なる場合にも正しいものであるとするも、既に子供の出來て居る夫婦關係に於て其子供を考慮に入れなくてもよいものであらうか、親は戀愛の有無に從つて進退去就を決めて行くことが都合がよいかも知れないが、其子として生れた者をば誰が敎養するか、斯う謂ふことも考へて見ねばならぬ。流石に勞農露國では子供は國家自ら之を敎養することに定めて居る。然し國家が子供を敎養するからと云うて其で以て直ちに自由離婚、單意離婚が合理的であるとは謂へない。其前に尙ほ國家が子供を敎養することの能否、可否如何と云ふ問題を決定せなければならず同時に又親が子を捨てゝ迄戀愛に從つて歸趨する所を定めるとが正しいことであるか如何かを考へて見なければならぬ。社會組織を全然變更して仕舞へば兎も角も然らざる限りは吾々の本能的動作や衝動的行爲は多くの場合に於て社會生活の必要と云ふものに依つて制限を受けるのであり、又吾々は此制限を受けるのは社會の一員として存在する以上は已むを得ないことであり、當然のことであると考へて居るのである、其處に社會的規則が產れ規範が出來るのであつて道德、宗敎、法律經濟と謂つた樣な各種の規範は孰れも斯樣にして出來上つて居るのである。其故今日の我が社會に於ては勞農露國に於けるが如き極端なる離婚の自由を是認することは出來ないと見るべきであらう。從て離婚は必要的害惡であると謂ふ考は現在の我が社會に於ては未だ決して葬られて仕舞つたものでないと謂つて差支なからう。斯樣に考へて來ると、今日は尙ほ離婚は之を已むを得ざる場合にのみ認めることとしてなるべく離婚を防止する樣な方法を講ずると云ふことが社會生活の必要に應ずる所以であると謂へるのである。

離婚の多い原因は種々あるであらう、又國々に依つても違ふであらう。米國に於て離婚が多いのは一般に婦人の地位が高く殊に其經濟的獨立の能力と機會とが與へられたが爲であると見られて居る樣である、其かあらぬか米國に於ては妻の方から離婚を請求する場合が比較的に多いと謂はれて居る。一戰後歐洲に於て離婚が著しく增加した原因に就ては各國共之が調査に腐心して居るが、英國の統計に依ると出征した夫の不行跡を原因として妻から離婚を請求した場合が大半を占め

て居る。但し最近歸朝者の談に依ると妻の不貞を原因とする離婚も非常に多いと云ふことであり、獨逸に於ても妻の姦通が著しく增加したと傳へられて居る。結局戰爭の後には殆んど例外なく生ずる所の風紀の廢頽が離婚增加の原因を成して居るものと謂へる。然るに我國に於ては、從來別段に婦人の地位も高くなかつたし殊に婦人の經濟的獨立は今日未だ認められざる狀態であると共に、特に戰後に於ける著しき風紀の廢頽と謂ふ樣な事實もない樣である。夫にも拘らず離婚は今も昔も相變らず多いと云ふのであるから是には我國に特有な事情があるものと見なければなるまい。

我國に特有な離婚原因は何であるかと云ふことに就ては各方面から考へらるべき事であるが、私は唯法律上から見て我國特有の事情と認むべきものと考へることにする。尤も私は今遺憾ながら離婚原因に關する我國の統計と謂つた樣な物を手にして居ないから具體的に離婚原因なるものを考究することは出來ない。從つて唯法律家としての立場から、我國に於ける婚姻並に離婚に關する民法の規定を見て離婚の多い事情を造つて居ると思はるる點を、一般的抽象的に考へるに過ぎない。

先づ第一に思ひ及ぶことは、我國に行はれて居る婚姻の手續は果して離婚の事情を釀しては居ないか如何かと云ふ問題である。法律の規定に依ると、我國に於ける婚姻手續の要點は「市町村長に婚姻を屆出る」と云ふことである。通俗に謂へば「入籍」である。此屆出に因つて始めて法律上に有效な婚姻が成立するのであつて、屆出をせない間は假令婚禮の儀式を擧けても、又進んで實際は誰が見ても夫婦としての同棲をしても未だ婚姻があつたとは謂へないのである。所謂「內緣の妻」なる者は右の如き狀態に置かれた婦人に對する名稱であつて、法律の認めない所である。然るに我國の實際に於ては內緣の夫婦なる關係が甚だしく多い爲めに實際は夫婦でありながら法律上は夫婦でない者が澤山ある。元來我が國には「試に嫁を貰ふ」と謂ふ考なり習慣なりがある。子供が出來たらば入籍すると云ふ慣習の行はれて居る地方もあれば、又嫁が家風にあうたらば籍を入れると云ふ慣習の行はれて居る地方も現今決して尠くない樣である。之では婚姻を殆んど「下女の雇入」と同視して居るものであると謂はねばならぬ。「下女の目見え」と「嫁入り」との距離は幾何もないのである。言葉は奇矯であるが事實は左樣である。始めから試みに行つて居る婚姻であつて見れば、既に當初から離婚を豫想して居るものである。眞劍に婚姻してすら離婚の事情が生じて來ることが尠くない、況んや當初から不眞面目な考で居るのであるから圓滿な關係が續かないのが寧ろ當然である。然し內緣

の夫婦は法律上夫婦ではないのだから其離婚は法律上に離婚としては現れて來ない。從て内縁關係の解消は離婚數の中には算入せられては居ないけれども、内縁關係が多く又其解消が夥しくあると云ふ事實は知らず／＼の間に一般に婚姻を輕視するの風を助成して居るのであつて、離婚を誘發する重大な原因となつて居るのである。卽ち我國の實際では事實婚が多いに拘らず法律は此事實婚を以て婚姻と認めないが爲めに其處に或る不一致が出來る、其が離婚を誘發する事情となつて居るのであるから世間が始めから法律上の手續を採つて所謂法律婚をするか、或は法律が事實婚を以て婚姻を認めると云ふことにして、婚姻を輕視し從て離婚を茶飯事に考へる惡習を一日も早くなくすることが離婚防止の一手段である。

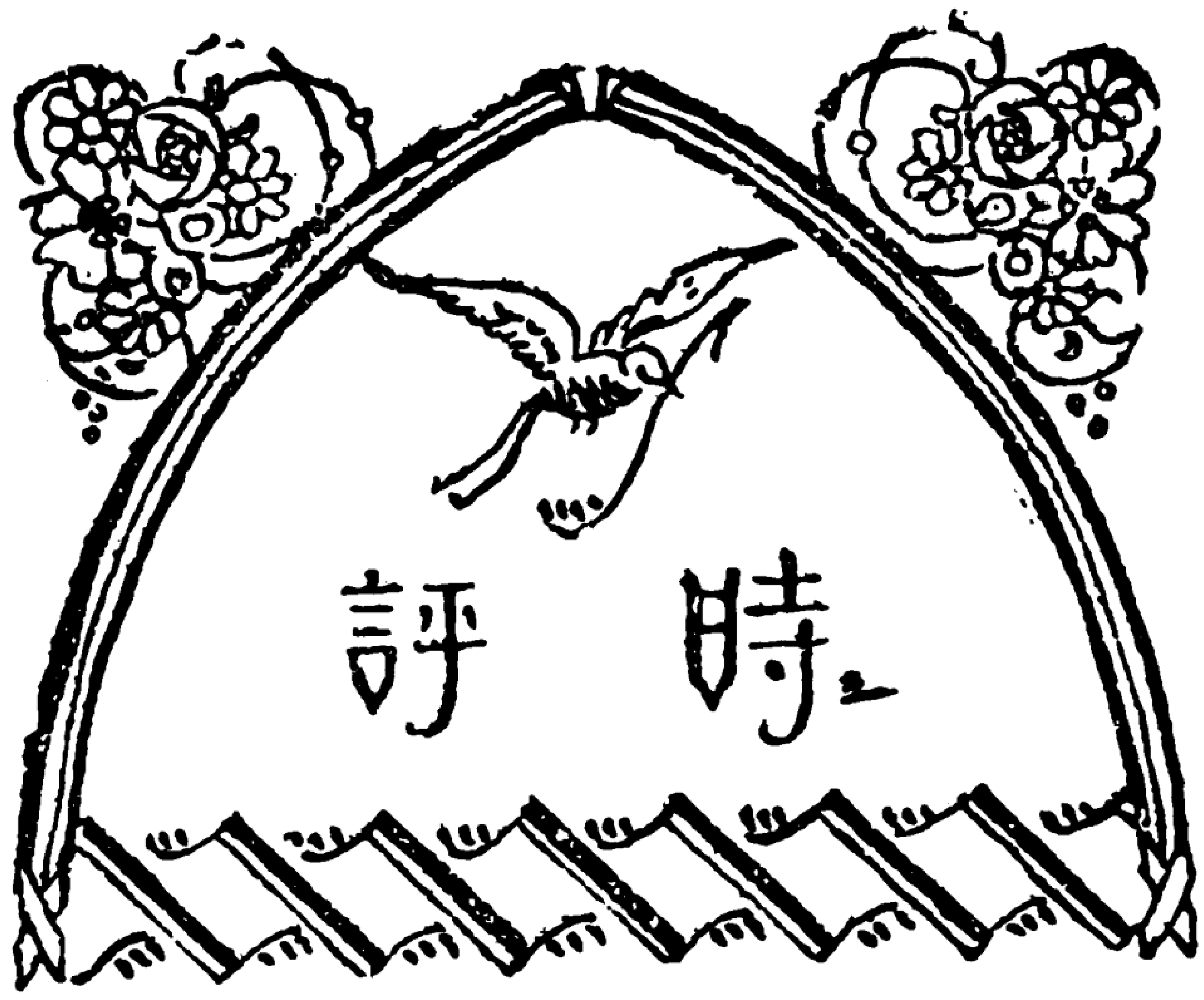
次で考ふべきことは、正式に法律上の手續を踐んで婚姻する場合でも、其處迄に至る過程に於て離婚を誘發する事情はないか如何かと云ふ問題である。從來我國に於ては未知の男女が媒酌人を介して婚姻すると謂ふのが普通であつた、男女相知つて相思の間柄となつて婚姻してすら尚ほ且つ必しも終生圓滿に行けるものではないのに、增してや始めから御互の性情も趣味も解しない男女の結合が圓滿に行きさうな筈がない。此ことたる、今更言ふ迄もなく旣に周知の事柄である。問題は唯如何にして青年男女を交際せしむべきかと云ふ點に在るのであつて相當に考へられて居る樣であるから敢て多くを贅するにも及ばないが、實際、研究して見なければならぬ重大な事であると思ふ。尙ほ婚姻の過程に於て注意すべきは我民法では婚姻の許可と云ふ手續を必要としては居ないが果して其は無用なことか如何かと云ふことである。外國の法律を見るに、婚姻せんとする當事者は裁判所、身分官吏と謂つた樣な相當官廳に身分、年齡、職業其他一定の事項を記載したる願書を提出して婚姻許可證を得なければならぬものとし、官廳は申請に基き或は調査をなし或は當事者の婚姻に就き異議ある者は一定期間内に其申立を爲すべき旨を公示し其異議を申立つる者なかりし場合に始めて婚姻許可を與へることにして居るものが尠くない。婚姻は人生の最大事であり夫婦は社會の基礎である以上、婚姻に就ての手續は極めて嚴重であつて差支ない筈である。然らざる場合には却て婚姻を輕視し從て離婚を誘發することになり易い。此見地からすると我民法の規定する婚姻手續は簡に過ぎると謂はねばならぬ。

婚姻の手續から見て右の如く離婚を誘發する事情がある上に尙ほ離婚の手續を見ても同樣の事情が伏在して居る。離婚に關する諸國の立法例を見るに、法律を以て離婚原因を定め夫婦の一方が提起する離婚の訴に基き裁判所が其原因の有無を認定し之あるものと認めたる場合にのみ離婚判決を爲すべ

きものとする裁判離婚主義を採るものと、法律上何等の離婚原因を必要とする所なく當事者の意思表示のみに因つて離婚を許す所の自由離婚主義を採るものとに分つことが出來る。自由離婚は更に夫婦の合意に基き離婚を許す協議離婚主義と其一方の申出に因りて離婚を許す單意離婚主義とに分つことが出來る。勞農露國の如きは此後の主義を採つて居るが、其他の諸國は大抵裁判離婚主義を採つて居る。我民法は裁判離婚主義と自由離婚主義とを併用し且つ自由離婚に就きては協議離婚主義を採用して居る。勞農露國を除けば我國の離婚手續は諸國に比し最も簡易であると謂つてよい。從來我國では協議上の自由離婚が多かつたのであるが、其實は夫の意思のみに基く單意離婚であつたのである。斯の如く離婚の容易に出來ることが離婚の原因を誘發して居ることは容易に考へられることである。米國に於ても曩に謂つた通り離婚の數が著るしく増加したに就て其防止策が講究せられて居るが其一案として、離婚法を改正して、離婚は一生涯に一回だけ許すこととすべしと云ふのがある。つまり一度は離婚が出來るが二度目の婚姻は絕對に離婚が出來ないとなると第二回の婚姻に就ては云ふ迄もなく、第一回の婚姻に就て既に深重な注意をすると云ふことになり從て離婚を尠くすると同時に、第二回目の婚姻に就ては絕對に離婚が出來ないから、不和を生じた場合でも何とかして融和の途を考へ出すことになると云ふ理由に基ける案である。此案が善いか惡いかは別論であるが、少くとも此案でも謂つて居るが如く、離婚が容易に出來ると云ふことは却て離婚の原因を誘發することになるのである。其故我民法の採用して居る自由離婚主義は離婚防止の目的には全然添はないものである。

要するに我國に於ては婚姻手續も離婚手續も共に離婚原因を醸成し若しくは誘發する傾向が著しいのであるから、吾々は此點に注意して其弊害をなるべく尠くすることに努めねばならぬと思ふ。法律の改正と謂ふことも考へられぬではないが、元來法律なるものは道德の表現に外ならぬ、道德に或る普遍的な表現の形式を與へ之を以て社會生活の基準とした場合に法律が出來るのであるから、形式だけの法律が制定せられた所で、一般の道德が之と一致せなければ法律は何の役にも立たぬ。同樣に法律の形式はあまり完全ではなくとも、一般の道德が法律の形式以上に高いものであるならば、法律の形式をより高き道德に一致する樣に解釋して行くことに因つて法律改正の手續を踐むことなく改正と同一の結果を收めて行くことが出來る。私は法律存在の根據は何處迄も道德であり、道德の基礎は各自の意思の作用に存すると考へるのであるが、斯樣に考へて見ると何事に依らず先づ道德の涵養と

云ふことが必要である。婚姻法は不備であり、離婚法には缺陷が有つても社會の道德が發達するならば少しも不都合はない筈である。此見地からすれば從來離婚が甚だ多かつたことに就ては男子の反省を要すると共に他の一面に於ては婦人の覺醒と云ふことがより以上に重要なことであると云はねばならぬ。從來一般に婦人の地位が低く、婦人は事の善惡に拘らず夫に從順であることを要求せられ又斯くあることが婦德であると稱へられたことが、我國を有名な離婚國たらしむるに與つて力のあつたものである。假令法律は完全でなくとも、婦人が自ら婚姻の場合に注意し又妻となつて後も徒らに夫の不條理な振舞を許して居ると云ふ態度を捨てるならば從來の弊害は恐らく著しく減ずることであらう。無論婦人だけに覺醒を求むる譯ではなく、男子の反省も亦必要ではあるが、男子の反省を促すにも亦婦人の覺醒を要するのであるから特に婦人の覺醒を要望するのである。近時我國に於ても婦人運動が次第に其勢を増して來ると共に世人が其方面に注意を向ける様になつて來たことは喜ぶべき現象であるが、之と同時に一面には婦人運動を冷眼視して、婦人運動は『男の様な女』を造らんとして居ると評する人もある様である。然かも斯る批評が所謂保守主義の人からならば未だしも、世に新思想家だとか評論家であるとか謳はれ、自らも一世の新人を以て任じて居る様に見える人の口から出るに至つては、驚くの外はない。婦人運動は單なる理窟でもなければ空想でもない。況んや女を男にしようなどと不自然なことを考へて居るものでない位なことは婦人運動史の一頁でも見れば直ぐに了解し得る筈である。夫にも拘らず往々にして斯る世評のあるのは婦人運動に携はる者の言動にも行き屆かぬ點があり、婦人自身の態度にも時には『男の様な』風が見えるからである。乍併、婦人の覺醒と云ふことは決して『男の様になれ』と云ふ意味を持つては居ない。又持つべきものではない。然らば婦人運動は婦人に向つて何を要求するかと云へば説明は甚だ困難であるが、私は之を一口にして云へば『外柔内剛』を要求して居ると謂ひ度い。婦人の地位の高いと謂はれる外國の婦人を見ても決して『男の様な女』ではない『外柔内剛』と謂つた様な特質を具へて居る様である。男子に『威あつて猛からず』と云ふことが要求せられる様に婦人には『外柔にして内剛し』と云ふことが要求せられ茲に始めて男らしき男、女らしき女が出來、眞に意義ある共同生活が營まれるのであつて、之れ軈て健全なる家庭と健全なる社會とを産み出す所以であると思ふ。



奴隷制度としての女

室伏高信

女は最後の奴隷であるのでせうか？

アレキサンドラ。コロンタイのある小册子のうちに、女は「最後の奴隷」だといふことが書いてありました。彼女のいふとほり、女は最後の奴隷であるのでせうか。

今日の女が社會人として一種の奴隷であることは勿論であります。女が奴隷であればこそ、婦人解放の必要があるのです。女の解放を叫ぶものは、先づ今日の女、若しくは今日までの女が、母權時代を除いては、奴隷であつたといふことを認めてかゝらなくてはならないのです。

私たちにとつて問題になることは、この女が奴隷だといふことが、果して「最後の奴隷」であるかどうかといふの點にあらうと思ひます。

今日の社會には少くとも二つの大きな奴隷階級が存在します。賃銀勞働者と婦人階級がこれであるのです。賃銀勞働者の階級はブルヂョアの階級に對抗します。婦人は男に對抗します。しかし男と女との相違は、今日の社會現象としては、性の區別ではなくて、階級の區別だと思ひます。男性と女性との區別でなくて、男の階級と女の階級との區別だと思ひま

す。

ある人は、直ぐとかういふでせう、今の世の中に男の階級と女の階級の區別があるにしても、その階級の區別は、性の區別からきたものであると。果して今の世の中の男女の階級的區別は、性的區別の所產なのでせうか？

若し男女階級の區別が、男女の性の區別からきたものだとしたら、男女の階級の隔ては永久に撤廢することができないでせう。何故なら性の區別は永久に撤廢することはできないからです。果してさうなのでせうか？

ミルの婦人論は、婦人問題を論ずる誰でも一讀したことはあるでせう。彼によりますと、今の世の男女の階級の區別は最初は腕力の問題から起つてゐます。男の方が、女よりも、腕力的に優越であつたからであるといふのです。男が女よりも腕力において優越であつたために、女は自然に男に從屬させられることになつたのであるが、それが習慣となり、秩序となり、そして法律となつて今日の世の中のやうに法律上にも女は奴隷となつたといふのです。果してさうなのでせうか？

ミルの考へは、女の從屬の起原の考察としては或は正當であるかもしれません。しかし今の世の中に、どうして腕力の優秀なものが、昔のまゝに、社會的に優秀な階級でありうることができるでせうか？

腕力時代の過ぎさつたことは何人にも異論はないでせう。腕力者の一團が優越階級である時代でないばかりではなしに、丁度その反對になつてゐます。腕力階級は今日では奴隷階級に落されてゐます。そして他の新らしいものがこれを支配してゐます。ブルヂョアの階級がこれであるのです。ブルヂョアの階級が馬鞍に乘つてから既に隨分久しいものであるのです。この時代に、男女の關係だけが、大昔のまゝに腕力の關係で支配されてゐるといふことをどうして想像することができませうか？

法律は何時でも支配階級の道德であるのです。支配階級が奴隷階級への征服狀態を道德化する一方法であるのです。でブルヂョア時代にはブルヂョアの法律が存在します。ブルヂョア時代に、腕力時代の法律が支配してゐやうとは考へることができません。ミルの婦人論は少くとも今の世の中には、もうたゞの古典となつてしまつたといふのほかはないのです

またミルの婦人論のうちには、女が男と同等の社會的地位をうるためには、女の知識的向上が必要だといふことを述べてあります。女の知識的向上の必要なことは勿論でせう。しかしこのことも、女を奴隷から救ふのには、第一義の問題だといふことはできないのです。昔から今日まで、知識ある

ものが社會を支配したことはないのです。却つてそのあべこべであるのです。ごく近世になつて知識階級と稱する一團が出てきました。若し知識が力であるのなら、この階級は世の中を支配しなくてはならないのです。しかし事實はそのあべこべであるのです　知識階級とは、矢張り一つの奴隷階級であるのです。月給といふ報酬、原稿料といふ報酬を受取ることの代りに、自己の人格を雇主に賣らなくてはならない、あわれむべき階級であるのです。

今日の支配階級は、昔と同じように、矢張り知識のない階級であるのです。大實業家、大政治家はみなこれです。そして知識階級は奴隷の狀態に滿足してゐるよりほかはないのです。知識よりも外に、實際に社會を支配する力が存在してゐるからであるのです。つまり、支配階級と奴隷階級とを造りあげる原因が知識以外にあるからであるのです。

世の中に、奴隷階級の存在してゐるのは、若しくは女が奴隷階級であるといふことは、腕力の問題でもない、知識の問題でもない。若しくは法律、習慣の問題でもない。また性の問題でもない。

今の女が奴隷であるといふことは、今の勞働者が奴隷であるといふことゝ同じ原因からきてゐます。今の世の中を支配する神、見えざる神はたゞ一つしかないのです。經濟的權力がこれであるのです。この經濟的權力が政治をとほして一般的に無產者を、賃銀制度をとほして工場勞働者を、結婚をとほして婦人を支配してゐるのです。

で、女が奴隷狀態から解放されるためには、結婚を廢したらよからうと考へるものもあるでせう。若し結婚そのものが女の從屬の原因だとしたら、私たちは結婚は廢止するのほかはないのです。そして今日では、結婚が、女の從屬の根本的な原因であるように見えてゐます。何故なら、結婚しない女にとつては男に對する從屬關係が存在してゐないからであるのです。

結婚を廢止することは決して不可能であるのではない。また史上には結婚のない時代もあつたのです。しかし若し男に經濟的權力が存在してゐたら、そして男女の關係が何等かの形において存在したら、例へば賣婦のような形で存在したとしたら、女の奴隷狀態は少しも變化をうけようとは思はれないのです。繰返していへば、女の從屬の原因は、結婚そのものではなく、たゞ結婚の形式をとほして行はれてゐるに過ぎないといふのです。そして女の從屬のほんとうの原因は、經濟的權力そのものゝうちにあるといふのです。

結婚は明かに一つの××制度であります。女の解放のためには勿論この奴隷制度から解放されなくてはならない。しか

し結婚制度は、かつては男の腕力的優越を規律する一制度であり、今日では男の經濟的支配を規律する一制度であるに過ぎません。奴隷制度の根本ではなくて、その徴候であるのです。だから婦人解放の目標は結婚制度の廢止にあるべきとともに、その窮局において、男の經濟的權力――一切の經濟的權力の廢止になくてはならないのです。

　今日の女の奴隷制度の直接の原因は、女が家庭的に、若しくは結婚をとほして經濟的に男に從屬してゐるの點にあります。家庭のうちでは、男が經濟的權力者であり、生活の手段を提供し、そして女はその生活の手段を受取ることの代りに彼女の人格を男に賣つてゐるのです。こゝに近代の女の從屬が存在するのです。しかしもう一歩を進めて考へると、その男――家庭内において生活の手段を提供する經濟的權力者も實は一つの奴隷であるのです。彼自身は、俸給若しくは賃銀制度をとほして、彼の人格を彼の雇主の階級に賣つてゐるのです。で今日の女が、縱令家庭的に男の權力から解放されたにしても、その解放された女は、その解放されたと思ふ瞬間に、男の權力よりも更に無慈悲な、更に根本的な、更に永久的な奴隷制度のもとに置かれてゐるのです。

　今の世の中には、職業婦人が非常に殖えて來ました。職業婦人は現代社會の一つの大きな特徴であるのです。この職業婦人の場合を考へて下さい。彼女は男の經濟的權力から解放された女であるのです。結婚制度も最早や彼女を奴隷として規律することはできないのです。しかしそれならこの種の職業婦人は眞に獨立の婦人であるのでせうか？　賃銀なり俸給なりの制度によつて、彼女の勞働を彼女から抽き出し、彼女の人格を雇主に賣つて纔に生活を支へてゐる職業婦人がどうして奴隷でないといふことができるでせう。××をとほしての『妻』が奴隷制度であるやうに、賃銀制度をとほしての職業婦人もまた一つの顯著な奴隷制度であるのです。

　今日の女の前には、二つの奴隷制度が横はつてゐます。『妻』と、職業婦人とがこれであるのです。家庭的奴隷制度と、賃銀奴隷とがこれであるのです。そして家庭的奴隷制度が廢止されても、尚ほ、女の前には、更に無慈悲な奴隷制度が彼女の肉を喰はうとして待ち構へてゐるのです。

『職業婦人』は婦人解放の道でないばかりではなく、第二の、そしてより根本的な奴隷制度であるのです。『妻』が最後の奴隷制度ではなくて、職業婦人が最後の奴隷制度であるのです

　女は決して最後の奴隷ではない。最後の奴隷は勞働者であるのです。結婚制度が最後の奴隷制度ではなくて今日の經濟制度が最後の奴隷制度であるのです。男が女を支配するのではなくて、經濟的權力が女を支配するのです。男が支配者、

女が被支配者ではなくて、男も女も、ともに被支配者であるのです。

だから婦人解放は、女を男から解放することではない『男』は最早や支配者ではなくて被支配者である。男は女の主人ではなくて、男も女も奴隷である。今日の世の中では、主人は見えざるところにゐます。見えざるものが男をも女をも支配します。一切のものが一つの巨大な主人に使へてゐます。この巨大な主人が經濟的權力であることは勿論であるのです。

婦人解放の目標を、男からの解放に置くことは根本から間違つてゐます。そは婦人奴隷制度の根本がどこにあるかを掴んでゐないのです。

婦人解放の目標を、法律上の平等に置くことは、ブルヂョア婦人の一運動であるに過ぎません。參政權運動としての婦人運動――例へば新婦人協會の婦人運動などは、婦人解放の運動ではなくて、一つの奴隷運動であるのです。永久奴隷制度をこの地上に押し立てようとする運動であるのです。ブルヂョアの、ブルヂョアによつての、ブルヂョアのための奴隷運動であるのです。

今日の家庭は一つの奴隷國であります。小さい奴隷國であります。しかし自由國のうちに立つ奴隷國ではない。奴隷國内の奴隷國であるのです。大きな奴隷國のうちの一つの小さい鎖鐶であるのです。で婦人解放の運動は、この大きな奴隷國からの解放の運動でなければならないのです。だから嚴格にいへば婦人運動といふやうな部分的、特種的な運動はありえないのです。婦人が最後の奴隷でない以上、婦人運動なるものはありえないのです。窮局において、そは勞働者運動でなければならないのです。そは勞働者運動の一部でなければならないのです。

しかし勞働者運動もまた人間の運動でなくてはならないやうに、婦人運動もまた一つの人間運動でなくてはならない。人格回復の運動でなくてはならない。靈の復活の運動でなくてはならない。奴隷國の代りに、靈の王國を建設するものでなくてはならないことは勿論だと思ひます。

武器問題早わかり

新聞に近頃武器問題が八釜ましく論ぜられてゐます。それは新聞によつて書いてゐることに多少の相違もあるやうだ。

陸軍側では全然そんな事實はないと打消してゐるやうだ。しかし日本の陸軍がいくら打消しても誰れも陸軍の言ひ草なぞを信用するもののなくなつたところに問題の要點が來るのです。それはわれ／＼の手に陸軍の言ひ草を打ち消すほどの具體的な證據があるからではない。證據以外の證據があるからです。

日本の陸軍は何をしてゐる。特に西比利亞方面で何をしてゐる。何のために兵隊を出してゐる。何のために北樺太の占領を半永久にする。何のために何億かの金を使つて、朔風寒い西伯利に、何年も何年も多數の兵隊を出して置かなくてはならないでしよう。西伯利が日本の領土でないこと、西伯利が外國の領土であることは、日本の陸軍閥にだつて分つてゐよう。日本軍閥にだつて、西伯利出兵が日本の領土や主權や國民やを××するためでないことは分つてゐよう。隣國が騷騷しいと日本が危ふい！　さういふことをよく云ふ。昔から侵略家がみなさう云ふ。どんな惡黨にだつて多少の口實はあるやうに、いな、凡ての惡事の場合に、きつと口實があるやうに、若しくは惡事であればあるほどに口實がなくてはならないやうに、侵略主義者は、何時でも口實を先に立てる。隣國が騷々しいから、我國が出兵するのだと、隣國がいくら騷騷しくたつていゝでないか。そんなことのために干渉しなくつてならないとしたら、凡ての國家は戰爭ばかりしてゐなくてはならない。小弱國は何時でも踏みにじられなくてはならない。日本の陸軍閥はそれがしたいのです。戰爭がしたいのです。弱國の弱音に附け込んで何ものかを得ることが、愛國であり、武威の發揚であり、國體の精華であり、國家の道德的理想の實現だと考へるのです。

困つたものです。困まつた時代の「殘物」です。この殘物が日本を支配してゐるのです。日本だけで足りなくて、「大日本」、つまり外國をも支配したいのです。これが誰れにも分つてゐます。これが今日では誰れにだつて知られてゐます。日本の「陸軍」とは何か？　軍閥の支配である。軍閥とは何か？　支配閥です。日本をも、隣國をも支配したいのです。外國を支配する考を侵略主義といひます。

そこで陸軍閥がどんな綺麗なことを言つても誰れも信用しない。われ／＼に具體的な證據のない時でも、この陸軍閥なら、あゝしたことはやるだらうと、いふだけの見當はつく。この見當に誤りはない。で武器問題と特別にとりて、いはなくてもいゝ。正しく言へば、日本の陸軍閥のしてゐることは凡てが「武器問題」であるのです。「武器問題」をとつたら何んにも殘らないのです。

で、この武器問題のことだが、それは二つに區別して考へ

べきです。一つは日本の軍隊がロシヤから押收した武器です。それは五十數棟の倉庫に入つてゐました。それがどうなつたかの問題です。この武器はロシヤの武器です。だから無條件でロシヤへ歸すのが當然である。否、ロシヤの武器を日本が「押收」することが不正であるのです。西比利亞出兵×××であるのでそのなすところも不正ならざるをえないのです。その不正に押收した武器をどう處分したか。それが張作霖の手に移つたといふのです。誰れが移した。分りきつてゐるではないか。張作霖とは何ものか。先づ一種の馬賊である。セミヨノフなどと同樣、一種の馬賊です。

第二の方は、日本軍がチエック軍から預つた武器である。チエック軍が西伯利を引揚げる時に、日本軍に貨車十六箇分の武器を預けて行つたのです。この貨車にはチエックと日本軍との双方の封印がしてあつたのです。その武器がどうなつたか。どこへ落ちついたか、日本の陸軍では分らないと云つてゐますが、それが無くなつたことだけは明らかだ。無くなつたと云ふ噂が立つた。そこでチエックの領事が怪しいとにらんで、日本の陸軍に貨車内を見せてくれと云うた。日本の陸軍は中々應じなかつた。最後に止むなく見せることとした。そこにはもうチエクの封印はなかつた。日本の封印はあつた。貨車内は空であつた。何ものかゞ盜んだ。盜んだことは慥かだが誰れが盜んだか分らない？　誰れだらう？　日本の陸軍に云はせると、日本の番兵が何人かに、だまされたといふことだ。番兵がだまされたのか？　チエックがだまされたのか？　チエックの封印はチエックだけがすることができる。一度剝ぎとつたチエックの封印はチエックだけかできる。だからチエックの封印はもう無かつた。日本の封印は、日本で幾度でもやれる。一度とつても二度やれる。それは日本軍だけがやれる。だから日本の封印は殘つてゐた。さう考へて見れば、武器問題の責任は分りきつてゐる。日本軍の封印の所持者がそれだ。それは誰か。

全集

豫約規定

（一）分冊方法

「アインスタイン全集」は非賣品にして豫約申込者のみに頒つものとす。但し一部分選擇購求に應ぜず）

（二）體裁册數

洋裝、菊版、背皮兩クロース、金文字天金函入　全四册、壹册平均約四〇〇頁新型橫組

（三）刊行期間

大正拾壹年拾壹月より二ケ月壹册宛刊行し大正拾貳年六月を以て完結す。

（四）申込金及期日

豫約申込希望者は、申込金五圓を添へ、來る十月卅一日迄に申込まれたし。右申込金は最終の月の拂込金に充當するを以て、第一回拂込金は別に拂込みありたし、中途解約者に、申込金を拂戻さず。

（五）拂込金及期日

（甲）分拂＝毎回金五圓とす（壹册分）

第一回拂込期日　大正拾壹年拾壹月拾日限り

第二回拂込期日　日限り

第三回拂込期日　大正拾貳年壹月五日限り

但し二ケ月以上拂込みを怠りたるものは解約者と見做す

（右拂込金の外に送本料を要す）

（乙）一時拂＝金拾九圓とす（四册分）

拂込期日は大正拾壹年十月卅一日限り

但し申込金不要（右拂込金の外に送本料を要す）

（六）送本料

凡て拂込金の外に左の送本料を要す。

毎月拂の方即ち壹册分	市內	十二錢
	地方	廿五錢
	臺灣、樺太	廿五錢
	朝鮮、支那	廿五錢
一時拂即ち四册分	市內	四十八錢
	地方	一圓
	臺灣、樺太	一圓
	朝鮮、支那	一圓

（七）配本

第一回配本は十一月二十日より拂込金の順に發送す。（以下毎回の配本も拂込金の順とす）

內容見本

ハガキにて申込次第無代進呈

締切期日十月卅一日限

（裏面を見られよ）

四一　臨界狀態の近くに於ける等質液體及液體混合體の蛋白光の理論
四二　光量子の理論及び電磁的エネルギーの局所集中の疑問について
か？
四三　一部分解せる氣體内の音響傳播

第四卷（一般相對性理論）

特殊相對性理論から一般相對性理論への一大飛躍は蓋し最も困難苦慮を極めたものです。その種々の考察から理論の完成に到るまでの論文は本卷內容の大部を占めるものです。更にこの理論の應用として驚異すべき宇宙論を生み、又物質構成の理論への發展の計畫は、この卷に收められた諸論文から覗ふことが出來るでせう。之等はすべて一九一三年以後最近に到る時期に書かれたものです（石原純博士記す）

第四卷　目次

一　光の傳播に對する重力の影響について
二　光速度及び萬有引力場の靜力學
三　動力的萬有引力場の理論について
四　相等性及び萬有引力、アブラハムの注意に對する答
五　アブラハムの釋文『更に相對性及び萬有引力について』に對する注意
六　萬有引力問題の現時の立場について
七　萬有引力論の物理學的基礎
八　絕對微分學より見たるノルドストレームの萬有引力論（アインスタイン及びフオツカー）
九　ライスナー氏の疑問に對する回避解答
一〇　一般化せられた相對性理論及萬有引力論の原理的考察
一一　一般化相對性理論に基づく萬有引力論の場方程式の共變性（アインスタイン及びグロースマン）
一二　一般化相對性理論及び萬有引力論の一介證（アインスタイン及びグロースマン）
一三　萬有引力の一理論の物理學的基礎（アインスタイン及びグロースマン）
一四　一般相對性理論の形式的基礎
一五　一般相對性理論の基礎並考及びこの論の天文學に於ける應用について
一六　相對性理論の範圍の二三の見易い考察について
一七　一般相對性理論について
一八　水星近日點運動の一般相對性理論による說明
一九　萬有引力の場方程式
二〇　一般相對性理論の基礎
二一　フリードリッヒ・コッツトラーの論文「アインスタインの相等假設及び萬有引力について」について
二二　萬有引力の場方程式の近似的積分
二三　ハミルトンの原理及び一般相對性理論
二四　一般相對性理論に關する宇宙論的考察
二五　ヤコービの定理の一演繹
二六　一般相對性理論の原理的考察
二七　萬有引力波について
二八　ド・ジッター氏の與へた萬有引力方程式の一つの解に對する批判
二九　一般相對性理論に於けるエネルギー則
三〇　グールケの小論「エーテルについて」に對する注意
三一　シュレーディンガーの論文「萬有引力の場のエネルギー分素」について
三二　シュレーディンガー氏の小論「一般共變的萬有引力方程式の一解方特系について」に對する注意
三三　萬有引力の場は物質粒素の構成に於て本質的の役目をもつか？
三四　從來ニウトン力學によりて說明せられぬと思はれた月の經度の週期的變化に關する注意
三五　一般相對性理論の基礎の午近の補足について

發行所
東京芝愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

兒童の性教育について

帝國小學校長 西山哲治

四五歳から十二、三歳位までの兒童が性に就ていろいろ不思議な考へを起して訊かれた時、其敎へ方に依つて種々な弊害が起ると思ひますが、貴方の御家庭で次の樣なお兒さん達の問に對して、實際に何う云ふ風に御敎へになられてゐますか、それを御聞かせして頂き度いと御願ひしました結果、多數の極めて興味深い御回答に接しました。

第一問 私は何處から生れたの、と訊かれた時。

第二問 赤ん坊は何故お母さんのお腹の中にゐるの、と訊かれた時。

第三問 お母さんのお腹はどうして大きいのと訊かれた時。

第四問 赤ん坊はどうしてお母さんのお腹の中から出てくると訊かれた時。

第五問 男と女とはどう違ふと訊かれた時。

第六問 あの牡鷄は牝鷄をいぢめてゐるよ、(鷄の交尾を見て)打つてやらうかと訊かれた時。

□

十二三才の男女兒と假定す

未だ同樣の質問に接しませんが、其場合には次の樣に答へたいとおもひます。

一 お母さんが產みました。

二 赤ん坊はお母さんのお腹の中で十ケ月程ゐます、外へ出られるだけ大きくなる間、最も安全な赤ん坊のお部屋がお母さんのお腹の中にあります。

三 赤ん坊の居るお部屋がお母さんのお腹の中にあるから大きいわけです。

四 赤ん坊がお母さんのお腹の中のお部屋で靜かに大きくなつて外へ出ようといふ力が出來て來ると產れて來るのです。

五 花にも雄花、雌花、雄蕊雌蕊あり。又、凡ての動物には雄雌とがあつて、雌の方は實を結び、子供を產むもので、人間ではそれが男女となつてゐる。

六 いぢめてゐるのではありません。雄蕊が雌蕊の花紛を受けて果實を結ぶやうに、牡鷄に牝鷄が交尾して卵を產むとその卵は孵

化し雛になるのです。

□　武林無想庵

一　小生の子供いまだ二歳ですからまだ訊く筈はありませんが若し訊かれたら『お母アさんのお腹から』と答へます。

二　『この世の中へ生まれるため』

三　『赤ちやんが這入つてゐるから』

四　『お父さんがお母さんを可愛がつたから』

五　『オチンチンがあるのが男、ないのが女』

六　『打つてはいけません。あれは男が女を可愛がつてやつてゐるところですから。』

□　關寛之

一　お母さんの胎内から生れた。神（天、自然）がお母さんの胎内に生ぜしめられたから。

二　子供（人間の小さい時は）は獨りで世の中に生きることは出來ない。それで父母のお蔭で學校に通ふ。あなた方より小さい赤ん坊は、食物すら一人で食べることは出來ない。それで一人で食べ得るやうになるまで、お母さんの胎内で育てられるのです。

三　赤ん坊がはひつてゐるから。（第二問に依つて理由が解かれる。）

四　（幼兒には）神様が、赤ん坊が獨りで食べられるやうに育つと、母の胎内から眠つて夢みてをられる間に出して下さるのです。眠つてゐるのだから、何うして出して下さるかはわからない。

（長童には）鷄の卵を生むやうにして出てくるのです。

五　男は子供を生まない。女は子供を生める。神様の意志で女を選まれたのです。（お尋ねの意を生殖的方面の性差と解して。）

六　弱い者を虐める奴は追つぱらつてやりなさい。

□　山川菊榮

年齢滿五歳位

一　『お母さんのお腹から』と答へてゐます。

二　『お母さんのお腹の中の、赤ちやんの玉子が、お母さんが可愛がつてあげたから段段大きくなつて坊やになつた』と話します。自分が母親の胎内にあつたことは非常な喜びであるらしく、どんなにか樂しい時代でもあつたやうに、も一度はいつてみたいなどと申します。

三　初子の誕生後、私に妊娠の事がありませんから、さういふ疑問を發したことがありません。然し自分が胎内にあつた時、母親のお腹が大きかつたことは承知してゐます、そして少しもをかしいこと、妙なこととは思つてゐません。

四　『坊やが餘り大きくなつて、お母さんのお胎にはひり切れなくなつたら出て來た』といふだけで滿足してゐます。餘りデリケートなことは『段々大きなお兄さんになつてからお話してあげる』といひます。

五　第二次性徴を男女の別と信じて少しもそれ以上の疑問を抱いてゐませんから、今までの所、此方から何も教へる必要を認めません。

六　これも例がありません。

□ 入澤宗壽

一 お母さんのお腹から（凡て平靜に眞を敎ふるがよく、常にそのやうに敎へ居れり）

二 まだ一人前にならないから（幼童は此理由にて滿足す。生成の原因をその際に說くに及ばず。それは漸次機會を利用して徐々に導かば十一、二歲には既に了解すべし）

三 赤ん坊が居る故（前條と同じ。平靜に早く敎へ置かば、年長にかゝる問を起さず）

四 中で大きくなつて一人前になつたから、（前條に同じ。早く敎ふることは性敎育の核たる『平靜』のために好都合なり）

五 男は子を產ます、女は子を產む（凡て機會を利用して敎ふるがよし。お母さんは何故湯に這入れないかと問いたとき、月經につき敎へやれり）

六 動物を打つことはいけない（若し追求すれば、交尾することにより卵を生むことを敎ふ。八歲の子もそれを知れるが故にかゝる問を發せず。凡て年齡により個性により答も異るべきなり。四五歲より十二三歲まで一樣に取扱ふ譯にゆかず。以上の如きは眞を敎ふる主義の下には幼少の際にあらはるゝものなれば、その積にて答へたり。）

□ 帆足理一郎

年齡三歲位

一 お母さんのお腹から生れたの。

二 赤ん坊はお腹の中で出來たの。お腹の中にゐなければ太きくならないの。

三 お母さんのお腹は赤ん坊がゐるから、太きいの。

四 赤ん坊が太きくなると、お母さんお腹から獨りで出て來るの、お母さんのお腹には赤ん坊の出て來る處があるの。

五 男にはちんこがあるの、女にはないの。男は髮を短くしてゐるが、女は髮を長くしてゐるの。

五 あれは、いぢめてゐるのではない。卵を作つてゐるのだから、打つてはいけない。

□ 鹿子木員信

私には九つの男の子と六つの女の子がありますが、私が、家にゐた事が餘りに多くないせゐもあるかも知りませぬが、まだ御提出になつたやうな質問を受けた事がありませぬ。從つて御答へする事が出來ませぬ。

唯だ、一般に、私の觀察した所を申しますと、こゝに御提出になつたやうな質問は、必ずしも凡ての子供が言葉に現はして問ふ所ではないと存じます。性に關する質問そのものが、かなり一々の子供の個性に依るやうに思はれます。即ち、多くの子供は性に關して或本能的深祕な——寧ろ神祕な畏敬の念を持つてゐて、中々口などに出して問はぬ事が多いやうであります。また元來智的な生來自然科學的とも云ふべき性質の子供の場合に於ても質問を起す心の背景は、個性から個性に違ふのだと思ひます。從つて是れに對する答もその都度都度、心すべきものであつて、一律のものであつてはならぬやうに思ひます。

□ 三島章道

年齡十二三

一　おかあさんのお腹からさ。（かう答へてだまつてゐればそれでよし、又、『お腹つて、お腹のどこ？おへそ？』ときかれたら『今にわかるさ』と云つてやる。もしそれが、もつと五ツ六ツの小さい子なら『えゝさうさう』と云ふのだけれど。そして十二三よりもつと大きければ、本統を數へてもいゝと思ふけれど、十二三では無理に數へなくてもいゝと思ふ。）

二　赤ん坊はお母さんのお腹に出來るにきまつたものだから。

三　赤ん坊がゐるから。

四　充分おなかの中で育てばひとりでに出てくる。

五　男と女とはうまれつき體が違つてゐると云ふより仕方がない。

六　あれば卵を與へてゐるんだから打たなくてもいゝ。

□　大島正德

男兒九歳、女兒五歳位。

一　母さんの御腹から。

二　何等の質問なし。

三　赤ちやんがゐるから。

四　御へそから。

五　あるのとないのと。

六　場合なし。

□　菊池寛

女、年齢五歳位。

一　『お母さんのおぽんにから』

二　『大きくなれば分る』

三　訊かれる事由が今のところありません。

四　『大きくなれば分る』

五　『女は髮をゆつてゐる』目下のところ、それにて澤山。

六　鷄を飼つてゐませんから、その心配なし。

□　堀江歸一

一　大抵の場合、『お前は天から降つて來たのだ』とか『川から流れて來たのだ。』位のことにして置きます。

二　天からお母さんのお腹の中に降つて來て少し大きく爲るまでお腹をお家にして居るのだと申します。

三　赤坊が這入つてるから大きいのだと申します。

四　赤坊が大きく爲つて、眼があいたり、耳が聽えたりすると、世の中へ出て來て人間の仲間入りをするのだと申します。

五　男は強く、女は優しいものだとして置きます。

六　あれはいぢめて居るのではない、遊んで居るのだと申します。

□　木村久一

西洋の本を見ると、向ふの子供は、既に三四歳で、しつこく生殖に關する質問をして、親を手こずらせるやうである。そして、滿足な説明を與へられないと、精神に變調を來すやうなことさへ少なくないやうである。實はかう云ふ風に好奇心の強烈な國民なら頼もしいのであるが、悲しいかな我國の子供は、かう云ふ強烈な好奇心を有つて居ない。私の長男は六つになるが、まだ生殖に關する質問を發したことがない。そして私の觀察では、私

の長男は決して例外ではない。我國の子供は生殖に關して不審を起しても、西洋の子供のやうにしつこくない。容易に紛らかすことが出來る。我國の子供は、生殖に關してに限らず、概して、西洋の子供のやうな強烈な好奇心を有つて居ない。我國に、ニウトンやダーキンの現はれない原因はこゝにある。それは兎に角、精神作用は、人種によつて非常に違ふことを忘れてはならない。例のラッセルは支那に關する或る論文の中に、支那人のザツクバランな性質を述べて、サイコアナリストも、支那人の間には、精神分析の材料を多く集めることは出來ないだらうと云つて居るがこれは全く、人種によつてメンタリテイが違ふ爲で、實際我々日本人（或は東洋人）は、精神分析の著書を讀んでも、成程と思はれない點が非常に多い。我々はどうしても西洋人のやうに、精神分析のシーオリーによつてチヤームされない。これは要するに、我々と西洋人のメンタリテイが違ふからに外ならない。我國には歐米に於けるが如く、精神分析が流行になる時はないだらうと思ふ。　話が横道に外れたが、西洋の本を讀んで、直ちに我國で性教育などを主張するのは早計である。この點は、嘗て述べたとがあるから理由は略するが、要するに、性教育に關しては、私はサイレンス論者である。そして質問の回答としては、私はまださう云ふ機會に出會したことがないと云つて置きます。

□　安部磯雄

私共には七人の子供がありますが一度も性に關する質問を受けた記憶がありません。私はなるべく性に關する書籍によりて子供に必要なる知識を與へたいと、思うて居ります。

アイスタイン教授の來朝

紅葉の燃えつく我國に、アイスタイン教授は來朝する、神戸着はもう間もない十一月十六日の朝だ、相對原理がいかに根深い理論であるか、歐米の學界のすべてはこの相對原理のために動いてをる、我國では大教授の到着を迎ゆるため長岡、石原諸博士等は神戸まで出迎へらるる、そして十九日は教授を正賓として我學界總出の歡迎會が小石川植物園で開かるることに決定してをる。

又攝政宮殿下は相對原理に非常の趣味を有たれて十一月廿三日長岡博士を宮中に召されて相對原理を御聽講なる筈で、その夜は各宮殿下等と博士を晩餐に召されて、その席上、博士に對して相對原理の御質問があることと承はつてをる。



日本藝術の印象

アンナ・パヴロワ

あたしが、お國を訪ふと、もう、月のひとつを閲しました、まことに早いものです、さうして、あたしは、この帝國ホテルに――慕はしい大東京にも――別れねばならぬ、寂しき日が、あたしに近よつてゐるのです。

おもへば、碧い波の上から丹麗な富士山の姿に迎へられて、港にきたあの朝から、いろ〳〵な日本の印象が、あたしの踊る尖頭旋回のやうに、めまぐるしいやうに、あたしの感覺に觸れ溢れてゐるのでございます。

エンプレッス・オブ・カナダの甲板で、あたしは、いつも、どこの國に行つても、されるやうに、お國の新聞記者の方に逢ひました、そして寫眞を撮影させられました。それは、なんでもないことですが、お國の藝術を解せらるゝ知識ある女性にお逢ひしたことが、いちばん、あたしを驚かしたのです、あたしは、お國の女性を人形のやうな女性だとばかり思ふてゐたのでございます、白い顔に夢を見てゐるやうな黒い細い眼をもつた、行儀作法のゆきとゞいた靜かな女性で、言葉すらもあまり言はれぬ、はにかみがちな、そんな女性だと思つてゐたのでございます、その女性のすがたは思ひがけないあたしの意表にでた女性でございました、流暢な英語をかたりました、握手を、いきほひよくしました、さうして社交的な謙譲を程よくもつた女性でした、――あたしは歐米で日本の女性によく逢ひました、友もあります――しかしそれは海

の外に出た女性——代表的な分子の女性であつて、進取的な頭脳の所持者であるからこそ、あゝでもあつたのだこ——が、うばかり思ひこんでゐたのでございます——が、あたしの思想に[illegible]しいのをお笑ひくださいますな。　欧米の女性が、まだまだ日本の女性のことは、あたしの想像のやうな女が多いことゝ考へることを、あなたには[illegible]の女性に[illegible]思ふのでございます。

お国の女性は——あたしの接した、あたしの印象の女性は　[illegible]頭脳[illegible]女性ではなかつたのです　あたしは、[illegible]頭脳の女であるべく西洋は、[illegible]ことではあるまいと思ふのです。　[illegible]日本に[illegible]生活といふものに触れた時、つくづく[illegible]思つたのです——[illegible]日本は近代のコンマア●シヤリズムの大きな波に、なかなかに、[illegible]。

あくまでも[illegible]でございます、[illegible]のことをよく[illegible]お国の[illegible]價値をもつてゐるのでございます、[illegible]のことでございます。　[illegible]日本の[illegible]のでございます、[illegible]日本の現状に女性はなかなかの[illegible]のです、日本の現状の女性の[illegible]ことを目醒むる[illegible]目醒むるほど、むつかしい[illegible]の女性の大[illegible]に[illegible]のです、[illegible]日本[illegible]

日本人の生活は[illegible]

ます、それをどこまでもくらべて[illegible]

ませう、しかしそこを、あたしが踊るやうなバッキヤナルのやうな生活の力の豐悦をもつと、つきすゝむべきではありませんか。

あたしが舞臺で踊るのは、ひとつに人生の悲痛を癒すべき任務だとして踊るのです——人類のための藝術です。

あたしは日本に上陸してからこのかた、いろ〳〵な社會組織のなかに迎へられました、東洋と西洋の差が實によくわかりました。

東洋の繪畫と西洋の繪畫の相違がそこにあります。

三味線音樂(スリー・スワング・ミユジック)とヴァイオリン音樂の相違がそこにあります。

あたしは藤蔭會に招かれて日本の新らしい舞踊を見ました、さうして"The Dance of the Fn Leavealles'(落葉の踊)を興味をもつて見たのです、あたしの爲に、特に刷つて下すつたプログラムには、かう書いてあります。

This is the impression conveyed by the fallen leaves as they are lossed up and down and to and fro on the ground by the wind toward the end of autumn.

あたしが帝國劇場で踊つた『秋の落葉』と同じ趣をこのダンスがもつてゐるので、あたしは甚大な比較興味をもつたことは、だれしもかゝる場合にあへば、かうあるであらうと思ふのでございます、コト・ミユジックにつれて靜かにミス・シヅエは踊りました、そして可憐な二人のダンサアは落葉のひとつのつとめを完全にはたしました、踊のテクニックは、實にあたしらもよくわかつたのです、言葉で表現できぬほど、心から心にミス・シズエのテクニックはわかりました。この踊りで東洋と西洋の相違が實によくわかりました。

おなじ藝術表現で、こんなに表現がちがふのです。

あたしの落葉は生の悩みそのまゝを表現したつもりです。

ミス・シズエの落葉には東洋の靜的の瞑想した姿しか見られません。

コト・ミユジックは、やはり印度佛敎の響です、亞細亞の光りに照らされた蓮の花のやうな沈默のなかの悲しいすゝり泣きです。

あたしは芝のシユラインにゆきました、東洋の匂ひです、壯嚴でした、マダム・バツタアフライにでる鳥居の大きな門がありました、美くしい塔がありました、神聖の地としての絶好の松木があたしを慰めました、その門の前を近世の自動車が走りました、褐色の市街電車が埃をあげてゆきました、すべてが、サンダルを穿いた希臘人が靴を見て驚くやうな姿態をこの東京はもつてゐるらしく思はれるのです。

ある日、あたしは能プレーを見ました、立派なパントマイムです、心の藝術です、ところぐ不可知な動作に逢ふのです、しかし意味は囚へ得ました、あたしは能プレーに對して、すこしの知識をもつてゐません、能プレーは簡素であるべきものです、布臘の古代人のマスクの演劇が其處にあります、あのマスクは口を大きくあいて悲劇の物語をしました、この能プレーのマスクは、ひとつも口をあいてゐません、みんな結んでゐます、永久に結んでゐるらしく見えます、そこに心の藝術を見せるものがでたのであらうと思ひます。

ある日帝國劇場の劇を見ました、あたしは其の背景の進步してゐるに驚きました、その時の劇のテーマは池(ポンド)でした、一

人の情とて女の戀の物語は話のやうに思はれました、わからないながらわかりました、あの背景は、まつと廣い視野に見せる必要がなかつたでせうか――ういらうは興味がありました、あの踊りにも日本の繪の氣分がよく描かれて居ります、ういらうのキモノの色彩は、だれの考案でせうか、すぐれたものに思ひます。

日本の劇を見る人々は服裝が亂れてゐると思ひました、禮服は日本では、劇を見るにきないのですか、ハオリ、ハカマは、いつ着るのですか。

ある日ゲイシヤ・ガールのパアチイと呼ばれました、日本の錦繪の姿は、この階級にばかりのこつてゐると思つて愛慕の情をもつて見ました、あたしに、はなしかける女性がひとりもゐなかつたのは寂しうございました、日本のナイフ・アンド・フオクのハシは、なか〳〵むづかしいものです、あれは一度つかへばすてるときゝました、國民性のひとつが現はれてゐます、日本の下駄もはきにくいものです、あたしの踊り相手のミスタア・ヴオリイニンに慰さめの靴（コンフオタブル・シユーウス）だと言つて笑ひました、どうして〳〵慰さめでありませう、ヴオリイニン氏のアイロエイです、箸と言ひ下駄と言ひ、實にむづかしいものを日本の人々はつかふものです。

ある日美術學校を訪ひました、英作和田はいろ〳〵な東洋佛敎の繪を見せてくれました、佛像も見えました、あたしは古重襴のカケモノのキレも繪よりも深く愛しました、日本人の祖先の物をつくる魂のこもつたものが見られるからでした澁味のあるあの重襴の色彩は、われ〳〵の生活のうへにも應用ができると思ひます。

ある日ミツコシにゆきました、日本の純なキモノがなくて歐米にゆくキモノがレデイ・メードにどつさりありました、

そのキモノは心ある女性なら、すぐそのまゝ受けいれかねる安價な色彩と模樣がありました、どこに多くゆくのでせうか日本のキモノなら、まだ、なんでもよいと思ふ氣輕な女性がまだ歐米に多いのでせう。

あたしどもは、いかなるときでも美の高上を願はぬ時はないのです。

草の葉のひとつでも美であることをあたしは望みます。

世界は美であらねばならぬのです。

世界は美の宗敎に支配さるべきものです。

それならば、だれがこの美の宗敎を司さどるべきなのでせう、われ〳〵藝術にたづさはるものが、その大任務をはたすべきなのです、通常の人が雲烟過眼する萬象のなかに美の理想をとらへてこれをその藝術に現はして、美趣をこゝにありと敎へるのです。

この理想を發揮して、永遠の常住相をもつて心を感化するのでなければ藝術といふものは成立せぬであらうと思ふのです。

あたしは、極めていそがしい身で、舞臺から睡眠それから稽古といふわけで、日本の女性の方々としみ〴〵物語をするチャンスがなくて過ぎたことを實に殘念に思ふのでございます、あたしは世界の國々を、かうして急がしく旅するのでございます、しみ〴〵と物を思ひ且つ考へることは、まれなのです、疲れた思想は、よくありません、ですからこゝに、あたしが書いた斷片は瞥見（グリンプス）にすぎないのでございます、グリンプスは、おほくフレッシュなものです、しかし物の心核は、つかむときを、さうでないときがあるものです。

あたしは、まだ多くの溢れたやうなものがあるのです、しかしそれをまとめる勇氣がないのです、日本の暑氣は隨分強

いこともそのひとつです、稽古が日本の舞踊の稽古のために——割におほくの時をさくのです——それがために敬愛する日本の女性のためになにごとかのこしたい言葉を、つひやしたく思ふのですが、それがかなはぬのです。

あたしは、あまりペンをとることがありません、言葉がすぐ文字になるのに慣れてをらないのです、ですから、あたしの文意はきつと斷片的です、まとまつたものがありません、これは心から深く日本の女性に詫びねばなりません、思想の深味もなく、まして啓發すべき言辭もないのです、ひとりのダンサアが思ひうかべたまゝのかざらぬ印象だと思つてくださればよいのです。

あたしは Virina Reconstruo のために、めづらしくも印象をのべました(あたしには長く感想をのべることがあまりないのです)あたしは有力な、あなたの雜誌を通じて、日本の女性の爲に、あたしの日本滯在中の深甚な同情をうけたことを感謝します、さうして永遠にこの地上をすみよからしむることが女性の義務であるべきことを、お互ひに胸ふかく刻みこんで、地上樂園のために、勇ましく鬪ふと言ふことを盟ふものであります。(於一九二一・九・二九東京・帝國ホテル)

疾病と精神力

醫學博士 樋口繁次

われ〳〵人間の生存は肉體にのみ依てなるものでなく、それは實に其の腦中に發現する精神即ち靈の活動を要するものである。精神か吾人日常生活の上に於て肉體と同じく、或はそれ以上の働きを爲しつゝある事は何人も認むる所である。殊に病者に於て、其の疾病の治癒に就ては肉體のみにあらずして精神の働きが、非常なる影響を與ふるものなる事は、われ〳〵の日常經驗しつゝある爭ふべからざる事實である。

精神即ち靈の作用は、第一に病者が醫師の診察を受くる場合に起る即ち其の醫師を信じ此の醫師の診斷及び治療ならば必ず自己の疾病は治癒すべしと固く信ずる事である。然れば其疾病は大體に於て治癒し得べしと余は信ずる。尤も疾病の治癒は疾病本來の性質と、其の疾病の所有者たる病者の肉體の抵抗力とに大なる關係を有するものなるを以て、如何に病者が強き信仰を有すればとて今日の醫學が敎ゆる治療法に依つて必ず全治し得べしとは斷言し難きも、少くとも其の醫師を信ずるの念慮強き時は、其の疾病の經過に良好なる影響を與ふるものなる事は疑ふべからざる所である。それと共に治療者たる醫師も、如何にしても其の病者の疾病を治癒せしめたいと云ふ願念の非常に熱烈なるに於ては其病者をして必ずや良結果を收めしめ得べしと信ずる。然るに現代社會に於ては病者は容易に醫師を信ずる事ができない、假令ば甲の醫師を訪ねて其の病氣に對する診斷並に治療に就て意見を聞き、其の重症にして治療の爲には相當苦痛を忍ばざるべからざるを知るや、其病者は必ず更に乙の醫師に至り、丙の醫師を訪ね、終に最も簡單に治癒すべき意見を有する醫師に落着かんとし其診斷並に治療法の適否等は問題に上せざるかの觀がある是れは素人であつて醫學の知識がないから止を得ずとも云へ得るが一面病者が醫師に對する信用がないかとも言ひ得らるゝ、甚だしきは東京市内著名の醫師を歷訪する者もある、一方醫師の側に於ても、一度訪ねられた病者に對し的確に其病症を診斷し如何にしても其の疾病を治癒せしめずんば止まずと云ふ底の學問に忠實なる、病者に熱烈なる同情を有する

もの果して多きや、否や。

而して余の今日迄に得たる經驗に據れば、病者が治療者を信ずる事の熱烈にして、同時に治療者に於ても病者に對して注ぐ同情心非常に強き時は、其の疾病は、不治なるものは止を得ずとするも然らざるものは多くの場合に於て、之れを速に治癒せしむる事が出來る。或は苦痛を感ぜしむる事少くして治療せしめ得べしと思惟す。今日行はるゝ治療法は主として科學的、物質的の治療法にして、醫學者の多數は、此科學的物質的治療法に依て治療法の極致に達せんと努力するが如き觀がある。余は如此き科學的物質的治療法にのみ頼ては治療の眞諦を得る能はず疾病の治療は如上の方法と精神的療法と相俟て初めて完全なるを得るものなりと信ずるものである。卽ち精神的治療法は又如上の物質的療法と同樣に大切なる治療法なりと考ふるのである。唯精神的の治療法を行ふ所の者が多くは非醫者にして、而して之れを誤まられたる宗敎の如きものと聯結せしめ居る爲めに第一に病症を診斷すること能はず、從つて之れを應用する適應症を選擇する事が出來ない。偶々適中し奏功するものあれば是を以て、萬病に效果あるものとして濫用し、それが爲めに物質的、科學的の治療法のみを以て治療法の全般と考ふる者よりして詐僞者の如く考へらるゝに至るものである、然るにも關らず此の如き方法が治療に效を奏して到る處に患者の信用を繋ぎつゝある所以のものは其方法が全然無效にあらざるヿを證明するものにして、患者迷信の結果なりとして否定し去る能はざるものなりと思ふのである。余が日々診療を行ひ居る際に於ても患者に應對する態度溫雅にして内に不可能の威嚴を藏し診斷治療法を說明する言句詳細を極めて患者の聽かんと欲する要點を盡し病苦に對する同情患者に徹底したる場合には常に好結果を齎らして居る手術療法の如き切開し或は縫合する等全く技術的の治療と信ぜられ居る方法の如きも其の成績の擧ると擧らざるとは、唯々技術の問題のみにあらざる事を信ぜざる譯には行かざるのである　そは自己の精力常に旺溢して而して如何にしても其の病者を、病苦より救濟せざれば止まずと云ふ願念熱烈にして行はれたる手術ならば、何時も其の結果は良好なるもので、若し自己が何等か身體の故障、或は精神上不安ありたる際に行はれたる手術は、自己の全精力を傾注する事能はず何等かの缺陷を生じ易きものである事を日々の手術の成績より確く信ずるものである。故に余は自己の手術の業績を擧ると其の然らざるとは、技術上の問題のみにあらずして技術は勿論大切なのには相違なきも其の刀を執る者並に之れを介助するものゝ精神の緊張の程度に依るものと信ぜざる譯には行かぬ。余は人間の活動する時は精神が緊張し靈氣發生し其

靈氣が對者を包掩する或は對者の體内に浸入するものと思ふ其靈氣が何者なるやは勿論科學的に證明する能はざる處であるけれども其之あるを疑はざるものである、假令ば元氣旺盛なる人と對談し或は演説を聽く時は自ら躍るを禁じ得ない、或は偉人に接して頭自ら下るが如きは何故であらうか、余は二十年の經驗より刀を執る時のみと言はず疾病の治療は精力衰弱せる病者の體内に治療家の旺盛なる精力を注入するに依て初めて效を奏するもので服薬或は手術の如きは其方法にして電氣を導入する電線の如きものなりと言はんと欲するものである。

故に治療者は、其の治療を行ふに當つては、自己の精神肉體共に健全にして、熱烈なる同情を有し旺盛せる精力を發揮する能はざれば治療者としての價値なきものなりと思ふ、そして自己の眼前に在るものは唯疾病のみにして、自己は憐むべき疾病の所有者より其の疾病を除き去らん事を祈願するのみ、其の疾病の持主の何人なるや、社會的地位の如何なる者なるや等は、素より問題視すべきものでない、事實に於ても治療を行ふ場合は、總て消毒せられたる白布を以て掩ひ施術すべき部分を現はすのみなれば、眼前全く病あるのみである。次ぎには若し病者が克く治療者を信ずる事を得ば、手術の如き肉體の上に大なる襲撃を受けて、甚だしき苦痛ある場合にても能く之れに耐え忍ぶ事が出來る。之は信の力に依るに外ならざるものにて、彼の痲醉藥を用ふるが如きは一時藥物の力に依り苦痛を忘るゝのみにして、眞に苦痛を感ぜざらしむるには至らない、假令ば分娩の如き、其の當事者たる婦人に取りては、大なる苦痛にして、而も克く之れを耐へ忍ぶ事の出來得る所以のものは、先祖代々分娩なるものは刹那的苦痛を覺ゆるのみにして胎兒娩出すれば其の苦痛は直ちに分散すべきものなることを言ひ聽かされ之を堅く信ずるが爲である

かく種々の病者が、肉體的の苦痛を感ずる治療を受け居る際にも、もし其の病者が或時間を經過したる後には必ず輕快するものなりと云ふ事を信じ、且つ此の方法は可成り苦痛なるも、此の治療を受くる事に依り自分が永く苦しめられたる苦痛を消散せしむるを得るものなる事を固く信ずるを得ば、其苦痛は比較的に惱みなく忍び得らるゝのみならず却つて愉快なる回復の光りを望見して、苦痛に堪へ得るものである。之れに反して病者が治療者を信ずる事の稀薄なりし場合には非常に煩悶し、自ら其の苦しみを増大すが如き狀態にある事も亦日々實驗する所である、但し其の信念が治療者に向けられずとも、何等か他の神或は佛と云ふが如き信仰力に向けられたる場合にも、其れに依り輕減を得らるゝものである。其對象が何物にせよ確く信ずるものありとすれば、之れに依つて又必ず輕快を得るに至る。此の意味に於て世間より所謂迷信なりとして排斥せられ居る御符神咒の如きもこれを運用するものにして、其の宜しきを得れば、又治療の上に於て有效ならしむる事の出來得るものである。だから余の考ふる所

にては治療者が病者を治療する、病者が治療を受くると云ふ場合には、病者は治療者に絶對の威力ある者と信じ並に斯く信ぜしめ治療者は病者を自己の體軀の延長せるものなりとの考へを以て病者と自己と同體なりと考ふる程度迄に同情の厚かつたならば必ず其の治療行爲が顯著なる業績を擧げ得ない事はない。斯の如き信念より出發して、治療者は病者の訴ふる事は其の繁雜なるを厭はず懇切に之れを聽取して、卽ち病者は自己の病める所以缺けたる箇所を治療し苦しみより免れんが爲めに、治療者を訪ふものなる事を了解し更に自己の病める時を回顧して、病者の希望を充すやうにすべきだ。其希望を入るゝことは同時に病者の信用と信賴に打克つことゝなると思はる。而て其疾病の本質を斷定するに當つては、永き年限の數多き經驗よりして、一見直覺的に確乎たる動かすべからざる斷案を下し得る事も少くはない、屢々下し得るに至るものである、古來名醫の遺されたる奇蹟的の診斷も亦偶然の事にあらずして、其の永き間の數多き經驗より生み出されたる所の尊き產物なりと信ずる。

然しながら今日は、一面に於て、斯の如く直覺的の病症の診斷を尊重する事の外に、他の一面に於て極めて精細なる細菌學的、或は組織學的、或は化學的の檢索を行ひて、其の診斷を確實にするの必要がある。此の方法に依て古來難病、或は不治なりと考へられたる疾病を極めて早期に發見し診斷し得て、之れを根治せしむる事が出來るに至つたのである。此の方法が親切に學問の示す方針を少しも誤る所なく忠實に行はれたる時には、假令ば結核の如き疾患、或は癌症と云ふが如き惡性の腫物、其他種々の傳染性疾患を、極めて早期に診斷し、之れを根治せしむる事を得る、又其の傳染と蔓延を防遏するを得るものである、斯くして病症を卽ち假令臨床上其顯はれたる症候に依て何病と診斷せられても前記の檢索を行へて其成績を握らざれば積極的の診斷は下されぬと云ふ事になつて居る假令ば打診や聽診に依て肺結核と診斷しても喀痰の中に結核菌を證明せざれば、肺結核とは言はさぬ。視診や觸診で癌腫と診斷しても組織學的に癌組織を認定する迄は癌腫と診斷する事は憚らねばならぬ。是れは類似の疾病が澤山あつて誤り易いからである又實際此手續を閑却した爲に誤診した例も少くないからである、斯くして病症を斷定する事を得ば、之れを治癒せしめて、其の病者を健康體に復せしむるの方法を行はなくてはならぬ、而して治療の方法は昔よりして今日まで大部分は種々の藥物を服用せしめ或は塗つたり貼たり注射をすると云ふが如き所謂藥物的の治療法が行はれて居る、前世紀の中頃よりして手術的の治療法が熾んに行はれ、今世紀に至り理學的及び化學的の治療法が漸次歩を進めて來て居る、今日治療者として心得置かざるべからざる要件は、疾病の持主よりして其の病根を除き而して其の疾病を治癒せしむる爲めに病者の身體を損はざる事で、次には其の治療を行ふに當りて病者を苦しめざる事である、卽ち病者の體軀を損傷する事なく又苦痛を感ぜしむる事なく其の病苦より免れしむる事である。此の理想は理學的療法の發達と共に漸次現實に

近づきつゝある、然しながら今日の醫學の敎ゆる範圍に於ては尙ほ病者の身體を損はずして治癒せしめ得ざる多くの疾病がある、斯かる疾病を治癒せしむる爲めには手術を行はなければならぬ、余は常に思ふ、自己の身體に傷つけらるゝを厭ふが如く病者も亦同じくこれを厭ふであらう、然れども、刀を加へざれば其の疾病を根治せしめ能はざるが故に、止を得ずして手術臺上に上すのである、身體髮膚は父母より受けたるものにして自己の私有物にあらずと考ふる立場よりしても尊重すべきものである。他人の身體に刀を加へて罰せられぬものは唯醫師あるのみである。故に治療者は刀を執るに當つて、唯其の疾病を治癒せしめ得れば、目的は達したるものなりと考ふるならば、其治療法は第二段に落つるものなりと云ふを憚らざるのである。斯の如き理由よりして疾病を治癒せしむる事は第一義なるが故に勿論其疾病を全治せしめなければならぬ。而て其疾病を全治せしめ得べしとの確信を有するに至つたならば手術の切傷は成るべく小にして又成るべく目立たざる場所に作られねばならぬ斯くして終には手術したる痕を求むるも發見し難きに至るを希望して刀を執らねばならぬと信ずる、而して此願望を達する爲には術者の感ずる苦痛を増し或は操作を困難ならしむるが如き事を問題にしてはならぬ尙ほ之れに關聯して記述したき事はコッホ先生に依つて發見せられたる黴菌ゼンメルワイス先生並にリスター先生に依つて創始せられたる消毒法の知識の普遍に依つて、切傷の完全なる治癒は黴菌の撲滅にあり嚴重なる消毒にありと信ぜらるゝに至つた、此の事は治療家に向つては最も大切なる條項であつて、一瞬間と雖も閑却すべからざる事である。然しながら切傷の完全治癒なるものは黴菌の侵入を防遏せるのみにて行はるべきものでなくして寧ろ組織細胞の生活力に大なる關係を有するものなることを考慮する必要がある、然るに今日にては往々にして此方面に對する注意の閑却せられ居るの傾きがある。元來組織細胞の生活力さへ旺盛なれば多少の黴菌侵入すと雖も、其の黴菌は活潑なる生活力を有する組織細胞の爲めに、直に撲滅せられて其の切傷は美事なる治癒を營むものである、夫れ故に余は日々の經驗よりして消毒法を嚴重に行ふと共に組織細胞の生活力を減弱せしめざる事に一層重き注意を拂つて居る、斯くして刀を執るものは、其の技術に精練を要するとは勿論なるも、更に一層重要なる事は病者の身體を健康に復歸せしめんと祈願する熱烈なる同情心の必要を痛切に感ずるものである。此の信念より出發して余は玄關に『慈心妙手』の四大字を掲げて病院に出入する毎に之を見て自ら戒め常に病者に對し大慈悲心を施し神妙なる技術を行はんと祈願するものである、疾病治療の眞諦は啻に物質的科學的行爲に依てのみ徹底すべきものにあらず精神的に大慈悲心を喚起し病者を其旺溢せる精力の靈氣に觸れしむる事に依て眞に全快せしむるを得るものなる事を堅く信ずるものである。故に余は慈心妙手の四字を守本尊として前述の治療に對する信念を以て、助手看護婦と共に一心同體となりて其職に盡さんと努力して居るものである。



ハレムより社會へ

——回々敎徒女子の生活の一面——

大久保幸次

黒人坊の奴隷が、扁桃のやうにぱつちりした眼の女の爲めに、眞珠を鏤めた風雅な卓子の上に乘せられた銀の盃の中に、甘い果實の汁を注いでゐる。それから部屋の中央にしきつた大理石の池には、三四人の美しい少女が、水と戯れながら、面白さうにゆあみをしてゐる。濃厚な花のかをり、麝香の匂ひ朦々と立ちのぼるそらだきもの、眼もくらむやうな色の取合せ――これが、歐洲人の回々敎徒に關する書物や、繪畫の中に、よく出て來る所謂ハレムの場面である。歐洲人は、かういふ東洋人の生活を描き出しては、自分等の異國情調に對する憧憬と、すべて東洋のものを淫蕩化する傳統心とを滿足せしめやうとするのである。成る程、東洋の諸民族の中には、かうした華やかな戀の世界を持つてゐた時代もあつた。支那

一　ハレムの謎

アラビア文字の面白い組合せや、いろ〳〵の花模樣をつらねた壁や、キラ〳〵するやうなモザイクの窓に取りかこまれた大廣間には、數多の美姬が群れ遊んでゐる。青光りのするまでに髮の漆黑な一人の女が、綾錦を敷きつめた寢床の上に腰をかけ、琴に合せて、鶯のやうな聲で唄つてゐると、これは又ブロンドの少女が、美しい絹の薄物をひら〳〵とひるがへしながら、さす手、ひく手もあざやかに舞をまうてゐる。彼方では、肉づきの豐かな、膚のきれいな女が、珍らしい花毛氈の上に、なまめかしく身を横へて、水煙管の長い管な口に當てゝは紫の煙をあたりに漂はして居るその側では、

の歴史を繙いても、インドの文化史をめくつて見ても、ユダヤ人や回々教國の盛んな時代を觀察しても、所謂三千の寵愛というたやうな、艶かしい聯想を起させるやうな史實を見出すことが出來よう。我が國に於ても、平安時代の貴人の生活や、徳川時代の大奧の有樣なども、可成りきらびやかなものであつたらう。しかし、之を以つて東洋人だけに限られた淫佚な快樂であると考へるのは甚しい誤解である。西洋にも又かゝる例に乏しくないのである。ローマの極盛時代は、いはずもがな、中世紀から十八世紀頃へかけての歐洲諸國の家庭生活は、敢て東洋のそれに劣らぬ。華やかな色彩を以て彩られてゐたのである。

　東洋人の中でも性的生活に對して西洋人から最も甚しい誤解を受けてゐたのは、回々教徒である。それは、回々教徒の世界は、歐洲基督教徒の世界に最も近く接近してゐる異つた雰圍氣であると共に、歴史的に兩者の關係が深く而かも其が甚だ香しからぬ性質のものであるからである。卽ち、回基督教は、猶太教と同じく、セム種族の間に生れた一神教でいづれもその教義の根本を共通にしてゐるのであるが、又其れ丈互に排他的で、ユダヤ人を壓迫してゐた基督教徒に取つては、回々教の出現は實に容易ならざることであつたのである。かくて、この兩教徒は絶えず鬪ひ續けてゐる中に、回々教徒の文化が歐洲近代文明に大なる影響を與へたにもかゝはらず、基督教徒は回々教徒に對する間違つた、妙な傳統が出來上り、由來歐洲人はとかく回々教徒の世界をそのまゝ公平に觀察し、正當に解釋することが出來ないやうな工合になつてしまつたのである。

基督教徒の回々教徒の女子に對する見解も矢張り、かうした傳統が禍ひして、その眞の姿を見ることをしなかつた。卽ち、彼等は回々教徒を以て性の淫樂を擅にする多妻主義者と嘲り、その女子を以て、靈のない男子の玩弄物であると罵しるに至つた。しかし、果して回々教徒の女性が、そんな哀れな、そんな下らない、そんな慘じめなものであらうか

　我々は先づ基督教徒の口癖にする多妻主義のことに就いて少しく言つて見ようと、思ふ。

二　所謂一夫多妻とは

　回々教の經典はコーラン（アラビアの原語ではクルアーンといふのが近い）で、これは教祖ムハンマッド（五七〇(?)――六三二年）が神（アルラー）から受けた默示を記載したものであつて、信徒の靈的生活の指南車であるばかりでなく法律書でもあり、又日常の生活の規範でもあるから、この書の中には百般の事項が書かれてある。その第四章の「女性」

といふくだりには、女子に對する教祖のいろ〳〵の教へが載せてあるが、その第三節には、「お前達が良いと思つた女子を娶れ、二人もしくは、三人、もしくは四人を。しかし、それが正しくないといふ恐れがあるのなら、唯一人の女を娶るのが良しい云々」といふ意味合の文句がある。この「四人」といふのが妻の數の制限を示すと同時に、又多妻を公然と許可してゐるといふやうに誤解される原因となるのである。然らば、何故教祖かこんな事を云つたかといふに、其は其の當時のアラビア人の性的生活の反映に外ならぬのである。世界の大宗教は一切の民族とか、國境とかを超越したものであるがそれでも猶ほ教祖は、それ〴〵その生れた民族の環境の支配を免かれることは出來ない。ムハンマッドの如きも亦さうで彼は神の豫言者であり、又新しき宗教の建設者であると共に又當時の腐敗せるアラビヤの社會の改革者でもあつたのである、その頃のアラビヤ人は宗教的に極めて墮落してゐたと同時に、性に對する觀念も亦頗る低級なものであつた。彼等は女子を獸類の如く取扱ひ、女兒生るれば生きながら之を地中に埋めるといふやうなことまでした。一夫多妻は無制限に行はれ、女子は貨物の如く自由に人手を渡つていつた。此等の醜き習俗は、いたくムハンマッドの心を刺戟した。彼は女子も男子と等しく神の創り給ひし人間なることを說いて、其の位置を高め、母性を尊重せしめ婚姻の制度を定め、男女人倫の道を正しうした。四人といふ妻の制限も畢竟當時に於ては非常なる大英斷と稱すべく、無制限に妻を所有し得る當時の社會に對しては、正に非常なる改革に外ならなかつた。

しかし、ムハンマッドは決して多妻を容認したのではない前記の章句にも見ゆる如く、四人としたのは、比喩的に妻の數の最大限度を示した丈のことで、彼の理想は矢張り一夫一婦にあつたのである。何となれば、彼は、一人以上の妻は、夫が各のものに對して、同じ衣食住と、同じ分量の愛とを分け與へ得る場合にのみ之を許容したからである。卽ち、夫が多くの妻に注ぐ愛は絕體に平等であることが必要條件で、此の如き事を實行し得ずして一妻以上を娶る男子は來世に於て激しい地獄の苛責を受くることゝした。而かも人間はかういふ偏愛からはどうしても免かるゝことは出來ないのである。教祖は、長く放恣な性的生活を送つてゐるアラビア人に對して、俄に眞向から一夫一婦の主義を强制することの反つて賢ならざるを悟つて、裏の方から比喩的に單婚制の正當にして神の嘉し給ふところなることを說いたのである。」

三　華かなる昔の夢

從つて敬虔なる信徒は一夫一婦を嚴守してゐる。その上、

一夫多妻は、單に偏愛の罪に陷り安いばかりでなく、四人の妻のある家庭は暴風雨にあつた船のやうであるといふ俚言の通りに、家庭の平和を亂す外に、尙ほ多妻を平等に待遇する爲めには非常な富力を必要とする所から、經濟の方面から云つても、どうしても一夫一婦といふ所へ落ちついて來るのである。故に、現今の回々敎徒の大部分は一夫一婦主義者で、基督敎徒のよく非難するやうな一夫多妻者はほんの例外に過ぎない。そして、それは王者とか、ブルヂョア階級とかいふものが、權力と金力とにまかせ、敎祖の訓誨なんどはそつちのけで、自己の快樂と、豪奢振りの見せつけの爲めに、古代めいたハレム生活を續けてゐるので、それとても、もう昔の物語りに出て來るやうな傳奇的な、濃艶な色彩を失つて、餘程あつさりした、小規模のものになつてしまつた。

回々敎徒の中でも、最も進歩してゐるトルコ人などは、立派な一夫一婦主義者で、其の家庭生活は極めて美しいものと稱せられてゐる。昔は、此の國にも豪奢なハレム生活をしてゐた特權階級があつたし、近代では、暴君として名高いアブデュル、ハミード二世（一八七六――一九〇九年）などは、幾多の美姬を以て後宮を賑はし、アラビアンナイトに出てくるやうな、派手な、官能的な享樂に浸つたが、これは、いづくも同じ暴君の型で、現代のトルコの宮庭生活は、ずつと質素なものであるし、後宮の女性も女官といふ方が適當であらう。そんな譯で、丁度大江戸の千代田の大奥の生活が、華やかな、美しい夢のやうに我々の眼に幻となつて浮んで來るやうに、トルコの今の人達にも、ハレムの生活は、現し世の人の味ふことの出來ない、童話の世界となつて表はれてくるのである。

新らしいトルコに較べると、ペルシアや、インドや、北アフリカの回々敎徒の中には、まだ／＼昔の名殘を止めてゐるやうである。此等の諸地方でも、一夫一婦が大部分を占めてゐるが、それでも、トルコなどよりは、閨房生活もずつと神祕的な雲に包まれて、古めかしい匂が高いやうである。

かういふ風に、回々敎の敎へでは、一夫一婦が理想でありそして多妻の習俗は、特權階級の經典の文句の濫用、惡用に過ぎないのである。特權階級が多數の女性を專有せんとする慾望の熾んなのは、何も回々敎徒に限つたことではない。一夫一婦主義を以て誇りとする歐米の基督敎徒だつても矢張りさうだ。一體、基督敎は決して積極的に一夫一婦を說いてはゐない。舊約全書にはユダヤ人のブルジョア間には、艶麗なハレム生活が詩のやうに描かれてゐるし、新約全書にも、取り立てゝ一夫一婦を力說してはゐないらしい。故に、原始基督敎時代には、禁慾主義的の傳道者は、改宗者や、弟子に對

して、一夫多妻の習慣を斷念させる爲めに可成り苦心したことであらう。基督教以前の歐洲に於ては勿論多妻は行はれかの貞操觀念の强いと云はれてゐたゲルマン人さへも單婚主義者ではなかつた。基督教が此の大陸へはひつてからも、多妻制の行はれたことは、例へばローマでは紀元三九三年法律を以つて多妻を禁じ、又近世では一六〇三年英國のジエームス一世が之を禁じた史實に徵しても解る。從つて、基督教徒間でも昔、王者や特權階級が多妻を蓄へた例は澤山あるし、かの宗教改革者ルーテルさへも、基督教の立脚地から此の教と一夫一婦主義と何等必然的關係のないことを說いてゐる。モルモン教は、他の基督教各派からは異端扱ひにされてゐるが自らは基督教を標榜してゐて、多妻を神の命令と信じてゐた故に多妻といふものが、回々教徒のみの持ちものではないやうに、單婚制といふものも基督教徒のみの持ちものではない唯人間は、性關係の淨化、二つの魂のみの永久變らざる結合といふやうな理想を持つてをり、そしてそれが相互に一番幸福であることを知つてゐるから、結句一夫一婦制へ向つて行くので、歐洲其他に於て法律や慣習を以て多妻主義を禁ずるやうになつたのも其の爲めであるし、回々教の理想とする所も亦それに外ならない。

四　夜の世界の無い國々

しかし、人間には又性關係の變化を喜ぶ本能もある。ここに於て正當な妻以外に、他の女性に對しても好奇心が湧いて來る、其所で、表面から一夫一婦主義を强制されてゐる、基督教徒は、外妾を蓄へたり、賣笑婦に戲るゝやうになつたりする。回々教徒の間にも、妾や女奴隷――奴隷といふと恐ろしく聞えるが、西洋の奴隷は獸類同樣の待遇を受けてゐたが、回々教徒間では、極めて寬大に取扱はれ、他國の婢僕と大差はない、妾蓄へる事は許されてゐるが、賣淫は嚴禁されてゐる。故に、回々教國では、其の原始時代には、賣淫制度は知られてゐなかつた。近代に至り、近東の諸都市に歐洲人の來往が激しくなるにつれて、賣笑婦も姿を表はして來たが、これは、回々教徒の生活とは殆んど關係がない。例へばトルコの港などで、靑樓を營んでゐるものは、多くユダヤ人であり、娼妓は、主としてユダヤ人か、さもなくばギリシヤ人とか、アルメニア人とかいふ土着の基督教徒で、御客も大抵は基督教徒である。これは所謂『白人奴隸』を口にする基督教徒としては、誠に恥づべきことである。

一體、回々教徒の間には夜の社會生活といふものが少ない。歐米人が、夜遲くまで、明るい街で、カフエーや酒場氣

分を味つたり、劇場や舞踏會で樂しんだり又は、白粉臭い化生のものを漁り歩るいたりするやうな快樂は、回々敎徒に取つては未知の世界の出來事である。彼等は、朝は夙に起き、夜は早く寢に就くといふ習慣を守つてゐて、夜の生活は回々敎暦――太陰暦――の九月即ちラマザーンの月の三十日間があるのみである。この月は、病人、老人、幼兒、旅行者等の如き特別な事情あるもの丶外は、日出から日沒まで斷食し愈々日の暮る丶に至つて、食事を取り、明るい市街へ出掛けて芝居や名物の影芝居に興じたり、講談や音樂に耳を樂しましたりして遊び歩るき、日出と共に又其の日の勤行を初めるのである。かういふ特別な祭典の外は、彼等は夜の時間を靜かに、樂しく家庭內で過すのである。これは、トルコ人の如き歐洲に住んでゐる回々敎徒でさへ同樣で、大戰の結果、社會生活の急變につれ、漸くトルコ婦人も歐洲の姉妹のやうに、夜の世界の享樂を知るやうになつたが、これは、トルコ人の爲めに、慶すべきことであるか憂ふべきかとであるかは疑問である。回々敎徒の夜の家庭生活の中心は例のハレムである。澤山の妻妾にかしづかれながら、ハレムの中で、夜を過ごすことは、男子として或は無上の快樂であるかも知れないが、かういふ時代があつた僅かの例を除けば、ハレムは實に家庭和樂の中心であるのだ。一體、ハレムは歐洲人の辭書では、後宮とか、閨房とか譯して、直ぐ數多の妻妾のゐる淫樂の巷を聯想するが、この文字の根本義はそんな浮ついたものではない。もとは、アラビア語で「男子が武器を持つて當然保護すべき人又は物」を意味する所からして、己が家族內の女性又は一般女性の意味となり、更に轉じて、か丶る女性の住つてゐる部屋をも意味するやうになつたのである。ハレムは其の外尙ほ宗敎的の意義をも有し、メッカやメディナの如き回々敎の靈地や、回々敎寺院の內庭をもさう呼んでゐるかういふ風にハレムにはいろ〳〵の意義があるが、之を家庭生活に適用すれば、妻その他の家庭內の女子及び其等の住する婦人室で、後者はトルコでは、ハレムリックと呼び、ペルシアではアンダルーン（內房の意）と稱へてゐる。この婦人室は婦人の獨占物で、全體の家の中で、最も大きく、最も美しく、內部からは外部が見えても、外部からは見えないやうに造られてゐて、男子は父兄や夫の外は親族でなければはひれない事になつてゐる。そして、夜になると、主人と主婦とを中心に、家族が此處に集まつて、珈琲や甘い飮物を飮みながら、談笑したり、樂器を鳴らしたり、踊を踊つたりして樂しく暮らすのである。

五　夫は妻の衣、妻は夫の衣

實際、かういふ意味のハレムは回々敎徒の和樂の中心であるが、此處に注意すべきは彼等の男女關係の嚴格なることである。卽ち、回々敎の女子は男子との自由なる交通を禁じられ、家庭內にあつては、婦人室に蟄居し、外出に際しては、ヴエールを以つて密に顏を覆ひ、寺院に詣でても、特にしつらへたる別室に入るなど、全く男子とは別の存在を持つてゐることである。これは、回々敎徒の女子の最も大なる缺陷で其の爲めに、彼等のみならず男子の方もどれ程の利益を受けてゐるか解らない。歐洲人が、回々敎徒の女子を以つて、唯男子の玩弄物に等しい、奴隷のやうな慘じめなものと考へるのは、この點から見ると、いかにも道理らしく思はる。しかし、この事丈で果して、回々敎徒の女子がそんなに哀れなものであると云へるであらうか、歐洲基督敎徒の女子でさへ人間並に扱はれるやうになつたのは近頃の事ではあるまいか。

　ムハンマッドは或る意味に於てフエミニストであつた。彼は、虐げられてゐたアラビアの女子の手を取つて、人間といふところまで引き上げてやつた。彼は己が糟糠の妻ハヂーヂアを「信徒の母」と呼んで、敬愛し、「天國は母の步るく地の下に」あると說いて母性を尊重した。コーランの第二章には「妻は御前達の衣であり、御前達は妻の衣である」といふて、夫婦の平等なることゝ、相愛すべきことゝを敎へた。基督敎の聖書には、婚姻は唯肉的罪惡を防ぐ一方法に過ぎないやうに書いてあるらしいが、ムハンマッドは婚姻に對して、もつと、神聖な清淨な見解を持つてゐた。彼は尙ほ、男女兩性に對して貞操を要求し、夫に對して妻及び家族扶養の責任を課し、處女の純潔を尙び、寡婦や孤兒を保護せしめ、戰場にて女子を殺戮することを禁じた。離婚は、男女兩方より請求し得らるべきものとし、又離婚の手續を簡單にして。其に對して夫に課する條件を重くした爲めに、手續のみを面倒にした基督敎徒に比して、事實上離婚は反つて甚だ少ない。刑法上に於ても女子は相當の保護を受け、科料の如きは男子の半に減ぜられてゐる。歐洲人は回々敎徒の女子の爲めには天國が設けられてないと誣ひてゐるが、其れは誤りで「神は男女の信徒を喜びの園に導びき給ふので」ある。勿論回々敎も女子に對していろ〱の制裁と制限とを與へてゐるが、家庭生活に於ても、社會生活に於ても、相當の保護と權利とを與へてゐるから、彼等の境遇ははたの見るが如く、爾く慘じめなものでもなく、低いものでもない。故に婦人自身も己が境遇に滿足して、反つて、社會にのり出して、生存競爭にあくせくしなければならぬ歐米の女子に同情してゐる位である賢母良妻主義は正にこれ回々敎徒女子の標目であらう。

六　社會の表面へ

しかしながら、時代は變り、世相は移つて行く。騒がしい世界から隔離された。靜かなハレムにも、浮世の小波は立つて來た。回々敎徒の女子は、そろ〳〵そのハレム生活の單調に飽きて來た。樂な、刺戟の無い、保護された生活に堪へられなくなり出した。女子ばかりの世界に立て籠つてゐる腑甲斐無さを感じて來た。人目をつゝむヴエールを外づして、私かに男子の世界が覗いて見たくなつた。

かうして最近二三十年來、傳統に縛ばれて來た、保守的な回々敎徒の女子の中にも婦人運動が萠ぐんで來たのである。トルコの如き、エヂプトの如き、インドの如き、其の他文化の高い回々敎徒の女子は一齊に女子の解放を叫んで、社會の表面へと乘り出して來た。しかし、彼等は、參政權とか何とかを要求するのではない。男子の世界を浸さうとするのではない。女子は女子として人間活動の業に與りたいといふのである。女子が外部の世界に觸れることなく、ハレムニ蟄居してゐることは、女子自身の存在の滅却を意味するのみならず男子に取つても一大損害なので、男子も亦女子の解放に好意を表した。かくて、回々敎徒女子の活動は次第に熟し、女子の爲めの學校は頻りに設けられ、種々の會合は催ほされ、雜誌は刊行せられ、女子に相當な就職の途は開かれて來た。取り分け大戰以後のトルコに於ては、女子の覺醒目覺しくヴエールは取り去られ、男女間の自由なる交際は開かれ、ハレムリックは解放され、職業婦人は著しく增加し、社會の表面に立ちて、男子と共に活動することはもう珍らしい事ではなくなつた。

かうしてハレムの神秘の扉も終に開かれたのである。回々敎徒とても畢竟人間で、世人の考へてゐるやうな、決して不思議な存在ではない。トルコの英傑ムスタフア、クマールパシアの蹶起は、單にトルコ人のみならず、世界三億の回々敎徒、否全東洋人に非常に力強い印象を與へた。回々敎徒は今や長夢より醒めて、至る所に、生存權の爲めに奮闘を續けてゐる。彼等は今後益々女子の協力を必要とするであらう。

（大正十一年十月五日）

回教國の婦人問題

山川菊榮

一

東は印度、ペルシヤより、中央アジア、小サジア、ドン及びヴォルガ地方を經て、西エヂプトに至るまで、アジア、ヨーロッパ、アフリカの三大陸に亙る廣大な地方に占據する回教民族の總人口は、約二億二千萬と註せられる。曾ては古代文明の祖先たり、中世に於てはサラセン帝國の名の下に、歐亞を席卷した彼等は、近世に至つてヨーロッパの帝國主義に全く壓伏せられ、政治的には獨立を失ひ、經濟的には貪婪飽くなき外國資本家の搾取の對象となつた。かくて無智と迷信と、隷屬と悲慘とは、彼等の先天的劣惡の必然の結果であり永遠の運命であるやうに信ぜられてゐた。

けれども大戰この方、資本主義の世界に起つた大きな地震と龜裂れとは、その恐ろしい震動を、幾世紀の間回教徒が眠りつゞけてゐた大地の上にも及ぼさずにはゐなかつた。歐洲資本主義の支配に對する回教民族の叛亂の火の手は、野火のやうに燃え擴がつて、此處に消えれば忽ち彼處に勢を得る有樣となつた。埃及の獨立は、不完全ながらも此叛亂の成功した一例である。最近にはトルコが、希臘によつて代表せられる歐洲資本主義の羈絆を脫しようとして必死の努力をしてゐる。全く是等の虐げられた民族の叛亂が國民的獨立の要求に立脚してゐるのは勿論のことである。けれども最近の諸弱小民族の獨立運動には、必ず影の形に添ふが如くに、同民族の間に於ける社會的平等、即ち無產階級及び婦人解放の要求が伴つてゐることを見落してはならない。詳しく云へば、被征服民族の間にも王侯貴族あり賤民及び勞働者がある。所で王侯貴族の要求は、單に外國の支配を離れて昔のやうに自己の手に完全な主權を恢復し、外國資本家に代つて自分らの懷に國民の汗で出來た富を納めように盡きてゐる。彼等は壓制や搾取其事が惡いといふのでなく、外國人が壓制や搾取をするのに反對するだけなのである。所が賤民や勞働者や婦人はこれと異つて、相手が外國人であるか自國人であるかを

問はず、一列一樣に自分らを虐げ、自分らを搾取する階級や制度を無くさうといふのである。一方は純粹に國民主義的、排他的、保守的であり、他方は國際主義的、協同的、進步的である。弱小民族の獨立運動には必ず此二つの流れがある。そしてともすれば、前者が外國資本家階級と妥協して、相共に賤民や勞働者の搾取に取掛ることが多いに引かへ、後者が國際的無產階級運動と提携することゝなるのは云ふまでもないことである。殊に前者が婦人解放に反對し、後者がそれを最も熱心な信條とすることは、顯著な特徵である。

二

幾世紀の間、回教民族は歐洲資本主義の軛の下に奴隸の狀態を保つて來たが、その回教民族の內部に於ける婦人の地位は、賤民や勞働者のそれと同じく、二重に奴隸的なものであつた。豫言者マホメットは『人生には女子なかるべからず。然も女子よりは何等の善も來ることなし』といつて、婦人が避け難い邪惡だといふことを聲明した。かういふ極端な男性中心の宗教的信仰に煩されて、回教民族の婦人の生活は全く奴隸及び囚人のそれと同じことであつた。彼等は夫以外の男性との交際を許されぬどころか、原則として家庭に蟄居し、寸時も顏からヴエールを離さぬやうにしてゐなければならなかつた。トルコやペルシヤでは、法律は今なほ婦人にヴエールを被ることを命じてゐる。トルコ人の間では僅かに五才や七才位の幼ない少女が第三第四の妻として、既に幾人もの妻のある成年男子と結婚させられる。彼等は夫が沐浴する際に手傳つたり、寢床に橫はる夫の足を揉んだりするだけを義務とする侍婢にすぎない。それ所か幼女がまだ見ぬ許婚の夫のために殉死させられたり、一生涯寡婦の生活を守らされたりすることさへあるのである。

回教の教への中にはかういふ言葉がある。『夫は妻に對して親切なるべし。夫は妻より挑まれざる限り、妻を叱咤し又は妻と爭ふべからず。斯の如く寬仁なる態度は、囚人のそれに等しき妻の地位に相應しきものなり。人は囚人に對して寬仁なるを要す。』

既に妻は囚人にして夫は獄卒である。その間に平等の保たれようがない。殊に悲慘なのは父權的家族制度の下にあつて夫又は父を離れては全く糊口の道のない婦人が、夫の家を逐はれる時である。勿論女子は、不都合な夫を離婚する權利はもたないが、夫はいつ何時でも好き勝手に妻を離婚することが出來る。離婚された妻は乞食となる外ない。かやうに婦人は經濟的に全然男子に從屬してゐるのである。工業的資本主義が僅かに發達し始めたばかりで、一般に未だ封建的な、出

によつては父家長的な家族制度の行はれてゐる東洋諸國では男子を離れて生活の道のない婦人の運命は殊に悲慘なものであるが、特にヴエールを捨てゝ人中に交ることを邪惡視する回敎の風俗は、甚しく婦人の經濟的獨立を妨害して居る。

極度に保守的な僧侶は婦人の心的發達を妨げ、その自覺を抑壓するために全力を盡して居る。單に僧侶のみならず、宗敎的な敎育を受けた土着の所謂『知識階級』も亦婦人の智的發達に反對し、これに妨害を加へてゐる。無智と迷信と、幾代かに亙る習慣の結果、不自然な、壓制的な家族制度を、男女共に自然なことゝ考へ、それ以外の男女關係を想像さへすることもなかつた。

或自覺した回敎國婦人の記す所によれば、回敎國の男子の婦人に對する態度に三通りある。その一は『婦人は精神的にも肉體的にも男子より弱い、劣等な生物で、たゞ男子の捕虜たり、奴隷としてのみ適してゐる』といふのである。トルコ、ペルシヤ、アフガニスタン、ボハラ、キヴ、及びターキスタンの一部の如き、封建制度及び父家長制度の遺習が多分に殘つてゐる地方では、これが普通の見方である。

第二は、上と同じく、婦人はたゞ奴隷にのみ適してゐるといふ見方ではあるが、同時に『婦人は家事と育兒とを司るべきもので、練油式を行ふことが出來るやうに、宗敎的敎育だけは受けさせる必要がある』といふのである。これはトルコの西方の農民、アナトリスの小ブルジョア、ロシアの韃靼やバスキルの農村、ターキスタンやブハラの小都市、及びペルシヤ、アゼルバイヤン等の商人の間に行はれてゐる見解である。

第三は『婦人も亦人間ではあるが、精神的にも肉體的にも男子より劣つて居る。然し婦人が社會生活に參加しなくては國民的存在は不可能である。故に婦人を敎育せねばならぬ。彼等は家事を見、子供を敎育せねばならぬが、然しそれは單に古き家族制度の指定する範圍に留めねばならぬ』といふのである。此見方はヨーロッパ流の敎育を受けた知識階級、歐洲と取引をする商人、學生の中の先覺者等、一言にして言へば進歩的な國民主義者、又は國民主義的ブルジョアの間に廣く行はれて居る。是等の連中の理想は、外國資本家の勢力を驅逐して、自分らの手に同民族の間に於ける資本主義的支配權を掌握することにある。トルコのブルジョアの間には最近十年間にこの思想が次第に勢を得、此階級の婦人の間にはヨーロッパの中流女權論の思想の流れを汲む者がぼつ〳〵現れて來た。

三

婦人の極端な屈從と悲慘とは、彼等を驅つて、あらゆる叛亂に容易に共鳴させることゝなつた。過去數世紀來、回教民族の中に起つた宗教的、又は國民主義的のいかなる革新運動にも、死を賭した婦人の勇猛な奮鬪の見られぬことはなかつた。十九世紀前半にペルシヤを騷がせた愛國運動の際には、ルスタム・アリといふ著名な婦人の鬪將が陣頭に立つて土民兵を指揮し、壯烈な鬪ひ振を見せて敵味方の男子を畏服せしめた。此頃エヂプトには「男子を排斥せよ」の標語の下に、強大な婦人運動が起つた。ソフヰヤ・チャヌムが兩性の絕對平等と、女子に男子と同じ敎育を授けることを要求して起つたのも此時代である。回教民族の間には此種の例は數へ切れない。彼等の間の男子が民族的自由、宗教的自由を要求して起つ時は、婦人も必ず共に起つた。勿論その場合には、家族制度よりの解放といふ、今一つの目標が附加されてゐたことは云ふまでもない。

民族的壓迫の外に、今一つ婦人の覺醒とその解放の要求とを強めたものがある。それは經濟的原因である。ヨーロッパ人の資本主義文明の侵入の結果は、商工業の繁榮と女子勞働の要求を來した。茲に東洋婦人は始めて、家族制度の羈絆を離れて――未だ極めて局部的であるにせよ――經濟的獨立の機會を得るやうになつた。更に又地方によつては――例へばトルコの如き――間斷なき戰爭の結果、主要產業たる農業は男子の手を俟つことが出來ずに婦人によつて營まれ、更に農產物の賣捌きや搬出にまでも婦人自身が當らねばならぬこととなつた。茲に至つてか、門外不出の敎へや異性との交際禁止を始め、あらゆる古い傳統や偏見は自ら崩壞せざるを得なくなつて來た。トルコでは憲法發布の後、婦人團體が至る所に發生し、最近にはコンスタンチノープルにだけでも十五あり、それは殆ど總て政治上の目的をもつたものである。

英國官憲及び資本家階級の暴狀に對する印度の不穩狀態も亦印度婦人に影響を與へずにはゐなかつた。あらゆる抗議や示威運動には必ず少からぬ婦人が參加してゐる。一九一九年ヴォナールで開かれた全印度回教婦人大會に於て、印度の回教婦人は、印度の革命運動に參加すると共に、英國資本主義の暴狀に對して強硬に抗議する旨の決議を通過した。今日東洋諸國では國民主義の運動が漸く熾烈を加へて來て居るがそれらは最近に至つて單なる政治的獨立運動の域を脫し、西歐資本主義の壓迫に對する革命運動の性質を帶びて來てゐる同時にそれが解放の要求をもつ全ての階級の婦人を吸引し始めて居ることも爭はれぬ事實である。

四

回教民族の自覺に重大な刺戟を及ぼしたものはロシア革命である。ロシアの人口約一億の中、回教民族は實に四千萬の多きに達してゐる。此四千萬の回教民族の境遇に起つた殆ど奇蹟的な變化は、今なほ西歐資本主義の奴隷となつてゐる他國の回教民族の心理に、根柢から動搖を與へたものであつた。

失敗に終つた一九〇五年のロシアの第一革命の當時、既に韃靼、バスキル地方には、中央の動搖に呼應して熱烈な婦人運動が起つた。超えて一九一七年の三月革命は、至る所、回教民族及び婦人の熱心なる歡呼を以て迎へられた。そして回教徒の地方ソヴィエット會議の代議員も、全露ソヴィエット大會の回教民族代議員も、常に婦人の完全な市民權といふことに歸着する。婦人問題に關する精細な、徹底した提案を抱いて居つた。

革命の當初から、回教民族の居住する全ての町では、婦人解放を目標とする回教婦人團體が簇生した。韃靼地方の農村では、兵士の妻女達が戰場に出てゐる夫を返せと叫んで多くの巡査や官吏や地主の執事を毆打し、また地主の土地を與へよと要求した。革命當時のあらゆる集會や示威運動には、僧侶や保守主義者の呪咀や讒謗や威嚇にも拘らず、多勢の回教婦人が參加した。憲法會議の議員選擧の時には、男子よりも婦人の方が活動をした程であつた。

共産黨の政府を成立させた十一月革命は、更に一層回教婦人の目ざましい活動を促した。新政府は戰爭を中止した。地主の土地を農民に與へた。工場を勞働者に與へた。そして婦人と子供に對する國家的保護の制度を確立した。要するに新政府はあらゆる弱き者、虐げられたる者の味方であつた。のみならず、新政府は、民族自決の主義に基いて、諸異種民族をして獨立自治の聯邦たることを許した。そこでジョルヂア、アゼルバイヤン、ターキスタン、アルメニア等は皆なソヴィエット共和國に加盟して居る小獨立國となり、内政は自治となつた。其等の國々に於ては婦人は男子と共にソヴィエットの選擧權を行使し、また人民裁判官にも選出される。隨つて婦人に不利な法律や制度は急速に改廢せられ、一夫多妻制、賣淫制度の如きは、元より一刻も存在を公認されなくなつた。男女の權利が平等になつた結果、不合理な家族制度、不自然な結婚生活は維持されなくなつた。男女間の係爭問題に就ては、特に婦人の裁判官、陪審官の發言權が重せられる。隨つて婦人の人權を無視して解決は下されようがないのである。

文化の非常に遲れてゐるターキスタンに於てさへ、僧侶や宗教的な古い知識階級の意見や判斷は省みられず、婦人は事ある毎にソヴィエットの助力を求める有樣である。ターキスタンの都會ウズベンスキーには十一月革命後、女子師範學校が

かれた。學生の約五割は、壓制者たる夫と離別した婦人である。是等の婦人は教育と自活の機會とを與へた勞農政府、彼等を始めて動物から人間の狀態に引戾して呉れたその政府に衷心からの敬意と愛着をもつてゐる。そして彼等はその新しい知識と、潑剌たる精神とを以て、未だ奴隷若くは囚人の生活を脫し得ずに、暗黑の中にもがいてゐる姉妹を鼓舞激勵して居る。

タシュケントのスタロ●ゴロッド●ソヴィエットには十五六名の土民の婦人代議員がゐる。其地方全體の土民の婦人共產黨員は二百名を超えてゐる。一九二一年のメーデーには、勞働組合に屬する婦人が八百名以上、示威運動に參加した。大抵の市には數個の婦人團體があつて、婦人の社交や研究に便宜を與へ、更に彼等の間には生產組合の工場もあれば、手工の講習會等も組織されて居る。ターキスタンのどんな邊鄙な地方に於ても、婦人はソヴィエットの事業に參加し、教育、育兒、公共食堂、圖書館、其他に關する政府の文化的施設を熱心に援助して居る。

五

露領の回教徒の中で、ツァーの虐政にも拘らず、その固有の言語や風俗や文化を保存したのは、コーカサスのアゼルバイヤンの人民であつた。此處には一九一八年三月に共產主義革命が起つたが、同年九月、反動革命のために顚覆されて共產黨政府の人民委員(大臣)二十五名は虐殺された。超えて一九二〇年四月、一滴の血をも見ずに、議會の多數決によつて再び共產黨政府が成立した。此國は石油の產額は、アメリカに次で實に世界第二位を占め、地味豐沃に、氣候は溫和で農作物も豐饒で、非常に富んで居る。隨つて其社會的施設は本露の勞農政府よりも更に徹底した、行屆いたもので、文盲者に對しては勞働義務を全然免除して、有給で通學させて居る。

一九二一年二月八日より四日間、此國の首府バクーで東洋婦人大會が開かれた。夫や父や兄弟の激烈な反對を排して來集した婦人代議員は總數一千二百名、中でも四百五十名は中央アジア其他の最も遠隔な地方や、山間の僻村から來會した回教婦人や、猶太婦人であつた。開會當日はアゼルバイヤン全國の祭日となり、何千の老いたる、若き、ロシア、チョルヂア、猶太及び韃靼等の婦人が『インタナショナル』の歌を合唱しながら赤旗を掲げてバクーの市街を練り歩いた。

大會は十一日まで續いたが、未だ曾て見知らぬ人の前で口を開いたことのない婦人が交々演壇に立つて、過去の悲慘と幸福と希望に輝いた現在及び將來を語つた。議事日程は大要次の如きものであつた。(一)現下の問題。(二)ソヴィエット

政府と東洋婦人。(三) 東洋婦人の過去及び現在に於ける婦人の地位。(四) 小工業と東洋婦人。(五) 母親と子供の保護。(六) 教育と東洋婦人。

此大會は政黨政派を問はず、民族や宗教の異同を問はぬ一般的な婦人大會であつたが、これを通過した全ての決議は、みな勞農政府は婦人解放を遂行し得る唯一の政府であり、隨つて東洋婦人を代表する本大會は、同政府を極力維持するといふ一事に盡きてゐた。此大會から百五十人の婦人代議員——大多數は回教民族——が選出され、其等の婦人は本露の共産黨婦人部に對して贈與する赤旗をもつてモスコーへ派遣せられた。その赤旗には「赤色ロシアの勞働婦人及び農村婦人よ。吾々は諸姉の示された道を辿りました。もはやいかなる力も吾々に後戻りをさせることは出來ませぬ。ロシア共産黨中央執行委員會婦人部へ。アゼルバイヤンの婦人より」と記されてあつた。大會は更に全東洋の婦人に向つて、アゼルバイヤンの婦人の例に倣ふことを奬める檄文を發した。此大會の代議員が多くの頑迷な夫達を離婚して大會に參列したこと、また婦人の屈從の象徴を亡す意味で、古來の法律と宗教とによつて神聖視されて來たヴェールを、代議員自ら大會の席上で集めて燒き捨てたことは、興味ある挿話として傳へられて居る。

僧侶や老人が驚き恐れて見てゐる中に、中央に立つた若い強壯な婦人が、手には赤色の大旗を掲げ、足下にはヴェールを踏み躙つて、凛々しい姿勢で、希望に滿ち、眼を天の一方に投げてゐる。トルコ語を話す民族のために作られたこのポスターは、勞農政府の婦人解放の努力を語ると共に現に回教民族の間に見られる事實である。

今や全世界の民族解放の運動は、同時に其被征服民族の間に於ける無産階級解放、並びに婦人解放の運動と一つになつて居る。

此種の回教徒の擡頭は「黄禍」を招くものでもなければ、古代民族と近代文明との間に、帝國主義的征服戰爭を來すものでもない。それは實に東洋と云はず、西洋と云はず、また基督教徒たると回教徒たるとを問はず、あらゆる國々の虐げられたる民衆の解放運動と同一意義を有し、隨つてその目的は或民族、或宗派、或階級、或性に限られた自由や獨立ではなくて、全世界のあらゆる男女民衆の自由と平等とにある。國際的基礎の上におかれぬ限り、彼等の運動に成功の望みのないことも明白である。「萬國の勞働者團結せよ」この一語の外に彼等の運動の指針たるべきものはない。そして既にロシアの回教民族の現狀が示してゐる通り、被征服民族の中の最も進んだ分子は、此標語の下に運動を進めてゐるのである。



女中奉公の一年

賀川はる

師範學校に這入つて勉強し度い望も、今は全く絶たなければならなくなりました。度々東京に行く序のある私の伯母は、もう私の奉公口を探して呉れて了つたのです。或晩、伯母は妹に當る母のところに來て東京の土産など出して、

『はアちやんの行くところも丁度よい家が有つて、何日でも來て呉れと云ふことです、先は御夫婦と二十四になる息子様一人の三人家族であまり忙がしくはない様子です、始めて出るのに骨が折れるところも無理だらうと思ふし、それにお宅では裁縫を教へてゐられるから、それも習へるでせうし、そこでは如何でせう。』

と云ふのです。『どうも色々御世話様です、本人がよいと思ひましたらそこへ御願ひ致します。』

『小さい子供様がなく、裁縫が教へて頂けるところでしたら、結構です。また餘り大家族で朋輩などが多いのも六ケ敷いものですから今の話のところでしたら丁度よろしい様に思ひます。』

父母のこんな會話のうちに、私の行くところが定まりました。それは私が小學校を卒業した。十五歳の夏の始めでありました。

東京の思ひ出

私は横須賀に住んでゐましたので、小學校時代に毎年三月に試験を終ると、進級した記念に伯母が自分の子供二人と私の三人を連れて東京に遊ばせて呉れたものです。で私達は東京市内が電車にならぬ前の鐵道馬車時代、その前のガタ馬車時代も知つて居ました。一區間が二錢であつたことも記憶してゐますし、アノ高い響のラッパも深い印象を私に與へてゐます。今でもその様な音を聞く時、古い東京を思ひ出します。

從兄は馬が好きで、アレが強さうだとか、こちらが好きだとか批評したものでした。私は馬には興味がなく、仲見世で買つた簪や、觀音堂の前の鳩などが嬉しくて、馬車の上での話は二派に別れたものでした。說明に依つ

て二重橋は尊く思はれ、淺草の玉乘は自分と同じ年頃の女の子を危み、動物園は何日見ても面白く感じました。

親戚が多いに拘らず、伯母は子供達が遠慮することを思つて、わざ〱宿屋に泊るのでした。宿屋の朝はまた珍らしくて嬉しいもので、淺草あたりに宿を取る年など特別にさうで有りました。障子を開けると向ふに五重の塔が見え、鐵道馬車を挾んで都の人が忙がしさうに歩いてゐました。そんなですから、愈愈東京に奉公するのだと思つても、寧ろあの美しい櫻の上野、向島の堤、その東京に住むことの出來るのは幸だと思ひました。然し又思ひ返すと、父と母と妹達と別れて、自分の溫かき家庭から出ることは苦しくもあつたのでした。

母は何かと準備に忙がしく働きました。夜具蒲團を作り、今迄の樣な友禪物は今度は使はれませぬので衣類の凡てを奉公人向にせねばならないので直したり、その外主人に對することも何くれとなく母は敎へて呉れました。母も嘗ては奉公をした者で、人を多く使用するには一度は是非奉公せねばならぬと考へられてゐました。然し私の場合は經濟的に奉公が必要であつたのです。

準備は整ひました。私は十五ヶ年住なれた地を離れて行きます。親では別れ難いと云ふ懸念から、伯母が私を連れて往つて呉れることになりました。私共の汽船は四時間ばかりで東京の靈岸島に着きました。

初奉公

伯母と共に親戚を訪れました。二三回しか遇つたことがないこの人が私を、これから私が主人として仕へる家――日本橋の或る家に私を連れてゐつてくれました。そして私は愈愈他人の中に置かれました。奉公と云ふことに就て自分に心配が有りました。女中や男を使つてゐた私の家では、つい自分も雇人に對して無理を云つたり、困らせたりしたもので今更ながらよくない事をしたものだと思ふのでした。そして今自分がそんなにしてこの奉公が勤まれば誠に辛いことだと思ふのでありました。然し幸に三日間のお目見も無事に濟んで雇はれることになつて一先づ落着きました。二三日は全く夢中で日を送りましたが、漸く馴れて來ますと色々と感じが出て來て御主人を呼ぶことにも一寸困りました。今迄ならば、伯父樣、伯母樣と呼ぶ樣な人達を、旦那樣、奥樣と云はねばならないことは、何んでもない樣なことですが一寸口に出ないので兎もすれば、伯父樣と口先まで出るところを漸く氣付いて直す樣な場合が度々でした。

一日の仕事

大家族と違つて、朝の炊事も忽ち終りその後は掃除でしたが、これは又大そう念の入つたもので、奥樣が非常な潔癖家で中々普通の掃除では滿足されないのです。座敷は元より臺所も外廻りも非常にこの掃除のために時を費すのであります。御主人は自ら掃除をすることを好まれて、朝食事前に、四角になつてゐる宅の外は綺麗に打水をして掃かれるのです。植木好で庭も手入をされます。そのあと私が雑巾を丁寧に掛けて行きます。私の以前の女中もやはりその通りであつたと見え、誰

所の板間は實際鏡の樣にほんとに顔が映るほど綺麗になつてゐます。玄關二疊と次の間が八疊その奥が六疊そこは佛檀と聖天樣を祀り外に八疊の居間と三疊の女中部屋が有ります女中部屋が有つても一間になつてゐないで、居間との隔が全くありませぬ、奥の六疊だけは、奥樣が自ら雜巾を以て掃除されます。その中に肴屋、八百屋、酒屋の御用聞が參ります。元來奥樣は純然たる江戸生れで江戸意地なしきりに主張されるのです。それで肴屋が今日はかゝ、ますの走りだと云へば、買はねば江戸兒の意地が立たぬとしてゐます。秋魚の走りだと聞けば、普通ならばその頃一錢五厘位のものが八錢しても買はねばならぬと思つてゐるので私も驚いたことでした。

九時頃には五六人の娘達が裁縫の稽古に見えるのでその準備をしておきます。旦那樣のお辨當を作つて下さると私はそれを持つて五六丁隔つた、御主人の勤先にまで行きます。私の主人は兜町の株屋に勤めてゐられた相場師であつたのです。

お辨當運びには一つの樂しみが有りました。私の主人は私の世話人より家のことを聞いてゐたので、

『お前は、お乳母日傘で育てられたと云ふのに奉公に出る樣にまで零落したのは、お父樣が道樂でもしたのか、それとも相場にでも失敗したのか？』

と聞いて見たり、私が十五でも非常に小柄で使ふのに痛々し樣に思つて、餘程氣を付けて呉れたのです。それで自分の店で茶受のお菓子は必ず私のために殘して置かれ、使に行つた時に空辨當箱に入れられてあるのです。ですから私は毎日それを樂しみにしたものです。自分一人では濟まないと思つて、何時も先づ奥樣に出してその殘りを自分のにしてゐた譯です。

晝食が濟むと解物をしたり、奥樣のところで裁縫の教へを受けながら、少しづつ手持をさせて貰ふのです。これも僅の時間で忽ち晩餐の支度に掛つたりせねばならず、洗濯物のある日は、とても坐つて習ふ譯には行かないのであります。

田舎から出た私は水道の便利を實に驚きました。毎日家に風呂を立てますが、トタンの に手掛けて置けば僅の時間で濟みますし嬉しかつたものです。當時はまだ電燈は戸毎には有りませんでしたからランプの掃除は、竹ぼやの芯を眞直に切ることに苦勞したものです。例に依つて丁寧な掃除を終つて夕食に向ひます。實家でしたら兩親と妹達三人と學校の話や遊びのことや、その日の出來事を面白く話しながら一つの食卓で實に樂しくしてゐたものが、奉公人の今は八寸四方位の切溜のお膳で、奥とは別のお菜で大抵は濟ますのです。夕方は實に淋しさを感じます。隣りから哀調を帶びた尺八の音が聞えて來ます。ランプに灯が點ぜられる頃、雨戸を繰る時、涙は頬を傳ひます。食事の後付けが濟みますと、磨き物を始めます。盆、鼠入らず、その他色々の家具を、からぶきんを掛けて磨きます。主人は煙草入に趣味があるので人形町の夜見世の古道具屋をあさつて色々のを所持してゐられます。夜になるとその金物を自分手に取りかへたり、緒〆めを直したりして樂しんでゐられます。よく人形町へは御伴をして行きます。東京の夜見世を面白く見ました。歸り

は必ず襦袢の袷を買つて貰つたものです。奥のお床を取る前に、その座敷の疊を綺麗に掃くのです。それをしなければ決して蒲團は敷かれないのです。そんなに掃き清めても奥様は必ず、手拭を持つてゐられて一足歩くと足をふき二足あるいて又掃くと云ふ風で實に病的に綺麗好な人でした。そんなにして奥で皆様が休まれてから私も樂しい床に這入るのでした。

奉公人氣分

實際他人の家に這入つて見れば、奉公人となつて味はねば解らないことがあるもので、昔の人が奉公を一つの修養と心得たのは確かに間違ひではないと思ひます。食事に就ても我儘で、あれではいけないこれでなければ食べられないと實家では申してゐても、奉公してそんなことは云へませぬし、又云へないほど不思議に美味しく食べられるのです。それどころではない實際食事が待たれます。子供のうちは御菓子が御馳走でお飯などは仕方なく親に云はれて食べる様なものですから副食物がよいの惡いのと云ふのです。思へば可哀相なもので十五位な子供で三食を待ち兼ねるのですから、然しこれは實際味はつて見れば解らないことです。その食事と同じ様に樂しいものは眠りです。遊びに面白く寢る時などを忘れて遊び狂つてゐた自分は、居眠りなどは一生涯自分とは無關係の様に思つて過したのですが、他人に使はれると眠りの此の上もない嬉しさを經驗するのであります。少し風の吹く日など例の掃除に實に多忙を極めます。三回も四回も掃いたり拭いたりして、雨戸の棧まで雑巾を掛けるのでありますから夜は疲れて不體裁の居眠りが襲ひ來ります。こんなことではならないと勇氣を出しても弱くも敗けて了ひます。思ひ出すことは自分の使用人に當て惡戯をしたことです。やはり夜に居眠る小僧達に算盤を結び付けて置いて、急に『奥で呼んで居る』と云ふと驚いて算盤をつけたまゝガラガラ云ふのも氣が付かず走つて行く滑稽を手を打つて笑つたものですが、自分がその立場に置かれてつくづく惡かつたと思ふのでした。夜業物をする頃私は堪らなく眠氣が來るのでつい居眠りが始まります、それで遂に減食を命ぜられました、と云つても意地の惡いのでも、嚴罰でもなく、『さう眠いのは夕食が多くて胃が惡くなつたのだらうから、少し控へたらよいだらう』と云はれたのです。私は實に恥入つてその後は緊張してゐました。年の若い息子様のことでありますから、時々は夜遊びに耽けることがあつて歸りの遲い時などが有ります。『罪のない奉公人にまで迷惑を掛けるか』とそれが一つの改心の方法となる様にと、奥様の考へで私を決して寢かさないのです。その時こそ居眠りも公然ですが實際迷惑なこと限りなしです。

私は一度危險に出遇ひました。つい風呂の中で疲れて眠りました。目を醒ました時何分經つたか少しも見當が付きませぬ。風呂から出ると非常に氣分が惡いので板間に腰を掛けました。その後は記憶に少しもないのです。氣付いて見ると、御主人達の看護を受けて寢かされて居ました。話されたことは、臺所で人の倒れた大きな音がしたので來て見ると お前

が、臺所のセメントの流に倒れて居るので驚いて座敷に連れて來て氣を付けたのだ、腦でも打てばそのまゝ死ぬところであつたと云ふことでした。

一ケ年十五圓

私が通學した横須賀の小學校は、明治三十二年に始めて女生徒の行燈袴が使用される樣になり自分もこの學校中での最初から用ゐた方でした。その翌々年あたりから筒袖が改良服として流行りました。これは母が中々許してくれませんで、殆んど高等四年を卒業する間際に漸く一枚だけ袖を切つて呉れたのです。そんな時代ですから少し前まで先生も丸髷に結つてゐられたので、生徒は黒繻子の衿の掛つた着物でした。私もそんなのが有つてその上に海老茶の袴を穿くと如何にも對照が惡いので、子供心に衿を取つて呉れる樣に母に注意したことがありました。

奉公に出て再び衣類は昔風になりました。束髪もやめて、一週間目位に髪結が來て結ひます。三錢の結賃でこれは主人の方から出ます。風呂も自宅に出來るので、そんな金は入りませぬ。それで一ケ月の給金が壹圓貳拾五錢となるのであります。

朝起きてから晩床に入るまで御主人の召使ひなので、自分の物一枚洗濯するのも許を得た上でなければ出來ず、買物のための外出も同じ町にある親戚に行くにも自由ではないのです。道の順序により時には無斷で知人の家を覗いて來たりすると、實に氣が氣でないのであります。

なつかしいと云へば矢張り故郷の我家でした。夕方その日の洗濯物を物干場に取りに行くと、私の汽船のついた靈岸島が見えます。我家が何處か解りませぬが、兎に角く靈岸島の向ふに我家が有るのだと思ふと實に堪へられない懐かしさを覺えるのです。こんな夕方母が忙がしく夕餉の支度をする傍で手傳ひながらその日の歴史の物語を話したり、今日の清書の甲は二人でその中の一人が自分であつたことなど云つて母をよろこばせたものでした。私は自分の作文と圖畫が惡くて母にさへ恥かしくて云はれない點を附けられてゐたのです。そんなことを思つたり、小さい妹達がやはり私が居らなければ淋しいだらう、父はキツト私の健康である樣に願つて居て呉れるだらう、家で皆揃つて暮らせたらほんとに幸だ、こん度歸つたら必ず家のためによく盡さう、そして差し當り親に孝行は主人によく仕へることだと考へてくるのです。そして溢れ落ちる涙を拭いて物干より下りて來ます。

當分はこんなに思つてよく泣きました。家から便りが有ると又新しく涙が湧きます。時折伯母が訪ねて呉れると、又涙です實に家を離れて見ると親の親心も家の溫さも深く感ぜられるものであります。

お小言

或夕方、私は米櫃からお米を量つて桶に入れ樣と思ひますと、もうお米が少ないので、自然、桝が米櫃の底をガラ〳〵させるのであります。突然奥から奥樣が『今日はよく米櫃を拂つて日光にお干よ』と云はれます。私は大きな重い米櫃をどうして一人で運ぶことが出來ようと非常に困却しました。今に奥から

來て助けて下さるのかとそれを待つてゐました。やがて時間が來て、お針子は皆歸りました。奥樣は臺所に見えて『他人が居るのに米櫃の音をさせるものではない、さも〱お米がない樣で、恥かしいではないか、私がア、云うたから宜かつたものゝ、ほんとに氣をつけなければいけないよ』と私は叱られました。五俵入れても百俵入れても食べれば空になることも當然なことなのですが、此の人達の社會にあつてはそれを氣にせなければならないほど狹いのでせうか、相場師と云ふものも妙なものです。臺所の水瓶は、水道を受けて始終溢れさせておくのが主人の好みです。やはり一種の緣起とでも云ふのでせうか？

五厘の洗濯賃

洗濯石鹼が何日頃出來たものか知りませぬが、私が始めて石鹼を知つたのは八歳の時でした。未だに覺えて居ますが、父と一所に錢湯に行きますと石鹼を使ふとが出來ました。その石鹼が花王石鹼でありましたが、花王と云ふ字を知らない私は、顔の石鹼で、顔だけ之で洗へと云ふ意味だと思つて居たのです。使ひ始めたのはそれから餘程後のことの樣に覺えてゐます。

　洗濯石鹼は早くから重寶に使つてゐましたでも、母は自分の奉公時代のことを話して、その頃は大抵灰のあくを使つて居たさうですが、母の主人は着物を大切にする人で灰汁では布地がいたむからと、お米の洗ひ汁で洗はされたさうです。

　私はそんな六ケ敷ことは主人には云はれませんが、灰汁でも石鹼でも中々落ち惡い洗物が始終ありました。御主人は持病が痔疾で下帶がひどく汚れるのであります。私は奉公するからには、どんな汚いことでも嫌なことでも我慢をせねばならないと思つてゐましたが奥樣が

『いくら奉公人だからと云つて、これは餘り汚なくて、可哀相だ、けれども洗つて貰はない譯にも行かないから、一つ洗つて呉れたら五厘上げるとしよう。その洗ひ賃として』

　私は別にそれほどにして貰はなくともよいのであつたのですが、主人の方から云はれるので『はい』と返事はしました。ただ餘り綺麗に汚れが消えないのに困つてゐました。

　奥樣が云はれる時は勿論、僞りでもなんでもなく、ほんとに五厘出さうと思つて居られたのですが、でもこれがその金だと渡されたことは一回もなく、一年後に暇を取る時にも又それはありませんでした。

小按摩の印象

　私は奉公に出る時に、衣類や諸道具を入れた行李の中に、學校時代を懷かしがつて唱歌帳や、讀本、ノートを一緒に持つて行くことを忘れなかつたのでした。少しの暇にそれを見て樂しみましたので、主人も私の讀書好なことを了解してくれて、暇が有れば讀書してもよいと云はれました。私は兼々この家にある粗末な本箱に太閤記のあることを知つてゐましたので許されたのを幸にそれを讀みました。自由に勉强が出來ない境遇に置かれると貧乏の悲しさを深く感じるのであります。その頃、この家を花客として居る、女の小按摩が有りました。越後の生れで遠く東京まで出

て來てゐるのです。私とは年にて一つ上であつたと覺えてゐます。兩眼とも失明して居ます。主人の治療をしながら問はるゝまゝに日ゝを話します。晝はその師匠から生理學を學んで實習し、夜は町を遲くまで歩いて仕事をするのださうです。よい都合に仕事のある時はよいが遲くまで歩いても誰れも呼び入れて呉れない時は、師匠の不氣嫌を見るのが實に辛いとか、こつのであります。一時間位按んで五錢を得て歸ります、主人達はよくこの小按摩を可愛がつて、來る度に大抵何か御馳走をしました。ある時海苔卷を出して奥樣が『これは東京でだけ出來る海苔なのよ』と說明しましたら、按摩は『これは苔ではありませんか、越後ではこんなものは、食べません』と氣味惡さうに食べました。江戸自慢の奥樣もこれには、一寸閉口の樣でした。

私は小按摩を見て誠に氣の毒な人であると思つたが私はそれ以上に、この人の仕事は尊いことだと强く感じたのです。一日の中には可成多くの人に喜びを與へるだらう。奉公人が臺所で働いてもそれほど喜こばれない。喜ばれないばかりでなく、私の樣に、年が行かなければ反つて多くの世話を掛けることが有るのに、小按摩は直接他人の肉體の苦痛を癒すのであるから、どんなにか人を喜こばせることが出來よう。看護婦の働きと變りはないと、私は思つたのです。元來私は看護婦を志願してゐました。小學校時代ナイチンゲールのことを知つてから、その仕事に非常な憧憬を持つてゐてその當時はどうしても自分は看護婦として働き度いと思ふ心が切でありました。父は當時の看護婦界にその品性の立派なものでない多くの分子のあることを私に語つてそれを止めさせたのでした。それ以來私は教師になる望を持つたのでありました。

十五の時にこの小按摩に依つて考へさせられたことが今でも尙私より離れないのであります。その後私はマッサージをすることに依り、三人の伯母と、父と、夫とを喜ばせることが出來たのであります。

新刊紹介

□**剪られた花**（佐藤春夫著）□中篇小說叢書の第二篇である。七十錢、新潮社）

□**二人の從**（武者小路實篤著）□同上叢書の第六篇である。（七十錢、新潮社

□**白　路**（吉田絃二郎著）感懷の深い小說である。（壹圓八十錢、新潮社）

□**黑龍の流れ**（田北功著）西比利亞出征中の印象記である。（二圓五十錢、三田書房）

□**カラマーゾフ兄弟**（伊藤松雄譯）ドストエーフスキイの原作を脚色したものである。（壹圓、新潮社）

□**糸の亂**（前田曙山著）歷史小說である。（二圓二十錢　講談社）



長篇小説

炎の路（二）

―エセル・デル原作―
三上於菟吉

四　羊歯の床

幾日となく暗い深淵のうちに惱ましくさまよつてゐるやうな漠然とした惡夢の境に囚へられてゐたムリエル・ロスコエ孃は、やつとのことで追々に意識を取り返しかけて來た。が、彼女はまだすつかり困憊しつくしてゐて眼瞼を開けるのもやつとのことで、況して長い間目をみひらいて物をみつめる力なぞは持てなかつた。そして自分が全然ひとりぼつちでゐるのではなく、誰れかが側にゐて絶えず注意深いみとりの目を注いでくれてゐるやうだとは氣がついてゐたけれども、それが何人であるかまたどういふわけで自分がその人の看護を受けるやうになつたのかなどといふことを思ひ明めて見る程の氣力もないのだつた。

とは言へ、さうした精神状態もやがてをはりをつけかけて來た。全身にはなほ何とも言はれない苦惱が殘つてゐたが、頭の中はだんだんに冴えて來てあたりは到頭光明で照らされはじめた。彼女が最初に氣がついたのは誰れかゞ枕元に坐つて、半覺半醒の彼女の顏や額を冷たい水で始終冷やしてゐることだつた。ムリエルにはそれがうるさくてならない氣がした。

『よして頂戴。よして頂戴。』と彼女は遂に辛抱がならなくなつて言つた。『私すつかり疲れてゐますから、どうぞ眠らせておいて頂戴。どうぞ……』

『解つてゐますよ、解つてゐますよ。』と親身の親らしい聲が答へた。『だがもう目を覺さなければいけない時機です。』

彼女は此の言葉の意味をほんの漠然とのみこむことが出來

ただけであつた。彼女はどうにかして眠りつゞけようとしたが、相手は許さないやうだつた。たうとう彼女は一生懸命になつて目を開けて上を眺めた。

ニック●ラトクリッフはその瞬間、彼女の瞳に何とも言はれない叱責の色がひらめいたのを感じた。けれどもそれはほんの刹那のことでその叱責はすぐに消えてひどい恐怖の光がありありと浮んだ。

『まア、私、どこにゐるんでせう？』とムリエルは身を起して叫んだ。『あんたは私をどうしたのです？』

ムリエルは荒々しくあたりを見廻した。まるで悪夢に脅されでもしたやうに見廻した。彼女が横へられてゐたのは狭い暗い谷間の羊歯の寝床の上であつた。四邊は暗影に蔽はれてゐたが遠い高空には日の光が流れてゐた。數呎はなれたところには岩間に咽び音を立てる谿流が流れ、後の方には黒い巖壁がつきたつて、鬱陶しい叢が一めんに生ひ茂つてゐる――そしてしつきりなしに薄氣味の悪い翼の音を立てながら蝙蝠に似た奴があたりを飛び廻つた。

ムリエルはゾッとして後ろへ身を退いた時、ニックの力勁い腕がソッと自分を抱いたのを感じた。

『安心してゐらつしやい。』と彼は事もなげな調子で言つた。『あんな小禽に驚かなくともいい。』

ムリエルはニックの腕を振り離さうとした。しかしそれは蛇のやうなものだつた。

『觸らないで頂戴。』ムリエルはムッとした調子で荒つぽく叫んだ。

『あ、失禮でした。解りました。』

ニックは氣にも止めないやうに言つて、今度は明るいメロディを口笛で吹きながら、土の上に投げ出してあつた小さな包を開いて何かしはじめた。ムリエルはぢつと坐つてニックを眺めてゐた。彼は土人の着物に頭から足先まで包んでゐたが、その被衣のひまから現はれてゐる黄色い顔が何とも言はれない氣味悪さをムリエルに感じさせた。まるで人を害しでもする猛鳥のやうだとムリエルは思つた。

氣が付いて見るとムリエル自身も亦同じやうな扮装をしてゐた。濡れ髪は額にへばりつき、顔は水でしづくが落ちる程濡つてゐた。彼女は手で顔を拭いた。彼女の不安は刻々に増して行つた。

ムリエルは事のなりゆきをハッキリと思ひ還ることが出來た。此の男は私を無理やりに連れ出したのだと彼女は戰慄を覺えながら自分に言つた。私を無知覺にして置いて砦から連れ出したのだ――お父さまを後へ殘したまゝ――それにしてもお父さまはどうしてこんな門に私を任せてしまつたのだら

う？

いゝえ、そんな筈はありはしない——と彼女は心に叫んだ。お父さまがどうしてそんなことをなさるものか！　こんな野蠻な卑怯未練なことをするやうにお許しになる筈があるものか！　こんな殘酷な、こんな僞らしい、こんな奸黠な方法をお許しになる筈があるものか！

ムリエルに力が歸つて來た。憤怒の力が蘇つて來た。彼女は逃げ出してしまひたかつた。どんな艱難辛苦をしてももう一度父親の許へ行かねばならない。その爲にはどのやうな冒險をしてもいゝ、どのやうな危險に傷いてもいゝ——こんな野獸と一緒にゐるよりは……彼女は駆け出さうとした。

ニックはさうした彼女を見てもゐなかつたし、振返つて見るでもなかつたが、素早く腕を伸べて彼女の着物の裾を押へた。

『勿論行かねばなりません、しかしその前に食事をなさらなければ……』とニックは靜かな聲音で言つた。

ムリエルはどうにかしてニックを突き離さうともがいた。しかし裾を掴んだ指は荒鷲の爪のやうに勁く鋭どかつた。

『行かして頂戴！　どうなさるのです？　どうなさらうとするんです？』ムリエルは狂氣のやうに叫んだ。

ニックは落付き拂つてゐた——

『お爲めにならないことですがね——僕はお止めしますよ。』

ムリエルは最後の大努力で身を振りはなした。が、その瞬間に全身の力がまた脱けてヘタヘタと地上に坐つてしまつた。

『やつぱりいけないでせう？　ね。』とニックは柔しく言つた。

そして兩手で顔を蔽してしまつたムリエルをばそのまゝにまた以前の仕事にとりかゝつた。

『さあ、どうぞ朝飯を上つて下さい。』と、やがて彼は言ふのだつた。『なか〳〵上出來の米飯があります。少し食ると御氣分がよくなりますよ。』

ムリエルは相手の聲を聽いて身を震はせた。どうして此の男の與へる食物なぞを口にすることが出來よう。

『さあ、食つて下さい——食らなければ駄目です。』とニックはムヅかる子供をすかすやうに繰り返した。『どうして食らないんです？　さあ、ほんのひと口——ね、お食んなさい。』

ムリエルは兩手を顔から離して相手を眺めた。ニックは彼女の前に跪づいて、土人外套の頭被をうしろに刎ねてゐた。そして米飯とビスケツトの入物を差し出してゐるのだつた。

『私、何にも食べられませんわ。』と彼女は戰慄を聲音に表はして言つた。『あんたが食べたらいゝぢやないの。私は死んだつて食べやしません。』

ニックはたゆまなかつた。

『お食んなさい。お體の爲めですから。』
ムリエルは憤ろしげな一瞥を投げた。ニックはなほ一層食物を突きつけた。
『さあ、お食んなさい。』
その刹那、彼女はわが意志に反して思はず食物の容器を受けた。彼女は相手の監視的な視線の下に食べはじめた。ほんのひと口の食物が咽につかへるやうな氣がされたが無理に呑み込んだ。相手は一かけのこらず彼女が食べてしまふまでは注目を緩めなかつた。
『そら、氣持がよくなつたでせう。』とニックが言つた。
するとその時、どうしたわけかひどく急に彼女の胸に父親の面影が浮んだ。
『あんた、私に何か話がある筈でせう?』と彼女は神經的に訊ねた。
ニックは顔を反けた。そして谿間の彼方を眺めるやうにした。
『えゝ。』と少し間を置いて言つた。
『ねえ——早く話して頂戴。』とムリエルはしどろもどろな口調でせかせかしく言つた。『早く話して頂戴。お父さまはどうなすつたのです?　お父さまはどうかなすつて?』
ニックはぢつと此方を見て靜かな聲音で答へた。
『氣を靜めて下さい——お父さまは昨晩お亡くなりになりました。あなたが砦を脱出なさる前に——』
ムリエルは悲しげに叫びを立てた。ニックは寄り添つて子供をなだめるやうにムリエルを抱き寄せた。彼女は男の腕から脱れようとする氣力もなくなしてしまつた。あまりの驚きに官覺はしびれてしまつた。抱かれてゐるといふことはぼんやりと氣が付いてゐたがそんな行爲に對する憤りなぞは感じられなかつた。
ニックはひと言も言はなかつた。相手の頭をわが肩にもたれさせて、やさしく搖ぶるやうにしながら、自分の顔を相手のそれの方へ寄せてゐた。その表情にはまるで大苦惱を堪へてゞもゐるやうな惱みがあつた。
ムリエルはわなゝく唇で言つた。
『詳しく話して頂戴。』
彼女は男性の腕の壓迫が堪へられなくなつたやうに身じろぎをした。そして到頭自由になつた。彼女はなほ彼を用心してゐるやうに見えた。彼女に取つて彼は報告者に過ぎないのである。ニックは膝頭を抱くやうにしてまた谿間のかなたを眺めはじめた。そして話し出した。唇はいくらか震へてゐたが聲はハッキリしてゐた。
『砲撃がはじまると間もなくのことなのです。多分あなたを

お訪ねになつて歸られてからすぐのことでしたらう――心臓の上をまつすぐにお撃たれになりました。致命傷だといふことは御自分ですぐお知りになつたやうです。もう覺悟してゐられたでせうし……私たちはすぐに砦の内にお連れ申して介抱しましたが、意識はもう失つておしまひになつてゐました。そして直ちに絶命されたのです。』

　ムリエルは齒を嚙み占めるやうにして言つた。

『それをどうして昨晩言つて下さらなかつたのです？』

『申し上げない方がいゝと考へましたから――お父さまもさうお望みだつたに違ひありませんから――』

『どうしてです？　父がどうしてそれを望まなかつたと仰有るの？　死目に逢はせないやうにお望みになる筈が……』

　ムリエルは激しい憤怒にイライラしながら顫へた聲で言ひ返した。

　ニックは一瞬間默して、やがて彼女の方を見ずに答へた。

『みんなあなた御自身の爲めにいゝやうにと思つてです。』

『私を見たら父が悲しむだらうとお思ひになつたの？』

『あの方が意識をお持ちの間はお悲しみになるでせうし……それにすぐに御絶命になつたのですから――』

『それなのにあんたは私をお詭しになつたのね！　父が死にかけてゐた時私をお詭しになつたのね！』とムリエルはだんだん物狂はしい調子になつて『あなたはそれも私のためにして下すつたと仰有るのでせうね！　父の側に行くのは私の權利ですし、父と死ぬのも私の權利です。それなのに臨終の父にも逢はせずに私をお奪ひ出しになつた。私はあなたを許しませんわ！　一生許しませんわ！』

　彼女はほとんど地團駄を踏んで罵しつた。そしてなほも罵しりつゞけた。

『決して許しませんとも！　若し私が一切を知つてゐさへしたら……』

　彼女は急に荒々しく咽び哭きはじめた。そして地上に打仆れて痙攣く指で濕地の苔をかきむしつた。そして咽び泣きのひまから『お父さん！　お父さん！』と今現在目の前に父の亡骸を見てゐでもするやうに繰り返した。ニックはもう手出しをしなかつた。まるでスフィンクスの顔に浮んでゐるそれのやうな謎の靜かさでぢつと眺めてゐるだけだつた。

　ムリエルがやうやくのことで身を起して重い髮をうしろに搔きやつた時、彼は錫の小コップを差し出した。

『これはたゞの水です、おあがんなさい。』

　ムリエルは機械的に受け取つて言はれるままに飲んだ。そして頭が燃えるやうに痛むのを感じながら後ろに仆れて咽び泣きつゞけた。

しばしして彼女にまた男の手が身を抱くのを覺えた。しかし眼を開けて見るのも物憂かつた。彼はまるで女のやうな物馴れた柔しさで彼女の顏を洗ひ拭ひ、髮の毛を後ろに撫でつけ枕を頭の下にかつてやつた。

ムリエルはニックがつい側に坐つてゐることを知つてゐた。絶えず注視の眼を離さないことも知つてゐた。けれども長い間の激しい疲れが一どに出て來てもうどうにも眠さから抵抗出來なくなつた。たうとう彼女は夢もない深い〳〵眠りに落ちた。

五　朝

ムリエルが眼醒めた時あたりは眞暗だつた――彼女は自分がいつもの床に寢てゐるのだとしか考へなかつた。しかしそんな幻想はすべて消えてしまつた。あまり距つてゐないところで鳴くジャッカル獸の叫びを聽くとたちまち我れに返つて肌寒い闇のうちに身を起して戰慄した。

急に温かな手が冷たい彼女の手を把つて、低い聲で囁やいた。

『大丈夫ですよ。僕が此處にゐますから。』

『眞暗なことねえ……』

『大丈夫です。安心なさい。もつとこつちへお寄んなさい。こんなに冷たいぢやありませんか？』

彼女はわなわなと身震ひをしながら彼に寄り添つた。力勁い温かい男の腕がうれしかつた。

『もうぢき日が出ます。お腹が減りませんか？　え？』

彼女は大へん腹が減つてゐた。ニックはビスケットを握らせてくれた。ビスケットを食べると幾分元氣が出た。

『少しは温くなりましたか？さ、手を出してごらんなさい。』

ムリエルの兩手はまだ冷たかつた。ニックはその手を自分の温かい胸に押しつけた。男の温かい肌に觸れた時ムリエルはかすかに身を震はせた。

『でも、あんたが冷たいでしよ？』

ニックは柔しく笑つて、なほのこと相手の手をわが肌に強く當てた。

『心配しないでいゝです。あなたは眠つたから一層寒いのです。僕は眠らないから大丈夫。』

ムリエルは相手が一睡もしなかつたといふ事實を聽いてびつくりした。もうニックを憎んでゐるひまはなかつた。相手の體が心配になつて來た。

勿論忘れてやることは出來ない、が、この曠野の夜、この人を除いて彼女は誰れの保護を求むべきであらう。その上此の男の側にゐるといふことは一種の樂しみでさへもあるやうな氣さ

へどこかでするのである……

『ちつともお眠みにならなかつたの？　どうして眠らないでゐられたのか不思議ですわ？』

ニックはまた柔しく笑つた。その笑ごゑを聴いてゐると彼女は此の男は善い性質の人間だとは思はないではゐられなくなつた。

彼女はしばし默つて坐つてゐた。それからもう十分温かくなつたのでソツと手を男の胸から退いた。

『まだ聽きたいことがあるのよ。』とムリエルはニック・ラトクリツフに言ひかけた。『ラトクリツフさん。あんたは私を無理にお連れ出しになつたけれど、これからどんな方法で逃げようとなさるの？　聽かせて頂戴。』

『ニックと名を呼んで下さい。ね。』とニックは言つた。『私が取つた手段はあなただつて感心して下さるに違ひありませんよ。それに事が非常にうまく運んだのです。こゝは砦から十二哩も離れた山の中です。私はもう一奮發して山越えをしてしまはうと思つてゐたのだが、あなたが眠氣だつたから明日のことにしたのです。山といふ奴はしかしいゝ奴です。隱れ場所はどこにもあるが、見つける方には不自由この上なしだ。兎に角此の山間を南へ南へと行けば、結局バセツト將軍の軍隊と數日中に出逢ふことになると、打算してゐますト大地を打つ槌と思つて間違ひはありません。

ニックは冷靜に説明した。ムリエルはしかし思ひ迷ふのだつた——ほんとうにさううまく行くであらうか？　彼女は彼のどこかに魔力のやうなものがあるのを感じてゐた。それゆゑ最後はその魔力でどうにかなるだらうと思ひはしたけれども……

『それであんたひとりで私を十哩あまりも運んで來て下すつたの？』

『まアそんなものです。』

『どうしてそんな事が出來たんでせうねえ。』とムリエルは相手の力量を信じることが出來ないものゝやうに言つた。

『つまりあなたがさう重くなかつたからでせう。』

ニックの腕はなほ彼女を掻き抱いてゐた。ムリエルはそれが惱しかつた。

『あんた何か食つて？』とムリエルは訊ねた。

『いゝえ、もう長いこと食べません——』とニックは言つた。『その代り私は莨を吸つてゐます。氣が付かなかつたのですか？』

その調子には强ひて相手を説服しようとするやうなところがあつたが、ムリエルは何も氣がつかなかつた。

『まア、莨も食ものと同じ作用をしますの？』

『より以上です——』とニックは騒かず言つた。『やつて御覽なさい。』
彼女は信じ難いと言ふやうに頭を揮つた。
『信用出來ませんわ——』
『何ですつて！　信用出來ないつて……ハハ。』
相手は何でもなく冗談を言ふのだつたがムリエルは恥かしくなつた。そして默り込んだ。ニックも默つた。ムリエルはニックは今何を　へてゐるのだらうと考へた。沈默は壓迫的なものに感じられて來た。ふと、ニックは口を開いた。
『ごらんなさい、夜明です。』
ムリエルは眼を瞬つたが何も見えなかつた。
『上の方です——そら左の方に——』
ムリエルは夜空の深みがほの白さを漂はせはじめたのを見た。
彼女はホッとした。そして光を增してゆく空を眺めつゞけた。みる／＼それは輝きを增すのだつた。谿間の萬象は灰色になり、やがて淡桃色の光を帶びはじめた。
ニックは片松葉杖をついて谿間を眺めてゐた。彼は娘の方は絕えて見なかつた。彼の黃色な顏には小皺が一めんに出來てゐた。
ムリエルは相手が押し默りつゞけてゐるので何となく心細くなつた。
『ニック。』と彼女は幾らか躊躇ひ勝ちに呼んだ。
『やあ、お早う。』とニックは急に振返つて『僕はあの流れへ下りて行つて水を浴びたらどんなにいゝ氣持がするだらうと考へてゐたのです。十分元氣をつけて置かんとまだなかなか歩かなくてはならんから……あなたにも歩いて貰はなければならんです。』
ムリエルは身を起した。彼女は日光の下にニックの脚を眺めてゾッとしたやうな顏をした。
『おゝ、脚を見てはいけませんよ。ひどく汚れてゐるから。』とニックは笑つて見せた。
『まア、どうしたのです、あんたの足は傷だらけだわ。跣足で歩いてゐたんですのね！』
『いや、私だつて鞋は穿いてゐたのです。さ、もう見ないで下さい。別に心配にはならないのですよ。』
彼は笑つて見せたがムリエルは欺されなかつた。
『私縛つてあげますわ。』
『有難いけど、足に重い布をしばりつけては歩きにくいからこのまゝでいゝです。今夜はまた可成險しい路を歩かなければなりません。心配して下さるな。たゞ一生懸命驅け歩く積りになつて下さい。顏をお洗ひになると清爽しますよ。』

ムリエルは流れの方へ下りに行つた。大きな岩間にはざあざあと清冽な谿川が流れてゐた。彼女は苔むした岩蔭に膝を突いて、毎朝するやうに祈禱を上げやうとした。しかし今の彼女に取つては祈るべき何ものもないやうな氣がされるのであつた。どうして下さいと祈るべきであらう？　今や彼女の世界はまるで空虛なものではないか？　誰れの爲めに祈るべきであらう？　今や彼女の心には愛するに足る何人も殘つてゐないではないか？

　ムリエルは冷たい岩に膝を突いて長いこと兩手で顏を蔽してゐた。父を失つた彼女が――あれ程までに愛してゐたものを奪はれてしまつた彼女が、かうした觀念を抱かうとも神も恐らくは尤め給はなんだであらう。

　谿水のひゞきは靜かで寂しかつた。その響に耳を貸してゐるうちにムリエルの頭からはニックのことさへ消え亡びてしまつた。腦の內部はだん／＼活動を止めて、物憂げなものが一ぱいにはびこりはじめた。何を考へようとも思はなかつた。彼女は苔むす岩に頭をもたせかけて眼を閉ぢた。絕え間のない水の響は子守唄のやうに聽えつゞけた。

　……こんなにしてゐるうちに、恐らく彼女はいつとなく眠りに落ちたのであつたらう。言ふべからざる快よさが五體を押し浸すのにしばしが程は任せてゐたが、ふと何かしら甚しい危險が迫つて來たやうな氣がして彼女はゾッとした。彼女はその正體を見定めようと思つて目を瞬た。

　その瞬間、彼女はアッと叫び聲を立てゝ飛び上つた。彼女の全體はあまりの怖しさに痲痺してしまつた。ほんの二三間先きに野獸のやうな、髭ぼう／＼な土人が立つてゐて、それが歩一歩彼女に近づくのである。その男の眼は炎のやうに獸慾で燃え、腕は餌食を抱かうとしてわな／＼と拘攣つてゐた。彼女は叫ばうとした。もう叫びごゑさへ出なかつた。

　蠻人の細い、しかし力勁い腕は差し伸された。その腕は蛇のやうに彼女に絡み付かうとした。彼女の全身の筋肉は恐怖のために力を失つてしまつた。と、その刹那、俄かにもう一人の人物が突然出現して、今にも彼女を抱かうとした蠻人の後ろから組みついた。荒々しい格鬪が岩間で演ぜられはじめた。二人は彼女の足元で組んづほぐれつ捩ぢ合ひ、嚙み合つた。氣が往いて見ると後から現はれたのはニックなのであつた。ニックはたうとう勝つた。彼は膝で蠻人の胸を押し伏せて兩手で咽喉を緊めつけようとしてゐた

「畜生、死んぢまへ！」とニックが叫ぶやうに思はれた。ニックその人の顏も野獸のやうに變じた。上唇はもの怖しく上に引釣り、白い齒はガチ／＼と打衝かり合つてゐた。

「そのナイフを取つて下さい。」とニックは言つた。銳どいヒ

首かつい側に投け出されてゐた。ムリエルはそれを靴の爪先でニックの手元に蹴寄せてやらうと思つたが、その時不思議な靈魂の力がそれをさせなかつた。彼女はたゞ恐怖に身を凍らせて眺めてゐた。

ニックは遂に片手を伸してナイフを摑んだ。おゝ、彼はそれを振りかぶつた。今彼は組み伏せた敵を突き刺すだらう……組み伏せられた蠻人は口から泡を吹き、全身をもぢつてどうにかして脫れようともがいてゐる。

ムリエルは激しい怖れのためにまたしても氣が失はれてゆくのを感じた。體中の關節は力を失ひ、やがて意識の世界を暗い闇の幕が包みはじめた。彼女はよろめいた。そしてくたくたと地上に仆れてもう何事をも知らなつた………

六　鷲の夢

「眼をお覺しなさい！　さあ！　もう眼をお覺しなさい。」ニックはしづかに繰り返した。

しかしムリエルは呻きつゞけたまゝ眼を開けなかつた。

「さあ、お覺めなさい！　何も怖いことはない――眼をお開けなさい！」

ぶる／＼と身を震はせつゝムリエルは眼をひらいた。彼女はいつの間にかまた羊齒の床に臥てゐた。ニックは近々と顔を寄せて覗き込んでゐた。その眼は鷲のそれのやうに輝やかしかつた。彼女は相手の下唇に引裂けたやうな傷があるのを見出すと、また肌えに粟を生ずるやうな感じに打たれて目を反けた。蠻人を刺し殺さうとしてナイフを振上げた刹那のあの惡魔のやうな顏――あの顏を彼女は思ひ出したのである。

「行つて下さい！　あつちへ行つて下さい！」と彼女は呻いた。

「えゝ、行きます。その代りこれを飮んで下さい。」とニックは小さな錫コップをムリエルの手に押しつけた。「ほんの少しです。ブランデイを飮むと元氣が出ますから――」

ムリエルはソッと身を起してコップを唇にあてた。水で薄められた強烈な酒はたちまち彼女の脈管に力を與へ、全身をしつかりさせた。彼女は怯々怖しい岩間を眺めた。

溪川のひゞきは元のまゝだつた。しかしそのあたりには恐怖すべき出來事の名殘はもう何も見られなかつた。戰慄が彼女の胸を走しり通つた――だが、あの大きな岩の彼方には何ものが隱されてゐるのであらう？　ムリエルはもうこんな場所には長く止つてはゐられない氣がして來た。それにしてもあのやうな酷たらしい事を敢へてするニックと一緒にゐることはなほ忍べなかつた。どうかして逃げねばならない――此の男の側から逃げねばならない….たとひ山で餓死しようと

も……

ふと、顧みるとニックは側にはゐなかつた。彼女があつちへ行けと命じたので何處へか身を隱したのであらう。おゝ、此の機會だ——あの男から逃げるのは此の機會だ。ムリエルはソツと立ち上つた。四五間行つて叢の蔭に立ち止つて容子を伺つたがニックが氣が付いて追つて來る氣配はない。彼女はまた少し歩いた。すると、突然、目の前に一人の男が地上に仆れてくつたりとしてゐるのが瞳に映つた。彼女は息を詰めて立ち止つた。それはニックだつた。ニックは身じろぎもしなかつた。ムリエルはホツとして足を早めて遠ざからうとした。しかしその刹那言ひ表はし難い感情が彼女の足を動かなくした。あの人は死んだのではあるまいか？　あの爭闘の間にどこへかひどく傷を受けたのではあるまいか？

ムリエルは今は逃亡の氣組も失つてニックに歩み近づいた。そして囁やいた。

「ニック！」

相手は答へなかつた。彼女の懸念は增した。

「ニック！」もう一度さう呼んでソツと肩に手を觸れると、相手ははじめてかすかに身を動かした。ムリエルはホツとした。ニックは顏だけ此方へ向けた。見れば頰と顎には激しい苦悶の皺が刻まれてゐる……

「あゝ、ムリエルさん！」とニックは笑つて見せようとして力の脱けた聲で言つた。「お氣の毒だが少し氣持が惡いのです。だがすぐ直るでせう。あつちへ行つてゐて下さい。」

ニックは口を利くのも大儀なやうに顏をしかめて、苦悶して兩手を取りしぼつた。ムリエルはどうしていゝか解らなくなつた。

「どうなすつたの？　何か欲しいものはありませんか？」と彼女はハラ〳〵しながら訊ねた。

が、その時不意に彼女は思ひついた。ニックはひどく餓ゑてゐるに違ひない。此の人が食物を口にしたのを彼女は見なかつた……ムリエルは羊齒の床の方へ驅け歸つた。そしてパンを持つて來た。

「さあ、おあがんなさいな。」と彼女は命令するやうに言つた。

ニックは顏を蔽してゐた。彼は心の中で鬪つてゐるやうに見えた。彼はしどろもどろな聲で言つた。

「あつちに持つて行つて置いて下さい。その代りブランデイを少し飲みませう。それから煙草を——」

ムリエルは男の腕に手を掛けて、顏を覗き込むやうにしながら、繰り返した。

「さあ、おあがんなさいな。ね、私あんたがどうしてこんなに苦しいのか知つてゐるの。餓ゑてゐるんだわ。私には解つ

てゐるわ。」

「餓ゑてなんかゐはしませんよ。」とニックは無理に笑つた。

「私は朝飯もやつたし茶も飲んだし……」

「いゝえ、嘘を言ふものぢやないことよ。私にも眼はあるの。私をめくらだと思つてゐるの？」

　ニックはそれには答へずにそろ〳〵と身を起した。しかしパンには手を觸れなかつた。

「もうよくなりました。大丈夫です。」

　ムリエルはぢつとニックを瞶めた。

「さあ――私の分は別けてあるのよ。これだけはあなたがお食べなさい。こんな森の中で餓死するなんか馬鹿らしいことです。これを食らないやうなら、私もあなたの命令は何も守らないことよ。」

　ニックはしばし默した。そしてもう文句を言はずにパンを取り上げた。彼は食べはじめた。

　もう少しで食べつくしてしまはうとして、彼はムリエルを眺めて訊ねた。

「あなたの分といふのをお見せなさい。」

　ムリエルは急にヒステリカルに笑ひ出した。何とも答へずに笑ひ出した。

　ニックは打ちのめされたやうに飛び上つてムリエルの肩を掴んだ。

「何といふことをしてくれたのです？　私が食べずにゐたのはあなたの爲めで、とりも直さず私の爲めだつたのだ。それだのに私は今全部のパンを食べてしまつた―若しあなたが飢に責められた時に一かけのパンもなくなつてゐたら……」

　ムリエルはほゝゑんで答へた。

「食べてしまつたのはもう仕方がないぢやあないの？　私死ぬのは何とも思つてゐないから――」と言つて「私、屹度あんたは眠むいだらうと思ふわ。少し眠つた方がいゝことよ。私が番をして上げますから。」

　ニックは頭を振つた。

「もし何事か起つたらすぐ起しますから――」

「しかし――」

「あんたは私が逃げるかと思つてゐるのでせう？」

「いや、そんな事は考へないが一度ある事は二度ないと限りません。また何者が現はれないとも限らない。あの男は多分バセット將軍の軍隊に對する斥候兵だつたらうと思ふのです。近所にまだゐるかも知れない。だから私は射撃しなかつたのです。」

　ムリエルはかすかに戰慄した。しかし努力を以つて言ひ張つた。

「大丈夫よ、どんな場合にも落付いてゐますわ。」
　二人は羊齒の床の方へ歸つた。
「あなたは側にゐてくれますね？」とニックが言つた。
「えゝ、勿論ゐますわ。」とムリエルは責任を知つてゐるといふ氣持を聲音に含めて答へた。
　ニックはもう口を利かなかつた。身じろぎもせず橫になつて、息の音さへ立てなかつた。やがて彼は眼を閉ぢた……そしてかすかな寢息が聽えはじめた……
……夜が來ると二人はまた南へ南へと山中を辿りはじめた。星がニックの案內者だつた。手に手を取つて二人は石くれにつまづきながら遮二無二步いた。とき〴〵遠くに人影らしいものがうごめくを見たが、彼方では氣がつかないと見えて誰何もしなかつた。ニックはしかし片手で絕えずピストルを握り〆めてゐた。彼は娘の父親への——萬一の場合には生きたまゝの彼女を敵に渡さぬといふ約束を忘れなかつた。二人は殆んど口も利き合はなかつた。ムリエルははじめの中はなか〳〵よく步いた。しかしやがて堪へがたい疲れが彼女を襲つて來た。とは言へ後ろを振返るのも怖いやうな逃亡者の心理が、もう一步も踏み出し難い程疲れた彼女を無理に押しすゝめた。ひどく疲れたのを見て取つてニックはブランディを一口含ませてくれた。その刺戟もさう長くは持たなかつた。又しても彼女の步みはもつれはじめた……ニックは赤兒を抱くやうに彼女を抱へた。そして一足でも南へ進まう〳〵と試みるのだつた。こんもりと茂つた木蔭を見つけて彼ははじめて步を止めた。…………
　夜がほの〴〵と明けると目の下に平和な村落の姿が見えはじめた。
「私は糧食を徵發して來ませう。」とニックは言つた。
「いけません、いけません、私はこんなところに一人ではゐられません。」とムリエルはむづかる子供のやうに言つた。
　ニックは思ひ止つた。ムリエルはすぐに深い眠りに落ちはじめた。しかし日が上つて熱い光が降り注ぎはじめると彼女の眠りは妨げられた。燃えるやうな熱が出て來た。ニックはびつくりして彼女を木蔭の奧にかゝへ込んで、またすや〳〵と眠りに落ちたのを見屆けると、足音を忍ばせて麓に下りて行つた。小川の岸に佗しい一軒家があつて、その家のまはりには山羊が群れてゐた。ニックは山羊飼の老人に乳を所望した。老人は土人服を着た彼を落人の英國人とは思はないらしかつた。それで快よく一瓶の乳を與へた。
　歸つて見るとムリエルは眼を覺して不安と乾渴とに悶えてゐた。二人は一瓶の乳を半分づつ飲んだ。
時が移つた。ムリエルは突然ニックの腕を摑んだ。

「ねえ、ニック。」
「え、どうしたのです？」ニックは娘の顔に言ひ難い苦悶が漲つてゐるのに驚いて訊ねた。
「ねえ、ニック。」と娘はかすかな聲で言つた。「これから先は私は置いてきぼりにして一人で行つて下さい。どうせ私は今夜は死んでしまふだらうと思ひますの。その方がいゝんですのよ──私、すつかり、すつかり疲れてしまひましたわ。」
ニックはすぐには答へられなかつた。彼は相手の冷たい指を握つて、もう少しで接吻しさうに唇のところへ持つて行つた。
「ムリエルさん、あなたは私のものですよ。私にあなたの生死は任せられてゐるのです。私はあなたを棄てることは出來ません。」
ムリエルは手を振放さうとはしなかつた。
「どうして私を死なせないの──死にたがつてゐるのに？どうして私を連れて逃げるの。」
「どうしてですつて？　それを言へと言ふのですか？」ニックは荒々しい吐息をして言つた。「いつか解りますよ。しかし今日はたゞ私を信じてゐて下さい。それがあなたに取つて一番いゝ道ですから。」
「どうして生きてゐなけりやならないんでせう──私がゐなくては困るものはもう一人もゐないのに……」と彼女は歎いた。「私が生てゐる限りはその言葉は眞理ではありません。」とニックはハッキリと言つた。
けれども山羊の乳で一時蘇つたムリエルの氣力はまただん〳〵衰へて行つた。東邦の素晴しい夕日が遠い高嶺の永劫の雪を淡紅いろに輝やかして沈みゆくころ、彼女はまた昏々と睡りはじめた。ニックの腕を枕にした彼女の寢顔には殆んど死の平和を思はせる靜けさがあつた。
ニックは相手の寢息があまりに靜かなのでだん〳〵不安になつて來た。彼はブランデイの罎を取り出して最後の一滴を彼女の唇に注いだ。彼女の睫毛がかすかに顫へて、深い吐息が咽喉から溢れた。彼女はポカリと眼を開けた。その眼は幼兒のそれのやうであつた。ニックは彼女を抱きしめてゐながらも今にも腕の中から抜けてどこか遠い〳〵ところへ行つてしまひさうな氣がしてならなかつた。それで蔽ひかぶさるやうにして相手を覗き込んだ。
日はもう沈み果てようとしてゐた。嶺々は一切那天國の巌のやうに輝やいた。突然ムリエルが言ひ出した。
「見えて？」
彼は彼女の目が高嶺の頂の方へ走しつてゐるのを見た。
「何が見えますね？」とニックは言つた。

彼女の瞳は彼に歸つた。考へ深げな目付だつた。

『ほんたうに奇態だわ！　鷲に違ひないわ。』

そのうは言のやうな言葉はニックの胸を搔き破つた。

『私ですよ――ニックですよ。解りますか？』と彼はわなゝく唇で言つた。

『いゝえ。』と彼女はまた高く眼を投げて言つた。『だけどあれは鷲だわ。』

ムリエルは身をくねらせてニックの腕から離れた。そして幻影を追ふものゝやうに乗り出した。ニックはハラ〳〵と涙を落した。

『しつかりして下さい、ムリエルさん。私を見て下さい、私を愛して下さい。山にはあなたを呼ぶものはありません。あなたの爲に私は此處にゐるのです――ね、私を見て下さい。』

ニックの言葉はやつとムリエルの耳にはひつたらしかつた。

『でもニック、たしかに見えたのよ――砦で見た私の夢の通りなものが――山の頂や、鷲や、火の戰車や澤山の馬が……神さまが送つて下すつたに違ひないわ。』

彼女はさも疲れたやうにさう言つてまたウト〳〵と睡り出した。

その時ニックはふと崖下の小徑の方を眺めた。おゝ、これは夢ではあるまいか！　彼自身も亦熱病に罹つてゐるのではあるまいか！　今や彼の眼前の小徑を馬が、砲車が、大勢の同國人が列を正して行進しつゝあるのであつた！

『おゝ、バセット！』

ニックの混亂した頭が此の名を思ひ出すには幾らかの時を費さないわけには行かなかつたのである。

（つゞく）



藝術か愛か

藝術家と結婚

村松正俊

藝術家といつても普通の人間である以上、別にそれの結婚や離婚が問題となるわけはない。もし問題となれば、それは普通人としても問題となるべき場合にちがひないと最初に考へたくなる。しかしさう考へるのは少し早まつた考へであるか、或はあまりに常識的に考へた結果である。通例藝術家といふものは、普通人と著しく異つた人種であると考へられてゐる。故にこれの生活がややもすれば普通人の生活と衝突したり、矛盾を起したりするので、もしも普通の結婚とかいふ普通人の生活が彼等に可能であれば、それが却つて變に思はれることもある。さうして彼等に離婚などといふ普通人にとつては普通事でないことがあれば、藝術家といふ豫感がそれを更に大事件のやうに、考へさせる。しかもある場合にはそれが當然のやうにも思はせてゐる。その上藝術家はその仕事の性質上社會的に一種の好奇心の的となることを免れないからなほのこと問題となりがちである。

最近さういふことで社會的に問題となつたのは、宮地嘉六氏、三宅周太郎氏、それから江口渙氏の離婚問題である。しかしそれらの事件の内容に關して、私はただ新聞紙を通じて知るのみで、その眞相を解しないのであるから、それをどう觀、どう批判するかといふ根據をもつてゐない。ただそれを一般的問題として見る時、ある興味がある。さうして之を機緣として、藝術家の結婚や離婚について、そのことが私に次

のやうな考察をなさしめる。

結婚とは單に一つの制度に過ぎない。それは社會的の制度であつて、人間生活が社會的になればなるほど固定されてゆく制度である。それは制度であるから、常に人間の生活段階に應じてそれぞれの異つた形をもつてゐた。故にある點からいへば、それはやはり人間生活に伴つて進化しつつあるのである。しかし現代に於けるほど、それが外的に硬化したことは先づなかつたといつていいであらう。結婚とはつまるところ、生殖作用の一部をなすので、それは元來純個人的なものである。生殖の目的は種族であるにはちがひないが、生殖の當事者にとつては、それはあくまでも個人的である。種族保存が生物の本能である限り、子を生むといふことは、實は種族の意志であつて、個人の意志でないとも見られる。しかしかかる抽象的な、超越的な意志はあるかないか分らない。もしあつたにしたところで、それは必ず個人を經て現れるものであるが故に、結局個人的といふことに歸着する。種の意志が個人の本能として現れると見てもいいであらう。しかも種の意志であることを知らないで、個は自分の子を生み、育ててゆく。さうしてそれはその個の主觀には、いかにも自分の意志で子を育てゐるやうに映ずるであらうが、社會的なり、種族的なりに客觀化して見るとやはり、結局種なり、社會なりのために子を育ててゐるのである。それについて全然無意識にその通り實行するのは生物一般のことで人間でも野蠻人などである。故に一般の生物は種を目標にして、しかも個的に生殖作用を行ふのである。人間の結婚もさうである。生活段階にいろいろ現れた一夫多妻制や、多夫一妻制や、團體婚や、さういふ結婚制度は、やはりその種のためになつてゐた。さうして今日では單に種といふよりは、社會といふ新しい單位がその目標となるのである。故に今日の一夫一婦制も結局今日の社會維持といふことに歸着する。

然らば今日の社會に最も適合してゐると考へられ、一夫一婦制が今日絶對的に行はれてゐるのは、最もいいことではないかといふかも知れない。實際それは種の維持からいつても一夫一婦が最もいい方法にちがひない。父母が子供の成長を守るのは、それより外にないかも知れないからである。

しかしながらそれはむしろ表面的であるといつていい。事實、一夫一婦制は理想としてはいいものである。(尤もその理想といつても後にいふやうに、ある限界の内部限りの問題である。)しかも多くの人はそれで滿足してゐるだらうか。否、主觀的な滿足、不滿足はどうでもいい。客觀的に社會事實としていへば、蓄妾や、姦通や、賣笑や、離婚や、その他の

事實がこの理想としての一夫一婦制を裏切つてゐる。この事實は一夫一婦制が表面あくまで正しいものとして、やや固定した道德觀や、宗教觀によつて聲援を與へられてゐると共に生殖といふ事實がしばしばそれを破壞してゐることを示してゐる。

　更に一夫一婦制の根據を心理的に考へて見ると、その根柢をなすものは感情である。男女が互に戀し合ふといふのは感情である。また嫉妬するのも感情である。さうしてこの感情が生殖作用に入つて來たのは、恐らくさう昔のことではないであらう。(尤も感情を生殖慾から派生したといへばいへるかも知れないが) 掠奪婚や、賣買婚時代にもあつたかも知れない。しかしそれはきはめて不充分であつたに違ひない。結婚制度が一夫一婦に近づくのは、男女が相互に感情を見出しあつてからである。さうしてもとより性交を特定の人間に獨占しようとする意志がその根柢になつてゐるにはちがひないが、かかる感情がなかつたならば一夫一婦の根據は定まるわけはない。結婚は社會的制度で、戀する男女の社會的認識である。

　この場合、感情といふものがいつも純個人的であることを知らなければならない。戀はもとより感情と結びついてゐる。戀が性慾から發してゐることはたしかであつても、その性慾のみで戀は成立しない。感情がそれを戀に變化させる。さうすると戀は盲目であつて、個人的なのである。

　一夫一婦制はその根據は正しいかも知れないが、それはあらゆる結婚者にすべてその相手に滿足し、相手を戀してゐる場合にのみ限られてゐる。然るに制度となつてきまつたものは、常に必らずさういふ事態を發生せしめない。戀は思案の外といふが如く、思惟や理性の上にある。制度は發生の當初こそその必要に應じてゐるが、固定するときはその必要以上にまで硬化する。そこで戀といふ一夫一婦的心理と、結婚といふ一夫一婦制が食ひちがつて來る。その食ひちがふはどこから來るか。いふまでもなく、社會的と個人的の相違からである。社會的にはどんな男女でもいいから、とに角一夫一婦で夫婦になつて子供さへ生めばいいのである。戀愛はその相手を選ぶ。雌雄淘汰は自然的かも知れないが、優生學との、人爲淘汰は人爲的である。鷄や、朝顏の改良をするには人爲淘汰もいいであらうが、相手が感情をもつてゐる人間では、それはちよつとあてはまらない。それでも社會的にはただの男と女との結合であればいいのである。それは統計の報告などがいい例である。統計は決して何の誰が何の誰と夫婦になつてゐるとはいはない。有配偶者幾名といふだけである。

　社會制度の結果は、その社會の構成にかかつてゐる。結婚

社會制度の一つである限り、社會組織によつて變化されることを免れない。さうして資本主義的社會では當然その色彩があり、共産主義的社會ではまた共産主義的になる。ところで資本主義が自由主義の結果であるとすれば、その起原はやはり個人解放に存してゐる。そこで現在の社會のすべてが個人主義的色彩をもつてゐることは當然である。これは個人的な戀愛觀に一つの力をそへることになる。そこで一夫一婦制もまたその理想として充分なものとなるのである。ところがこの個人主義的思想が結局固つて階級をつくるやうになると、個人はつひに階級の奴隷とならざるを得ない。そこで結婚も階級のうちに限られることは、むかしの階級制度と何のちがひもない。ただ階級の内容がちがふだけである。そこに個人の不滿足の一原因がある。さうしてその同じ原因から幾十の原因が出て來て、いよいよ結婚制度といふものを固定せしめる。さうして個人的感情は多く犧牲に供せられる、自由戀愛の主唱者や模倣者たちもその事實を忘れてゐる。

その結果は何であるか、感情的に合せぬものを、無理に合せしめて、單に社會的承認のみで滿足するやうになる。さうして個人的感情は之を他で滿足させる。ここに姦通や蓄妾やその他の事實が生ずるのである。(尤も事實は性慾が強すぎる結果から來ることもあるであらう、しかしここでは主として社會的に論じてゐるのである)さうして制度がいよいよ硬化して、事實はいよいよ放埒になるといふ結果が生ずる。

さういふ固い制度の下にあつては、自由に結婚したり、離婚したりすることは容易なことでない、そこには名譽があるとか、地位があるとか、さういふ附屬的關係があつて、更にその固化を强めてゐる。しかるに結婚といふ生殖作用の根本はやはり性慾に歸着する。性慾は恐らくショーペンハウエルの云ひ草でないが盲目的なものであらう。それは選擇もなければ感情もない。それはあらゆる社會的制度などを無視することが出來る。從つて制度のみがいかに固定しても、この性慾に變化がない限り性といふ事實が常にその制度を破るであらう。

一般に固定した制度を破壞する人は革命家である。しかも社會は之を反逆人であると見る。社會は最も保守的なもので、ことに制度、習慣に關して甚しい。故にこの破壞人は危險人物である。然るに危險人物は、多く精神に缺陷のある者である。社會の犯罪の多くはさういふ精神薄弱者や變質者によつてなされてゐる。故に革命家もまた精神の變質者の一人にちがひない。メービウスはニィチエやゲーテを研究してさういふ事實を擧げてゐるし、有名なロンブローゾにしても

さういふ證據を擧げてゐる。さうしてさういふ變質者は多くどこにひそんでゐるかといふと、それは藝術家や哲學者などの中に見出される、故に革命家とか藝術家とに、危險人物は多く藝術家とか哲學者とか詩人から出る。アメリカの何とかいふ學者が人間を分けて學者向き、事業家向き、詩人向きとにした。その內で詩人向きといふのは、いはゆるイデオ・エモーショナル型といふので、子供や、野蠻人や、精神薄弱者に多くある型である。實際詩人などは普通人以上に感情がするどくて、異常に感覺的でなければならないのかも知れない。

藝術といふものはそれ自身が個性的でなければならない。さうして藝術家といふものはより以上個性的である卽ち人並みはづれた人間である。アノルマルな人間である。それが精神的に非常にすぐれてゐるか、非常に劣つてゐるかなみはづれてゐるか、いづれにしても常人以外のものである。この個性的な、人間は結局個性的にしか活動することが出來ない。さうしてそれは將に性的生活に於てさうである。たださへ小說や詩は性的要素がなければ成立しない上に、それをその作者の經驗を以つてするから、その世界はいよいよ異常になる。之をあべこべにいへば藝術家とは精神薄弱者、性慾異常者であるかも知れない。もしそれが普通の社會的制度に依つて結婚すれば、その結末や知るべきであらう。社會的と個人的との衝突はとくに藝術家に多く見出される。

更にもう一つの見解がある。あらゆる人間の生活は、それの根柢に於てあくまで種の維持のためであるが故に、結局性的である。家とか、衣服とかいづれも性的起原をもつてゐる、それが性的範圍を脫していはゆる文化といふものに成り上つたのは、性からいへばあべこべに成り下つたのである。それは人間では頭腦の發達にもとづく、理性とか、理智とかは、やはり性的起原なのである。それは單に本能から出たもので、本能の代りをつとめるに過ぎない。

本來の職能がさうであるにもかかはらず、理智はそのうちますます發達して、現に今日見るが如く、それ自身の獨立した職分と領域をもつやうになつた。それは單に本能の代用のみでない。理智それ自身の世界をもつのである。これはもとより生活の發達から生ずるいはゆる文化現象に相應するものである。その二者の相互關係は、いづれが先きでいづれが後であるともいへない。むしろ相關的に連絡してゐるのであらう。いづれにしても今日の人間はかかる文化とかかる理智とにより、いろいろの世界を開いた。それは決して直接に性の世界と關係してゐない。さういふ世界は性の世界と離れれば離れるほどそれ自身の獨立を保つものと考へられる。科學がさうである。哲學がさうである。さうしてあらゆる一般の事

業の一切がまたさうである。さうしてその結果人間といふもののの價値をその方面にのみ認め、いはゆる人間的といふ名辭はその方につけるやうになつた。

ところが元來人間的といふことが最も分らないものである。學校の教師はさういふ意味で最も人間的で最も道德家であり、學者であり、最も性の世界から遠ざかつてゐるやうに考へられてゐる。然るにその教師が戀愛事件か何か、性に關する事件をひき起すと、社會は第一にそれを非難する。しかし一派の論者特に詩人などはそれを以つてそれが第一の人間的なことだと主張する。卽ちこの場合では最も性の世界に近いのが人間的なのである。この見解は實はどつちでもいいので、つまりさういふ事實は人間の今日の生活に性からはなれた世界の存することを證明し、同時にそれがある價値の意味で見られてゐることを證してゐる。故にさういふ世界にすぐれてゐる人は、性から遠かるのが第一の仕事である。さうしてその理智の働に沒頭するのである。ショーペンハウエルが生殖器と大腦とを正反對の兩極と考へたが、さういふ考へ方はたしかに存在し得る。故に哲學者や學者などは獨身者が多い。これは事實として生理的にさうなつてゐるのもあるし、また意識してさうしてゐるのもあるが、いづれにしても、性の世界以外の世界が人間にあつて重要な働をしてゐることは事實である。さうしてさつきから問題にしてゐる藝術家といふものも、實はさういふ人間の一種ともなるのである。

然るにさういふ生活は、人間としていへば決して好ましい狀態ではない。人間として望むことは、ただ幸福の生活である。幸福は決して知識の生活からは來ない。ストア派の學者は、セネカのやうな連中でも、結局人間の生活は幸福に存するといふが、その幸福はエピクロス派の快樂などとちがつて德の生活であると主張してゐる。しかし心理的にも生理的にも幸福といふのは性の生活に歸着するものに違ひない。生活の進行は或は理智の方へ行くかも知れないが、幸福感は常に下降的で、一足退くところにある。性から智に行くのが進步であるならば、學者の生活は苦しいもので、性の生活は幸福なものになるのである。

その故に普通人の普通の生活は結局ただの幸福を求めてゐるに過ぎない。戀愛生活はその幸福の頂上にある。それの客觀的意義は別として、主觀的には性の生活が第一に望まれるべきである。然るにもしも性の生活から遠ざかるのが進步であるとなし、すべての人間をその方へ向けようとするとき或は本來流動的な制度が固定したり、事實との矛盾が生じたりする。現に學校教育を强制する結果、多くの文明國では結婚期が遲れてゐる始末である。さうしてその裏面の種々な

性的事實が生ずるのである。さういふ固定した社會なり、制度なりを打ち破るのは何人であるといふと、それはもとより最も進歩しない、即ち、最も原始的な人間にちがひない。社會のすべての人が、内心は欲してゐて、實は制度に囚はれつきりになつてゐる時、さういふ原始人が、あらゆる制度を打ちやぶると、社會はその人を反逆人とするが、同時に英雄にまつり上げる。制度の上からその英雄を非難しなければならないくせに、内心はその行爲を賞讃する。

さういふ原始人は何であるか、それはきはめて發達せざる人間か、或は發達しすぎた人間である。即、さつきいつたやうに精神の多少異つた人間である。さうしてさういふ人間は藝術家である。さうなると、藝術家は普通人とちがつてゐるくせに、實は普通人のねがひを代辯して、自ら行つてゐるのである。精神の異常といつても、その上を強く描き出した結果に外ならない。個性的とはそのいひであり、同時に性の生活の個性的なのと相應ずるわけである。そこに藝術家の立場が生ずる。小供や、野蠻人がその欲望を勝手に充足させて、少しも社會的態度に出ないやうに、イデオ・エモーショナルな藝術家ははじめからその個人的態度を充分に發揮するのである。

さういふ點から觀察すると、革命家としての藝術家は、今度は反對に、個人的に見れば精神異常者にちがひないが、社會的機能としては、社會の進化乃至現存制度の破壞者として間接に次の社會を呼び起してゐる。その故に革命的でない藝術家は藝術家としての役目を果してゐないし、また事實として凡ゆる古來の大藝術家は殆ど全部革命家であつた。その意味で反社會人としての藝術家の活動は社會にも必要である。

そこで以上の論から宮地氏や三宅氏などの問題にかへるのであるが、これら諸氏の態度が果して以上述べたやうな革命的なものであるかどうか甚だ疑はしい。この上で最も小供らしく最も野蠻人らしかつたのは故岩野泡鳴である。泡鳴氏は日本の社會の上に何らかの跡を止めてゐる。しかし新聞紙だけを信ずれば、三宅氏の如きは完全に制度のままの結婚を認め同時に普通人としての離婚沙汰となつたものらしい。宮地氏の場合ではそれよりも多少自由戀愛的傾向があつたのかも知れないが、しかしやはり日本の制度としての結婚に落ちついたものらしい。しかし結婚や離婚などは、個人的に觀察すれば、個人個人の性慾に關係するので、さういふ要素を除いて、外界の事實からだけで斷ずることは不可能である。

もしも藝術家がかかる性質をもつてゐる以上、藝術家が破壞した後の生活は、その藝術家にとつては最も幸福な生活に違ひない。ストリンドベリの如く、不幸な人もあるにしても個人的に論ずれば、その人個人個人の性の問題になるので、社會的には論じられない。もしもかくして藝術家が常に革命家であるならば、婦人は安んじて藝術家を夫とすることが出來ないかも知れない。しかしその藝術家がその婦人と共に幸福に暮さうとするためにかかる革命をするものとすれば、その婦人は意を強くして可なりである。しかし藝術家がかくの如き態度に出るのは、むしろその本來の原人的な型によるためであるとすれば、その氣まぐれで又いつどう變るか知れない。さうすれば婦人の幸福はそこに破られることになる。普通人としての幸福はやはり、戀するものとの結婚に歸着しさうしてその結合はむしろ個人的よりも社會的である、永久的であり、人格的であるとすれば、本來個人的で瞬間的で、感情的な藝術家はつひに結婚することは出來ないであらう。さうしてもしもさういふ藝術家の見方が正しいとするならば、約束の社會の結婚觀は、更に社會組織の變化に伴つて、また新たなるものが生じて來なければならない。それは一口にいへば新しき團體主義のそれである。

藝術家と結婚の破壞

小牧近江

妻もしくは夫が、その夫もしくは妻をふり捨てるといふ行動は全く自由の行爲である。これを道德的立場から見ても、何等非難すべき點がない。今日のやうな社會組織に於て、特權階級が無政府主義の狀態の限りをつくし得る時代に於て、そもそも道德といふものの價値がどうであるか。われらはその存在すらも疑ふものである。であるから、日本のやうに結婚といふ純然たる男女關係の一私事を道德扱ひにし、それに根柢を置く國に於て、一たびその道德といふものの價値が疑はれ、または、全然その存在それすらも否定さるるやうになると、結婚それ自身の今までの解釋はその根柢から覆さるる

ことになり、それに對する反逆行爲に對しても道德上どうのかうのといふことは全く意味をなさないことになる。

それならば、今いつたことから割出せば、僕のいつたことは結婚卽野合といふ意味に解釋されるかも知れないが、僕は遺憾ながらそれに對して然りと答へざるを得ない。

そのことは、現在社會に於ける結婚といふものと家族といふものを、更にまた、家族といふものと社會國家といふものと結びつけて考へれば、僕の極めて率直にいつた意味に氣付かるる筈である。それはまた何故かといふと、現在の世の中は、誰も知つて居らるるやうに、私有財產制度の上に組立てられてゐるので、われわれの日常見る結婚の多くはことごとくその私有財產制度の枝葉であり、それの擁護でないものがあらうか。今日の多くの結婚は、たとへ、その中に愛とか文化?　とかいふ要素があるにもせよ、すべて私有財產繼承の道具でないものがあらうか。ここで僕に一言述べさしてもらひたい。それは、われらの眼差す以上の人たちの結婚は言ふまでもなく、日常痛ましい生活苦に追はれてゐる無產階級の人たちのそれでないことである。

といつて、僕はブルジョア階級の既婚者、または、これから結婚されようとする人たちに好んで無禮な言を吐かうとするものではないが、僕らブルジョア家庭に育つたものが不道德な制度そのものに一言の挨拶もなく、他人の行儀に對してやれ道德云々をいふ資格のないことを强くいひたいのである。僕は、またこの與へられたる機會に於て、新婦人協會の諸氏に一言呈したい。諸氏の熱心に主張さるる男女の同權、平等思想に對して、われらは同感である。しかし、諸氏が私有財產制そのものに對しても今少しく徹底的に切込まざる限り諸氏の獲るところは精神上の絕體同權と大部分の政治上及び小部分の法律上の同權しか出るに價しないであらう。母性と相續の關係は、女性をして私有財產制度の存續する限り永久に法律上の束縛の中に置くであらう、ことなどは社會上に於ける男女不同權の一例と言はねばならない。無產階級人が新らしき秩序をつくることを目的とする『明日の運動』に無產者とともに進むことによつてのみ、新らしき社會、新らしき自由と、平等を完全に獲らるるのであつて、それ以外にない。

ここに一個の妖怪が徘徊する。その妖怪を藝術家と呼ぶ。極めて我儘な、外面と內面とはとかく矛盾の多い魔物である。藝術家の本心は——決して全部といふのではないが——案外ブルジョア的である。ブルジョア藝術家の間に氣紛なプロレタリア思想の持主のあると同時に、プロレタリア藝術家の間

にも本質的にもしくは、模倣的にブルジョア良心の持主があり得る。多くり受けることがあり得る。そして、そのブルジョア藝術家も、プロレタリア藝術家も、その魔性に於ては驚くべき共通點をもつてゐるのである。これらの人々は藝術家であれば、藝術家であるがために、ちやうどブルジョアがプロレタリアに強要してゐるやうに、藝術家であるがための特權を要求、もしくは吹聽し得るものときめ込んでゐるのである。もし、これが離婚問題であるとすれば、女にとつてさぞかし迷惑なことであるだらうと同時に、人騒がせなことだ。こんな事件で獲るところのものは新聞雜誌と―おつと忘れた原稿を書く人のみだらう。離婚といふものが許されてない時代若くは許されてない國に於てこそ、かういつた問題は社會問題または法律上の問題としてそれは多少の興味に價すだらうが、今のところでは一切の結婚は人生の最大不幸であるといふことを裏書する廣告に過ぎない。と同時に、それに對する第二の感想は、それが誰れにもせよ、破綻に對する氣の毒な感じと、さういふ結婚をしたことに就いて當事者間に明のなかつたことの數へである。われわれの良心は、かりそめにも、さういつた悩みをつづけた人、またはつづけけつつある人に對して批判を許さぬものであるといふのが僕の宮地嘉六氏や三宅周太郎氏のお氣の毒な事件を新聞で見た時の氣持であつた。ところが、それは多分記者の揑造であつたらう、宮地三宅の兩氏はその離婚の理由に藝術家の氣分に合はぬとか、趣味が合はぬとか、また藝術家に對する理解がないとかいふ口吻がちらりほらり、覗はれて、それらがあまり僕らにいい印象を與へなかつた。そして、肝心の離婚そのものよりも藝術家であるとかないとかいふブルジョア良心と何等異のないものそれが、僕にとつて不快を與へるに充分であつた。おそらく記者の筆があの時、氣狂つてたのだらう。さうであれば幸福である。

さうしてゐるうちに、その後になつて、更らに社交界を騷がすやうな事件が起きた。こんどの問題の主人公は女で、藝術家で、その上こん度は藝術家として、女の人格が問題の中心となつてゐる。三浦環女史と全然異つた國の、しかも同じ肉聲と脂肪分と――の持主をＶＷＸ女史と假定する。そして、その女が法律上の夫と、家庭のある身でありながら、同じく藝術家であるといふフランケチなる者と肉體關係を結ぶと假定する。藝術家は藝術家同士が相互にその藝術を理解せば敢て姦通を犯すことを許されてゐるかどうか。僕はここに辯明して置くが、これは環女史事件をいつてゐるのではない。三浦環女史たるものが、フランケッチのやうな者の藝術そのものにほれ込むやうなことはまづ無からう。もしさうであるとすれば女史の眞價はフランケッチのそれに劣らぬ低級なものであることを自ら證明することになるから……とにかく、ＶＷＸ女史は藝術上の愛から生れた神聖な戀愛として夫を

捨て、フランケッチと關係する。それを社會はどう見ればいいか。社會はそんなことを見る必要がないのである。そして、不道德の社會は、それに對して道德上どうのかうのといふ資格が更らにないのである。VWX女史に對して發言し得るものは彼女の夫である。夫が法律上の權能で、彼女を離婚するとしまいと、また、性慾病者として之を放任しようがしまいが、當人の意志次第で勝手で御座る。要するにわれらに取つての問題は人格といふことである。しかも、その人格は現在の社會に對する人格でも、また、世間に對する人格でも、更にまた、藝術家の人格でもない。新らしい社會が生れるまで藝術家そのものも、また、現存社會そのものが問題ではなくて僕らに取つて、自己にのみ對する人格さへあればそれで結構である。世間のため自己辯解をなすことなどの必要は更らにない。その意味に於て、藝術家である人も藝術家でない人もそこには區別のあらう筈はない。僕らの最もおそるゝものは無節制な戀愛といふことである。

ブルジョア社會の斷末魔に於て、一方の旗頭三浦環女史が他の一方の旗頭田中純氏と兩雄相結ばうとどうとそれは問題でない。たゞ、われわれの目擊するところのものは、不道德な根柢の上に制定した現在の結婚制度は如何にいはゆる不道德な行爲でめちやくちやに破壞されつつあるかといふ現實の指摘である。

しからば、われらの理想とする社會に於ける結婚はどんなものか。その際結婚制度は存在の必要があるだらうか。われら本來の希望は假令それが、如何に進歩した法律であるにもせよ、結婚に對しては社會國家の一切の干渉を排する。男女關係の一私事である結婚には如何なる社會と雖も之に干渉する權利がない。まして、法律が人間の自由意志を結婚のために結びつけるといふやうなことは全く意義をなさない。われわれが常識に判斷しても、法律が人間を結婚させるといふことは有り得ないのである。しかし、今の世が資本主義から共產主義へ急進するやうな場合があつたとしてもまた、その社會では經濟組織が如何に急變してゐても、舊習な家族思想や封建的な傳統といふものが無產階級の一般から脫け切らない間、當分無產階級の社會に當てはまるやうな婚姻法が制定されなければならないだらうとを認める。現に共產ロシアに施行されてゐる一九一八年一月卅日の婚姻法などはその意味に於て過渡期に於けるものとしては理想的なものだらう。これによつて見ても、女子の國有とか家庭の破壞とかいふとは如何にブルジョア一流の虛構的宣傳であるとが解るであらう。飜つて日本の現狀を見よ。私有財產制度の國に於ける女子の境遇は全く男子の私有のやうなものではないか。その上藝術家に限らず一般の野蠻である筈のロシアですら自由意志による一夫一婦制であるのに、文明國の日本はまたどうしたのだらう。悲慘なる離婚は悲慘なる結婚成立そのものから禍の第一歩をなしてゐると言はざるを得ない。そして、僕らは道德人格一切、今の社會とは沒交涉であることを記憶しよう。

藝術か愛か

江口渙

「藝術か愛か」提出されたこの命題に解答を與へる前に、私は私の都合上豫めその內容を限定して置きたい。つまり藝術家の個人的生活に於いて、藝術の創作が重いか戀愛が重いかと云ふ意味に。さうしないと問題があまりに漠然としすぎるからだ。

厨川白村氏は本誌の前號の「戀愛雜感」の中で「性慾が戀愛となり、また廣く人類愛となり、道德ともなる關係は動力が電氣や熱に變化するのに似てゐる。本質的に見れば根原は同じだ」と云はれた。それはたしかにその通りだ。唯、性慾が戀愛となるには、是非とも生命の本質の微妙なる濾過作用を經なければならない。從つて個人の生命の本質が深く强く純であればあるほど、その戀愛も深く强く純なものとなるのだ。つまり戀愛の價値の內容は凡て個人の生命の本質の微妙にして高貴な、濾過作用の程度如何に依つて決定する。

私は藝術と性慾との關係をも、亦、性慾や戀愛や人類愛や乃至は道德との關係と同じやうなものだと見てゐる。本質的に見れば根原は矢張同じだ。唯、性慾が藝術となるには矢張是非とも生命の本質の濾過作用を經なければならないと同時に　もう一つ藝術的天分と云ふ特殊な濾過作用をも經なければならない。そして、藝術の價値の內容も、矢張、この二つの微妙にして高貴なる濾過作用の程度如何に依つて決定するのは云ふまでもない。

小鳥が美しい歌を唄ひ、花が綺麗な色を染めこまやかな薫を發するのも、みな生殖のためだと自然科學者は云ふ。たしかにその通りに違ひない。然し、同時にその微妙にして高貴

な歌や色や薫は、矢張、彼等の無意識的な或は有意識的な藝術的創造だと云ふ事が出來る。事實、それ等の歌や色や薫は吾々人類の前に厳然として立派な藝術的價値を主張する事が出來るからだ。

前に云つた通り、戀愛と藝術とは、本質的に見れば同じ性慾と云ふ性的作用の上に、遠い遠い源をもつてゐる。その點に於いて兩者に少しの差異はない。

同時に戀愛と藝術とは、それが高貴なものであればあるほど、ともに、人間の生命の本質的な迸出である。一つの高貴な世界、生命に充ちた世界の創造である。その點に於いても矢張、兩者に少しの差異がない。

唯、人間の心的過程を辿つて行けば、同じく生命の本質的な迸出であつても、戀愛には種の保存と云ふ目的が無意識的に含まれて居るのに對し、藝術には自己保存と云ふ目的が、矢張、無意識的に含まれてゐる。

その點に於いて、兩者には甚しい差異があると云はなければならない。

かくの如く、一方、性慾に遠い源を曳いてゐると云ふ點に於いて全然本質を同うし、生命の本質の高貴に迸出、生命に充ちた一つの世界と云ふ點に於いて、その存在を同じくしながら、他方に於いては、種の保存と、自己保存と云ふ全然異る目的を持つてゐる戀愛と藝術とが、藝術的創造とか、一人の藝術家の心の上に果して同時的に存在し得るか。これが第一に問題だ。

極々厳密に解釋すれば、藝術的創造と戀愛とは、一人の藝術家の心の上に、決して同時的に存在し得ない。何故なら小說家が萬年筆を走らせ、畫家がカンバスに向ひ、音樂家がステージに立つ時、ほんとう云へば自己の藝術の創造以外、そこには髪一條のすきもない筈だから。

同時にその同じ藝術家が、生命をもつて愛するその愛人と抱擁し接吻する時、そこには愛人と愛人との間に生み出された高貴な戀愛の世界以外の何物もない。風さへ通る隙もない。だからその世界の中では、藝術的創造なぞは到底存在し得可き筈はない。

然しかう云ふ事は、はつきり云へる。一人の藝術家が、一方に戀愛と云ふ大きな世界を持ちながら、他方に藝術的創作

と云ふ大な仕事に從事し得る事はたしかに可能だ。そして、その戀愛の世界が高貴なものであればあるほど、又、藝術家が自己の藝術に忠實であればあるほど、その藝術家はその戀愛からうける高貴なる感銘、生命の本質への嚴肅なる浸透によつて、自己の藝術をより高貴ならしめ、より嚴肅ならしめる事も、亦可能だ。

又、その藝術家が愛人を愛する事が、強く深く美しくあればあるほど、藝術に依つて養つた生命の本質への精進に依つて、その戀愛の世界を、より強め、より深め、より美しくする事も亦可能だ。

かくて自己の藝術への忠誠が、やがては自己の愛人への忠誠となり、又、自己の愛人への忠誠が、やがては自己の藝術への忠誠となり、それが窮極に於いて自己の生命の本質への忠誠となると同時に、又愛人の生命の本質への忠誠となる事が出來るのだ。

唯、藝術家の生活の上に戀愛が起つて來た場合、時間的に云へば、無論、戀愛の世界に沒頭してゐる時間の方が、藝術の創作に沒頭してゐる時間よりは長いかもしれない。だからと云つてその藝術家は戀愛のために藝術をおろそかにしてゐるとは云へまい。何となれば戀愛はその性質として常住座臥心の上に置く事は出來るが、藝術の創作はさう不絶に持續し得るものではないからだ。

ここまでは藝術家の生活に於ける、藝術と戀愛との相互的關係を述べて來たばかりだ。これからいよいよ、この論文の重心である、藝術か、戀愛か、と云ふ問題に入らう。

若しその藝術家が何等かの境遇からの必要上藝術か、戀愛か、そのどつちかを捨てなければならない破目に陷つたら如何する。これは一寸一と口では答へ難い難問題だ。

他人の場合は後廻しにして、先づ私の場合を想像しよう、何故なら他人の場合を想像するより、自分の場合について考へた方が答へ易くもあり、又、手取り早くもあるからだ。今私に生命がけで愛し合ふ愛人が出來たとする。そして、その愛人が何等かの止むを得ざる事情で、若し自分をほんとうに愛するなら、どうかあなたの藝術を捨ててくれろと、私に迫つたとする。さうしたら私は心をこめて彼女にかう云ふだらう。

『若しお前が俺を生命がけで愛するなら、又、俺がお前を生命がけで愛してゐる事を信じるなら、どうかお前の何物を捨てても俺の藝術を愛してくれ、そして、その創作を許

してくれ。何故なら俺の藝術は決して俺一人だけが生んだ子供ではない。お前と俺との二人が生んだ子供なのだ。ほんとうに俺を愛するなら、又ほんとうにお前自身を愛するなら、同時にそれと同じ生命がけでもつて、二人の間に出來た子供である俺の藝術をも愛してくれ。生命がけで愛する二人の愛に依つて受胎され、生み出され、育てられたのが、俺の藝術だ。生み出したのはおれの手だが、生み出さしめたのは二人の生命なのだから」

これだけ云つて尙云ふ事をきかないなら、私は止むなく愛人と別れるだらう。何故ならその愛人は口でこそ生命がけで私を愛すると云ひながら、實は愛してゐないのだから。そして、結果に於いては私が彼女を捨てた事にはなるが、動機に於いては彼女が私を捨てたわけなのだから。

その上に彼女は私をして私と彼女との二人の生命を愛に捨てさせる事になるのだから。その位なら、私は彼女を捨てて私の生命と私の藝術を拾うであらう。

唯、何かの都合で二人が止むなく心中でもしなければならない破目に落ちたら、それは自ら又別問題だが。

若し私の愛人が同じく藝術家であるか、又は藝術家としての好い素質を持つてゐるとする。そして、私と彼女との生命がけの愛に依つて、その萠芽がぐんぐん育つて好い藝術家になつたとする。例へばアルトの唱手として。

その場合、もし何等かの止むなき事情で、彼女の藝術のために、私の藝術を捨てなければならない破目に陷つたとしたら、私はどうすれば好いのか。その場合は前の場合とは自ら違つて來る。若し彼女の藝術が私の藝術よりたしかに一層高貴である、又、さうする事に依つてますます高貴になる事が明かな場合、私は喜んで彼女の藝術のために私の藝術を捨てるであらう。そして、彼女の藝術の中へ私の生命を溶かし込ます事に依つて、新しき私の生命を見出すであらう。

これは三浦環氏と三浦醫學士との間に於ける現狀を見て一寸勝手な想像を自分の上に加へたまでだ。但し、環氏を想像の對象として考へて見たわけでは決してない。何故なら私はどう云ふものか環氏が變にきらひだ。聲はいくらでも愛する事が出來ても、環氏の人間を到底愛する氣なんかになれるものか。

三浦環氏と三浦醫學士の間は、一方が藝術家で一方が科學者だけに、一寸問題は困難だらう。

然し、私から見れば三浦環氏も三浦醫學士もどつちも決し

て生命がけで愛し合つてゐるものとは受け取れない。若し、二人がほんとうに愛し合つてゐるならば、そして、三浦醫學士が環氏を、愛する如くその藝術をも愛してゐるならば、醫學士は環氏の藝術と同時にその生命をますます高貴ならしめるために、片時もはなれず一緒に世界を廻らなければならない筈だから。

何と云つても現在の狀態では、三浦醫學士の科學よりも環氏の藝術の方が、大分價値が上だらうから。

例へば島村抱月氏を見よ。愛する松井須磨子のために、大學敎授として、又、批評家としての位置を捨ててまでも、その藝術を育ててやつたではないか。抱月氏は須磨子の藝術をより大きく生かす事に依つて、日本演劇史の上に自分の生命をも生かしたのだ。だから生命で愛し愛された抱月氏が死ぬと、須磨子がああして後を追つたのも無理ではない。或は須磨子が先へ死んでも、抱月氏は矢張あんな風に後を追つたかもしれない。

だが三浦醫學士が今突然死んだところで、環氏は果してそのために首をくくるだらうか。環氏があの洋裝をしてぶら下つた處を想像すると一寸愉快ではあるが。

だが、あんな問題も、結局、藝術の職業化と云ふ事に根本の原因がある。そして、近代の藝術は職業化した事に依つてたしかに墮落した。

萬葉時代の歌を見よ。如何にその哀切なる戀愛を歌はずにゐられなくつて歌つた事か。あんなのこそほんとうの生命の止むに止まれぬ流露である。(一一・一〇・八)

藝術の恐しさを感ず

加藤一夫

斯うした事だけが思ひ出される。

僕等が結婚した時は、僕が藝術によつて生活しようと決心

した時代で、僕には文名もなく所謂署名もなかつた。僕はた。「科學と文藝」と云ふ雜誌を發行し、飜譯によつて、やつと食つて居た。その他では、ほんの少しばかり、僕の感想や思想的な論文ばかりが、二三の文藝雜誌で發表されるばかりだつた。

僕等は貧乏だつた。

貧乏だけならいゝ。食つて生きて行くと云ふ事だけで滿足が出來ればよかつた。しかしそんな事だけで滿足が出來ればよかつた。しかしそんな事で滿足の出來ないのは云ふまでもなかつた。僕には藝術的創作慾があつた。人生の眞を探求しそれを實現しようとする慾望をもつて居た。從つて讀書もし靜に考へる事もしなければならなかつた。即ち

一方では食つて生きて行くための仕事が必要だつた。そのために飜譯をしなければならなかつた。

他方では、讀書、研究、創作をしなければならなかつた。だから隨分忙はしい生活であつた。而も、それが中々容易に思ひ通りには行かなかつた。殊に結婚をしてからは、生活が複雜になるし、妻は病身で始終寢てばかり居る。子供が出來ると、その子がまた病身で、むづかり屋で、僕の仕事は、阻碍される一方だつた。

そこで、僕は苛々し出した。

生活と藝術との二つの重荷を肩に負うて、常に心ばかりがあせつた。さう云ふ場合にはよく、結婚を悔いた事もあつた。そして妻にやさしい顏も見せず、やさしい言葉もかけない事が度々であつた。

かうした事が、妻の心に深い缺陷を刻み込んだ事は明白であつた。人一倍愛や戀に憧れて居た妻が、結婚をこんなものだとは思つて居なかつたので、失望したのに相違ない。

僕は勿論、妻を愛して居た。恐らく妻が僕を愛した以上に愛して居た。一ときでも妻と別れて居るのが寂寥でたまらぬ位愛して居た。しかしかうした生活や藝術が、それを十分に示して見せる事を出來なくさせた。またわざとそんな事を示さなくとも、妻は十分にそれを承知し諒解して居る事だと確く信じて居た。ついほんの近頃まで、さう信じて疑つては居なかつた。ところが、妻の方ではさうでなかつた。彼女は僕に愛がないのだと考へたのだ。そして常に寂寥を感じて居たのだ。そして彼女は遂に、その缺陷を他の何かによつて充さうとする樣になつたのだ。

かくの如くにして藝術は愛の破綻を生んだのであらうか。一面から云へばさうも云へるだらう。

しかし僕はさうは云ひ度くない。

藝術が愛の破綻を生んだのではなく、生活が、貧乏が、社

會制度がかうした結果を生んだのだとしか思へない。

もし僕が貧乏でなかつたなら、そんなに苛々した氣持ちにはならなかつたらう。僕は十分、妻の要求するものを與へ得たであらう。僕の愛は枉められず、素直に、成長して行つたらう。從つて、妻も、愛の前に瞽しなかつたらう。

平常の貧乏生活から社會制度を呪ふのと同じ程度に、否、もつと痛烈に、僕は今度の事から社會制度を呪はないでは居られなかつた。

僕が今負うて居る疵は餘りに生々しい。

この疵をつゝかれることは餘りに苦るしい。僕は、與へられた問題にふれた節としては、たゞこれ丈けの事しか云ひ得ない。

僕等の事件はしかし、何等決定的な解決を見て居るのではない。だから何も決定的なことは云はれない。

しかし今度のことは、決して愛の破綻ではない。何となれば、今度の事によつて、更めて僕等は、僕等の愛の深さ大さ眞實さを自覺したからである。僕達は互に、自分及び相手の愛を信じる事が出來た。そして素直な打碎かれた心で、此の不幸な事件を靜に忍ぶことが出來るやうになつた。

かうしたことは他人にはわからない。だからこんな事を云ふのは野暮であるかも知れない。

たゞ、僕が何等の苦痛なしにこんな事が云へるのだとは思つて貰ひ度くない。僕の此の苦惱、此の寂寥、誰がこれを分ち得ようぞ。

世間では僕の思想が、かうした破綻を生んだのだと思つてるものも多い樣だ。或はさうかも知れない。しかし、たとひ僕の思想がそれを助けたとしても、思想がかうした結果を生んだのでない事はたしかだ。

妻は最初何等の思想も持たなかつた。けれど段々と僕の思想に薰染されて來た事は事實だ。ことに、今年になつて僕が書いた小說『虛無』や『泥濘』やが、どんなに彼女に影響したか知れないと僕は觀察して居る。僕は藝術の恐ろしさを感じる。

だが、僕は今、これ以上何も云へない。



婦人生理學講座

（二）

醫學博士

永井潜

第一次性徵・第二次性徵・第三次性徵

前段、性別の生物學的意義を尋ねて、吾等は、生殖は生命の焰を死の風から防いで、永遠に消ゆることなからしむべき障壁であり、千古を貫く生活の流の湧き出づる源泉であること並びに此の大切なる生殖作用を體現するに當りて、生物が高等となるに從ひ、生殖細胞に二樣の區別を生じ、其の合一によつて、始めて完全に自己を若返らしむること。而して又た其の二樣の生殖細胞即ち精蟲及び卵は、下級の生物では、同一個體内に生ずるが、高級に立てるものになると、其の各が別々の個體内に造られて、斯くて始めて嚴格なる意味に於ける兩性の區別が現はれることを明かにし得たのである。

膣と云ふ殿堂に齋き祭られて居る御本尊たる生殖細胞は、生殖腺と稱せらるゝ厨子の中に護られて居る。生殖腺の中、其細胞から精蟲が出來るものが、男性生殖腺即ち睾丸であり、卵が出來るものが、女性生殖腺即ち卵巣である。して見ると、此の生殖腺の相違、即ち睾丸であるか卵巣であるかが、性別の根本を爲すべきもので之に第一次性徵若くは主要性徵なる名を與へる。而かも雌雄男女を比較して見ると、其の差別は單に生殖腺のみに止まらないで、他に幾多の相違を擧けることが出來る。併し、凡て是等の差別は、主要性徵に附帶して起つたものであるから、之れを附帶性徵と云ふのである。其の中、或るものは直接生殖腺と聯關して生殖作用に與かるもので、精囊とか、輸精管とか、喇叭管とか、子宮とか、膣とか、其の他兩性の外陰部等は之に屬する。然るに他のものは、直接には生殖作用に關係することなきもので、例へば人間では骨格、筋肉、皮膚及び其の附屬物たる毛髮や乳房等に於て見らるゝ男女の差別の如き、之れに數ふべきものである。而して之を總稱して第二次性徵と云ふのである。第二次性徵は直接生殖作用に與からないが、併し間接には兩性の相思牽引の上に大なる影響を及ぼすもので、隨つて生殖に關して大なる意味を有するものである。

第二次性徵は、男女に於て可なり著しい差別を示すものであるが、是れ程目立たないで、而かも兩性に於て見遁すべからざる相違を示すものがある。兩性の研究で有名なハブロック・エリスは、之れに第三次性徵なる名稱を附けた。例へば新陳代謝に直接の關係を有せる血液成分の差別や、呼吸運動の型式の相違や、其の他一般新陳代謝に於ける特色や、病氣に罹ることの違ひや、更に又神經系統に於ける微妙なる機能上の相違や、凡て是れ等男女に於ける生理的乃至心理的の差別は之れに數ふべきものである。

此の論歩を今一歩進めて行くと、男女に於ける上述の生理的乃至心理的差別が根柢となつて、個人生活乃至社會生活上、男女によつて甚だしい相異が起つて來る場合、之を第四次性徵と云つて差支がない。即ち男女の思考、趣味、習慣、服裝等の差別は、第四次性徵である。而して第一次第二次第三次性徵が、專ら自然的生理的先天的であるに反して、第四次性徵は專ら超自然的、心理的、後天的であり、隨つて精神生活の最も旺盛なる人類に於てのみ見らるゝのは當然の歸結である。一般に云へば生活體が高等となり生活が複雜となるにつれて、第三次乃至第四次性徵が際立つて來る。

斯く雌雄男女を標徵すべき差別は、幾段にも分つことが出來るが、併し上にも述べた樣に、性別の起原は、久遠の生命を得んが爲の手段たる生殖作用を完全に行はんとするに在る

のであるから、第一次性徴即ち主要性徴が、あらゆる性徴の根原をなすもので、第二次、第三次、第四次の附帶性徴は、皆之によつて喚び起さるゝのである。語を換へて言へば、男をして男たらしむる最後の根原は睾丸であり、女をして女らしさの讃美を恣にせしむるのは、すべて卵巢の賜である。此のことは、現代生物學によつて正さに肯定せられた處であり、而して又、あらゆる兩性問題に正當なる解決を與ふべき最後の鎖鑰である。

男女の心身の差別の發露する有様を見ると、胎内生活の時期は勿論のこと、幼少なる年齢期には、性の差別は極めて微弱であるが、年を追ふに從つて、漸く夫れが明瞭となり、一定の年齢即ち所謂「年頃」に達すると、男らしさ女らしさが其高潮に達する。而して其の時こそ、實に是れ迄未發の狀態にあつた生殖腺の蕾が、立派に咲き揃うたときである。更に又老年期に向つて、生殖腺の花が凋落するにつれて、一旦現はれた性の差別は、再び不明瞭となつて、花恥かしかりし新郎新婦も、何れを夫れと分ち難き尉と姥とになるのを見ても生殖腺の潮の進退につれて、毎も性徴の舟が進退して居ることを明かにすることが出來る。

更に又た、主要性徴が附帶性徴を喚び起す根原であると云ふ考は、去勢に關して見られたる幾多の事實によつて裏書された。元來去勢たるものは、人間が、動物や、加之人間自己の上に加へた最も古い手術であつた。蓋し太古人類の祖先が、獵者の生活に一歩を進めて、野獸を馴らして之を自分の思ふが儘に利用すべく牧者の生活を始めた時に、雄よりも雌の方が柔順であり、且つ肉も亦美味である所から、人間は、何時しか雄を變じて雌となしたいと云ふ冀望から、雄にのみあつて雌にない睾丸を切り取つて、偶然にも成功を喜んだものと見える。又人間自身に去勢の手術を施こすに至つた動機を考ふるに、二つある。其の一は宗敎的信念であり、他の一は多妻主義であつた。蓋し最も神祕なる生殖の作用に、直接關係せる生殖器其の物を、神祕なるものとなして、之を宗敎的に崇拜するに至るのは、自然の勢であつて、土俗學上世界到る所に見らるゝ生殖器拜祈の慣習は、斯る立場から見て頗る興味を唆るのである。隨つて又、斯の神聖なる生殖器に手術を加へることは、神に奉仕することの最高の標徴であり又た天國に入るべき最善の道であると云ふ様な信仰を懷くに至るのであつて、現に露國の「スコプツエン」及びルーマニアの「リポワーネル」の如きは、斯る信仰から、男子に去勢を實行して居る。又た歐羅巴では、中世紀に於て、寺院が讃美歌の歌ひ手として、美聲の男子を要求した結果、去勢が實行せられた。多少動機が異なつては居るが、矢張宗敎に關聯

して居る。次に多妻主義と去勢とは離るべからざる關係を保つもので、王侯貴族の後房に奉仕する男子をして、危險なからしむる爲には、此の方法によるの外はない。去勢された男子のことを「ユーヌヘン」と云ふのは、言語學的に之のことを立證して居る。「ユーヌヘン」とは、寢臺の番人と云ふ意味である。そこで埃及小亞細亞支那等の古文明國に於て之れが實行せられたのは敢て怪むに足りない。土耳斯では、今猶ほ貴族、富豪の子女が婚嫁する時、其の嫁入道具の一として、去勢された男子が追隨する、是れ等の男子は、無慘なる人買の手によつて容赦なく製造せられ、販賣せられて居るのである。

斯樣な關係から、人間でも、動物でも、去勢は專ら雄性に於て行はれ來たのである。今生殖腺の働がまだ目醒めて居ないで、隨て性の特色が發現して居ない幼少時に於て、去勢が行はれると、年月を重ねても、性の特徵が現はれて來ない。然るに之れに生殖腺を移殖すると、後れ馳せながら其の性徵が立派に現はれて來る。加之、場合によつては、敢て生殖腺其の物を移植せずとも、單に其の中に存する有效成分を含める生殖腺の「エキス」を注射した丈けで、其の效果を擧げることが出來る。

是れ等の問題に關して、最も興味ある研究成績が、夫の若返り法で有名なスタイナハ氏によつて報告せられて居る。スタイナハ氏は、生後僅かに三週間を經た幼少なるモルモットを取り、雄には其の睾丸を切除して、其の代りに卵巢を植ゑ雌には卵巢を取り去つて、其の後に睾丸を移植して、成長後如何なる狀態が現はるかを見た所が、前者は、本來雄として生れたにも關らず、體の大さ、毛並、乳房、外陰部等が、悉く雌の樣になり、加之、心の働き迄も雌性化して、雄から追ひ廻はされたり、或は自分の大きくなつた乳房を幼兒に含ませて之を愛育することを見た。之に反して、後者は、元來雌たるべかりしものが、卵巢を取つた後に睾丸を植ゑ附けられた爲に、心身共に雄性化して、乳房子宮等は發達せずして却つて體重、身長、毛並等も普通の雄と選ぶ所がなく、又た雌に對して慾望が著しく旺盛となることが見られた。

男子にして幼少時に去勢された「ユーヌヘン」や、或は先天的に睾丸の發育不完全なる男子即ち「ユーヌヒヨイド」を見るに、成長しても、男らしい特徵が現はれないで、男とも女とも見分け難い樣な狀態を呈する。即ち骨格が優しく、細長く出來、皮下には脂肪が餘計溜つて、丸味を有つて所謂曲線美を呈し、腰部が大きく、頭を除くの外、毛髮が少なく、鬚髭がなく、喉頭が發達しない爲、聲帶が細く小さくて、よく振動するから、音聲の調子が高く、筋力が弱く、精神的には感情に走り易く、且つ性慾が缺如して無勢力となる。
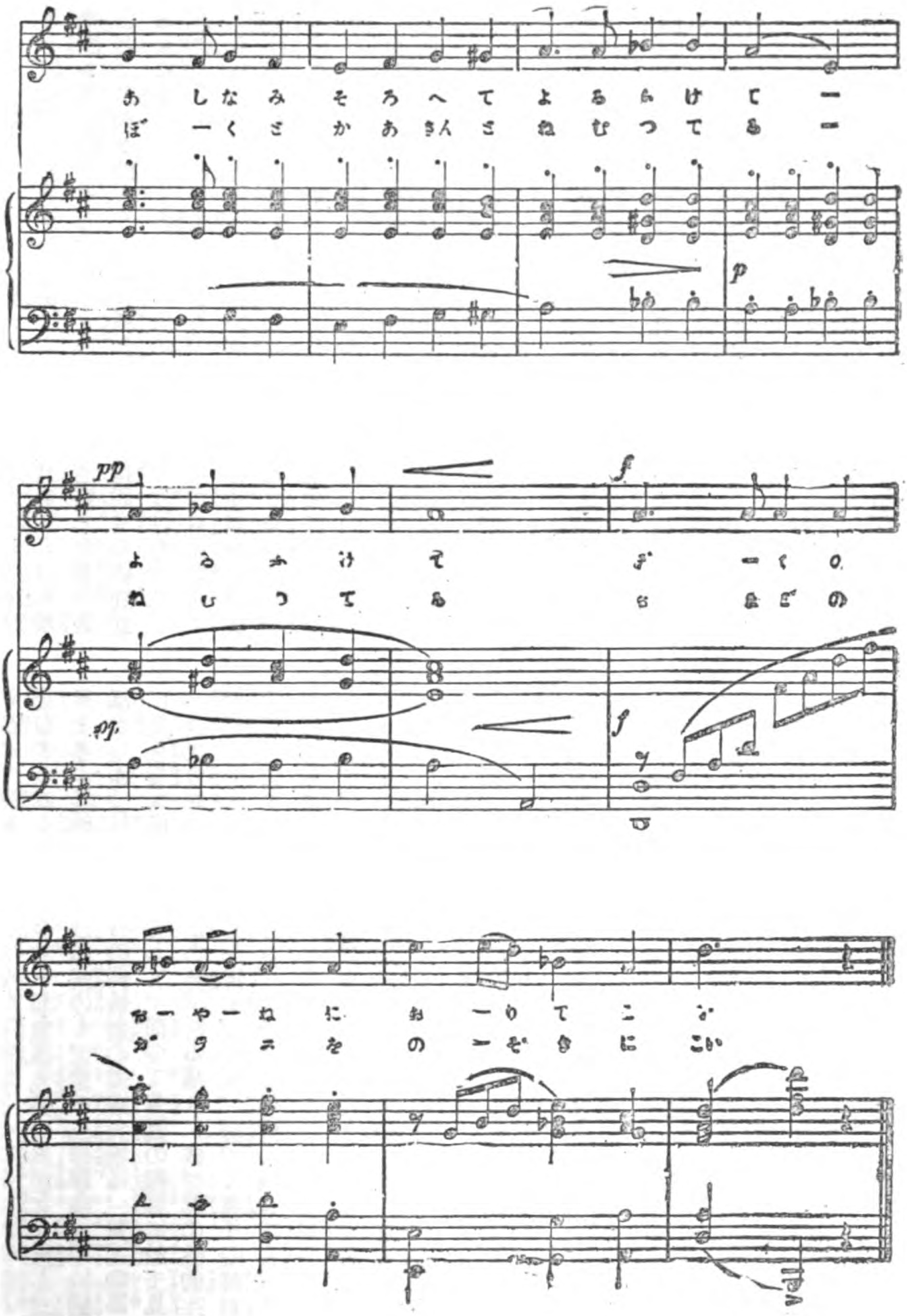
又去勢者は、年齡若くして而かも皮膚に皺が寄つたり、顏附きがませたりする。是れ身體の新陳代謝が一般に衰へた兆である。其の他記憶力が減し、意氣銷沈して動もすれば憂鬱になつたりする。即ち或る程度迄老衰の現症と似通うた現象が起つて來る。玆に於てか、老衰するから生殖腺が衰へると

云ふよりも、寧ろ生殖腺の機能が衰へるから老衰が起るものとの考を起して、何等かの方法によつて、一旦老衰した生殖線り機能を再び恢復せしむることによつて、老衰した者を若返すことが出來るだらうと云ふ考から、夫れに關する研究が行はるゝに至つたのであつて、夫の、近時非常な注意を惹いたスタイナハ氏若返り法の如きも、全く此の考から出立して攻究せられた一新法に外ならない。併し、單に生殖腺の機能障碍丈けが、果して老衰の原因たり得べき者なりや否やは、大に考慮を要する問題であるし、又た老衰と生殖腺の機能減弱とは、何れが原因であり、何れが結果であるやの問題も、輕々に速斷する譯には行かぬのであるから、此の大切なる問題は、今後十分の研究を積んだ後でなければ、其の眞價は明かでないのである。隨つて今直ちに此の法を人體に試むるが如きは早計と云はなければならない。併し又上に述べた樣な理由があるのであるから、一概に之を否定するのは當を得たものではない。兎に角、若返り法の批判の問題は暫く論外として、少なくとも睾丸の去勢によつて起つた心身の變化が、睾丸を移植することによつて恢復することは、人間に於ても亦、動物の實驗成績とよく一致して居る場合がある。即ち男性的第二次性徵が、睾丸移植の結果として發露したり、就中性慾生活の恢復は、頗る顯著なるものがある。

特に興味あることは、上述の學理を根據とせる同性愛なる變態性慾に關する治療である。已に述べたやうに、睾丸中には、男をして男たらしむべき心身の性狀を喚び起すべき成分があり、卵巣内には、女をして女たらしむるに大切なる機能を有する或る物質がありとしたならば、男が女を愛し、女が男を慕ふ異性愛を喚び起すのも、全く生殖腺の働に歸せねばならぬ。然るに稀有の例外として睾丸内に、普通の睾丸内に見らるゝ成分がなくして、却つて普通の卵巣に於て見らるべき成分があることがある。斯る場合には、其の性的生活は普通の男子の如く女子を愛せずして、却つて男子を好む樣な變態性慾に陷るのである。女子の同性愛の場合でも其の關係は同樣である。

そこで、若し此の推理が正しいものとすれば、同性愛を有する男子では、斯の異常の睾丸を取り去つて、之に代ふるに健全なる性慾を有する男子の睾丸を以てする時、變態性慾は退いて、普通の性慾を得ることが出來る筈である。而して此の豫想に一致する成績が尠なからず報告せられて居る。さりながら、是等の問題には、殊に心理的暗示が大なる影響を及ぼすものであるから、之に關して愼重に考慮した上でなければ、遽かに之を肯定する譯には行かぬが、兎に角頗る注目すべき一治療たるを失はぬ。
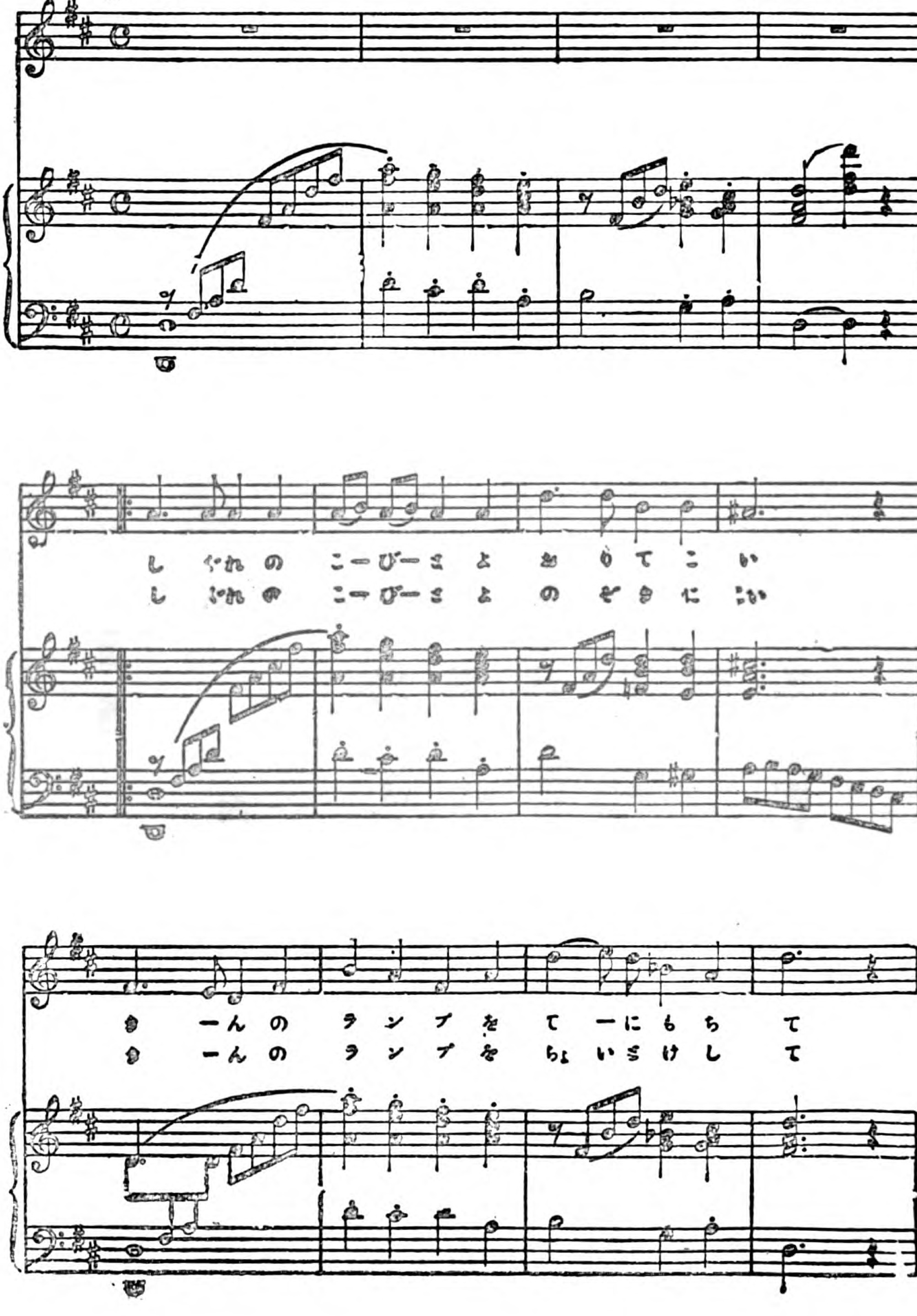
之を要するに、あらゆる附帶的性徵は、主要的性徵によつて惹起さるゝもので、體細胞と云ふ白紙の頁を、女と云ふ紅い筆で染めるのも男と云ふ青い繪具で隈取るのも斯の生殖腺の運行自在なる妙手であると云はねばならぬ。然らば生殖腺は、果して如何なる手段によつて、斯の巧妙なる働をなすのであらうか。以下之に關して述べて見たい。（つゞく）

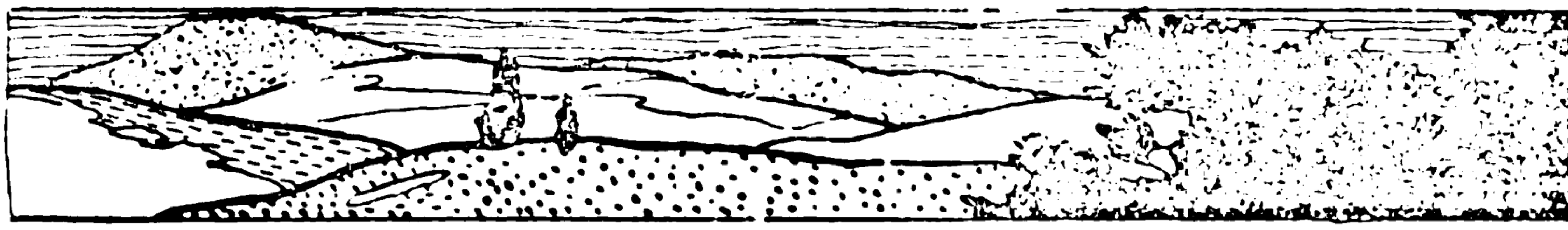

pp
f
あしなみそろへてよるふけてー
ぼーくさかあさんさねむつてるー
よるふけて　ぼーくの
ねむつてる　ちまどの
なーやーねにおーりてこな
ガラスをのーぞきにこい

しぐれ

西條八十 作歌
本居長世 作曲

Allegretto





しぐれ（童謡）

西條八十

時雨のこびとよ
下りてこい、
金の洋燈を手に持つて
足並そろへて
夜更けて
ぼくのお屋根に下りてこい。

時雨のこびとよ
覗きにこい、
金の洋燈をちよいと消して
ぼくと母さんと
眠つてる
お窓の玻璃を覗きにこい。

創作

長編戯曲 父と娘……武者小路實篤

短編小説 御鷹匠の縊死……佐々木味津三

舞踏（詩）……室生犀星

長編小説 黒谷夜話……中里介山

亂舞する焔……加藤一夫

短編小説 ある家庭……宇野浩二



父と娘

武者小路實篤

第二幕

第一場

山田の家の門の内

（次郎藤子を急いでつれてくる）

次郎。お嫂さん、うまくやつて頂戴ね。

藤子。やれるだけやつて見ますわ。一生懸命で。

次郎。もうすぐ門の前に來ますからね。僕は室へ歸つてゐますからね。そして僕に逢つてもいゝと云つたら、お嫂さんを無罪放免にしてあげますよ。

藤子。律義ね。

次郎。それならお願ひしますよ。（退場）

（門の前を二三人通つたあと、蝶子通る、藤子走けてゆき、暫くして蝶子をつれてくる）

藤子。もつとこつちにいらつしやいな。外から見えるといけませんから、私命にかけてもおたのみしたいと思つてをりますのよ。

蝶子。私に？

藤子。聞いて下さつて。

蝶子。私のやうなものに出來ることでしたら。
滕子。次郎さんのことですがね。
蝶子。そのことなら何にもおつしやらないで頂戴ね。
滕子。私達の結婚では隨分次郎さんのお世話になつたのですから、今度は私は御恩報じにでも、それは一生懸命なのですよ。本當に昨日の次郎さんの喜んでゐらつしやつたこと〻云つたら、私はあんなに次郎さんが快活な方とは知りませんでしたわ。今朝も隨分元氣にしてゐらつして、苦學生の稽古なんかしてゐらつしたのよ。それは次郎さんはい〻方で、面白い方て、それで珍らしくしつかりした方ですわ。それで晝の御飯の時も珍らしく父もをりまして、皆で次郎さんをからかつてゐましたのよ。處へあなたからの御手紙だつたので、次郎さんはそれはよろこんであけて御らんになつたら急に立つて室へお入りになつたのよ。それでお母さんがびつくりして見にいらつしたら、次郎さんが机に顔あて〻泣いてゐらつしたのよ。それで私達も御手紙拜見して、本當にがつかりしましたわ。
蝶子。本當にすみませんでしたわ。ですが、私もよく考へて見ましたのですが、考へると考へる程心配になりましてね。それに父もそれは齡とつて氣がよわくなつて、私一人をたよりにし、たのしみにしてゐるのを見ると私もどうしてい〻かわからないのですよ。次郎さまの方はなんと云つたつて御元氣でゐらつしやいますし、私でなければならないと云ふこともないと思ひますし、私でも、もつとおつきあひしていつたら、きつともうおはなれすることが出來なくなりさうですし、さうなつては私はどうすることも出來ませんから、今の內にお斷りした方が三方のためにい〻と思ひましたのであんな失禮な手紙をさし上げたのです。どうぞ惡く思はないで下さい。そして次郎さまにはどうぞよろしく、私は急ぎますから。
滕子。蝶子さん。どうかそんなことをおつしやらないでもう少し考へて見て下さるわけにはいかなくつて。
蝶子。私だつて考へるだけは考へましたの。
滕子。ともかくも一度、次郎さんに逢つて戴くわけにゆかなくつて。
蝶子。それはいけませんわ。私だつて決心はしましたけど、……

藤子。失禮かも知れませんが、次郞さんのやうな方はさう澤山ゐらつしやるとは思ひませんわ。
蝶子。それは私もよく存じてゐますわ。
藤子。一生のことですからさうすぐおきめにならなくつたつていゝと思ひますわ。
蝶子。それでもつゞけてお逢ひしてゐれば、不幸なことが起ることが見えすぎてゐますから。
藤子。そんなことはわかりませんわ。ともかく次郞さんはもう一度、お父さんをたづねて見るとおつしやつてゐらつしてよ。それはかまはないのでせうね。
蝶子。それはかまひませんけれど、私もちつとも强くないのですから、私を苦しめないで下さいとさうおつしやつて頂戴ね。おそくなると父が心配しますから。
藤子。本當に親孝行でゐらつしやるのね。
蝶子。あんまり孝行でもありませんのよ。たゞ父が可哀さうで仕方がなくなりましたの、あんまり私を信用してをりますので。
藤子。之から私とお友達になつて頂戴ね。
蝶子。ありがたう御座いますけれど、さよなら。
藤子。一寸待つて頂戴。

（蝶子退場次郞登場）

次郞。どうでした。
藤子。次郞さん、御免なさいよ。
次郞。だめときまつたのですか。
藤子。いゝえ、さうとはきまりませんの。
次郞。まだ望みはあるのですね。
藤子。十分あると思ひますわ。お父さんのこと許り氣にしてゐらつしやるの。それにあなたに養子に來てもらへるとは思

へないので、早く思ひ切る方がいゝと思つてゐらつしやるらしいのです。
次郎。さうですか。
藤子。あの方もお氣の毒よ。私、本當に御同情しましたわ。
次郎。僕は早くよろこびすぎたから、がつかりしすぎたのです。之から僕は本當に、あの人のために働いて見ます。
（大林門から入つてくる）
次郎。いゝ處に來たね。
大林。あゝ、不意に逢ひたくなつて來た。
藤子。よくいらつしやいました。
大林。（小聲で）　さつきは電話をありがたう。
藤子。お子さんは。
大林。丈夫にしてゐます。君はどうした。
次郎。僕かい、僕は相變らずだ。今朝くれば隨分面白い話をきかせてやる處だつた。
大林。今ぢやだめなのか。
次郎。今ぢや、もう過ぎた夢になつたよ。だが、之から、又夢を本當にしようと思つてゐるのだ。何處か散步して見ないか。
大林。散步してもいゝね。
次郎。一寸帽子をとつてくるからね。
大林。あゝ。
（次郎退場）
大林。だめだつたのですか。
藤子。まだどつちともきまりませんでしたの。さつきあんまりよわつてゐらつしつたので、あなたの處へ電話かけたのです

が、三十分程したら、又普段の次郎さんになりましたが、一時は一寸心配しました。

大林。さうですか。本當にうまくゆくといゝのですがね。

（次郎登場）

次郎。何處へ行かうかね。

大林。何處へでもいゝよ。

次郎。それぢや、お嫂さん一寸行つて來ます。

藤子。行つてゐらつしやい。

大林。さよなら。

藤子。さよなら。又御歸りに。

大林。ありがたう

（藤子退場）

次郎。何處か靜かな處へ行つて昨日の夢の話をしてやらう。そして何事も思ふやうにゆかないものだと云ふお話をして上げよう。

大林。教訓話だね。

次郎。しかし最後は、お目出たくなるか、滑稽悲劇で終るかそれは誰も知らないのだ。

大林。まあやれる處までやるさ。

次郎。さうだ。やれる處までやるよ。

（二人退場）

第二場

時　次の家

（藤子、着物をぬつてゐる。敏子歸つてくる）

敏子。お父さんは。
蝶子。一寸、郵便局まで。氣に入つたのがあつて。
敏子。あんまり氣に入つたのもなかつたよ。
蝶子。（買ひものゝ包の内から半襟を出して）まあ綺麗ですこと。
敏子。おそろひにしようと思つて二つ同じのを買つて來たから、一つ上げようね。
蝶子。まあうれしい。ありがたうよ。
敏子。他にもう何にも買はないことにしたのだよ。あの方と相談して、あんまりお父さんに御心配かけないやうにしようつて、約束したのだよ。
蝶子。さうを。本當にお兄さんいゝ方ね。私いゝお兄さんが出來てうれしいわ。お父さんもかげではよろこんでゐらつしやつてよ。
敏子。お前の方はどうなつたのだい。
蝶子。あの方とはもう絶交してしまひましたの。
敏子。絶交した？どうして。
蝶子。だつて、あの方とつきあつてゆけばきつと面白くないことが起ると思ひますから。
敏子。あの方の方でよく承知したね。
蝶子。あの方は承知したわけではないのですが、私の方だけ絶交しましたの、もうお父さんにかくしごとがないので安心しましたわ。もうお父さんの顔を見たつて安心してゐられますわ。
敏子。お前は本當に思ひ切りのいゝ子だね。
蝶子。だつて仕方がないわ。まさかあの方が養子に來て下さりもしないでせうし、お父さんだつて、あんな金持の子供に私をやることを承知なさるわけもないでしよ。どうしたつて、いつか思ひ切らなければならないなら、早い方がいゝわ。
敏子。それはさうだけど、お父さんはいざと云ふ時がくるとなんでも許して下さるよ。私の時だつてあんなに反對してゐる

らつしたのだが、私に子供が出來たことに氣がついたので、仕方がなしに許して下さつたのだよ。

蝶子。本當！

敏子。さうとも、私が鎌倉へ行つた前の日にお父さんは何氣なく、お前は二ヶ月程前から病氣をしないねとおつしやつた。それを、私がきゝまちがへたやうに返事をした時、それはいやな顔をおしになつて、それから一晩默つてゐらつした。私は本當にすまない氣がした。そしてその晩私が泣きあかしたので、お父さんがすつかり心配なさつて、なにもかも許して下さつたのだよ。

蝶子。さうな、本當にいゝお父さんね。どうりでお姉さんが短氣なことを起しはしないかと心配許りしてゐらつしたわ。そして私が、お姉さんを羨やましく思ふ程お姉さんのこと許り氣にしてゐらつしたわ。

敏子。私も家出しようか、死んでしまはうかと一寸は思つても見たのだよ。だけど、今になれば萬事がよくいつて、私は本當に安心したよ。お前だつて、いざと云ふ時が來たらお父さんはお許しになると思ふね。あ、お客さんだよ。

蝶子。お姉さん一寸出て頂戴な。

敏子。お前お出よ。

蝶子。それでも。いゝえ私出ますわ。

（退場、暫くして歸つてくる）

敏子。お客さんかい。

蝶子。お父さんの處へお客さんでしたわ。お父さんが居ないと云つたら、又あとで來ると歸りましたわ。

敏子。さうかい。どんな方だい。

蝶子。お姉さん。どうしませう。あの方がいらつしたのよ。

敏子。お父さんに逢ひに。

蝶子。えゝ。

敏子。それはお父さんに逢ふのはいけないよ。

蝶子。處が苦學生に化けていらつしたの。

敏子。まあ、ひどい人だね。

蝶子。いゝえ。それは私が入れ智慧して上げたの。

敏子。それなら絶交したのぢやないのだね。

蝶子。いゝえ、絶交する前に入れ智慧してあげたの、一昨日いらつした時に。變名して苦學生の眞似して來てお父さんにとり入つて下さいとおたのみしたの。

敏子。中々お前はたちわるだね。苦學生とは考へたね。そして、今おつてどうした。

蝶子。父は留守です。すぐ歸りますが。と云つてしまつたのよ。ですけど私と何か話さうとなさつたので逃げて來ましたわ。今度いらつしたら、お姉さんとりついで頂戴ね。

敏子。それはお前が出る方がいゝよ。

蝶子。だつて私、話すのがいやなのですもの。

敏子。私だつて氣まりがわるいよ。

蝶子。私たすけると思つて出て頂戴な。

敏子。自分で出たいくせして。

蝶子。嘘よ。

敏子。私は之から又出かけなければならないのだよ。

蝶子。何處へ。

敏子。きまつてゐるぢやないか。その着物はいつまでに出來る。

蝶子。急げば明日中に出來るわ。

敏子。そんなに急がなくつてもいゝよ。

（父歸つて來る）

二人。おかへりなさい。
時次。敏子、氣に入つたものがあつたか。
敏子。あんまり、ですけど、この半襟が氣に入りましたからお蝶ちやんとおそろひに買つて來ました。
時次。それはよかつた。
敏子。私之から又一寸富岡さんの處へうちあはせに行つて來ますわ。
時次。行つておいで、そしてよろしく云つておくれ、昨日は失禮しましたつて。
敏子。えゝ。
時次。誰か來たよ。
蝶子。さうを。お姉さん。
敏子。お前行つておいで、私一寸用があるから。

（蝶子、退場。まもなく登場）

蝶子。お父さん、へんな人が來てお父さまに逢ひたいと云つてゐますわ。斷りませうか。
時次。どんな人だ。
蝶子。苦學生のやうな人よ。金の無心かも知れませんわ。歸しませうね。
時次。どんな用だか、聞いておいで。

（蝶子一寸聞いてくる）

蝶子。原稿を見て戴きたいのですつて、キタナイなりした人よ。ことわりませうか。
時次。お前はなりがキタナければ人間は下らないと思つてゐるのか。苦學生にどんな偉い人が居ないとも限らない。失禮なことをしてはいけない。
蝶子。それならお通しするの。
時次。俺があつてくる。（退場）

敏子。お前は本當に隅におけないね。
蝶子。よくつてよお姉さん。
時次。まあどうぞこちらへ。

（敏子蝶子隣りの室に入る。時次、次郎と登場）

時次。どうぞこれを敷いて下さい。
次郎。ありがたう。
時次。遠慮なく。
次郎。いえ、もう。
時次。原稿は前からかいてゐらつしやるのですか。
次郎。いゝえ、最近、誠にはづかしいものですが。先生の私達の地方の新聞にお出しになつてゐる小說を拜見して、あの主人公にすつかり同情して、自分でも奮發すれば、やれないことはないと云ふ氣がしたので、かいて見ましたのです。お急がしいでせうがおよろしかつたら、おひまの時見ておいて下さい。戴きに上りますから。
時次。承知しました。
次郎。それでは失禮します。
時次。まあいゝでせう。
次郎。お邪魔ではありませんか。
時次。邪魔處ですか。蝶子、お茶をもつておいで。
蝶子。（外で）　はい。
次郎。中々うまくかけませんので。
時次。それはすぐにはかけるものぢやありません。
次郎。かく時には、どう云ふ風にかいたらいゝものでせうか。矢張り、實際に經驗したことをかく方がいゝでせうか。

時次。まあ、始めはその方がいゝでせうね。
次郎。しかし實際のことをかくのも中々むづかしいものですね。
（蝶子、お茶をもつてくる、次郎丁寧にお辭儀する、蝶子少しぞんざいにお辭儀する退場）
時次。菓子ももつておいで。それはなんだつて大へんです。
次郎。文學は金持でなければ出來ないと云ふ人もありますが、本當でせうかね。
時次。そんなことがあるものですか。金持に何が出來ます。人生のどん底の淋しさを知らないで何がかけます。
次郎。それでも、トルストイやフローベルやゲーテなぞは、
時次。そんな西洋人の例なんかあければ、反對に貧乏で偉い仕事をした人はいくらでもあげることが出來るでせう。そんなことは氣にする必要はありません。たゞ一生懸命にやるより仕方がないと思ひますね。金持の息子は女のことや、酒のことで夢中になつて、つい呑氣になるものです。其處へゆくと本當に苦しんだものは、どうしても一生懸命にやるより仕方がありませんからね。
次郎。さうですかね。ともかくそれでは一生懸命でやりますから、氣ながに敎へて戴きたいものですが。
（蝶子菓子をもつてくる）
時次。えゝ、御役に立つことがあれば何んでもします。まあしつかり苦學して下さい。立派な人間になつて、貧乏人のために萬丈の氣焔をあげて下さい。
次郎。ありがたう。それでは失禮します。
時次。それでは、又來給へ。
次郎。ありがたう御座います。
時次。つまらない菓子ですが。持つて歸つて道々食つて下さい。
次郎。いゝえ、それには、
時次。いゝえ、遠慮なく。

次郎。それでは遠慮なく戴きます。

時次。どうか。

(時次、次郎と退場、蝶子片づけにくる。時次登場)

時次。(怒鳴りつける) 蝶子!

蝶子。はい。

時次。お前はどうして貧乏人だと思つてあの人を輕蔑するのだ。

蝶子。輕蔑なんかしませんわ。

時次。さつきはなんて云ふお辭儀の仕方をしたのだ。

蝶子。私ちやんとおじぎをしましたわ。

時次。馬鹿! あの人が丁寧に、お辭儀したのにお前は鼻のさきであしらつた。それにこんなひゞの入つた茶碗を出す奴があるか。

蝶子。つい氣がつきませんで。

時次。嘘つき! この前、絹の着物を着た奴が來た時は、お前はこんな茶碗は出さなかつたぞ。そしてあんなお辭儀の仕方はしなかつた。そして下駄までこの前の時はちやんとなほしてあつた。馬鹿! お前は人間より着物の方を大事にするのだな。人間の値打と云ふものは着物できまるものでなくつて裸できまるものだぞ、今日來た苦學生の方が、人間としては百倍も上等だぞ。

蝶子。御めんなさいね。

時次。之から注意しろ。

蝶子。はい。

時次。馬鹿な奴だ。何が可笑しくつて笑ふのだ。もう一遍笑つて見ろ。人が眞面目に物云つてゐるのに。

蝶子。御免なさいね。

時次。(原稿をよみながら)、それ見ろ、中々書き出しからうまい。こいつは掘出しものだぞ。矢張り俺の目にまちがひはない。頭が中々いゝ。(幕



御鷹匠の縊死

佐々木味津三

とにかく彼は、これ迄とても自分が同藩の面々から、どの點でも、決して尊敬らしい尊敬は毫末も拂はれてゐないと言ふことを、ちやんと心得てゐる事はゐたのであつた。

顔が四角で、眼が狐眼で、年より頭が禿げ過ぎてゐると言ふ樣なこまごました箇所は格別として、『馬鹿平』と言ふ綽名がさうである。

御鷹匠五人十石取り三州田原の藩士、牛場嘉平國次と言ふれつきとした格名がちやんとあるに拘らず、いつの頃からか、肝心の『牛』と言ふ頭字は抹殺されて通稱『場嘉平』と言ふのみで、呼び棄てにされてゐる事も、ふざけた面々が『場嘉平』を『馬鹿平』に通じさせて、ひそかに手を打ち合つて嬉しがつてゐる事も、本人の彼は百も承知してゐる事はゐたのであつた。

がしかし、この頃になつてゝ、單に同藩の面々のみならず、藩主迄が事もあらうに、折にふれ時に際して、只自分一人を常になにかのお座興として、さながら生きたおもちやかなんかの樣に取扱ひ出したのは、流石の彼も聊か腑におちかねる所があつた。

それと言ふのも、そもそもはほんの鳥渡とした動機からである。

元來三州田原は封祿僅かに一萬五千石にも足らない位な、極く小藩に過ぎなかつた。當主三宅土佐と言ふのが、實は三宅氏代々の直系ではなくて、當時强藩隨一の中に數へられた、酒井姫路侯の次弟が入つて田原一萬五千石を繼いだと言ふ樣な關係であつたので、藩主三宅土佐たる者、雲を吸つて生きてゐない限り、僅か一萬五千石や、貳萬どころの封祿に甘んじる筈がなかつた。

あまつさへ天下は幕末多端の折からである。幼にして英邁煥發に渡り、家兄は當時廟堂のちやきちやきとあつては、天下の風雲をのぞんで三宅土佐たる者、只單に一萬五千石の瘦脛をかゝへたのみで喜ぶ道理がなかつた。

まさか天下を併せ呑む底の氣慨はなかつたとしても、青雲の志位は尠く共貯へてゐたに違ひない。それかあらぬか、見かけに依らず、彼なかなかの風雲兒であつた。

先代信友の隱居面にかくれて、高野長英をわざわざ聘して當時流行り物の蘭學を鳥渡にしろ、啄んでみようと企てたなぞがその一端である。それに對して、どれだけの見識を備へてゐたかは、知る由もないが、とにかく彼三宅土佐が德川二百五十年の廟堂にとつては、決して賴母敷しくない天下御免の不良分子であつた事は疑のない所であつた。

その故ゐか、華山渡邊登が尙齒會の面々等と共に幕府の罪を獲て、三州田原の國表へ蟄居命ぜられた砌り、故意か偶然か端なくも飛火は彼三宅土佐の所へ迄立ち及んだ。

そして、『家中渡邊登儀、蟄居仰せ出され候身分に不拘、蕪筆に事寄せて、當江戶在住の門人知己等と消息相交せ候段、公儀をも怖れざる不屆の仕儀たる可く、主人たる者怠慢の條々、以ての外の儀に付、右屹度咎め置者也。』と言ふ樣な御奉書があつて、見事三宅土佐は黑表中へ書き加へられたのである。

若し春秋の筆法を以つてするならば、なにをかくさう、公儀御奉書なるかの譴責文が、御鷹匠半場嘉平を、藩主三宅土佐の玩弄物にさせた。と言ふ事が立派に言ひ得た。

その位公儀の御差紙は三宅土佐に强く利いたのである。

只單に、强く利いたと言ふだけでなくて、その御差紙は、外に向つて英邁不羈なる三宅土佐を、つひに急轉直下で一直

線に、内に向つて暴戾不羈なる三宅土佐に造り換へて了つたのであつた。

華山は責を引いて割腹する、藩はあすにも潰滅しさうな不安に襲はれて、上を下へと狼狽する、と言つたあんばいで、萬事が火事場騷に陷入つたので、そのため不敢取城内士分以上の悉くが急遽藩主の名に依つて招致されたのである。

御鷹匠半場嘉平が、藩主三宅土佐から、そもそも嘲弄をうけたのは、實を言ふとその席上であつた。

公儀御差紙に對して、然る可き申開きを入れたものか、このまゝ默殺するか、或は又酒井姫路侯の緣邊を辿つて裏からなんとか運動したものかと言ふ樣な議題が諮問にかけられて、重役以下ずつとめいめいが夫々の所說を開陳した時である。巡はり巡はつて丁度、最後の末席にかしこまつてゐた半場嘉平が愈ゝと言ふ場合に際したのであつた。所が何としたものか彼は、自分の席順が巡つて來たに拘らず、意見どころか何等意見は全然持つてゐなさうな顏つきで、不思議にもほかんとそつ齒をむき出したまゝ一向知らん振りで暫くほけぼけとしてゐたのであつた。これが常の場合だつたら、高が御鷹匠の半場嘉平ごとき、一人の意見や所說は元來どうなつてゐたつて全然構はないに違ひなかつたらうが、何にしろ、時が時だつたのである。少しく腹の虫が治まりかねてゐた三宅土佐は、半場嘉平が禿頭に四角い顏で、狐眼にそつ齒をむいて、全然ほかんと馬鹿面をしたまゝ、至極すまし込んでゐたのをちらりと認めると、先づ頭から、

「こりや嘉平、そちはこの土佐がお咎め食うても大切（だいじ）ないか。」

皮肉に切り出したものであつた。所が彼は一向すましたもので、それを又言ひ樣もあらうに、

「御意にムりまする。」

平氣で答へたのである。答へ乍らも依然として、そつ齒をむいたまゝ、まるで上の空のごとくほかんとしてゐたものであつた。これが常なる三宅土佐であつたならば、

「うつけ者めが。」位で、どうにかかうにか、怒りを押さへて天晴名君らしく虫をころす位な肚藝はしかねまじい場合であつたが、癇の立ち切つてゐた三宅土佐が卽座に物をも言はず、佩刀に手をかけるや否や、つかつかッと血相かへてにぢり寄つたのは、決して無理がなかつた。しかしそこ迄行つても流石にまだ三宅土佐たる者、全然自制は失はなかつたとみえて、

「こりや嘉平、そちは土佐が譴責うけても、確かに大切ないか。」

ぶりぶりし乍らもう一度念を押したのである。

「御意に厶りまする。」

しかし彼は、同じ答へを平氣で繰り返へし乍ら、やはりぽかんとそつ齒をむいて、至極すましたものであつた。惡びれないと言ふよりも、少しく無神經に馬鹿面をしてゐる嘉平の樣子には、聊か張合ぬけがしたと見えて、

「大切ないか。確かに大切ないか。」

三度び土佐守は念を押したのであつた。がしかしやはり彼は、前のごとく、そつ齒をむいたまゝで、

「御意に厶りまする。」

同じ答へを繰り返へしたのである。のみならず一向平氣な顏付きをし乍ら、突然にやにや狐眼を吊り上げて笑ひ出すと

「とんだ失念をいたしまして、今朝程家内に挨拶も仕らず參じましたので、途方に暮れてをりまする。」

同じ馬鹿面をし乍ら實に當惑さうに言ひ出したものであつた。

突拍手もないその一言には、流石に三宅土佐も、おとがひを崩した。そして手にあまる樣にしつかと掻い込んでゐた御佩を輕るく持ちかへると、

「嘉平、そちはよつほど妻女がうい奴と見えるなう。」

急に言葉を軟げて、ふと半場嘉平をからかひ出したのである。それを又彼は實に愛す可き程眞つ正直な顏付をして、

「御意に厶りまする。」

さう言つたものであつた。三度び三宅土佐はからからと笑ひ出して、

「そちの妻女は、ずゐ分とそちをかはいがると見えるなう。」

前とは打つて變つて、實に天氣晴朗な顏付をし乍ら又そんな風にからかつたのであつた。

がしかし、半場嘉平なる彼は、一座の面々迄が一時にクスクス笑ひ崩れてゐるのに、依然として眞つ正直な顏付で、

「御意に厶りまする。」

實にすましたものであつた。

肝心の御奉書問題は、飛んだ所で蕩氣を抜かれた爲に、それなりに有耶無耶で葬り去られたが、しかし御鷹匠半場嘉平が、藩主三宅土佐の眼に、よき玩弄物として映じたのは、實にその時からである。

その事あつて以來から、藩主土佐守は半場嘉平を發見するたびに、

「こりや嘉平、今日は妻女に挨拶して參つたか。」

にやにや笑ひ乍らいつもさう言つてからかつた。でなかつたら、

「この頃でもそちの妻女は、ずんとそちをかはいがつてくりやるか。」

さう言つてからかつた。なにを言はれても紋切り型で、

「御意に厶りまする。」と言ひ乍ら、半場嘉平なる彼が、その都度、いつものごとくそつ歯をむいて、ほかんと馬鹿面をしてゐるのを認めると、藩主三宅土佐は、又にやにやと笑ひ乍ら、

「そちは果報者ぢやなう。」

と言つてからかふのが常だつたのである。時に依ると、わざわざ殊に夜分なぞおそくなつて、突然藩主から火急の御召が彼のところへ屆くことがあつた。取るものも不敢取、彼が慌てまくつて出仕すると、三宅土佐は、頭からにやにや笑ひ出して、

「嘉平、相變らず女子(おなご)妙理と見えて、近頃とんと顔色がよくないなう。」

さう言つてすぐとからかひ出すのであつた。

機嫌の良い時だつたら、近侍を對手に、碁でもパチパチやり乍ら、なにかと彼にからかつて、ひとり悦に入つてゐると言つた風な事がないでもなかつたが、少しく御機嫌のなゝめな時は、浴びる樣に、盃をふくみ乍ら、只始終、氣味惡く、にやにや笑ひ續けて、いつ迄もいつ迄も、嘉平をたつた一人遙か座敷の眞ん中に畏らせておいて、首根つこが痛くなる迄彼に馬鹿面をさせる樣なことがよくあつた。

火急の御用どころか、實に體のよい、酒の肴にしたのである。

とにかくこれを要するに、御拳書事件の例の事があつて以来、眼に立つて藩主土佐守が、半場嘉平をなぶり者にし出した事は、確かな事實であつた。

そして、その前後から、いつの間にか藩主迄が、彼を「場嘉平」と言ふ綽名でもつて呼び棄てにし出した事を、ちやんと彼も、氣がついてゐたのである。

氣はついてゐたが、かと言つて、それをとやかく氣にするやうな彼では全然なかつた。それを當り前と感ずるよりも、寧ろ却つて、半場嘉平なる彼には、そんな事は全然些細な無關係な事に考へられて、凡てが問題外だつたのである。只彼に大いに問題となつたものは、彼の責任として託された二羽の御鷹と、そしても一つは、藩主にさへからかはれた例の彼が妻女の事であつた。

朝起きると、彼は先づ威儀を正して、二羽の御鷹に伺候するのである。若し常ばきにしてもよい様な袴が何着もあつたならば、實際彼は袴迄穿つて、鷹のご機嫌が伺ひ度い位、字義通り威儀を正すのであつた。

それだけならまだよいが、彼は鷹の前に近づくと、藩主三宅侯に伺候する以上に、いとも慇懃にぬかづいて、へたばらんばかりに、かしらを垂れるのが常であつた。その上に、實際、おそるおそると言つた工合で、麗はしき尊顔を拝しましてと迄は言はないが、とにかく、言葉も改めて、

「麗はしき御機嫌に渡らせまして、なによりのことに厶りまする。」

切口上で、挨拶をするのであつた。それから餌を換へてやるのである。その餌が又、遠くから竹箸で挾んで遙かに差し出すと言つたあんばいで、差し出したその餌を鷹の方で機嫌よくぽくりと一口に啄むと、半場嘉平も亦ひどく恐悦がつて同じやうにぱくりと、口なづきをするのであつた。

運わるく、その第一箸を鷹の方で、見向きさへしない様な事でもあらうものなら、足の裏をしたゝかに藪蚊にでも刺されたゝ様な顔になつて、實に當惑するのであつた。

ざつとそんな工合で先づ鷹の御機嫌を伺つて了ふと、それから彼は、同じ慇懃さでやはりおそるおそる例の妻女の御機嫌を奉伺するのである。

鷹はけだものだからまだよいが、妻女に遭つては、物を言ふだけに彼は最初から戰々兢々たるものであつた。妻女の方では別に尻に敷くの、敷かないのと、それ程の考へはなくても、里方の家格と言ひ、十人並以上の容貌と言ひ、誰が見ても禿頭の狐眼の、そつ歯の馬鹿面をした彼に比べたら、分に過ぎた出來栄であつたので、何かと彼は、受太刀に廻り勝ちであつた。

あまつさへ出來過ぎた位、才はぢけた女だつたので、彼としても別にあらたまつて意識することなく、何かにつけて頭が上らなかつたのである。

畏まつて挨拶は勿論のこと、妻女の方から、ぢれ上つて、見兼ねるやうに、

『もうよう厶ります。』と聲をかける迄は、いつ迄も彼は、しやんとして、半ば首を垂れ乍ら、置物のごとく伺ひを立ててゐるのであつた。

全く彼のまるまつちくちゞこまつた猫背は、そのため自然に造られたものであると言つても過言ではない位だつたのである。

たまの勤番で出仕する朝は、一層かしこまつて、神妙に伺ひを立てるのであつた。決まりきつたことなので、妻女の方でこうるさがつて、

『御出かけなされませ。』と突つ放す樣に言ふに拘らず、彼はいちいち伺ひを立ててから、やがて出仕するのが常であつた。それはまだよい方であつた。當才になる女の兒が何かむづがりでもして、その方に妻女が心を奪はれたまゝ、ふとした拍子に彼の方を對手にでもしなかつた場合は、妻女が顏の向いてる方へわざわざいざり寄つて、なんとか妻女が注意を向ける迄、彼はそのため出來上つてゐる樣な猫背をまるまつちくちゞこめて、いつ迄もしやんとかしこまつてゐるのである。

若しいちんち、妻女が何か他の仕事にでもかまけて、運わるく彼の方へ注意を向ける餘裕さへなかつたならば、御鷹匠五人十石取り半場嘉平なる彼は、やはり同じやうに、立つたり坐つたり、妻女の居る方へ妻女の顏の向いてる方へ、神妙

にいざり寄つては同じくいちんち猫背をまるめてかしこまつてゐたに違ひなかつた。

ざつとそんな風であつたに拘らず、しかし不思議な事には、彼に特種な誰からも追從をうけない、優れた才能が只一つあつた。

彼に託された鷹は、どんな愚物であつても早ければ一ヶ月、おそくて僅か三ヶ月にして天下に並びない位、傑れた逸物に仕立て上げられると言ふのが、即ちそれで、只傑物に仕立て上げられると言ふだけでなくて、一端彼の薫育をうけた鷹は、どの鷹でも、捕獲した鳥を羽一本も損はずに滿足に生かしたまゝで持ち歸へると言ふ殊種な才能を持つてゐるのが例であつた。

鷹の機嫌で天氣を豫報する位な事は尋常茶飯事で、今日は不獵と豫言した當日に、獲物の多かつた試しは只の一度さへもないと言つてよかつた。

若しその點で言つたならば「馬鹿平」どころか天下の「鷹平」と言つても尙ほ言ひ足りない位であつたが、それはとにかく、その他の點では、決して一人前の見識さへ滿足には持つた人間として考へられない位な節々が隨所にあることはあつたのである。

所で、三宅土佐の譴責は年内に、事なく落着する事はしたが、頂門の一針以上に只一回のお灸でこりこりした藩主土佐守は、年が明けると、今迄とは打つて變つて、にはかに御亂行の事が次から次へ行はれ出したのであつた。

女に淫しなければ、酒に淫すると言つたあんばいて、酒に飽きると、又片つ端女にお手をつけた。當時城下に一人の處女なく、當時城下に一人の妻女なしと言ふ噂程、慘狀は極めなかつたが、とにかくみめうるはしい女だつたら、處女と妻女の區別なく、持つたが不運で、

「予が身近くへ召連れい。」と言ふ鶴の一聲は、たいていの者をちゞみ上らせた。

「過ぎたる物は、公方さまに虎の皮の褌、田原に華山、馬鹿平女房。」と言つた落首が必ずしも當を得たものであつたかど

うだかは、知る限りではないが、とにかく田原に華山が過ぎたるために、三宅土佐の亂行が結ばれたものとするならば、落合以上に土佐守の御亂行は、人々の震憾を呼び起こしたものだつたに違ひなかつたのである。

がしかし、御鷹匠半場嘉平は、果して過ぎたる女房を持つてゐるのかゐないのか、自分では全然なに事もまるで知らないもののごとく、同じやうなる馬鹿面をして、只鷹と妻女に神妙にかしづき乍らやはり春を迎へたのであつた。

その春。ある朝である。藩主三宅土佐がにはかに、御鷹狩の催しを觸れ出した事があつた。仰せを畏まつて、御鷹匠の半場嘉平は、鷹の御機嫌から、即座に今日は不獵と言ふ判斷を下す事は下したが、しかし主命は否み難かつた。

股立ち高くかい取ると、二羽の御鷹を慇懃に捧げ持つて、彼も亦遙かにお伴先を隔たり乍ら、とにかくその催しに隨つたのである。

天氣は申分なし、春はよし、藩主も御機嫌ななめなかつたが、しかし肝心の御鷹は二羽共ひどく不機嫌であつた。午下り一刻迄を費して、獲物と言ふのはたつた一羽の野頬白だけであつた。それ迄は格別上機嫌であつたためか、藩主土佐にもそれだけの餘裕が起らなかつたとみえて、いつになく朝から、半場嘉平の存在などは、忘れ果てた樣に見受けられてゐたが、なにかの拍子でふと彼の存在に氣がついたものか、

「こりや嘉平。場嘉平。」

不意に聲をかけたのであつた。丁度その時嘉平は、左手に並べて捧げ持つてゐた御鷹が二羽共、急に甚だしく不機嫌になつて、ばたばた止まり木の上で取り組む樣に、騒ぎ出したので、にはかな羽ばたゝきに少からず面喰つて、まごまご狼狽してゐた所であつた。藩主が聲高に呼びつけてゐるのも、全然聞えないではなかつたが、しかし御鷹の不機嫌な羽ばたきは、一層彼には重大な出來事であつたので、つい承知し乍らも、鷹の方にのみ全神經を集中してゐたのであつた。

「嘉平。場嘉平！」

前より大きく、前より近く再び又さう呼んでゐるのもはつきり耳にすることはしたのであつた。がしかし、彼は一心に狂ひ出した鷹の機嫌を、何んとかして取戻さうとそればつかりに終始心を奪はれてゐたので、やはり承知し乍らも尚ほ振り向かうとはしなかつたのであつた。

「場嘉平！　こりや嘉平！」

三度び近く、三度び大きく又さう呼んでゐるのを彼はほんとうのすぐまうしろで聞きつけて、初めてはつと振り向いた。そしたへえい！　と言ひ乍ら固くなつて、その場にすばやく平伏しようとした拍子に、ひよいと見ると藩主三宅侯が、實に眼と鼻の先に、例のごとくにやにや笑ひ乍ら突つ立つてゐたので、突然彼は中樞の平衡を失つて、出かけたへえい！と言ふ言葉も半分で嚙みころしたまゝ、急にほかんと滑稽な位萬事取りみだして、頭も垂れずに、けろりと藩主の顔の方を眞正面からみつめたのであつた。上から下迄、全く弛緩しきつた樣なその樣子に不意と藩主三宅侯は、場嘉平の場嘉平たる存在意識をはつきり呼びさましたものか、突然突拍子もなく、

「嘉平！　馬鹿につける靈藥をそちにとらせうか。」

いつになく眞顔で、さう言ひ出した。

「恐悅に、恐悅に……」

と迄言ひかけて彼は急にどもり乍ら、初めてはつとかうべを垂れたのであつた。とたんに土佐守はかんからと笑ひ出したが、笑ひ半ばで千切つて棄てた樣に、ほくりと又元の眞顔に立ち返へると、急に何事かを決したもののごとく、今から嘉平の居宅に立ち寄らうと藪から棒に言ひ出したのである。

言ひ乍らも、已になんとなく兩眼を異樣に輝かして、驚きまどつてゐる近侍の面々を尻目にかけると、三宅土佐守はとつとと先へ歩き出した。

何が何やら只半場嘉平は、終始きよときよとと取りのぼせて、とにかく仰せと畏み乍ら先に立つて案内をしたのであつた。藩主の御聲かゝりで、「御供巡はりは道の途中で二手に分れて、そして僅かに近侍二名を差し連れたまんま、三宅土佐は何故か、實にいそいそとはしやぎ乍ら見るに堪へないやうな、半場嘉平の陋宅へ平氣でさつと這入り込んだのである。

狩裝束でつかつかと、藩主三宅侯が禿ちよろの緣先へ腰を下されたので、先づなにより面喰つたのは嘉平が妻女であつた。驚きと恐悅とで、妻女が當才の女兒を轉がす樣に寢かしたり、又引つかゝへる樣に抱き上げたり、一人でうろうろ面喰つてゐる間、當の半場嘉平は、例のごとくほかんとそつ齒をむいたまゝで、只終始馬鹿面をしたまゝであつた。

その間も藩主三宅侯は何んの故か、少しく異樣にまなこを輝かして、只妻女の方のみをぢろぢろと追つかけ乍ら見つめてゐたのである。二人の近侍には、すぐと藩主の肚のうちが、見えすく程によく讀めた。がしかし嘉平一人は、何事も更に合點のいかないもののごとく只馬鹿面で畏まつて、遙か下座にさし控へてゐたのであつた。

やがて妻女がこざつぱりと造り換へて、遠州流にいざり寄り乍ら、澁色のお茶を捧げると、藩主三宅侯は、つと無雑作に受取つたが、受取り乍らも土佐の眼は、彼が妻女の常に青々と剃り立てられてでもゐるかのやうな、いとも鮮かな襟筋のみに、ぴつたりとはりつけられたごとく吸ひ寄せられてゐたのであつた。

その時次の間から火のつくやうにはげしく泣き出した赤子の聲に、半場嘉平はつと氣を取り直ほした。取り直す同時に殆んど跳ね返へる樣に立ち上ると、彼は君主の面前も平伏もなにも一切忘れ果てたやうに、うろたへ上つて、狼狽の餘りよろよろし乍ら、つと次の間に駈け込んだものである。そして蟹の如く手足もからだも眞赤にちゞこめて、火のつくやうに泣きわめいてゐる女兒をすばやく、拾ひ上げた。

抱くと一緒に、あやすのか怒つてゐるのか見當もつかない樣な奇怪な表情をし乍ら、常より一層大きくそつ齒をむき出して、前後の考へもなく又元の部屋へ立ち歸つたのであつた。

とたんに、はつと妻女のからだが、うつぶしたまゝで藩主三宅侯からはぢかれたごとく離れたのをふと彼は認めた。遙か隔だつた庭の隅には、二人の近侍が、芋蟲のごとく恐縮しきつてへたばつてゐるのも重ねて彼は認めたのである。がしかし、只彼はそれを認めたと言ふだけで、次の瞬間には更にはげしく泣き叫んでゐる幼兒のためにすつかり又氣を奪はれて、前以上に狼狽をしてゐたのであつた。

そのまに藩主三宅土佐は、已に事終れりと言つた顔付でさつさと庭先を表の方へ歩き出してゐたのである。

赤子を小脇きに抱へたまゝ、嘉平もはつとひれ伏したのであつた。

その夜の亥の刻少し前である。ひるまの近侍がたつた一人で、忍びやかに駕籠から降りて出ると、ひよつくり嘉平の門先から仔細ありげに這入り込んだのであつた。

その間もなく、嘉平は彼の妻女が、玄關先でひそひそと、その近侍と二人して何事かを語らつてゐるのを、次の部屋で

鳥渡耳にさしはさむだ。

がしかし彼は懸命であつた。二匹の鷹の御機嫌を取りもどさんと專心に、只それのみに懸命であつた。

その所へ、妻女は何事か固く決したもののごとき顔付で、つと這入り込んで來たのである。見るといつの間にか、みなりもちやんと新らしく召換へて、どこか只ならぬ氣配であつた。

なんとなく樣子がげせなかつたので、嘉平も不思議さうに妻女の方をぢろぢろと見返へると、已に妻女は身勝手にひとり決めで取り決めてゐたものか、何んのよどみもなくきつぱりと、

「今から、去なして貰ひます。」

さう言つたところであつた。その一言には、流石の嘉平もはつと全身に戸惑ひを感じた。がしかし、やがて間もなく顔中を握りこぶしの樣にして、せんすべもなささうににやりと一度笑ひ去ると、そのまゝ彼は常なる半場嘉平に立ち歸つて、猫背をまるくちゞこめ乍ら、そつ歯をむいて神妙に、妻女の方へ畏り直したのである。

妻女は實に平然として、何んの顧慮もなささうに、ひそひそ近侍と語らふと、やがてそのまゝ言葉のごとく去んで了つたのであつた。何んのために何が故か、流石に嘉平も了解に苦しんだ。

とうしみの芯を掻き立てて、無心な嬰兒を前にし乍ら、夜中よつぴてまんじりともせず、喪心したもののやうにほつねんと、彼は考へ込んでゐたのである。

曉近くになつて來ると、嬰兒は空腹の故かしたたか聲を張り擧げて、ひきつけでもするやうに泣き出した。たとへ死ぬ程泣きわめかれても、彼に施すすべはなかつたので、只うろたへてまごまごし乍ら、嬰兒のぐるりをのぞきのぞき、巡つてゐるより仕方がなかつた。

たとへ嘉平が九十九遍廻つたとて、嬰兒が百遍目に泣き止む筈もなかつた。四半時、半時と刻が過つに從つて、寧ろ益益泣きさかつた。殆んど顔中で泣きわめいてゐる樣に見えたかと思ふと、やがて嬰兒はひくりと言ふ樣にからだごと痙攣させて、そして又ひいひいと泣き募つた。

やはりうろうろ廻はつてゐ乍ら、初めて嘉平は氣がついて、大發見でもしたかのごとくいきなり嬰兒を抱き上げた。が

しかし、抱いたとて子供は、一向泣きやむらしい氣色さへなかつたので、彼は又一層うろたへ乍ら、禿げ上つたびんの毛をふりみだして、嬰兒とにらめつくらをしてゐるより他に仕方がなかつた。

そのとたん、なにかの都合でふと彼が抱きしめてゐる腕首を右から左へ持ちかへようとしたはずみに、節くれだつた彼の手の甲が、嬰兒の唇にすれ違ふと、いきなり彼はむしやぶる樣に、嬰兒の唇がぶるぶるつと、手の甲に吸ひつけられたのをすばやく發見したのであつた。

突嗟に大發見をした彼は、前後の思慮もまるでなく、心持押へつける樣にその手の甲をそのまゝそつと嬰兒の唇にあてがつてやつたのであつた。嬰兒はひくりひくりと泣いじやくり乍ら、しやぶりつく樣に吸ひ出したのである。

ぢつとそれをみつめ乍ら、彼は又續いて大なる發見に胸をとどろかしたのであつた。そして手の甲をおそるおそる腫れものにでも障る樣に、そつと手元に引きつけて、試みに人指し指を嬰兒が口元へあてがつてみると、果して嬰兒は顔中でふるひつく樣に彼の指にむしやぶりついたのであつた。

そして、ちよびちよびつと言ふ樣に夢中で唇を鳴らし乍ら、眼から頬にも一杯涙をたらしたまゝで、不意にぎくぎく泣きやむと、一心不亂にその人さし指を吸ひ出したのである。

それを見乍らたまりかねて、いきなり彼はにやりとやると、突然ほろほろ涙をはふりおとした。そしてほかんと、そつ歯をむいて、暫くまじまじ馬鹿面をしたまゝ、上から嬰兒をのぞき込んでゐたのである。

ほかんとのぞいてゐ乍らも、彼は自分の心身が次第に、次第次第に、冴えておちつくのをかんじたのであつた。それになぞらふごとく、指を吸つてゐる嬰兒も亦少し宛少し宛、睡りに這入つていつたのであつた。全く嬰兒が睡りついたのを發見して、初めて彼はいささかほつとすると、新らしくいかにして嬰兒を養ふかに、はたと打つかつて、突然彼はお先まつくろな當惑にうろたへ上つたのであつた。そして指を口中にしやぶつたまゝで、死んだもののごとく泣き疲れて睡りこけてゐる嬰兒を遠くから、おそるおそる抱へたまゝで、彼は當惑のあまりのそりのそり、行燈のぐるりをまはり出したのである。戸惑ひ乍らも、狼狽し乍らも、一心こめて考へつめると、漸々彼にも事件の經過がのみこめ出したのであつた。

藩主三宅侯がお鷹狩りの砌りに、馬鹿につける靈薬と言つたのは、これであつたに違ひないと考へついたのであつた。

それに氣がつくと彼は諸事もろもろの事件に脈絡として胸中一導の見當が今ここで出來上つた樣に思へたのであつた。

その一導の見當を辿りさぐつて行くと、彼は君公と、妾女が兩端に相連なつて結びつけられてゐる事を、初めてはつと發見したのである。とたんに彼は心身が怪しくもやもや、もやの中に吸ひ寄せられるのを、翕然としてかんじたのであつた。そしてからだ中蜘蛛の巣にでも引つかゝつた樣な當惑の表情をつくると、彼はのそりのそり又行燈のぐるりを巡はり出した。

嬰兒はすやすや腕の中で寢入つた。とにかくと考へつくと、そつと彼は嬰兒を、しめつぽい褥の中におろした。そしてぺたりと、その枕元に坐り込んで、ほつねんと又彼は考へ込んだのである。

考へてみても、そのもやもやは、只もやもやとして、もやもや以上に決して考へ樣もなかつた。寧ろ刻々、折り重なつて濃度は密集して來る樣にかんじられるだけで、何等明らかな血路は一條さへも發見出來なかつた。

對手が藩主とあつてみれば、遙かに泣く兒以上に思へた。それさへ考へ出すと、先づ彼は頭からのつぴきならぬもやもやに恐れ入らざるをえなかつた。

そして彼はつい恐れ入つた樣に、その場に首を垂れてゐたのである。とたんに彼は、次の間で、御鷹がばさりと眼をさましたのをきゝつけたのであつた。と一緒に彼ははじかれたごとく、はつと我に立ち歸へると、口をすすいで御鷹の御機嫌奉仕に罷り出たのであつた。

それと入れ違ひに、嬰兒はその物音で再び眼をさましたものか、火のつくやうに泣きわめいた。鷹の餌を片手に遙かつまんだまゝで、伸び上る樣にし乍ら、彼は尻をもぢもぢさせた。

鷹はとろりと、とぼけた眼をし乍ら促す樣に、こつこつッと、とまり木を嘴でつッついた。はつとする樣に半ば平伏し乍ら、慌てて彼は又、餌を遙かに嘴近くへ持ち運んだものであつた。その間も嬰兒は、兩足をばたばたさせて、ひいひい聲を張り上げた。

たまりかねてはきよときよとし乍ら、泳ぐ樣に腰を浮かすと、つい狼狽のあまりつまんだ餌を子供の方へ慌てまくつてさし出したのであつた。何程の心得もない、二羽の御鷹は、その餌の方へ向き直り乍ら又こつこつと催促したのであつた。

三度びはつと平伏して、彼は遥かに餌を運んだのである。

運んだ餌を一口にぱくりと鷹が啄んだのをふと見て彼は偶然にも、大なる發見が偶然として湧き上つて來たのにはつと氣がついたのであつた。そして、且つて一度もそんな例はなかつたごとく御供餌半ばにして、餌壺も餌箸もそのまゝそこへ投げ出すと、殆んど血相換へ乍ら、彼は厨房へ駈け込んだ。

皿や小鉢を引つくり返へす樣にして、初めて米櫃を見つけ出すと、彼は胸とどろかし乍ら、米をすりつぶしたのであつた。やがて不完全乍らも手製の重湯を造りあげると、彼は先づにやにやとやり乍ら、大どんぶりにあぶれる位たつぷりと盛りうつして、抱へるやうに嬰兒の所へやつて來たのであつた。

ほどよく指先になすりつけては、大凡その呑み加減を見計つて、彼は嬰兒の唇へ運んだのであつた。なくなると嬰兒は、夢中で指先に喰みついた。又新らしくたらし込むと、うるんだ眼をくるくるとさせ乍ら、ごくごくのどを鳴らすのであつた。そのたび嘉平も釣り込まれては、ごくりとやつて、終始わけもなく、にや〳〵と薄笑ひを洩らし續けた。

生憎くと朝から表は、花ぐもりだつたのである。

その一刻ばかりして、なに故か非番の嘉平に出仕の命が屆けられたのであつた。

思案に餘つて、嬰兒は小脇に抱きかゝへると、彼はとぼけた馬鹿面をして藩主三宅土佐の面前にのそのそ罷り出たのであつた。

左右に居流れた近侍の面々が、袖引きあつてクスクス笑つてゐるのも、萬更氣がつかないわけではなかつたが、とにかく彼はなんとも仕方がなかつたので、抱いて來た嬰兒を先づ疊の上へごろりとねかすと、やがて猫背をまるめて平伏したのであつた。

「ほう。今日はそち、珍らしい土産物を持つて參つたなう。」

氣のせゐか君公は、何んとなく屈託がなささうな樣子で先づさう切り出したのであつた。

嘉平も仕方なし、
「へえい。」と言ふよりやむえなかつた。
「何才ぢや。」
再び屈託がなさゝうな、御聲がかゝつたのであつた。様子が變つてゐるので、なんとなく嘉平は戸惑ひして只、
「へえい。」
と又答へた。
「はてはへえい才と見えるの。三毛か斑か毛並はどうぢや。」
少しく笑ひ聲を含み乍ら又遙かにさゝうお聲がかゝつたのであつた。益々戸惑ひして、彼はいきなりはつと疊にかうべをすりつけたのである。
その時嬰兒は、何を感違ひしたものか、嘉平の脇で寢ころび乍ら、兩手をへな打ちふつて、なにかひとりで興じ出したのであつた。
「ほう。生きてゐるの。その歯はどうぢや。まだ一本も生えて參らぬか。」
一層笑ひ聲を含んだ君公の御聲が又遙かにかゝつたのであつた。愈々もつて彼は、恐れ入つたもののごとくへたばりついた。
そして、何がためにそんなことを一々君公が言ひ募つてゐるのか、考へに苦んだ。そしていつ迄かうやつてゐたらよいのか、見當に苦んだ。
嬰兒がばたばた、何んに興じてか、至つて上機嫌なのに、又氣がつくと彼は益々氣が氣でなかつた。とたんに又君公からは、
「嘉平。」と言ふ御聲がかゝつたのであつた。
はゝと二度びへたばりつくと、
「女子にかはいがられると言ふものは、ずゐ分と良いこころもちか致すなう。」

續いてさうおつしやつたのであつた。その時嘉平は、急に又もやもやが眼先にちらつくのを、はつきりとかんじた。

しかし君公はお構ひなく、

「そち同樣、そちの妻女からずんと予もかはいがつて貰つたぞ。凡て女子はういものぢやなう。あはゝゝゝ……」

又さう言ひ乍らかんからと笑ひ出したのである。

「大變に仏りまする。」

と言ひかけて嘉平はくらりと危ふくのめりさうになつた。そして氣のせゐか、がんがん、頭の中が鳴り出したやうにかんじた。

それをこらへる樣に、くそ力をこめて眼をとぢてゐると、なにかがやがや遠くの方で笑ひざゝめくのが耳についた。同時にばたばた、人の足音がこれも遙かに聞えたらしかつたが、やがてしんかんと水を打つたやうな靜けさに立ち歸へつたのではつと氣がついておそるおそる面を上げ乍ら半ば上眼でそつと伺ふと、嘉平は嬰兒と只二人、大廣間の隅つこに、いつのまにかおいてきぼりにされてゐたのを、初めてれきぜんと發見したのであつた。

まるで鼻でもつままれたやうなかんじで、彼はとにかく立ち上ると、又嬰兒を抱いたまゝ、とぼけた馬鹿面で屋敷へ下つたのであつた。

道ゆく人迄がとやかく彼にからかつた。御門番の足輕迄が、それとなく彼をあざ笑ひしたらしかつたが、凡てに無關心な馬鹿面で、のそのそと屋敷へ立ち歸へると、彼は嬰兒をねころがしておいて、又ぼつねんと坐り込んだのである。

そして只默々とかしこまつたまゝで、いつ迄もいつ迄も、考へるともなく考へないともなく、ほんやりとしてゐたのであつた。時々嬰兒がむつがると、はつと取りのぼせてまごまごするが、やがて又おとなしく靜まると、彼はけろりかんと馬鹿面をして、いつ迄もいつ迄も坐り込んでゐたのであつた。

その以後、城下の者達迄が、なにかと彼にからかふ樣なことがしばしばあつた。同藩の面々に至つては、わざわざ彼の所へ立ち寄つて、言はでもがなのこと迄言ひ乍ら、ゐこつに彼をいぢくりまはす樣なことが殆んど毎日あつた。或る者に至つては、承知し乍ら、

「嘉平どの、近頃妻女を御見うけ申さんが、どうなさつた。板の間かせぎにでも參られたか。」

そんな風にいたしめる者さへあつた。又或る者に至つては、

「妻女からことづけを賴まれて參つたによつて、內緒に申さう。」

そんな風な噓をつくつて、勝手にどんどん上りこみ乍ら、無人は百も承知のくせに、わざわざ酒なぞ用意して來て、そら燗だ。そら肴だと、うろたへてゐる彼を意地になつて、まごつかせる者さへもあつた。

でないものは、妻女のお蔭で今に五十石取りに出世するの、一日おきには妻女が忍んで歸つて、お殿樣のおあまりをちやうだいするのと、ろくなことは言はなかつた。

なかには又、藩主だつてなんだつて、女がたきはめがたきだから、一刀のもとにずばりとやつちまへ。なぞとさもさも義憤に堪へないやうにけしかけ乍ら、蔭でぺろりと赤い舌を出すやうなのが一人二人はないでもなかつた。

それらのすべてを、只半場嘉平は無關心に、無抵抗に、けろりと馬鹿面でききながした。實に何等反抗らしい反抗も、抵抗らしい抵抗も、ほんの少しさへ心に彼はかんじなかつた。

只時々、例の怪しげなもやもやのために、心身共にかくらんされる事がないでもなかつた。がしかしたとへどれだけ、彼がそのもやもやの中から一條の血路を發見せんために、うろたへもがかうとも、對手はとにかく藩主であつた。その藩主と言ふ一端に、かちりとさへ打つかつても、彼は卽座に只恐れ入つたもののごとく、當惑のみを感じるだけであつた。實に凡てに對して、彼は無抵抗に、無感覺そのもののごとく、見えたのであつた。

これ迄も藩士のうちで、君公に妻女を召し上げられた者は、長くて十日、早ければ五日位で、又鶴の一聲で召し下げられた者が多かつた、不思議に嘉平の妻女は、十日過ぎ、二十日過つて、已に一ヶ月にもなんなんとするに不拘、召し下げられさうな氣も見えなかつた。

怪しからぬ下馬評を下す藩士の中には、君公土佐守が、嘉平の妻女に、暇とらさうか、と言はれたのに、彼の妻女に限つて、

「いつ迄もいつ迄もお情けうけたうムります。」と言つたとか言はないとか、あらぬ取沙汰をする者があつた。

妻女が進んでか、君公が離さないのか、とにかくやがて二月になんなんとすると言ふのに、尙ほ妻女は歸りさうな氣配さへなかつたのであつた。

召し上げられた妻女達が、又召し下げられる間際には、たいていこれ迄何程かの、理由不明な、實に有難い御加增の、御取沙汰があつたものであるが、嘉平に限つては不思議千萬にも加增はおろか、それらしい樣子さへ全然なかつたのであつた。

ばかりではなかつた。丁度五月朔日の深更である。やがて二更に垂んとするころほひ、突然君公の御使ひと稱して、且つて彼が妻女を迎へに參つた事のある近侍が、物々しく三名程の伴ぞろひを召し連れて、いきなり嘉平が屋敷へ訪れたのであつた。

そして、頭から御下命である。と言ふことを先づ言つておいてから、實に途方もない下命なるものを唐突に嘉平に申し傳へたのであつた。それに依ると、嘉平が嬰兒は子の年生れと心得るに依つて、嬰兒の生膽を直ちに取り出して獻上しろと言ふのであつた。

その生膽は不妊症の御藥りに用ゐると言ふ事をおん自らおつしやつたと言ふことだつたのである。特に申し聞かするが、召し上がられるのは、卽ち其方妻女であると言ふ事迄近侍はお爲ごかしにつけ加へたのであつた。

畏まつて下命は逐一聞くことは聞いてゐたが、きゝ了ると流石に嘉平は眞靑になつた。常なる彼ならその場にも當惑と狼狽のあまり、只ほかんとうろたへるに過ぎなかつたが、しかし今は不思議にも、きつとそつ齒を喰ひしめて、只眞靑に靑ざめたまゝ、まじまじ近侍を見守つたのであつた。

彼自らも亦不思議にも、全身が冷え冷えと冷たくはつきり透明にひきしまつて來るのを充分かんじたのであつた。そして明らかに心身が、只一點に勢ひこめてみるまに力強く集中されるのを實に充分かんじたのであつた。

その一點こそは、實に彼をして初めてはつきり、積極的なる抵抗を彼から導き出したのであつた。主命も下命も、その一點の前には、不思議千萬にも實に他愛なく、一擊の元にはね返へされる樣にかんじたのである。

そして彼は、實に言語も明晰に、

『滅相なことに厶ります。』
きつぱりと拒否の意味を答へたのであつた。その時彼には、君主もなにも全然考へられないと言つてよかつた。後難も結果も、まるで念頭になかつた。只からだぢうにぎつしり詰つてひしめき合つてゐるものは、無心なる嬰兒一人のみであつた。

嬰兒一人への奇怪なる執着と怪しげなる亢奮ばかりであつた。そして再び明晰にかぶりさへ打ちふるふ樣にして、

『滅相な、滅相なことに厶ります。』

さう言つてのけると、しかしいつのまにかうろたへ上つて、彼はうろうろし乍らかばふがごとく褥の中の嬰兒によりそつたのであつた。

近侍も少しく呆つ氣にとられて、やがてそのまゝ歸へることは歸つた。歸つたあとでもその夜明け迄、嘉平は不思議に心身が彈力に充ちて、なんと言ふ事なく、隨所々々が、ふるへ上る樣にかんじた。

その早朝、早速にいはゆる後難が、嘉平の心邊におそひかゝつたのは、言ふ迄もなかつた。同じ近侍の御上使によつて

『こんたび主命に相背き候段、重々不行屆に付切腹にも申し付くべきの所、特別の計ひを以て、卽家格秩祿召し上ぐるもの也。』

と言ふ一札がそれだつたのである。序で乍ら近侍は、今日夕刻迄に間違ひなく引き拂ふ事迄つけ加へたのであつた。

嘉平は、遙かに低くへたばり乍ら、

只默々と無言のまゝで、そのおん趣をうけたまはつてゐたのであつた。そして上使は事足れりと言つた顔つきで、二匹の鷹を先づ恭しく捧げ持つと、そのまゝさつさと引揚げたのである。

つひそこ迄至るに及んで、死せるがごとくに弛緩してゐた嘉平の心身はもろ共に、初めて強くひきしまつて來たのであつた。ぢつと暫く畏まり乍らも、彼は總身の末梢神經迄が、にはかに鋭く活氣さへ呈して來だしたのを、實にはつきりかんじたのであつた。

全く今迄諸事もろもろの一切に對して、まるで無感覺に、無抵抗であつた彼の總身は今にして、つひに外から內から、

反響と抵抗とをもろ共に、併せかんじ出したのである。

さなきだに裕福でなかつた彼は、たとへ特別の有難い計ひたり共、秩祿に至る迄召し上げられては、當惑どころか明白に、はげしい反抗をかんじないではゐられなかつたのであつた。

殊にその原因が、只愛兒に對する執着を、何んの僞りもなく表明したと言ふ事に歸因してゐると考へられる限り、只反抗のみならず奇怪な不審さへ、彼は併せかんじたのであつた。

そして今迄もやもやのまゝで、只終始恐れ入らねばならないごとく、當惑のみを強ひてゐた凡ての濃霧が今にして、飽く迄彈力を充ち伴ひ乍ら、敢然明晰透徹として反抗の一點にきそひかゝるのを、初めて嘉平ははつきりと知りえたのである。

その焦點の範圍は只單に、一君公三宅土佐に限らなかつた。彼を馬鹿平と呼び棄てた、同藩の面々のみにも限らなかつた。

つねになにかとからかつた一般城下の者らにも限らなかつた。又彼をふり棄てて、平然として顧みなかつた一妻女にも限らなかつた。

天下天上一切が、凡て一切もろもろが、擧げてもつて彼の反抗の、敵手對手のごとく今は彼に考へられたのである。實に森羅も萬象にも共に嘉平は奇怪なる、反抗をはげしく感じ覺えたのであつた。

やがて彼は青ざめて、かたくそつ歯を喰ひしめると、別人のごとき表情で、突然怪しげに呻き乍ら、實に蹌踉として立ち上つた。

そしてそのまゝ室ぢうを隅から隅迄改めてゐたが、つひに敢然として意を決すると、須臾の間に家財をとりまとめて、只取りまとめたまんまで、夕刻と言はずその足で、わなわなと全身を痙攣させ乍ら、しつかと嬰兒を抱きしめて、いづこにとなく彼は立ち去つたのであつた。

その夕刻、嘉平は一入青ざめた顏つきをして、眼ばかり怪しく輝やかし乍ら、やはりそつ歯を喰ひしばつて、嬰兒もしつかと抱いたまゝ、田原城外をゞろゝろとさまよつてゐたのであつた。

その時ひそかにわが嘉平は死を選んでゐたのである。天下天上もろもろに、彼が最後の反抗をこころみんと企てて、彼は唯一つなる死を選んだのであつた。

しかも彼は縊死を選んだ。縊死による自殺が、いかに侍全體を効果的に強く侮辱するか、渾身の智慧をふり絞つて、實に彼は侍にあるまじい縊死を選んだ。縊死による自刄が、いかに君公三宅土佐を、その土佐の一藩士として、どんなに効果的に侮辱するか、實に彼は縊死を選んだのであつた。

かつ又侍の妻であつた、彼の妻女をいかに、効果的に侮辱するか、實に彼は縊死を選んだのである。

そしてその縊死を選んだ事が、天下天上もろもろを、只もろもろと言ふに止まらず、つひには自分自身さへ、併せ侮辱することであるのを、彼は尚ほ大いに考へたのであつた。

大いに考へたばかりでなく、その自らをも併せ侮辱することが、やがては天下天上の、森羅萬象もろもろに、只最後なる唯一つの、反抗を充分企てうるとさへ、半場嘉平は必死になつて考へたのである。

がしかし、果して藩主がそのために、どれ程の侮辱を事實に於てかんじるかどうか、それは彼の問ふところでなかつた。又妻女が、又藩士達が、そして又天下の一切が、果してどれ程實際に、かんじうけるかどうか、同じく彼の問ふところでなかつた。

只、實に只、彼が最後なる、唯一つの企ての反抗が、半場嘉平に執つて、最も効果あるものとして考へられさへすれば、それでもつて彼は、充分滿足が出來得たのであつた。

そして彼は已に死人のごとく、眞青に青ざめて、同じやうに眼ばかりぎろりと怪しげに輝やかし乍ら、やはりしつかと嬰兒を抱いたまゝで、夕暮れ立つた田原城外を、うろうろ跣足でさまよつてゐたのであつた。

その翌朝、天氣晴朗の朝陽を滿身にうけた、半場嘉平の死骸が、田原城外大手門の脇の、大きなさるすべりの枝から、ぶらりと往來のま上にぶら下つてゐたのであつた。

しかし、その死骸のま下には、當才程なる嬰兒が、重湯の這入つた大どんぶりをかゝへるやうにして、ごろりとその木の根つこに寄りかゝり乍ら、無心にくるくる顔ぢうを輝かしてゐたのであつた。

そして枝から枝を搖り動かして吹きぬける朝風のために、前の御鷹匠五人十石取り三州田原の藩士半場嘉平は、土色になつたへんぺいな顔に、ほかんとその齒をむいたまゝで、ぶらり、ぶらりとからだ全體を、風のまにまにゆり動かしてゐたのであつた。（完）



舞踏

室生犀星

舞踏のある晩であつた。
盛りあげた薔薇のやうな異國の小鳥たちが美しい杏色をした肌衣に
みな日本の夜露を含んで
劇場の廊下いつぱいに立ち匂うてゐた。
耳輪や頸飾りや扇や手提袋や
桃色や緑いろや乳色や
さういふ一さいの翼ある色が動いてゐた。

それらの外國婦人のあひだに
なりの低い日本の娘が白魚のやうに
しなやかな羅(うすもの)を着け

内氣な白足袋のさきをぴんとそらせ
さうして靜かにはづかしさうに歩いてゐた。
からだの圓みをなだらかに辷る縞物に
みな扇のかげに小さい脣を隱してゐた。
日本の娘の美しさは心を惹いた。

かれらは一樣に人生がいかに愉しいものであるか
貧乏はいかにいやしいものであるか
さういふ顏つきをしながら
美しい足さばきをそろへ
あるものは青いセリィ酒を飲んだりした。

王女や小鳥や孔雀のむれは
間もなくパブロァの舞踏を見た。
粉つぽい西洋紙がまるめられ
音樂のまにまに舞ひ沈みながらゐた。
どこから這入つてきて止つたのか
肉じばんをはいたパブロァの
長いしなやかな足さきに
青い一疋の蝗が止つて足搔いてゐた。
それも知らずに花を抱いたパブロァの

人の善いあいさつがみんなを喜ばせた。

草深い日本の暑い秋ぐちに
肌白粉をふいてゐたパブロアは
膝の上にとまつた青い一疋の蝗に驚いた。
それを窓口へ棄てたあとで
どこか場末の興行でそれを見たことのあるのを思ひ出した
それは露西亜だつたか
亜米利加だつたか
倫敦だつたか
それとも避暑地の食堂で踊つたときだつたか思ひ出せなかつた。

劇場のそとでは
孔雀や王女や小鳥など酔つたきもちで
秋ぐちの夜つゆに肌をさらしながら
くるまや自動車に乗り込まうとしてゐた。
月も星もない暑い晩であつた。



黒谷夜話

中里介山

二

その次の晩の事であつた、駿河國浮島ヶ原の無住の古寺の一間に燈をともして其の下で御幣を刻んでゐる一人の壯士があつた。細面でちよつと見た處は柔和な人であるらしいが、つら〱見れば秋の夜の肌寒い處がある。思ひ合はせると、これが河内の國の天野の四郎だ。

此の曉、足柄の横走關を越えた處で、土地の老人が熊谷主従に向つて斯ういふことを云つた。

『この曉方、上方より送られて參りましたといふ美しい女房を後から追ひかけて參りました壯士が奪ひ取つて連れ戻りました。女房を送つて參りましたのは多勢でありましたが、追ひかけて來た壯士は、たつた一人でございました、そのたつた一人の壯士の爲に多數の附添がどうにもならないで、おめ〱と其の女房を奪はれてしまつたさうであります、壯士は女を多勢の手から奪ひ返して悠々と此の街道を引抱へて參るのを見届けましたが、土地の者とてもどうすることも出來ませんでした、その女房樣はお若くて、それは〱お美しい方でございました、——左樣、その壯士の方も細面でちよつと見た處は柔和なお人柄のやうでしたが、

あとで聞いて見ますと、それは河内國の天野の四郎と云つて鳴り響いた强盜の張本ださうでございます、道理で誰も懼へ上がつて手出をする者がありませんでした」

その天野の四郎がこゝで、しめやかに御幣を刻んでゐる。果して天野の四郎ならば、その奪ひ返して來たといふ若い美しい女房は何處にゐる、また何しに、わざ〳〵東海道くだりまで其の女房を奪ひ返しに來たのだ。

『まだ泣いてゐるな、所詮泣いたつて無益だ、涙の海が涸れるだけで救の船は動かない、拙者に向つて慈悲を乞ふのは風に逆つて帆を張るのと同じことだ、何となれば、拙者は與へることが嫌ひで奪ふことが好きなのだ、見給へ、拙者は斯うして暇があれば御幣を刻んでゐる。して此の御幣を何の爲に用ゆるのだと思ふ、容子を見て步いて此處と覺しい處の屋の棟に此の御幣を立てゝ置くのだ、御幣を立てゝ置いて三日の以内には必らず其の家の何物をか奪うて歸るのだ、たとへば其の家に金銀財寶があれば金銀財寶、美男美女があれば美男美女、およそ人の珍重がるものを奪ひ來るのが、こちの仕事だ、樂みだ、獨りで往つて、袋の中のものをさぐるやうに取つて來る事もある、また手下の者共を配置して用意嚴重に强奪して來ることもある、時には、いたづら心から妖怪變化の眞似をして人間共を煙に捲いてあとをくらまして戻ることもある、一たび此の御幣を立てられた曉は、其の家に何事かの犧牲が無くてはやむものでない」

天野の四郎は斯う云ひながら、やはり傍目もふらずに御幣を刻んでゐる、さう云はれて見ると此の次の間で泣いてゐる人の聲が聞える。

『わたしの身體を奪うても心を奪ふことは出來ませぬ――』

半ばは嗚咽の聲で斯う云つた、これはまさしく若い女の聲である。

『なんと云はれた、身體は奪ふとも心は奪ふことが出來ない――成程、今はさう云ひたいだらう、それがまた實際、張りつめたそなたの心でもあらうけれど、拙者が聞くと其の言分が、すべての女を通じて定まりきつた型のやうな文句で、徒らに笑止を催すの種に過ぎない、由來、身體と心とは二つのものではない、二つのやうで實は一つのものだ、心を自由にするものは身體をも自由にすることが出來る、身體を自由にする者は、やがて心をも自由にすることが出來るのだ、いづれ思ひ當る時があるから、それまでは瘦我慢をしてゐるが宜い」

『身は汚されても心は汚されませぬ、命は殺されても、魂は生きて居ります、わたくしの身も心もたゞ一人の愛する人に捧げました、誰が此のまごころと、此の戀とを奪ふことが出來ませう、惡魔に見込まれた、わたくしは其のわなから逃れる力はありません、けれども卑怯な力で押へられた、わたくしは侮辱の心で其の人を見てゐます、その力が強ければ強いほど、わたくしの心には其の人を賤しむの念が加はります、本當の勝利は心から服して身を捧げられる處にあるのです、心に侮られて、ぬけ殼のやうな身體を自由にして喜ぶ男子は拾ひ首をして功名をする雜人ばらと同じことです、男子の譽れでもありません、さうして汚された女の恥でもありません』

『笑止、笑止』

天野の四郎は刻み終つた御幣を竹を裂いてはさんで其のかつかうをながめながら一方には冷笑を含んで、女のいふことを聞き咎めるが如く聞き流すが如く、

『やつぱり、二つの迷ひに混亂してゐるな、身は汚されても心は汚されぬ、誰もいふことだ、形は征服しても魂は征服されぬ、弱い者の爲には恰好の申譯だ、けれども其れは眞赤な嘘だ、形を奪うたものが本當の勝利者で、心をどうのといふのは弱者の泣言に過ぎないのだ、たゞ、それだけでは譯るまいが、やがて事實が證明さる時があるから覺えてゐるが宜い』

『いゝえ、〳〵、三軍も帥を奪ふべし、匹夫も志を奪ふべからずと、昔の聖人が教へました、わたくしの心も此の一筋より外に誰でも奪ふことは出來ませぬ、たゞ一人より外には此の愛情を捧げることは出來ませぬ』

『待て〳〵、孔子樣まで引き合ひに出して、我を張つて見るならば、わしも、もう少し深く云つて聞かさう、形を奪うたものが本當の勝利だといふことの道理と事實とを説いて聞かさうか……成程、そなたの今の心持は今云つてゐる通りに間違はない、心ぞ命と打ち込んだ戀人が天地の間にたつた一人あるといふことは、拙者もよく呑込んでゐる、親を捨て兄弟を捨てこの世の榮華を捨てゝも其の戀人に捧げたい悄い心持も充分に知つてゐる、けれども其れが本當の眞心だと思ふと間違だ、表裏をわきまへぬものは、かりそめの物を眞實と見、眞實のものをかりそめと見る、戀といふものは、決してさほど眞實なものではない、…………』

『あゝ、戀といふものが眞實で無くて此の世に何の眞實がありませう、義理を捨て人情を捨て、わが命を捨てゝ悔いぬも

のは戀でございます、この世から未來に連なつて消ゆることの無いのは戀でございます」
「成程、戀に囚はれてゐる間は、左樣に信ずればこそ戀があるのだ、其處まで迷はせて疑ふの餘地が無ければこそ戀がある、戀とや色とやいふものに迷ひきつてゐる若いものは總てさう思つてゐる、けれども、それは眞赤な嘘だ、見え透いた僞だといふことが、戀が冷めた後に漸くわかる、戀にのぼせてゐるうちは決してわからぬ、わかれば戀が無いのだから問答は戀が冷めて見てからの後だ」
「いゝえ、戀には冷めるといふことはありませぬ、世のいたづらの戀は知らず、ほんとうの戀は冷めるといふことのあるべきものではありませぬ」
「いよ／＼笑止、たとへば此の燈火を見給へ、油がある間は此の通り火が盛んで物を照らしてゐる、油が無くなれば消えてしまつて眞暗になる、戀といふのは此の油のやうなもので、油のある間は明るい、明るい間は暗いことを知らない、暗くなつてはじめて明るいものゝ幻滅といふものを感ずるのだ、油が盡きるやつに戀はきつと盡きる――さうして次の油をさせばまた燃え出す」
「戀といふものは一生にたゞ一度のものでございます」
「さうではない、戀は幾度でも繰り返せるものだ、この一皿の油が今夜のうちに盡きれば明日はまた新らしい油の一皿が盛られて、そこに燈火の生命が燃え出して來る、一生に一度の戀といふのは、乙女等が、はじめて男といふものを知つた時に一度だけ云はれる言葉だ、一皿の油がいつまでも燃えてゐるといふのは、たゞ受決經とやらだけの文句にある……見てゐるがよい、遠からぬうち、そなたの戀を此方へ引き向けて見せる、今のそなたの戀路が遠州灘の潮のやうに迅くとも、やがてそれを天野の四郎が留めて見せる、さうして、もとの戀人は忘れるともなく忘れて、この天野の四郎を忘れがたない、ものにして見せる、離れよというても離れられないものにして見せる、その時までは四郎を憎んで居れ、骨身を食ひ裂くほどに憎んで居るがよい」
「聞くも汚らはしいこと、暴力の中から戀が生れることは此の世にはありませぬ、あゝ、わたしは此の儘死んでしまひたい」

『戀は力の中から出るのだ、奪はれた時にのみ成功する、女は其の容貌を以て男の心を奪ふのだ、男はその力を以て女の色を奪ふのだ、お互に奪ひ合つて、それが火花を散らすのだ、人間の仕事は大きかれ小さかれ皆、戀の奪ひ合ひに過ぎないのだ、遠い昔をいふまでもなく、近い間の源平の盛衰を見てもそれはわかる、義朝を殺して其の妾常盤を奪うたのは淸盛の仕業だ、平家が壇の浦に亡んだ時、九郞義經が女院に名を立てた、義經が賴朝に憎まれたのは一つはそれだ、その義經の妾、靜を鎌倉に召して舞はせた賴朝の下心は何處にある、義朝に愛せられた常盤は淸盛にも亦難なく愛せられた。靜が賴朝の意に從はなかつたのは彼女の貞操が强かつたのではない、政子といふものゝ力が强かつたから賴朝がそれを憚かつたまでだ』

『あゝ、女と生れたことが恨めしい、來世は男と生れて、この恨みを晴らしたい』

『復讐は來世を待つまでも無い、男は男として、女は女として强くなりさへすれば宜い、われ等は不幸にして淸盛や賴朝のやうに强くなれぬ、彼等には祖先の歷史がある、わいく共の擔ぐにふさはしい系圖といふものがある、それを持たぬ我等は奇道を行くより外はない、彼等が大軍を率ゐて國を奪ふ時に我等は、手下をつれて物を盜むのだ、白晝堂々とやり難いことを、夜陰ひそかにやるのだ、併し、また盜むには盜むの妙味があつて、盜むにあらざれば味ひ難いものがある』

天野の四郞は此んな事を云つて、刻んで差した御幣を箱の中に入れ古い經机に頰杖をついてぐつたりと疲れを休めるやうな心持でゐると、外に颯と風が吹いて來た、街道の並木が風に搖れるらしい、そこらの草むらも野分に吹かれて、夜の前に落葉のかさく と走るのが聞える。

『風が出たな』

今まで靜かであつた深夜の秋が、さわがしくなつた、吹き出した風は、それからそれと海の波がしらが立つやうに何處もかしこもざわめいて來た。この古寺の中は、さながら孤島の中にあつて、四方の浪の音に驚かされてゐるやうである。

天野の四郞は、つと立つて裏の戶を開けて見た。昨晚はあの通りの月夜であつたが今夜は星の影さへ見えぬ、浮島ヶ原にも富士の裾野にも眞黑な綿のやうな雲が混沌として一面にかぶさつてゐるやうだ、浮島の沼のみが其の間から、時々鉛のやうな光を見せてゐる。

熊谷主従が馬を急がせて浮島ヶ原の海道並木を通りかゝつたのは此の時分の事であつた。

「小兵太、昨夜はあの通りの月夜で、今宵は如法の闇夜だ」

「けれども本來ならば月のあるべき晩でございますから、暗いと云つても眞の闇夜ではございませぬ」

「富士も裾野も浮島ヶ原も眞黒い雲のかたまりがむく／＼と湧き上がつてゐるやうだが、その中にあれ見ろ、ちら／＼と鉛のやうに光つて見えるものがある、あれは多分浮島沼だらう」

「成程、うすら白く沼のやうに光つては見えますな」

「おゝ、風が吹いて來たぞ、ざわ／＼と四方が鳴り出して來た」

「見渡すところ海道には人つ子一人通りませぬ、あの賑やか黄瀬川の宿も横を向いて通りました、車返しでも駒をとゞめようとはしませんでした、斯うして何處までも夜を好んで、上方まで晝は寢て夜道だけを通すのでございますか」

「さういふ譯ではないが結局夜道がさつぱりしてゐる、今日は駿東の民家で轉寢をしてゐると、家の前に馬を休ませた鎌倉武士が云ふことには、熊谷次郎が鎌倉を飛び出した、鎌倉殿の仰せで其れを引留めに來たと、口々にはやしてゐた、多分、さういふ煩はしい事があるだらうから、こゝ二三日は夜道を急がせて晝は休息することになるのだ」

「左樣でございますか、それなれば其のつもりで馬をいたはります、ざわ／＼と頻りに風が吹いて參りました」

小兵太は馬の口を取りながら、荒涼たる浮島ヶ原の夜の風が枯條を鳴らすのを心さびしく聞いて進んで行つたが、

「成程、こゝは浮島ヶ原、やつがれは其の時分はほんの子供でしたから、お作を致すことが出來ませんでしたが、よく出陣した鄕黨の者から軍話を聞きました、佐々木四郎殿が鎌倉殿から生唼を賜はつて大軍に追ひついたのは此の浮島ヶ原といふことでございましたね」

「あゝ、さう／＼、丁度、雨つゞきで富士の裾野の雪が溶けて富士河の水が増したものだから六萬餘騎の大勢が暫らく此の浮島ヶ原で食ひ留められたのだ」

「その時の思出を、あなたのお口からお聞き申したいものです」

「あの時の逸話は梶原源太と佐々木高綱の馬爭ひに留めを刺す、京へ攻め上るには是非共、宇治勢多の川を渡らねばなら

ぬ、それで良き馬を持たねば功名が出來ぬといふ處から、誰も彼も馬の詮議で血眼になつたものだ』

『郷黨のものが、よく一つ話に致しましたよ、その時の馬揃へを立板に水のやうに述べて聞かすものですから、やつがれも暗記してゐるのでございます、上總の國の介八郎廣經殿は磯といふ馬、下總の千葉介綱胤殿は薄櫻、武藏の平山武者所が目糟毛、澁谷の庄司重國殿は獅子丸、畠山庄司重忠殿は秩父鹿毛、大黒の人妻、高山葦毛といふのを引かれ、相模の三浦小太郎殿は鴨の上毛白浪、伊豆の北條時政殿は荒磯といふ馬、さうしてやつがれの御主人、熊谷次郎直實殿は權太栗毛を引かれ、大將軍九郎御曹子は薄墨青海波、同じく蒲の御曹子は一霞月輪といふのを引かれたと聞いて居りました』

『感心によく覺えてゐる』

『兎も角も、東國の六萬騎が、馬物の具を競うて此の浮島ヶ原をうづめた光景は素晴らしいものと想像いたします、やつがれも願はくば其の時にお伴を致したうございました、それに引かへて今宵は此の通り眞暗な原の中を、こつそりと忍んでひく體たらくでございます。御主人樣、あなたは昔の事を思ひ出して、どんなお心持になりなさいますか』

『何とも思はないが風が少し寒いな、雨を含んでゐるやうな風だ』

『左樣でございます、降るかも知れません、時雨の時候でございますから、颯と降り出して颯とやむやうなことになると困ります』

二人は期せずして天を仰いで空模樣を見た、今にも落ちて來さうな空である、若し、降り出して來たら、さすがに何れへか宿を求めねばなるまい、さりとても何處に宿の當りがあるか、それは二人共考へてゐないやうである、引返せば海邊に名だたる遊女のゐる黄瀬川の驛もある、車返しや千本の松原あたりに宿りを求めて得られない處はないが、この浮島ヶ原の中の宿を過ぎてしまつては、恐らく廂を貸してもらうべき百姓の家もあるまい、けれども二人は雨を懸念して引返すといふことを云はなかつた。

『落ちて來ましたぞ、落ちて來ましたぞ』

小兵太は忌々しさうに踏みとゞまつて空を仰いだ時に熊谷次郎は海道から左へ入り込んだ沼のほとりに一點の火光を認めた。

時雨の空がハラ〳〵と雨を落して來たのが二人は右へ避けて彼の一點の火の光を目ざして馬を早めた。それは人も住み捨てたらしい古寺である、二人が此の寺の軒へ身を寄せた時分に雨が颯と音をなして追ひかけて來た。

「物もう」

小兵太は早くも此の寺の扉に立つて案内を請うて見たが何等の返事が無い、

「物もう」

二たび音なうたけれど返事が無いのみか、最前はたしかに此處で火影が見えてゐたのに今到着して見ると其れが無い。いかさま住み捨てられて長いことになるらしい寺で、火影のあつたと見えたのが見誤りかも知れない、雨にさらされた燐骨が、夜な〳〵光を發するのに導かれて此處まで來たかも知れない。

「物もう、御住持はおゐでなされぬかな、お留守居の衆は居らぬか、御返事が無ければ此のまゝ御無禮を致しますぞ、我我は道に迷うて雨に追はれた旅の者でござる」

小兵太は念の爲に、これだけの挨拶をして扉へ手をかけて押して見ると、ミシリ〳〵と音がする。

「誰だ」

この時はじめて返事がして人が中から歩み出したものゝやうである。

「道に迷うて雨に追はれた者」

さすがに小兵太は扉を押し破ることを遠慮して待つと、中からパツと火の影がさして、扉が半ば内から開かれた。

「こゝは宿るべき用意がござらぬ、いくらもござらぬ故中の宿か或は車返しあたりまで戻つたが宜からう」

中から面を出した人は紙燭を照らしてゐる、その紙燭の光は寧ろ、自分の面を見せないで外なる人の容子丈けをうかゞふ用意のほどが見える、して見ると此小男も此寺のあるじではないらしい。

「用意が無くとも苦しうはござらぬ、一夜の雨を凌ぎさへすれば」

熊谷は小兵太の應待を補うた。それと共に有無を云はせないつもりか、遠慮をしない氣象のせゐか、早くも馬から下りて階段を踏んで縁の上へと腰をかけてしまつた。

『兎も角も』

中なる人は、近頃迷惑なと云ひたげなのを詮方なく、兎も角もと云つて、この旅人を誘ひ入れる氣になつた。小兵太は早くも摺り拔けて馬をいたはつて、これを程よい軒下につながうとしてゐる、熊谷は緣に腰をかけて踏段の上で草鞋を解いてゐる。

その體を紙燭を照らして後ろから見てゐるのは天野の四郎であつた。

彼は、この思ひがけない新客が何者で從者が幾人といふことを、しかと見極めてゐるらしい。結局、本當に旅路に迷うたもので、同勢は僅かに主從二人に過ぎないといふことを確かに見屆けたが、笠をかぶつて草鞋を解いてゐる主人の何者であるかはまだ見當がつかないらしい。身分ありげな武士であること、その武士も可なりの年配で屈竟の體格をしてゐること。差してゐる太刀も刀も見事なものであること、またちらと見た馬もすぐれた逸物であつたこと、その馬について來たのはたつた一人に過ぎないが、それが如何にも心利いた小冠者に見えたこと、要するに尋常の者ではないと見たけれども、さりとて、自分を追ひかけて來たものとは思はれない。血眼になつて人を追ひかけて來たものには、もう少しゆとりといふものが缺けてゐる。

斯うして先に來てゐれば自分が當座のあるじである、後から來て見れば當座の客である。天野の四郎は、此の客をどういふ風に待遇さねばならぬのか、それは先づ此の客のたちを見究めての上のことと、處が其のたちが容易にはわからなかつた。

草鞋を取つて熊谷は緣の上へ立つと、首に結んだ笠の紐を取つた。

案内に立つた天野は、早くその機會を待つてゐたのだ、あちら向きになつて屈んで草鞋の紐を取つてゐる時には、どうしても其の人相を見ることが出來なかつた、いづれ草鞋を取つてしまへば笠である、笠を取つてしまつた時に、主人公の眉目が現はれる、その時、面魂を調べてから待遇の等級を定めるといふ心構であつた。處が無雜作に取り拂はれた笠の中を見ると、天野は驚かないわけにはいかなかつた。思はず面の色を變へて紙燭を持つてゐた手が慄へるほど意外の感に打たれたらしい。それに頓着のない熊谷は、さつさと寺の中へ入つてしまつた。熊谷が、さつさと寺の中へ入ると、古い根

太が揺れて、可なりの大きな作りだが、家の四隅までが揺れ出しさうである。

天野の四郎が是非なく案内したのは例の御幣を刻んでゐた一間であつた。

『貴殿は此寺のお留守居かな』

斯う云つて熊谷次郎は大きな柱の下へドッかと坐り込んだ、その途端に、やつぱり家がミシリと鳴る、熊谷の立居が荒つぽいのではない、それほど作りが古くなつてゐるのである。

『實は、拙者も無斷で此處へ泊り合せた今宵の先客でござる、あるじといふのは、あの佛壇の蜘蛛の巣の中にござる大日の像かそれ』

天野の四郎も相對して坐り込んだ。坐りながら彼は隙間もなく熊谷の言語擧動から注意を怠らない。

一隅に落着いた熊谷は、全く明け放した心持で、この古寺の一間の容子をながめてゐる、臨時にこしらへた三本足の燭臺に器用に載せられた燈明皿の上には油が豐富にたゝへられてある、そこらに散らばつてゐる敷革や衣裳類を見ると、丁度、只今寢入ばなを我々によつて叩き起されたものと見える。

聊か氣の毒に思つて、この當座の主人の面を見ると、油斷のない眼の色をして始終自分を注視してゐるのに氣がついた。をかしい男だわい、自分こそ黃瀨川の宿か車返しあたりへ行つて暖かく泊つたら宜からうに何の醉興で、こんな處へ獨り寢をしてゐるのだ、熊谷が此の時はじめて不審に打たれて改めて、凝とその男を見構へると、彼は眼を横に外らした。

丁度、そこへ馬をいたはつた小兵太がずか〳〵と入り込んで來て、

『御主人樣』

主人の名を呼びかけながら實は、チロ〳〵と天野の四郎の面を氣味の惡いほどにながめて突立つてゐる。

『此のお寺は變なお寺ですね、遠くから見ると火が點つてゐて、近寄つて見ると眞闇です、人が住んでゐないかと思ふと、思ひがけなく此のお方が迎へに出る、裏へ廻つて馬をいたはつて居りますとな、此の後ろの間にまだ一人の人がおゐでになりますぞ』

『何』

面色を變へたのは當座の客の熊谷ではなくして主人面の天野の四郎であつた。小兵太は、やつぱりヂロ〳〵と天野の面をながめ廻して、

「この次の間に美しい女房が一人縛られて居りますぞ、あれは此のお方のお連衆か、それとも此のお方は、まだあの女房樣のある事を御存じないのか、人が無いと思つた寺の中に人が二人までゐて、その一人は美しい女房樣、馬を繋がうとて裏へ廻つて見ますと、不思議な物音がしますから、壁の間からソッとのぞいて見ますと、たしかにそれを見とゞけてしまひました、一體、この家のお留守居、あの女房樣は、どうしたものでございます」

「あれは拙者の連の者だ」

「お連の衆ならば、何故大事にいたはつておやりなされぬ、殊に若い女房樣ではないか、我々は屈竟な馬でさへも宿へつけば、後生大事といたはつて自分が寢るより先に馬を休ませます、たつた一人の女房のお連をあゝして酷い目に合はせて、一間へ抛り込んで置いて宜いのか」

小兵太は許すまじき色を面に漲らせて天野の四郎の方に詰め寄つた。天野の四郎の面はその時蒼白に變じて、引寄せた太刀の柄に手をかけようとした時、熊谷次郎は猿臂を伸べて天野の四郎の襟髮をむづと取つて引寄せてしまつた」

「河内の國の天野の四郎とやらはお前の事だな」

天野は其の手を拂ひのけようとしたが、熊谷の敵ではなかつた、天野が自己の手下の幾百人を慴服させてゐる自慢の輕捷な身のさばきも熊谷に向つては物の役に立たなかつた。

「小兵太、お前は、その女房衆といふのを助け出して縛られてゐるならば繩を解いてやれ、若し氣絕でもしてゐるやうならば藥をやつて介抱しろ」

「承知致しました」

小兵太は武者ぶるひに勇んで次の間へ飛び込んだ。

天野の四郎を引捉へて動かさなかつた熊谷次郎は、

「憎い奴だ、此の曉、愛甲街道で、大勢守つてゐる中を若い女房を奪つて大手を振つて歸つたといふのは貴樣だな、河内の國の强盜の張本の天野の四郎と名乘つて傍若無人に白晝を橫行した小癪な振舞を耳にははさんでゐたが、思ふ仔細があつて齒牙にはかけなかつたが、斯うして此處でめぐり合うたのは何かのお引合せだ、いつもならば貴樣の素首を捻ぢ切つて捨てるのだが、今度の旅は觀念の旅だから命だけは見のがして呉れる、勝手に逃げて命冥加のお禮を云へ、但、東へ行つ

たら鎌倉の武士に、幾月幾日の夜襲切つた、坂東の荒武者に斬らして懲らしめられたと事柄を告げて物を問うて見よ、天野の四郎もよい敵に逢つて命拾ひしたと名聞にはならうとも恥辱にはなるまいぞ」

「斯ういつて天野の四郎を引かゝへると、形ばかりの火燈口の障子を押しのけて、その間から、空俵を投げるやうに天野の四郎を家の外へ投げ出してしまつた。

そこへ小兵太は面を出して、

「御主人様、あの男をどうなさいました」

「因果をふくめて此處から抛り出した」

「え、あのまゝで、生かして抛り出してしまひましたか」

「観念の旅に無用の殺生は禁物だから」

「それは御了見違ひでございました、彼奴は殺さなければならない奴でした、あなたが殺すのがお忌ならば、やつがれが息の根を止めるのでございました、生かして置くと禍を致す奴でございます、その禍が一人や二人では留まらない奴でございました、無用の殺生ではございません、お助けになつたあなたこそ無益の慈悲をなさいました」

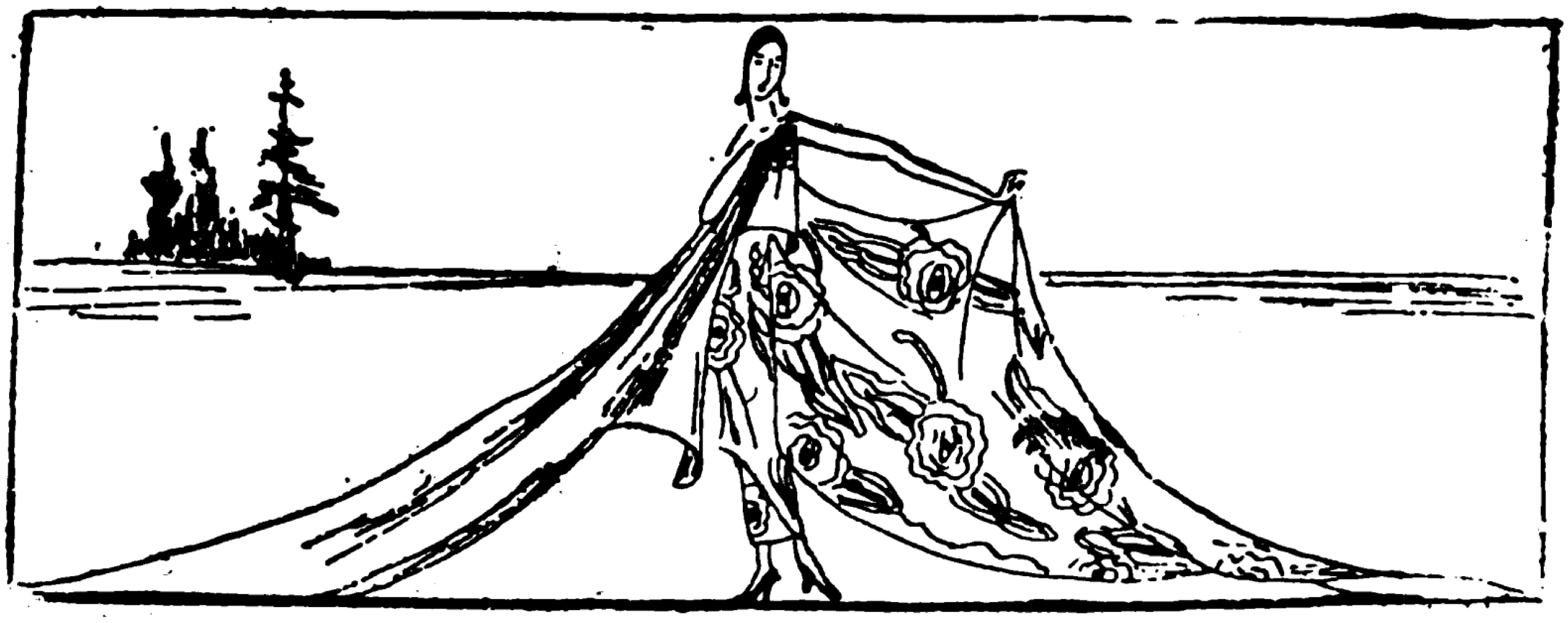
「ふむ、生かして置いたとて何ほどの事があるものか、さて、その奪はれた女房衆はどうだ、無事か、それともあやまちがあつてしまつたか」

「御安心下さいまし、無事でこの通り此處へお連れ申しました」

さきに天野の四郎がわだかまつてゐた燈火の下には花恥かしい美人がゐる、なほ恐怖から全く醒めないで半ば、裸體のやうに亂れて泣き伏してゐる、その時、窓の外の闇の中で、帛を裂くやうな人の聲が起つた。

「熊谷の次郎、よく覺えて居れ、今宵の恨みを忘るゝなよ、今宵の拙者が不覺は熊谷を熊谷と知つての不覺ではないぞ、尋常の旅人と見たのが熊谷次郎であつたから當座の位負けがしたのだ、この後、汝が東へ下れば東、西へ上れば西、いづくまでも天野の四郎がついて廻ることを覺えて居れ、千軍萬馬の間を駈けめぐる事では熊谷には及びもなからうが、鬼のやうに現はれ、魔のやうに隱れる天野の手並は遠からず思ひ知る時があらう、それと、一たび天野の四郎の息がかゝつた其の女——越中の前司が娘は泥土に塗れる處まで引き落して、浮れ女のやうな浮き名にさらされる處まで打ち落して見せしめにする、それまでは預かり主に不足のない熊谷に娘を預けて置くぞよ」

これは天野の四郎が闇にまぎれて逃げて行く時の捨ぜりふであつた。



亂舞する焔

加藤一夫

憎みたい
憎みたい
もしほんたうに　お前達を憎めたら
こんな苦しみは　しないですむだらう

そのときは
俺の此の情熱が　憎しみに集注され
憤怨の焔に　自らを燒きつくし
復讐の手段を考へる事に心が緊張し
力を失つた生が戰鬪の意慾にふるひ戰き
苦惱と寂寥とが霧のやうに消え失せ
俺はたゞ
傷ついた猪のやうに荒れ狂ふだらうに

それだのに
それだのに
俺は憎めない

男らしくないと笑はれ
『そんなに弱い男だとは思はなかつた』と
親しいものから憤慨されても
俺はなほ憎めない
いさぎよく別れる事さへ出來ぬ

今も尙俺は
信じて居るからだ
俺のお前への愛をも
お前の俺への愛をも

×

だが　それにしては
どうしてお前は　俺を裏切つたのだ
「私の愛が　酬いられなかつたことを
あゝ　私はどんなに悲しむだでせう」と
あの夜　お前は俺に云つた
妻よ　もしほんたうにさうだつたら
赦して吳れ
なるほど　俺達の生活は
幸福ではなかつた
幾度か〱
俺達の心は離されて居た
俺はお前を憎みさへした
お前も俺を　どんなに怒つたかを
俺は知つて居る

とは云へ妻よ
結婚が俺達の戀愛を屠つたとしても
俺がお前を　どんなに要求し　愛したかを
お前は知らないのだ

一とき——十分　五分　一分

お前が居ないと
俺は俺の家に寂しさを感じたのだ
愛の酬いられぬことを感じたのは
それはお前でなく
俺であると俺は思ふのだ

『わたし　もう少しあなたを理解して居たなら
こんな事にはならなかつたらうに』と
お前は今　泣いてもだえる

あゝ　不幸なる俺達の生活よ
今はもう　歸らない
永遠に寂しい人生を
俺達はおくるのだ

×

お前が俺の家を去つた後で
ふと俺は
お前に宛てた彼の手紙の一つを見つけた
あゝ　その謎のやうな一つ〳〵の言葉が
俺にとつて　もつとも不快な想像を思ひ浮ばせるあの言葉が
どんなに俺を苦しませたらう
くやしい　くやしい
裏切られた事がくやしい

だが　それだのにまだ俺は
お前を憎めない
『何故もつと怒つて呉れないのです』と
お前は云ふ
その心持ちは俺にもわかる
俺は怒つて居る
たゞ憎めないのだ

孤獨なる生よ！

俺はたゞ一人で生きる

×

何時おれは此麼ことを想像したらう?
何時お前は此麼ことを望んだらう
昨日　お前は云つた
「私は最初
あなたを去る考へなんか
毛頭もなかつたのです」と
俺は思ひ出す
お前が家を出るほんの二三日前
麻蒲團が汚れたとて
新しい布片を買つて來て
新しい衣をきせ
日あたりのいゝ緣側でふくらませながら
「普段用には惜しいわね」と
さも嬉しさうに微笑んで居たのを
だれがその顏に
だれがその心に
家を離れてゆくお前を見たらう
お前自身でさへ
それを見なかつたのだ
殘念だ
殘念だ

×

あまりに俺は潔癖すぎたのだ
いや　俺ばかりではない
お前も同樣に潔癖すぎた
その癖俺達はお互に
自分自身の純潔は主張しなかつた
何うしてそれが出來よう
お前も俺も

すでに幾度か傷いたものだ
使徒ポーロと共に
わが肉の弱きを知つて
「あゝ此の死のからだより
われを救はんものは誰ぞや」と
信じても居ない神に祈り求めた俺達だ
それで居て俺達は
互にその純潔を求めたのだ

恐らくはそれにも
理由はあらう
お前と結婚してからこちらへ
眞に俺は何人とも戀した事はないのだから

何うしてあの夜
あの様に俺はもろく絶望したのだらう
何で俺は　あのとき
お前をしかと抱いて離さなかつたらう
俺の潔癖が
お前を俺から離してしまつたのだ

×

あの夜
澤山の來客をうつちやつて置いて
俺はお前を
小田原の海岸につれ出した
お前は
まだ寢つかないで居る與志坊を負んぶして
俺の後について來た

俺の胸は怒りにふるへて居たのだ
俺は默つて道を急いだ
お前は素直に　親しげに
俺と肩を並べて歩るきながら
俺が横濱に行つて居た半日の間の出來ごとを
眞實のこもつた口調で話してきかせた

俺の胸は怒りにふるへてゐた
けれど　俺はたゞ
お前の言葉によつて　俺のその苦惱を拂ひきよめたかつたばかりだ
また　簡單にそれが出來ると思つて居たのだ
俺は正直な告白をお前に求めた
「ほんたうにお前は彼を愛して居るか」
お前は靜に叩頭した
「そんな事は信じられない」
俺は獨言のやうに云つた
けれど　お前はたゞ默したまゝ
俺の言葉に同意しなかつた
俺は絕望した
俺の潔癖が　電のやうに
俺の神經にきらめいた

「仕方がない
自分のいゝやうにしろ」
俺は絕望の聲を放つた
「もう二三日待つて下さい
　何とかきめますから」
お前は柔順に嘆願した
「考へる必要がないぢやないか」
俺はかうお前に云ひ放つた
あゝ　何で俺はそんな事を云つたらう
何でお前を抱いて
そんな馬鹿な事がない　と
云はなかつたらう
それをする代りに
俺はたゞ
どんなにお前を愛して居るかを
明らさまにお前に語つた

『それなら
何うしてもつと早く
その意志を私に示して呉れなかつたのです
今となつては仕方がありません』
かう云つてお前は
砂の上に泣き伏した

『俺は
お前がそれをわかりすぎるほど
わかつて居ると思つて居たのだ』
何等の僞りもなく
俺はお前に云つた

『あゝ　あなたのそのお心を知らないですんだなら
私は苦しみなく行かれたでせうに』
再びお前はさめぐ〳〵と泣いた。
俺はたゞ　不可抗の運命を見た

俺の力が
その運命に勝てない事を諦めた
諦めながら悲しむだ

渚には波が打ち
波がひいた
さながら二人の心の潮のやうに

『大きな船が……』
何も知らない子供が
どんなに眠らさうとしても眠らず
二人の親の間に
何が起つて居るかも知らずに
ひたすらに昻奮した
曇つた空に　月がのぼり
冷たい風が　海面から吹いて來た
子供が風をひくのを俺は恐れた
『もう歸らう』

俺は立ち上つてお前を促した
「はい」
お前も澁々立ち上つて俺について來た

家には　遠來の客のほか
誰もとまつては居なかつた
哲坊は姪の寢床に眠つて居た
俺逹はまた泣いた
「あなた　哲ちやんをつれて來て下さい
哲ちやんを」
お前は狂氣した女のやうに俺に云つた

お前は俺をしかと抱いた
俺はしかしお前を抱かなかつた
俺はお前を抱いた
お前はしかし俺を抱かなかつた
時にはお互に抱いたけれども
直ぐにその抱擁は解けた

十二時　一時　二時　三時
お前は遂に極度に疲れて眠つてしまつた
俺は朝まで一睡もしなかつた
夜があけるのを待ちかねて
俺は外に出た
しかし何處に　俺の靈の安住があらう
俺は再び戻つて來てお前に云つた
「雪　もう起きないか」
「はい」
お前は平常のやうでなく直ぐと起き上つた

お前は　顏を洗ひながら
とめどない涙を拭いて居た
俺は一碗の食も喉を通し得なかつた

食事がすむと
暫くたつてお前は云つた

『私夕方までに歸りますから
ちよつと散歩にやつて下さい』
俺はお前が何處に行くのか知つて居た
俺はお前を拘束することを欲しなかつた

『マヽが歸つて來ない』と
子供達が云ひ出したとき
何で俺はお前を外に出したらうと
再び俺は後悔した
彼と會へば
彼はもう彼を捕へて離すまいと
俺は思つた

運命だ!
再び俺は自分に云つた
喧かましい子供をすかして
『マヽを迎へに行かう』と
外に出た

殘暑の太陽が　猛烈に地上をこがす中を
俺は子供達二人をつれて街を彷徨つて歩いた
けれど　何處にお前の姿が見られよう
俺にひどくやられた尾行が
心地よげに俺の後について來る
子供をすかし〳〵
俺は苦しみを胸にをさめて
家に歸つた

蒸し暑い日だ
十分と俺は一ところに止まつては居られな
Kが來た
俺の顔に悲痛な影を見て彼は心配し出した
俺はしかし何も語り得ない

お前自身のかはりに
車屋のもつて來た　お前の手紙は
俺の心を落着かせた

たゞ　何故お前は
「あなたに愛憎をつかした」と云つて呉れなかつたのだ
一ときの落着いたこゝろが
だん〳〵と亂されていつた俺のこの苦しみをお前は想像が出
來るか

×

成るやうになつたのだ　と
俺は思つた
けれど　お前の去つた最初の夜の
どんなに寂しかつたか
あゝ　俺の胸は狂ひ舞ふ

×

次ぎの朝の食卓が
どんなに寂しかつたかをお前は知つて居るか
二人の子供
久榮　俺
けれど　平常のお前の席は空いてゐる
何と云ふ靜かな食卓だ
子供達さへ滅入つて居る

「叔父さん
　無理にでも食べなけりや駄目ですよ」と
久榮は　まごころをこめて云ふ
だが　何うして食物が
俺の喉を通らう
涙がこみあげて來る
俺はそのまゝ食卓を遁け出したのだ

おひるの食事は
もつと俺に悲しかつた
それは同じやうな滅入つた食卓だ
俺はふと思つた

お前がうちに居たときは
俺は隨分わがまゝを云つたつけなあと

お前のものだつた
俺と同じに
わがまゝは

俺達は赤裸々の自分と自分とで
觸れ合つた
わがまゝと　剛情と
二つの自我の
火花をちらした接觸
俺達は互に
腹をたて　罵り合ひ
憎み合ひさへした
だが　今となつては
どんなにそれが懷しい生活であつたか
どんなに　それが眞劍な生活であつたか

わがまゝを云ひ合ふ相手のない
今のこの生活の
どんなに寂しいことか
俺はいま　はつきりとわかる
俺がお前を愛したのは　また
いま　お前を懷しむのは
お前のこの赤裸々なお前だと云ふことを

お前をやつてはならぬ
お前を俺の家庭から去らしてはならぬ
俺はかう思ひ初めた

運命に反逆しよう
俺の愛を行くところまで行かしめよう
お前は歸らねばならぬ
お前の家は　俺の懷より他にはない
あゝ妻よ
歸れ　歸れ　すぐ歸れ

お前自身の家に
俺はかう叫んだ

お前はしかし新らしい慾望に燃えて居た
その上
彼の執着は蛇のやうに强かつた
刻々に移つてゆく俺の氣分は　再びもとの冷靜に歸つて行つ
た

×

哲坊をつれて
東京へ日がへりの夜　ふと俺は
驛の改札口にお前を見た
俺は驚いた
俺達の顏を知らないもの丶ない驛の人達が俺達の周圍に眼を
集めた

「何處へ行くんだ」
俺は小さな聲で　お前に云つた
お前は懐しさうな眼を向けて俺を見た
「うちへ行くのか」
俺は再び訊ねた
「え丶」
お前は答へた
俺は直ぐ車を呼んだ
お前は步るいて行かうとした
「おい　車に乘るんだ　車に」
俺はお前を無理に車にのせた

何處からともなく
何時とは知らず
彼の姿があらはれて來た
不安の色が彼の顏に見えた
俺はいま一臺の車を注文した

俺が小田原に居る間

いつも俺の敵役をつとめた警察署長が
二三の警官と共に
俺達の車が驛前を立つまで立つて見て居た

家には
KだのHだのFだのその友人だのが集つて居た
みんなはお前の態度に腹を立てた
俺はしかし
腹をたてながらも喜んで居た

彼はすや／＼と眠つて居る與志坊の枕頭に
頭を垂れて居た

お前は急に寒くなつたので衣をかへた
みんなが俺の書齋で話して居る間に
お前は與志坊を抱いて泣きくづほれた
「よつちやん、よつちやん」
寝入つて居る子供を
お前は搖ぶり起さうとした
「いけない　いけない
眼をさましてはいけない」
俺は苦しい胸を凝乎とおさへて
お前をはねのけた
「起きてもいゝ
起こさして下さい」
お前は神經的に泣いた

だが　みんなが歸つて
俺たちばかりになつたとき
お前の氣持ちはすつかり變つて居た
お前は冷酷な　氷のやうに冷酷な強い女になつて居た
俺は　お前の心の内容(なかみ)をわかつて居た
俺の鋭い洞察は　すつかりお前の心を見ぬいて居た
それにしても餘りにお前はヒステリツクであつた
すつかり理性が失はれて居た

十一時をすぎてお前達は
再び俺の家を離れて行つた

お前が　寢て居る子供と別れた光景を
誰が涙と恨みなしに見られたらう

おゝ何と云ふ悲劇であるか
戀を戀する――俺はさう云ふ　科學的な眞理としてさう斷言
する――お前の心
子を懷ふ親のきづな

お前はその一つを選んだ
選ぶべく餘儀なくされた
けれど　どんなにお前の心が強くとも
何うして此の子達を忘れ得ようぞ

お前達の去つた後で
何だか俺は胸がせい／＼した

×

大坂のSが訪ねて來た
かつて俺が　神學校に學んで居た頃
親友のKの戀人が
道でひろつて來た當年の美少年だ
お前も彼を知つて居る
彼と俺との關係も知つて居る
彼は今　もぐり實業家だが
感心に俺のことは忘れない
「夕飯を一緒に食べて來ませう」と
彼は云つた
俺は彼と一緒に家を出た
かつてお前と二人で
鷄肉を食つた料理屋だ
而もその同じ部屋だ

飯も食はず　酒ものまないで居た俺は
久しぶりで不味い酒をのんだ
初めはとても咽にはとほらなかつたけれど
直きに俺の舌は酒になれた

電話をかけてKを招んだ
俺を車で迎へによこしたS子と二人の女もよばれた
俺は浮きたゝなかつた
たゞ酒をのんだ
Sは女達を相手に歌をうたつて居た
その間に　俺は寂しさに泣いた

×

Kと二人で
東京に家を見つけて歸つて來た
音樂家のSが演奏旅行から歸つて居た
Kは自宅に歸つて
お前から俺への郵便をもつてやつて來た
何と云ふ喜びの音づれだらう
お前はお前の行爲を悔やんで居る
敬虔な心で知らざる神に祈つて居る

『表ッ調子な笑顔
それは跡かたもなく消えてしまひました』
かうお前は告白する
『緋文字のA
それを自分の心に縫ひつけて居ます』
かうお前は懺悔する
『あなたと別れて
初めてあなたの人格が
わかりました』
かうもお前は云つて居る
せめては　此の悲しい喜びを
お前の心の更生を
お前と一緒に喜んで呉れと
お前は云ふ
おゝ　喜ばう　喜ばう
ほんたうに喜ばう
けれど妻よ

その喜びは
お前の云つてるやうに
悲しい喜びであるのを忘れて呉れるな
悲しい喜びよ
寂しい喜びよ

いまも此の詩を書いて居るとき
眠りからさめた病める哲坊が
「マヽ」と呼んでから
お前の居ないのに氣がつくと
「パヽ居ない……」と泣いて居る
お前が居なくなつてから
子達は俺をとらへて放さない
一ときも放さない
おゝこれでもほんたうに
心の底から喜べるだらうか
悲劇　喜劇
そして無
おゝニヒリストに悲しみがないと誰が云ふ
また　寂しさ　苦しさがないと誰が云ふ
思ひきり俺は泣かう
悶えよう
苦しまう
そして　哄笑しよう

俺があんなに蔑しんで居たセンチメンタリスト
それは　俺のことであつたのだ

×

いよ〳〵俺は
東京にうつる事になつた
お前の所有物は　お前にやらうと
俺はお前をよんだ
お前は　默つて　こつそりと

俺の書齋にとほつた
お前は　お前のものを全部
東京にもつて行つて呉れと云つた
打ち碎けたる　從順なお前を　俺は見た

子供達は　お前の來て居るのを知らない
子供達は　久榮を親のやうに慕つて甘えて居る
お前はもうたまらなさうに見えた
「あなた子供をつれて來て下さい
……下さい」
何うしようかと　俺は考へた
一度は　つれに行つた
けれど　思ひ直して戻つて來た
お前はまた　嘆願した
ためらひ〳〵　俺はたうとう
與志坊を抱いて　お前の前にたつた
「よつちやん、よつちやん
　あれはだれ？」

俺は與志坊に云つた
「よつちやん、よつちつやん
　マヽよ！」
お前は寂しい微笑みを見せた
與志坊はたゞ　キヨトンとして
お前を眺めた
さながら　誰か初めての人に會つたときのやうに……
彼がどんな心持ちに在つたか
俺には　わからぬ
けれど　何と云つてもそれは
餘りに寂しすぎることであつた

俺は與志坊をつれて　お前の側に寄つた
お前は椅子から立ちあがつて
與志坊の方に兩手を差し出した
與志坊の顏からは不審の眼ざしが消えた
はじめて彼はニコッと笑つた

與志坊は　お前の手にうつつた
お前達二人は
互に頰をすり合はせて喜んだ
涙がお前の頰を瀧のやうに流れた

×

新聞の通信者が
俺達のことを通信したのを知つたとき
　俺達はたしかに狼狽した
臭いものに蓋をしようとするのではない
俺は　お前がきつと
歸つて來るのを信じて居たからだ
それが　天下に知れては
お前の心がかたまるのを恐れたからだ
お前も勿論　最初からそれを恐れて居た
彼も同じやうに……

俺は　お前をつれて東京に出た
あゝ　二時間半の汽車の中で
幾度　俺達は泣いたことか
涙が出ると俺は
窓の外に首を出して
そつと顏を拭いた

二つの新聞社を俺達は訪ねた
俺達は　友人の好意を感謝した
けれど　自分達の行爲にも恥を感じた
『成る樣になれ』と俺は考へた
さながら　戀人のやうに

俺達は街を歩るいた
何ごとも知らない哲坊は
二人の親の睦じさに狂喜して
賑やかな街の灯の美觀に打たれて
よくしやべり　よくはしやいだ

銀座の街の小料理屋の二階で
俺達は夕べの食事をとつた
俺は
幾度かお前と一緒だつたかうした場合を思ひ出した
それが此の上もなく懐しまれた
あゝ それにしては
何と云ふ寂しさだ 今は

もつとも大切なものが缺けて居るのだ
二人の手はつながつて居ながら
からだは 魂は
隔てられた溝の兩側に置かれてゐるのだ

尾行をまいて
俺達は電車に乘つた
俺はお前を
お前の友Fの下のところに送りとゞけた

吉坊をお前に預けた
俺は俺の舊い友達のところに行つた
あゝ 彼の夫人は
お前の親しい友で
幾度俺達は往來したことだつたらう

夜の十時をすぎて居るのに
彼の家は 琵琶の稽古で夢中だつた

俺は友と一緒に酒を飲んだ
絶望的な俺の言葉が
彼等を怪しませた
俺はたうとう
胸のくるしみを打ちあけた

いくら飲んでも酒には醉はなかつた
心が 神經が 煩惱が
風に亂れる焔のやうに 荒れまはり荒れ狂つた

あゝ　かつて俺が
人生を焰の舞踏にたとへたことを
お前は覺えてるだらう

それだ
いま俺が痛切に感ずることは
この俺が亂れ舞ひ　踊る
焰だと云ふことだ
焰！
焰！
燃えるだけ燃えろ
狂へるだけ狂へ
それが燃燒しつくしたとき
そのときこそ平安があらう
寂しい虛無だ
俺はしかし　それに憧れる

×

借りて置いた新居に
お前をつれて來たとき
何よりも先き　お前は
落着きのない家だと云つた
建具がお粗末で
門にしまりのない事を苦にした
「いゝよ、これは俺のうちだ
　お前のうちではない」
俺は寂しい笑ひを見せて云つた
「はつきりさう云ひましたのね」
お前も同じ寂しさをもつてそれに答へた
お前はまた
此所は何うすればいゝの
かうすればいゝの　と
俺に注意しながら
「やつぱり世話をやいて見たいわ」と
云つて笑つた
お前の胸にも寂しさはあつたらうが

俺の寂しさはお前にわかるだらうか

小田原に殘しておいて來た人々が
家財をまとめてやつて來るのを
俺達は待つた
待ちながら俺達は
俺達の話しをはじめた

あゝそれこそは
打ちやはらいだ心でもつて
寂しさと苦しさとを包んだ心でもつて
魂と魂との
自我と自我との
嚴(おごそ)かな　しめやかな　接觸
「最初から俺はお前を
ほんたうには愛して居なかつたのだ」と
あなたは　よく人の前でおつしやつたわね
あゝ　わたしどんなに悔やしかつたか
私の一番たふとい寶玉(たま)が
滅茶々々に壞されましたことを
その悲しさを　その寂しさを
あなたは　わかりますか」
お前は恨めしげに云つた

「あゝッ」
俺は鋭い針で胸を刺されたやうに
ギクリとしてお前に答へた
「それが　それ程お前を苦しめたのか
それなら赦して呉れ

何で俺が
そんなことを本氣で云へよう
お前は俺を　信じきつて居ると思つたから
俺はそんな冷酷な冗談も云つたのだ
なるほど俺は
心からお前に腹を立てたときには
俺はほんたうに

お前を愛して居たのか知らと
疑つたことはあつたが
決してそれを信じたことはなかつた
あゝ　憐れなものよ
それほどお前は　俺の愛に溺いて居たのか
赦して呉れ
俺がわるかつたのだ』

お前は泣いた
さめ〲と泣いた
『餘りにむごたらしい冗談です
なんで　ほんたうのことを
云つて呉れなかつたのです
あなたは一體
强がりで　お面かぶりです』
俺は　ほんたうにわるかつたと心に悔いた
同じ失望を　お前の言葉から受けたことを

俺は思ひ出した
俺はお前に云つた
『だが　お前だつて同じでないか
お前は　お前が俺の懐にとび込んで來たのは
追はれた鳥が
ところかまはずとび込んだやうなものだと
云つたではないか
おゝ　どんなにそれが
俺の感激を殺したかを
お前は知つて居るか』

『私はたゞ
負けぬ氣で　それを云つたのです
あゝッ、あゝッ』
『負けぬ氣で！』
俺は嘆息した
『負けぬ氣で！』
お前はまた

絶え入るやうに　身もだえしながら
泣きくづれた

お前が俺の魂の中にとび込んで來たときのことを
俺は思ひだした
それは冬も深い暮の師走だつた
病んで入院して居る父を
お前は毎日のやうに見舞つて居た
その度ごとに
お前は俺を訪ねた
病院では　ほんの少しの間
俺のところでは　時がないかのやうに……
お前は俺に

姉さんがもつて行けと云つたとて
美味（おい）しい鮨（すし）を　もつて來て呉れた事があつたつけ
俺と書生のTとが
鹽辛い豚のゴツタ煮をお前にふるまつたこともあつたね
それは雪のふる日だつた

俺のところで遊びほゝけて
たうとお前は　父を見舞はなかつた
朝つから夕方まで
夕方から夜おそくまで
お前が歸るとき
俺は　車をお前のために雇つてやつた

お前が歸つた後で
俺達は直きに寢た
トントン　と玄關の戸が鳴る
Tが戸を開けた　やがて
俺は俺の室に
お前の姿を再び見た

はじめて俺達は
こゝろゆくまで抱擁した
魂と魂とが一つにとけた
あゝそのときの

感激のうしほよ！
かうした俺の感激が　また
胸の至聖所にひめておかれたお前の寳玉が
かうした不用意から
だん／＼と傷けられ
壞はされて行つたとは
何と云ふ　なさけないことだ
「お互に
　素裸な感情を見せなかつたことが
　此の不幸な破綻のもとです」
お前は涙にくれながら云つた
「おゝッ」
俺はたゞ　頌えた

×

あのときに語つた一々を
いまは語れない

語る必要もない
けれど
お前のこゝろが
だん／＼と亂されてゆくのを俺を見た
お前の魂が　だん／＼と分裂してゆくのを俺は見た
「あゝ　いつそこんなことが
　少しもわからなかつたら……」
お前はなげいた
或るときは
お前は彼を　すつかり忘れて居た
お前の家　子たち
信頼する夫
それのみが　お前の胸にあつた
だが　お前はまた
彼のことを思ひ出した　そして
自分が今　二人の手を握つて居るのだと

氣づいてゾッとした
『もしわたしが
　たゞ家出をしたのなら
　とうに私は歸つて居るのだが……』
お前はもだえる

そのもだえよ！
俺はお前のもだえを哀れに思ふ
思ふには思ふが　それがまた
俺の心を　なやます
こみ入つたなやみだ
凝乎とそれを
瞶めては居られぬ惱みだ

×

人が生きるとは
それは慾望することだ
人は慾望する

慾望は　滿足を知らない
いつでも　新しいものを求める
だが　その慾望も止むときがある
それが人生の終はりだ
そこにはたゞ　ニヒルの世界がある

お前は慾望する
かぎりなく慾望する
それが　虚無に歸ることを知りながら
なほ慾望する

それは俺の思想だ
俺の見た科學だ
お前はその實行者だ

おゝ　お前の思想の先生は今
實行に於いてお前の弟子とならう

俺は　お前を失つた
その代り
新しい慾望の情熱を得た
俺も慾望しよう
食慾の充足運動に
一切の他の情熱を
枯れさせようとして居た此の俺に
お前は新しい情熱を甦らせて呉れた

あゝ　戀愛こそ人生の花
それは甘く　美はしい
朝に咲いて　夕に散らうと
それが何のわづらひぞ

戀ひて〱戀ひ死なう
戀のためならば　此生命もすてよう
わが情熱のつゞく限り　俺は戀をしよう
戀ひて踊らう
戀ひて舞はう
戀ひて狂はう
亂舞！
亂舞！

人生を何うしなければならぬと云ふことはない
人生は　こんなものだと云ふ現實もない
あるものはたゞ
われ等の慾望
われ等の衝動

わが人生は
寂しき人生
悲しき人生
孤獨なる人生

すべてのものは俺に背く
すべてのものは俺の心を知らない

俺はたゞ俺の人生をもつ

青白い月の光よ
その冷たい澄みわたつた光の海よ
それが俺の人生だ

俺のうちの藝術家がいま
俺のうちに甦つた
俺のうちの本質的なものゝ本質
——詩人がいま　俺のうちに復活した

おゝ　俺はこの俺の藝術でもつて
俺の人生を　俺の光と色とで塗りかへよう
詩人こそ唯一つの帝王
俺のこの　悲愴なる決心に
お前は　泣いた
俺も俺自身の　雄々しさに感激して
泣いた

×

とは云へ
またしても　にぶる此の決意よ
俺はまた　弱き一個の人間
俺はお前を　放しはせぬ
お前は　おれのもの

×

小田原に殘しておいた人達が來ない
家財　道具は　なほ更のこと來ない
俺とお前とは
もう六つにもなる子が側に居るのもかまはず
二人の不幸な　結婚生活を語りつゞけ
泣きつゞけ
ハンカチーフを水にしぼつた

そのとき俺は

快活な聲と顏とをもつて
お前に云つた

「もつと他の思ひ出がないか
あるならそれを話して呉れ
あゝ　思ひ出が
それが何であらうと
ありつたけ話して呉れ」

しばらく考へた後お前が語つた
あゝ　その滑稽な思ひ出よ
それが
どんなに俺達の胸をゑぐつたか
お前は話した

「私達が
初めてあの鴨川の家に住まつたとき
私達の小さな庭に
草花の種がまかれました
ダリア　カアネエション
百日草なぞ
そのうちに　バルサムと云ふのがあつたのを
あなたは覺えて居る？
その名が氣に入つたとて　あなたは
朝となく夕となく
それの芽生えるときを待ち望みました
そら　あの頃あなたのところに
英語をならひに來て居たお弟子さんのうちに
Ｍと云ふ方があつたのね
あの方が
私達に草花の肥料（こやし）をもつて來て下さいました
あなたはそれを喜びながら
小さな苗床に施しましたのね
中でも一番よくあのバルサムに

バルサムがだん／＼と育つたとき

「何だか鳳仙花のやうだなと
あなたはおつしやいました
「さうですね　あまりよく似すぎて居ますわね」と
私も答へました
バルサムは移植され
幾度か肥料が施されました
あゝそして遂に私達は
それがたゞの鳳仙花であるのを知りました
私達は互に顔を見合はせて苦わらひしました
あゝその時のあなたの顔が
ありありと見られます」

「あゝバルサム
　あゝ鳳仙花！」
俺はかう　幾度繰返したらう
俺の愛し育てたものは
俺の望んだものではなくて
俺の思ひもよらぬ草ばなだつた

せき來る涙を俺は抑へ得なかつた
俺は泣いた
聲をたてゝ泣いた

「あゝッ」
「あゝッ」
お前も一緒になつて泣いた
お前もお前の愛し育てた結婚が
こんなものにならうとは
夢にすらも思はなかつたらう

×

あひびきのやうに四日間がすぎた
家財道具が送られて來た
與志坊はマヽの代理者に抱かれて來た
俺達の別れる日が來た

心の緒が結ばれながら

更に新しい緒にひかれてゆく女よ
俺はお前の心のうちの苦しみを知る
けれど　俺はさらにその苦しみの上に
充すことの出來ぬ寂しさを持つのだ
俺はやはりひとりなのだ

×

三人が三人とも
お互ひに獨立して
自分の途を獨りで步まう
俺達は　かうきめた

お前はお前の住家を
彼は彼の住家を
子達をつれて
俺はお前の貸間を見つけて步るいた
けれど　妻よ
それはお互に不自然だ
俺はもう
その苦しみにはたへぬ
俺の弱い神經が
何うしてこの上の重荷にたへようぞ

×

俺達ちが小田原に行つて居た間
Iのところに預けておいたT子が
俺が東京に歸つて來てから
俺の家に戻つて來た

三十九度の熱を病みながら
さながら自分の家にでも歸つて來るやうに
車に乘つて歸つて來た

あゝ　だが彼女が父と賴むものは居るが
母は何處に居るのだ

彼女の寂しい顏を
俺を見て泣き出しさうにした顏を
お前は想像出來るか

俺はわざと顏をそむけた
何か元氣のいゝ事を云つた
寢床をとつて彼女をやすませた
だがT子の熱は昇る一方だ

醫者をよんで來ると
T子は感冒のほかに
肋膜をいためて居る

夕方まで遊びほうけて居た哲坊が
十時ごろになると　むつくり起きて
水をのみたいと云ふ
「熱が出たな」と俺は思つた
額に手をあてゝ見て
如何（どんな）に俺は驚いたか
額は熱湯のやうに熱く
顏は朱に染んで居るではないか

俺は直ぐに水を汲んで來て
哲坊の額を冷やし初めた
「ひどい奴だつて云つて居る」
と哲坊は云ふのだ
「何を？」
と俺は訊いた
「ひどい奴だつて」

あゝ　何の事だ
彼は熱にうかされて居るのだ
三度俺は訊ねた
「何だつて？」
彼は初めて意識を取り戻した
「ひどい奴だつて云つてる樣だよ」

それをきいた俺の胸が
どんなであつたとお前は思ふ

俺はお前を恨んだ
恨まずには居られようか

氷枕は引越しのどさくさで
何處かに見えなくなつた
俺は街に出た
氷嚢と氷枕とを買ひに——
だが　夜はもうおそい
氷はない
水枕！
二人の子の濕布
『彼女が居れば
　こんな事にはなれて居るのだがなあ』
と俺は思つた

あゝ　何事にでもこれだ
何事にでもお前を思ひ出す
これは俺の愚痴だらうか
男らしくない俺の愚痴だらうか
俺の胸は痛む

×

今度こそ
思ひきつて別れよう
かうして
お互ひに往來することは
もう　此の俺には耐へられない

疵を
絶え間なくつゝくやうなものだ
このまゝにして置いても
永遠に癒ゆる事のない此の疵だ
それを絶え間なくつゝいてはたまらない

お前達二人を
——たとひそれは戀人のやうではなくとも
あの薄汚たない部屋に見るとき
もしくは
俺の家に見るとき

おゝ　俺の心がどんなに痛むかをお前は知つて居るか

また
小さな子達ちが
あれほどお前を慕ひ
追ひ　泣き　喜ぶのを見るとき
お前が　それを苦しむのを見るとき
おゝ　俺の心がどんなにうづくことか

俺は
お前の胸のうちに
いやまさりゆく苦惱の雲を見る
その黑雲の影が
彼の心を暗くし　重苦るしくするのをも

妻よ
お前の靈魂の
すつかり打ち砕かれたことを
俺は知つて居る
同じやうに　俺のこゝろも

俺達は
互ひに失つた
俺達の無上の生命を失つた
けれど
今こそは　より以上のものを
俺達の自我のうちに見出した

悲壯な美が
蒼白い月光のやうな冷たい美が

俺達の情熱の焰から
立ちのぼり
噴き出し
すつかりと俺達の人生を
新しい色で塗りつぶしたではないか

ニルバアナの美よ！

虚無の世界の美よ！

おゝ
思ひきつてわかれよう
新しい美を育てよう

「さやうなら」
「さやうなら」
「さやうなら」
「さやうなら」

×

だが　何と云ふ寂しさだ
俺達はもう
すつかり離れてしまつたのであらうか
今に離れてしまふだらう
いや　かへつて一つになるだらう
お前は歸るだらう
俺はよろこんでうけいれるだらう
いや　行くすゑのことが
何うしてわからう
そんなことは何うでもいゝ
成るやうになるのだ

×

昨日一日
カルモティンをやめたら
昨夜はまた
殆んど眠れなかつた
夢！
夢！
俺は夢を見たのだ
俺達は小田原の海岸に
小さな家を借りた
俺達の荷物はまだとかれない
それだのに
お前は自分の荷物をくるめて
誰かのところへ嫁いでゆく
亡くなつたお前の父が俺を慰める
けれど　彼は此の世のものでないのを
俺は知つて居る
久菜も　緣ついて家を去る
俺は寂しい心をもつて
たゞそれを見まもつて居る
たゞ一人俺の側に殘つて居るのは
俺の故鄉の

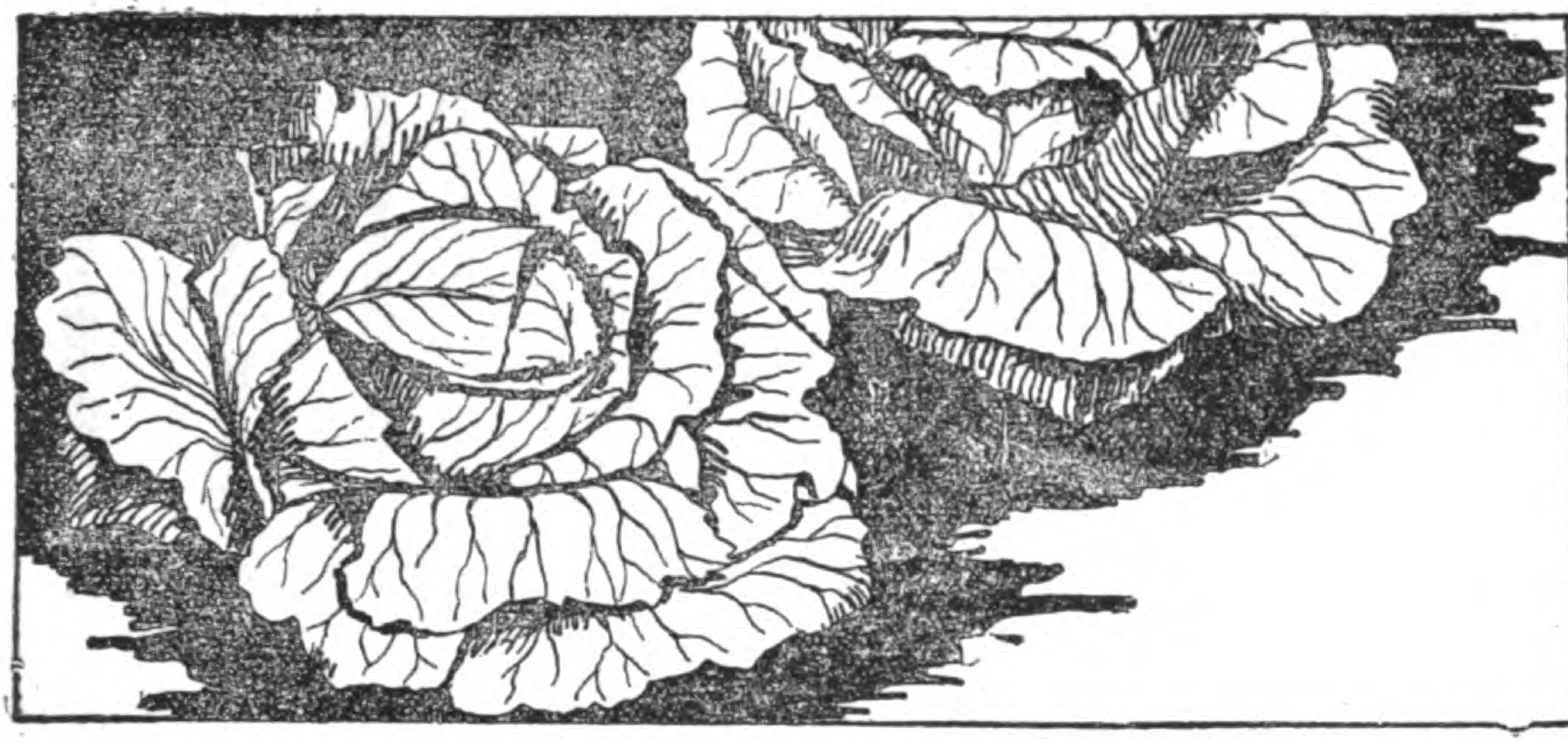
お前も知つて居る俺の從兄のSだ
ところが
そのSも船に乘つて歸るのだと云ふ
俺は彼をとめたが
彼は俺の言葉を用ひない
彼もつひに去つた
たつた一人俺は
荷物も解かれぬ家に殘つて
しよんぼりと
憂ひに沈んで居る

眼がさめて
俺はその寂しさを凝乎とこらへた
そこへお前からの郵便だ
その手紙の中には
お前の夢が記されて居る
何と云ふ暗合だらう

お前は云ふ
「私は昨夜(ゆうべ)
汽車に乘りおくれた夢を見ました
みんなが汽車に運ばれてゆきます
窓から首を出して
私を呼んで吳れます　けれど
私は何うすることも出來ませんでした
私はひとり取りのこされたのです」

俺はこの夢の話しを
涙なしには讀めなかつた
枕は涙でしつぼりと濡れた
何で　そんなに悲しかつたのか
何で　そんなに寂しかつたのか
俺自身にもわからない

おろかな奴だなあお前は
俺はかう自分に云ふ
なんで愚かなことか
他の俺はそれに抗議する
あゝもう何のことだかわかない
わからない
わからない
恐らくそれが
一番ほんたうのことであらう



ある家庭

宇野浩二

午前十時頃、主人の足尾潔はいつもの通り寢床の中で半分目を醒ましかけてゐた。だが、半分は未だ眠つてゐた。——

その少し前に、彼は大勢の群集の中を、彼だけが馬に乘つて、場所は彼の故鄕の町の城跡の公園らしいのであるが、天守臺の方に向つて進んでゐた。トントコトントコといふ、お會式の太鼓のやうな音が微かに聞えるやうな氣のするのは、群集の中にそんな太鼓を持出して來て、叩いてゐるものがあるのだらうか。

それがいつの間にか、神田の青年會館に變つてゐた。彼自身もいつの間にか徒歩になつてゐて、群集に押されながら入口を這入らうとすると、はつとした事にはそこで入場券を受取つてゐるのが、この十日程前から彼の家に來た女中の淸なのである。これは惡いところで出遭つたなと思つたが、幸ひまだ彼女の方では彼に氣がつかなかつたらしいので、彼は大急ぎで引返して裏口に廻つて見た。あの淸のむつちりした、水蜜桃のやうな頰は、それから西洋人形のやうな睫毛の長い目は、あんな大勢の人中でも異彩を放つてゐたな、と思ひながら、いつか裏口に來てゐた彼は、そこは何だかお寺か神社の境內のやうにひつそり

してゐて、いつの間にか夜になつてゐたと見えて、手に手に提灯を持つた巡査が、網を張つたやうに番してゐた。然し、そんなものは、どうにか彼等の目を晦ますなり、よし又見付かつたとしても、何とか口先でごまかすなり、彼をそれ程辟易させなかつたが、彼が思はず棒立に立止つた程吃驚させられたのは、向ふの入口の薄暗い中に、彼の細君がいつものヒスチリイを起した後(あと)の時のやうな、妙に悄然とした恰好をして、彼方此方と誰かを探してゐる様子で歩いてゐるのが、外の人間はその邊にゐたのか、それともゐなかつたのか、兎に角彼にはそれだけが暗の中に浮き彫りのやうに見えたことである。俺を探してゐるんだな、とふと彼は思つたので、ぞッとして今度は勝手を知つてゐる、その直横手の便所の窓から這入つてやらうと思つた。

彼は目指す便所の外に立つてゐた。彼はその便所の窓から會場内に這入らうと志すのであるが、それが可成り高い位置にあるので、先づそれを開けるのが甚だ困難だと思案してゐる間もなく、思ひがけなく、それが中の方から白い手ですーッと開かれた。彼は躊躇せずに、いきなり窓框に兩手をかけたかと思ふと、一息にそこ迄飛び上つた。その時、初めて、その窓を開けてくれた人を見たのであるが、それは二三年前に死んだ筈の吉木節子といふ、女流小說家であつた。變だな、この人は未だ生きてゐたのか知ら、と一寸思つたが、そんなことは大して氣にならなかつた。

「やあ、どうも有難う、」と彼はその場合、實際心から感謝して言つた。「あなたも聞きに來てくれたんですか、どうも有難う、」と彼はもう一度禮を述べた。但し、この後の方の禮は、斯ういふ警官や私服探偵の大勢見張りに來てゐるやうな演說會に、彼女が來てくれたのを、彼は當日の辯士の一人として、感謝したのに外ならなかつた。殊に、外の女でなくて、特に、この女であることに、彼は一層愉快の念を禁じ得なかつた。

といふのは、ずつと前、彼が未だ大學の文科の學生であつた時の或夏、友達と二人で伊豆の大島に行つたことがあつた。その時、彼は同じ宿屋で初めてこの節子に會つたのであるが、忽ち戀を感じたのである。が、彼等が來てから二週間程後に、やはり彼等の友達で、美術學校に行つてゐる男がやつて來て、いつかその男が節子を手に入れてしまつたのである。彼も未だ年は若かつたし、それは殆ど初めての戀でもあつたので、當時はその美術學生に對しては言ふ迄もなく、節子に對しても可成り激しい恨と憎との感情を抱いた。が、年月といふものは、總てのものゝ子守唄に違ひなかつた。殊に、その後、

彼が大學は中途で止めたが、少年の頃からの志望であつた文學者として、世に立つことが出來るやうになつたのに比べて、節子を自分のものにしたかの美術學生は、未だに一介の無名の書生に過ぎなかつた。そして節子は鈑、潔と同じ時分に多少文名をなしたが、間もなく流行性感冒の爲に死んでしまつたのである。

彼が社會主義者の仲間に這入つたのは、つい一年程前のことであつた。彼のやうな新米の社會主義者にとつて、今日のやうな演説會に出るといふことは、主義そのもの々爲といふよりは、大勢の警官に見張られながら、今でも禁止の命令が一下されると共に、群集が雪崩をうち、警官が劍を拔き、演説者等は十人の警官に守られて名譽の拘引をされる、といふやうな、言はゞ原田重吉が玄武門を破るとか、團十郎が辨慶の役を勤めるとか、さう言つた風な、甚だ花々しい空想に有頂天になるものである。そして、今死んだ筈の節子が群集の中にまじつて、彼の英雄振りを見てくれるのか、と思ふと、潔は二倍にも三倍にも氣持が愉快になつて來た。

「あなた、どうなすつたんです?」と節子が彼に言つた。「背中から胸の邊から、何だか大變ぶく／＼ふくれてゐますよ。今、あの窮屈な窓を潜り拔けなすつた時に、そんな風になつたんですか知ら?」

と、彼は浩然として胸の中に手を入れながら言つた。「あ、これですか。これはあなた、」と、右の手と左の手とを交る交るに胸の邊や背中の邊まで入れて、中から『青蒼めた馬』とか、『相互扶助論』とか、大凡十册に近い書物を取出して、それを廊下の上にぢかに置いた。

「まあ、どうなさいますの、こんなに本を?」と彼女が聞くのを待たないで、

「つまり護身用です。どうせ巡査とか私服とかいふ連中が、妨碍するばかりでなく、暴力をふるふに極つてゐますから、……すると、こんな風に、背中とか、胸とか、要所要所に本を背負つてゐると、萬一刃物でやられても大抵大丈夫ですからね。」と言つて、彼は再び浩然と肩を搖すつた。

その時、何處からとなく、鈴を振る音が聞えて來た。それは多分閉會の合圖だらうと思つたので、彼は「ぢやあ。」と言つて、如何にもこれから英雄的行動に取掛る前のやうな態度で、鷹揚に彼女に一禮して、向ふの方に歩き出した。と、妙な事に、彼女と別れてしまふと、その邊に人が一人もゐないばかりでなく、いつの間にか彼は往來を歩いてゐるのである。

その癖、例の鈴を振る音だけは、相變らず聞えて來る。が、今度は彼はそれがどうも豆腐屋の鈴の音らしいと思つた。すると、おや、もう十時過ぎたかな、と氣がついた。「豆腐――」と呼ぶ聲も微かに聞えて來た。――

これが、この小説の初めに、主人の足尾潔が寢床の中で半分目を醒ましかけてゐた、だが、半分は未だ眠つてゐた、と書いた、その時までの一時間程の間の彼の狀態であつた。

そして、それは正に十時過であつた。彼は頭から蒲團を被つたまゝで、腹の底から込み上げて來るやうな欠伸を催したので、うんと手足を突つ張つて、伸と一緒にそれをしようと思つたが、どうしたのか、ふと龜が首を縮めるやうにそれを遠慮して、出來るだけこつそりと、幾つにも分割して欠伸だけした。それから、彼は彼自身が寢てゐる八疊の間の隣の、四疊半の方を、そつと蒲團に穴をこしらへて細目で覗いて見た。そこの境界に嵌まつてゐる四枚の唐紙の、中の二枚が左右に開かれてゐたので、そこに彼は細君の寢床の形勢をうかゞふことが出來たが、それが生憎まん中の邊だけが見えて、頭の方が見えない、まん中だけの恰好で見ると、丸く持上つてゐる掛蒲團の中に、細君がまだ寢てゐるとも見えるし、或ひはそれは恰好だけで、最早や藻拔けの殼かとも思へた。彼はそこで出來るだけ聞耳を立てゝ、階下の物音を感じようと試みた。確に階下では、臺所の邊でか、茶の間の邊でか、何か用事をしてゐるらしい人の氣配は聞えて來るのであるが、それが細君であるか、女中の淸であるか、或ひはその二人ともであるか、容易に判別し難いのである。仕樣がないので、彼はだん／＼勇氣を出して、蒲團の穴を少しづつ擴張して行つて隣の部屋の細君の寢床の上を覗いて見ることにした。

若し彼女がその中にゐて、やつぱり目を醒まして、そんな風にして覗いてゐる彼を見付けたとしたら、いきなりわッと泣き出すか、それとも「意氣地なし！」或ひは「わい／＼連の社會主義者！」と叫んで、手近の枕か何かを投げ突けるか、若しかすると又、ひどく機嫌がよくて、子供のやうに「バー」とでも言つて、それから思ひ切り甘えた聲で「ぼつ／＼起きませうか？　こんなに朝寢をしてゐては、勞働をしてゐる人たちにすまないから、……ね、さうぢやない？」或ひは「もう少し寢てませうか、私、そつちへ行つてもいゝ？」と言ふか。

さうして、漸くのことで、彼はその蒲團の穴を擴大して行つて、隣室の寢床の上の方を、枕が傍に跳ね飛ばしてあつて、蒲團の中が空（から）になつてゐるのを見出したので、稍々安心して、改めて今度は少し延び延びと伸をした。それと共に、蒲團

の中から、ぬつと首を突き出した。

彼は見馴れた天井を眺めて、腹の底の底から湧出して來るやうな溜息を吐いた。彼にはその天井の無數の雨のしみと、節穴とで成立つてゐる地圖のやうな模樣は、日本地圖とか世界地圖とかよりも、その形なり要所要所なり馴染のものであつた。彼はそれを無心の目で見詰めながら、この家に引越してから、もう三年になるか知ら、いや、四年になるか知ら、その三年四年の間は、過去つた今から考へて見てもぞつとする程長かつたと思ふのである。それだけの分を、お前の壽命の外に加へてやるから、どうだ、もう一度その三年四年をくり返して見る氣があるか、と神樣に尋ねられたとしたら、レオパルディならずとも、彼も亦言下に辭退するに違ひないのである。

ばたん、と何か階下で物の倒れる音がしたので、彼ははツと冷汗が出る程、横たはつたまゝで飛び上つた。細君が又急に機嫌が惡くなつて、物を打ち突けるか、ほり投げたのではないか、と次の瞬間に彼は考へた。が、直に、それは何でもない、偶然の出來事らしく、後は今迄通りひつそりしてしまつたので、ほツと胸を撫で下ろした。人間が、こんなにまで、その細君の爲に惱まされるといふ事は、あり得ることだらうか、と彼は考へた。だが、現に、あり得るのである。彼は高等學校では言ふ迄もなく、中途で止めた大學に來てからも、一般の文科學生としては珍しく運動好きで、何方かといふと彌次氣分を多分に持つてゐて、根はさうでもなかつたが、表面は一通り快活で、そして元氣者であつた。現に、今でも文學者仲間での快活な人として通つてゐて、例へば一時彼の專門としてゐた評論に於いても、所謂諤々の論を張るので鳴らしてゐた。そして今は又社會主義的文學者として、進んで實行運動にも參加しさうな傾向の、勇敢な文士思想家として聞えてゐる程である。

けれども、彼の表面上の生活は兎もあれ、實際生活に於いては、この五六年來、卽ち彼が結婚生活に這入つてからは、次第に家庭に閉ぢこもり勝になつて、健康から言つても神經衰弱者のやうに元氣がなくなつたことは、彼に接近してゐる者の注意を免れなかつた、殊に、それが三四年前、今のこの家に引越して來てからは、一層であつた。彼のやうな元氣な、謂はゞ快男子が、そんな風になつた原因の大部分が、彼の細君のヒステリイの爲であるとは誰が知らう？

彼の割合に古くからの友達で、そして今現に彼の家の直近所に住んでゐる、やはり小說を書いてゐる男があつた。彼が

結婚して間もなくの頃、この男が亦、これは彼のやうに正式にではなかつたらしいのであるが、何處かの曖昧な女を連れて來て同棲してゐたことがあつたが、その男が屢々彼のところに、その同棲してゐた女の目をぬすんでは、そつと遊びに來て、その女が如何に激しいヒステリイで、その爲にどんなに不甲斐ない男の體裁になつて惱まされてゐるか、といふやうな話を、來る度に話して行つたことがある。それを聞くと、彼の細君は「まあ、どうなすつたと言ふんでせうね。それや、然し、病氣のせゐなんでせうね、でなければ、何ぼ何でも、御亭主の方にそんな事がね。」と氣の毒さうに言ひ言ひした。「然し、あなたが餘り優し過ぎるからぢやないんですか？」

それを聞く彼は頸筋の邊がむづ〳〵する思をした。何故と言つて、そんな鹿爪らしい、そんな尋常な應待をしてゐる彼女が、三日に上げずその男の同棲してゐるといふ、ヒステリーの女と同じやうな事をして彼を惱ましてゐるのを、けろりと夢の事かなぞのやうに忘れてゐるからである。それどころか、その男が、どういふ了見か、寧ろ得意さうに、昨日はどんな事があつて、どんな風に女が暴れたかとか、一昨日はこんな亂暴なことをして、その時毆られた所が今だに痛いとか、といふやうな話をして行くと、それから二日後か、三日後か、必ず彼の細君はそれを模倣して、彼を惱ますのである。

當時、その男はお伽話か何かを書いて、然しそれでは學生一人前の下宿代位の金も得られないので、殆ど乞食のやうな暮しをしてゐた。そして彼のところへも屢々僅の金を借りに來たことがある。甚だしい時は、その同棲してゐる女を表に待たしておいて、どうしても半襟を買はないと、往來のまん中に坐つてしまふと言つて、駄々をこねるんだ、濟まないけど、などと言つて、半襟代を借りて行つたことさへある。それが、この三四年前に、そのヒステリイの女とのいきさつを、その男の話振りそつくりな書き方で小說に書いたのが當つて、今では中々流行の作家になつてしまつた、而も、その問題のヒステリイの女とは死に別れてしまつて、今では何處かの田舍藝者を細君にして、彼の直近所にブルヂョアのやうな濟ました顏をして住んでゐるのである。

その男のブルヂョア振は甚だ氣に入らないが、今言つたその男のヒステリイ小說だけは、そのくど〳〵とした、女の腐つたのやうな筆致ではあるが、彼は屢々沁々と思出すのである、或批評家は、あんな馬鹿々々しい事はあり得ない、と言つてゐたが、あゝ、ヒステリイの女の狂態と、それに對應する男の痴態とは、ヒステリイの女と暮した男でなければ分

らない。死んだ島村抱月といふ男は、この男は決して馬鹿な男ではなかつたが、四十になつて戀人をこしらへて、やつぱりその戀人のヒステリィに惱まされつゝあつた或晩のこと、床の間の緣に我と我が頭をごつんごつんと打ち突けながら、「岩野泡鳴はえらい、泡鳴はやつぱりえらい！」と叫んでゐたことがあるさうだが、俺もヒステリィの女房を持つたが因果で、時々あの小說を書いた、俺の友達の、あのブルヂョア小說家の、あの小說だけは認めるな、認めるな、と彼は考へた。

小說と言へば、彼が或時、或新聞の連載小說に、いつか彼が學生時分に伊豆大島に出かけて行つて、吉木節子に會つて、彼女に戀をしたり、又外の美術學生がやつて來て、彼女を手に入れたりしたといふ、あの話を書きかけたことがあつた。細君のヒステリィと彼自身の神經衰弱の爲に、彼は一ヶ月も二ヶ月も仕事が出來ないことがあつたので、彼はその新聞小說を書くことで、經濟的にも、又精神的にも元氣を回復するつもりでゐた。ところが、それが新聞に出初めて、僅五六回つゞいた或日、突然細君はそれをずた〳〵に引破りながら泣き叫んだ。「こんな小說止して下さい、こんな小說止して下さい！」

どうしていけないんだ、こんなものが？　と彼はわざと平靜を裝つて聞き返したが、彼女がそれに對して言ふ言葉は無茶苦茶だつた。「こんな甘い、戀愛小說なんか書く人を私は夫に持ちたくない。」とか「こんな拙い小說を書きつゞけたら、あなたは文壇から葬られるから。」とか、「こんな其の自分の戀人のことなどを書いて、私に見せつけなくてもいゝぢやないか。」とか、要するに、言ふ口實は出鱈目であつたが、それには彼女の嫉妬の爲からに違ひなかつた。そして彼女は最後に「この小說を書きつゞけるか、私に離緣狀をくれるか、この小說をつゞけるつもりなら、これと一緒に私に離緣狀を下さい。」とばかり繰り返して泣きつゞけた。これには彼も、自分の折角始めた仕事であるといふのみならず、世間に對して、新聞社に對して、讀者に對して申譯ないといふ理由で、色々と怒つたり、宥めたり、頼んだりしたが、結局徒勞に終つた。そして、彼はその小說をそのまゝ打切つてしまつたことがあつた。

何の病氣でも多少さうかも知れないが、殊に斯ういふヒステリィといふやうな、神經性の病氣は、加速度的に進行するものである。彼のこの小說の場合でも、この事件が始まりで、その後彼の小說に對する彼女の干渉は次第に甚だしくなつ

て、それから一二ケ月後には、それが彼の自叙傳的なものであつてもなくても、どんなものにでも、若い女性を出したり、殊に戀愛的なものを書くことを一切禁じられねばならなかつた。それは彼の性來の傾向にも多分に依ることは無論であるが、その後、彼の小說が主に傾向的なものを扱つたり、彼が段々純文學から離れて、社會思想の研究に這入つて行つたり、終には實際運動に興味を持出したりするやうになつたのは、幾分彼女の病氣が原因となつたとも言ひ得る位である。——

昨夜も、寢る二時間程前に、何でもない事から彼女のヒステリイが爆發したのであつた。それは近い中に又、今度は東京でなく、横濱で行はれる社會問題の講演會がある。その時には、私も一緒に連れて行つてくれ、と彼女が言つた。その時、彼が一瞬間當惑さうな顏をした。が、彼ははつとして、直に、あゝ、一緒に行かう、と言つた。が、それが先づ一つの原因に違ひなかつた、その一瞬の彼の當惑さうな顏を彼女が見免す譯がなかつたから。然しそれからまだ二三十分の間は別に異狀がなかつた。が、次に、その横濱へ行く日までに、彼女は下駄が可成りひどくなつてゐるから、それを買ひたいと言つた。時に彼はもう明後日のことであるから、それ迄に二寸金が出來さうにない。下駄位辛抱したらいゝだらう。と言つた。

「私、行かないわ！」と彼女はいきなり、机の上にあつた彼の書きかけの原稿を手に取るが早いか、くしやくしやにして疊の上に叩きつけた。そしてそれが始まりであつた。

もつとも、それだけが彼女のヒステリイの原因でないことは、もう長年の經驗で彼にも分つてゐた。最も重要な原因は、もう月末が近いのに、この分では今月も亦家賃から米代から、悉く斷りを言はなければならない、まして、今度こそと心當にしてゐた縮緬の羽織を貰ふことなど、空想する餘地もないのである。それが彼女のヒステリイ氣分を破裂するすつかりの準備をして待つてゐた譯であつた。だから、その破裂の動機はどんな些細なことでもかまはないのである。そこで、横濱行の同行を、彼が一寸色に出して迷惑さうにしたのと、あんなさゝくれ立つた表の鼻緒の磨り切れた下駄で辛抱しろと當前のことのやうに言つたのとで、完全に爆發したのである。

「社會主義、社會主義なんて、あなたのやうな人が社會主義者面をしてゐるうちは、社會主義なんか、實現しない世の中の方がよつぽどいゝわ。あなたが、そんないゝ加減な彌次馬のやうな社會主義になつたお蔭で、國のお父さんから私まで

恨まれるんですもの、私、本當の所を言ふと、社會主義なんて大嫌ひだわ。それわ、本當はいゝものかも知れないけれど、あなたにしても、あなたのお友達や、尋ねて來る人たちにしても、社會主義の人に碌な人がありやしないぢやないの？　ビラを撒くのが面白かつたり、尾行をからかつて面白がつたり、巡査と喧嘩したり、警察へ引張られるのを何か名譽なことと見たいに思つたり、そんな事ばつかり面白がつてるんぢやないの？　そして肝腎の社會主義の方はどうなつてるの。あなたなんか、一寸も知りやしないぢやないの？……」

彼女の言葉は、一日ヒステリイが起ると、洪水のやうに口から出て來た。だから、多少吃り癖のある主人公などは、その百分の一、千分の一の應待も出來なかつた。殊に、誰かも言つた通り、ヒステリイといふものは天才の兄弟に違ひないので、その口をついて吐き出さる言葉の中には、一寸常人には言へないやうな鋭い批評を含んでゐた。だから、彼はやり込められて來ると、つい手を振り上げたくなつた。そして彼が腕力を出すと、彼女も亦ヒステリイ一流の腕力を奮つた。だが、要するに彼が常識を失はない反對に、彼女の方はつまりヒステリイであつたから、硝子一枚叩き壊すにしても、本棚の本を撒き散らしたり、着物を引裂いたりするにも、殆ど何の反省もなしに實行することが出來たので、やつぱり彼の方が負けてしまはなければならなかつた。

そして、いつの時でも、擧句の果には、女性獨得の武器を持出して、悲しさうに泣きながら、「私のやうな者がお傍に居たんでは、一生あなたのお邪魔になるでせうから、どうかお暇を下さい、それには、明日とか明後日とか言つてますと、お互に未練が出て、又ぐずぐずになつてしまひますから、直にを俥呼んで下さい、直に出て行きますから……」と如何にも分つたやうな、優しいやうな、それでゐて決して分らない、優しくない捨白を吐くのが常であつた。が、夫婦の情といふのは不思議なもので、そんな夜の十二時過に俥を呼んで來てくれといふやうな、見え透いた困らせを言はれても、女に泣かれ、而も今迄とは正反對の優しさうな言葉を出されて見ると、彼は彼自身に就いて泣く前に、過去何年間か連れ添つて來た愛着の心が、こんな病氣を持つてゐる女を、そしていざとなつても、今は父も母もなくて、實は何處へと定つて歸る家のない女を、哀れむ心で一ぱいになつた。彼はその時こそ、不斷の社會主義や評論に關係してゐる時の空元氣などを悉く失つてしまつて、弱い人間の男として、ほろほろと不覺の涙を流すのである。そして、涙が二人を和解させた。

だが、昨夜の場合では、彼等は到頭和解にまで至らないうちに、彼女が先づ疊の上に寢てしまつた。仕樣がないので、彼が蒲團を敷いて、まだ幾分か駄々をこね、抵抗をするところの彼女を無理野理に寢床の上に運んで行つた。そのうちに彼女が疲れの爲にいつの間にか寢入つてしまつたので、彼はこそ〳〵と自分の寢床にもぐり込んで、一二時間遲れて眠りに就いたのである。——

いつの間にか又うと〳〵と眠り入つてゐたと見えて、彼は何處かの大學の講堂のやうな所で、だが、どういふ譯だか、聽衆は悉く手に手にシャベルとか、鶴嘴とかを持つた勞働者ばかりである。その前の演壇に立つて、頻りに何か演說をしてゐるのであつた。が、彼は何か頻りに言はうとしてゐるのであるが、どうしても聲が出ない、而も彼が少しも聲を出してゐないのに、聽衆にはそれが聞えてゐたらしく、要所要所では必ず彼に向つて拍手を送るのである。その時、彼は氣がついたのであるが、演壇の卓子の、彼とは反對の側の角に、彼の細君が立つてゐたのに驚かされた。

彼はしかし此際細君などに氣をとられてゐてはならないとでも思つたのか、直に又正面に向つて、やつぱりどうも幾ら喋らうとあせつても、どうしても喋ることが出來ない演說をつゞけてゐると、ふと勞働者ばかりの殺風景な聽衆で一ぱいふさがつてゐる會場の、彼と眞正面の二階に、帝劇などにある貴賓席とでも言つたやうな、立派な席があつて、それがさういふ性質の會合にあることが、少しも彼の氣に觸らなかつたのであるが、その席に一人の女、間違ひなく彼の家の女中の淸が坐つてゐるのを發見した。が、その事も彼は少しも不思議な氣がしなかつた。唯、特に彼の注意を引いたのは、淸がきちんとそんな立派な席にをさまりながら、頻りに旗を振つてゐることであつた。斯ういふ席でそんな旗を振るとすれば、當然赤旗でなければならないと思つたので、彼はその旗の色を見極めようと目を凝らしたが、それが白とも、黑とも、灰色ともつかない、例へば寫眞のやうな色をしてゐるのである。さういへば、數多の聽衆も、淸も、會場全體が悉く寫眞のやうな色をしてゐて、何の色彩もなかつた。

「あなた、あなた！」

その時、突然彼の隣に立つてゐた細君の聲だ。斯う呼ぶ聲が聞えた。斯ういふ晴の講演の席上などで、をかしいな、と思つてゐる間もなく、

「あなた、あなた！」と聲はつゞいて聞えた。遠くで豆腐屋の鈴の音が聞えた。そして彼は神經衰弱者の眠りから醒めたのである。彼は咄嗟の間に昨夜の事を思出して、彼女がまだあのヒステリィの續きの狀態にありはしないか、と思つてはッとした。もう少し眠り入つてゐる振をしようか、それとも出來るだけ快活な表情をして目を醒ましてやらうか、と瞬間の思案の後に、

「うむ、あゝ。」と結局不得要領な返事をしてしまつた。

「あなた、もう十一時ですよ。」と細君はひどく優しい調子で、彼を蒲團の上から搖すつた。もつとも、ひどく優しいか、でなければひどく不機嫌か、ヒステリィの女にはこの二つの態度しかないのである。だから、彼のやうにそれを十分知つてゐる者にとつては、そのどちらにしても、不安心であることには大した變りがなかつたが、それにしても、不機嫌であるよりは優しいのに越したことはないので、この上機嫌よ、せめて今日一日つゞいてくれ。と彼は心の中で祈りながら、

「あゝ、起きよう。」と蒲團の中から顏を出して言つた。

「早く起きて下さいな。」と彼女が甘えるやうに言ふには、「私、今朝から一人で困つてるのよ。私、今朝は九時に起きたの、えらいでせう。そしたらね、淸がゐないの。何處かへ使ひでも出たのかと思ふんですけど、それにしても遲いの。」

「淸がゐない？」と彼は思はず叫んだ。

「まあ、吃驚した。何もそんなに頓狂な聲を出さなくてもいゝぢやないの。でも、をかしいわね、默つて出て行くなんて。もう來てから、昨日、一昨日、先一昨日、と四日にもなるでせう。今度こそ居ついてくれるかと思うてたのに、ね、あなた。それに淸はいゝ女中でしたわね。少しぶくぶく太つてゐたけど、可愛い顏をしてましたわね。隣の奥さんなぞ何處か親類の娘さんですか、なんて聞いてらしつた位ですわ。桃破なんかに結つてると、まつたく下町の娘見たいだつたわね。

……」

「部屋を調べて見たかい？」と彼はどうしたのか、未だ落着かない、多少急き込んだやうな調子で聞いた。

「いゝえ、それがね、寢床なんか敷きつ放しのまゝなの。それに荷物と言つたつて、まだ風呂敷包一つでしたからね。」

「まさかその寢床の中に這入つてゐる譯ぢやないだらうな。あの女は桂庵から來たんだらう。家は何處だつたけな、本所

とか言つたな、本所の鼻緒の職人か何かだな、彼女の兄貴か、親父はたしか居ないんだ。」

「私、そんな事、ちつとも知らないわ。」と細君が目を見張つて言つた。「あなた、よく知つてるのね、どうしてそんなに詳しいことを知つてるの？」

　彼ははツとしたが、出來るだけ何氣ない風を裝ひながら、「俺のところへ郵便か何か持つて來た時、そんな事を言つてたよ。ぢやあ、まだ部屋の中は調べて見ないんだね？」と彼女にはさうはつきりと氣はつかなかつたが、彼は可成りあわてた樣子で言つた。

「だつて、氣味が惡いんですもの……。」

「よし、今俺が調べてやらう。」と言つて、彼はいつになく身輕に寢床の中から飛び起きた。

「それにしてもをかしいわね。」と彼女は半分獨言のやうに言つた。「歸りたいのなら歸りたいと言へば、まだすつかり定つた譯ぢやないんだし、又定つたにしたところが、いつでも歸してやるんだのに、ね。どうしてこつそりと逃げるやうなことをするんでせうね？　まさか、何か惡い癖があつて、家の物をどうかして行つたといふやうな事はないだらうと思ふけど……。然し、變だわね。家なんか何にも持つて行かれるやうなものはありやしないけど、そんなブルジョアぢやないんだから、ね、あなた。……だけど、やつぱり變だわ、私、一寸調べて來よう。」

「いや、今、俺が行つて調べてやる。」と彼は着物を着更へながら、あわてゝ彼女を引止めるやうに言つた。

「女中部屋ぢやなくつてよ、私の調べるのわ。」と細君は言つて、あたふたと階下に下りて行つた。

　細君が、そんな風に、起つた事件に對する心配からよりは、寧ろヒステリィ婦人の上機嫌から、雀のやうに喋つてゐる間、先程その女中の清が無斷でゐなくなつてしまつたといふ報告を聞いて以來、何とも言へずそわ〳〵してゐた主人の潔は、實際胸の中に急に烈風でも起つたかと思ふ程の、心配に取亂されてゐたのであつた。といふのは、一昨晩、彼は細君が外の錢湯に出かけて行つた留守中に、女中部屋に出かけて行つて、話をしかけたのである、お前の家は何處、とか、兩親は、とか、商賣は、とか。女中の清は氷漬けにでもなつたやうに身體を固くして、唯主人の問に出來るだけ簡單な言葉で答へる切りだつた。固くなればなる程、そのむつちりした肉付が彼に誘惑的に見えるのであるが、生憎彼はその容貌か

らしても、又多年振舞ひ馴れて來た、その磊落らしい、他所目に威勢のいゝ態度や物の言ひ方からしても、それ等は唯相手に山犬に會つたやうな恐怖を感じさせるばかりで、斯ういふ場合の役者としては適しなかつた。

「……お前……」と彼はやつとの事で、斯う口をきつた。恐く斯うしても後の言葉を何とつゞけていゝか、見當がつかない、と言つていつ迄も默つてゐる譯にも行かないので「お前……俺をどう思ふ？……」

が、濟がそれに答へる言葉を知らなかつたのも無理がなかつた。

「お前……」と又彼は言つた。「……お前……俺が嫌ひか……？」

「…………」

つまり、彼女が固くなつた程度以上に、彼の方でも固くなつてしまつたのであつた。固くなつても、それなりに何處か優しくなるとか、色つぽくなる人も多いが、彼の場合ではその言葉付から、態度から、最もいゝ例で言ふと、巡査のやうに固くなつてしまつただけであつた。そしてそれから、それからそして、どういふ事が起つたかは、言ふ限りではない。が、兎に角、彼がその計畫に於いていゝ成功をおさめなかつた事は確であつた。

普通の場合ならば、やがて細君が錢湯から歸つて來ると、主人が理由なく甚だ不機嫌な狀態にあるのを見出したに違ひないが、彼の場合は、さうも行かなかつた。彼は成るべく彼女の機嫌をとるやうにすることと、彼女と女中とを此際二人切りにしないやうにといふことから、細君に散歩を誘つて見た。幸ひ、細君も機嫌よくそれに應じた。彼が、女中の濟が無斷で逃げて行つてしまひはしないか、と心配し出したのは、既にその時からであつた。その晩、十時過に、散歩から歸つて來た彼は、いつの間には濟がけろりとした顏をして、「お歸りなさい。」と挨拶したことや、「旦那樣」とか、「奥樣」とか、今迄通りの言葉を使つたことが、甚だ奇異に感じられてならなかつた。

然し、その翌日も一日、彼はその前の晩のことが氣にかゝつてならなかつた。濟に對する不滿とか、極りの惡さとかよりも、これが世間普通の細君なら、もし知られたとしても、大した事なくて濟むだらうが、あのヒステリイの細君の場合では、どんな騷動が持上るだらう、といふ心配で、實際飯が咽喉に通らない程の思をした。恐らく彼女は見えも外聞も忘れて騷ぎ出し、或ひは離緣話を持出したりするに違ひない、それが世間に聞えて、新聞の端にでも書かれたら、同じ文學者

でも、所謂軟文學者でないだけに、面目が丸潰れになる、といふやうな、馬鹿〳〵しい心配までした。が、その昨日も一日無事に濟んだ。濟んで見ると、何の事だ、さうだ、こんな事といふものは當の女中の口から決してその家の細君に話されるものぢやない、何の心配することがあるものか、と思はれた。——

その女中の淸が、今朝、急に姿を消したといふのである。彼は大急ぎで着更へた着物の上に、帶を巻き巻き階段を下りて行つた。何處かへ行つてしまつたのはいゝが、くだらない書置か何かをされてゐたら、といふ心配が突然頭の中へ起つたので、階段の中途から走り出した。そしてそこを下りて廊下を一つ曲つたところの、二疊の女中部屋に向ふと、その入口が開け放しになつてゐて、疊の上一ぱいに蒲團が敷き放しにしてあつた。彼はその上を踏んで、最先に半間の押入を開けて見た、が、二つ三つ紙屑が轉がつてゐる外に、中には何にも這入つてなかつた。念の爲にその紙屑を調べて見たが、字も何も書いてない唯の塵紙だつだので、彼はほッとして、今度は敷蒲團の下をまくつて見た。

「何か變つた事はない？」とその時細君が入口に現れて、斯う言つた。「私の方に別に失くなつたものもないやうだわ。」

「やッ、これはどうしたんだ？」と彼は彼女の言葉に答へる代りに叫んだ。「臭い！」

そして彼は改めて掛蒲團をまくつて見た。と、果して敷蒲團の上にべつたりと土瓶の水一ぱいこぼした程の、大きなしみがついてゐた。

「まあ！」と細君も殆ど同時に叫んだ。

「仕様がない奴だな。」と彼は、しかし思はず晴れ晴れした聲で言つた。實際この場合異様な臭氣を發する蒲團は彼に救ひのやうな氣がしたに違ひなかつた。

「やつぱりこれも惡い癖には違ひないわね。」と細君が彼の肩とすれ〳〵に顔を近づけて言つた。「だけど、どうしませう、困つたわ、こんなものゝ始末……」

「捨てつちまへ！」と彼は不斷の元氣な調子で叫んだ。

（練習） (6) La ĉielo estas blua. (7) La papero estas blanka. (8) La patro estas bona. (9) Jen estas pomo.（そら（そこに）林檎がある） (10) La frato estas tajloro.

そこで第一課（leciono unua レツィオーノウヌーア）で述べた文法の規則を纏めると

（規則）1. 名詞は語尾 o で終る
2. 形容詞は語尾 a で終る

Leciono Dua.

子供は何にでもすぐ疑を挾みます、本當だらうか、僞だらうか、言つた事を問ひ正しますが、語學を覺えるのにこれが一番近路であります、日本語で疑問には、文章の終に「か」と念をおす様に、エスペラント文では、文章の冒頭に ĉu（チュー）と言ふ言葉を置き終に疑問符（signo demanda スィーグノデマンダ）をつけて疑問文だといふことを表はします、そこで練習のため、一々前の例を疑問體にして、一々それに答へて御覽なさい、練習にあたつては、なるべく明瞭に大きい聲で正確に發音すること。

(1) Ĉu leono estas besto ?（答）Jes, leono estas besto.

(2) Ĉu rozo estas floro ? (3) Ĉu kolombo estas birdo ? (4) Ĉu leono estas forta ?

(5) Ĉu la patro estas sana ? (6) Ĉu la ĉielo estas blua ? (7) Ĉu la papero estas blanka ? (8) Ĉu la patro estas bona ?

〔Jes（イェース）といふのは丁度英語の yes で、今の場合「はい」といふ言葉です。〕

はじめの中はこれに一々答へるのが難しいのと、少し慣れると同じ様なことを繰り返すのが面倒なので、兎角嫌になりがち、すぐ倦きますけれども、これを忍んで何度も反覆してみなくては、いくら容易いエスペラント語でも、勉強しなくては自分のものになりませんから、自問自答（譯などは一々つけなくて、文章の意味をつかむやうに）して下さい。

前に「花は美しい」といふ言ひ方を覺えましたが、今度は「赤い花」と言ふには、赤い（ruĝa るーヂャ）といふ形容詞を花（floro）といふ名詞の前か後に置きます。（つづく）

Rozo floro estas.
（主語）（屬辭）（媒語）

と言つても差支ありませんが、主語と屬辭とを結びつけるのには媒語を中に挾んで、

Rozo estas floro.
（主語）（媒語）（屬辭）

とする方が穩かです、丁度 estas を數學の等號（＝）の様にみて。

こゝで注意すべきは、獅子（leono）をはじめとして四つの物の名を表はしてゐる名詞（substantivo スブスタンティーヴオ）は必ず o で終つてゐます、これがエスペラント語の大切な構造で、すべての品詞に一定の語尾があつて一見明瞭に區別されます。それから、文章はいつも頭字（majusklo マユースクロ）ではじまり、終には終止點（punkto プーンクト）がつけてあります。

（單語） kolombo 鳩、 forta 强い、
birdo 鳥、 sana 丈夫な、健康な。
patro 父、 la 冠詞。

(3) Kolombo estas birdo.
コロームボ エースタス ビーるド

(4) Leono estas forta.
レオーノ エースタス ふオーるタ

(5) La patro estas sana.
ラ パートロ エースタス サーナ

物事を見て判斷して、美しい（belaベーラ）とか、强いとか、丈夫だといふとき、屬辭には物の性質を言ひ表はす形容詞（adjektivo アドゥウエクティーヴォ）が使はれます、形容詞の語尾は皆 a であることに注意。

la は冠詞（artikolo アるティコーロ）で英語の the に相當するものです（英語の不定冠詞 a や an に相當するものはありません）日本人の様に冠詞のない言葉を用ゐてゐる人には、この用法は難しいものですが、冠詞はある方が便利なので、是非なくてはならぬものではありませんから慣れる迄用ゐないでも差支ありません。（いづれ後には使用法は申します）。

（單語） bona 善い、 ĉielo 天 blua 青い、
ボーナ チエーロ ブルーア
jen そらそこに！（注意を促す言葉） bela 美しい、
イエン ベーラ
pomo 林檎 blanka 白い、 papero 紙
ブランカ パペーロ
frato 兄弟 tajloro 仕立屋、裁縫師、
ふラート タイローろ

に到る迄には、英語やフランス語に比べては、極めて樂であるにしても、可成り苦心のゐるのは當然であります。

どうしたら一番早く覺えこめるかと云へば、最も自然な方法は赤坊が言葉を覺える樣にすることでありますが、どうも紙上の講座ではさうもできません、何か面白い文章でも説明すれば興味がありませうが、エスペラント語は十六條の規則の外には何を標準するかと申しますと、それは初めてザメンホフ先生が造られた Ekzercaro（エクゼルツアーロ）でありまして、これは是非とも數度は反覆研究しなければなりません。この例題に出てゐる使用法が總ての基礎となるものでありますから、兎に角一應これを講ずるのが正しい道であらうと思ひますから、これによつて講義をすゝめてまゐります、熱心に勉强して下さい。

この講義はよく讀んで下されば誰にも判りますが少し怠けるとすぐ難しくなります、解らなくなつたら初めから讀みなほして下さい。

LECIONO UNUA

文章は種々の裝飾がついて、複雜した形をとりますが、最も簡單な基本の形は「花は美しい」とか「獅子は獸である」といふやうな、主語と屬辭と媒語とから成りたつてゐるものであります。

どうしても文章にはこの三つの要素を欠くことはできません。

そこでエスペラントになりますと

(1) Leono estas besto.（獅子は動物です）
レオーノ エースタス ベースト

(2) Rozo estas floro.（薔薇は花です）
ローゾ エースタス フローロ

（單語） leono 獅子、besto 動物、rozo 薔薇、floro 花。

この二つの文章で leono と rozo が主語で、besto と floro が屬辭であります，そこで今獅子を見て、「獅子は動物である」といふ判斷をして、それを言ひ表はすために、主語と屬辭とを結びつける媒介物として estas といふ言葉を用ゐます。

又「薔薇 estas 花」と媒語で結びつけます日本語ですと、この estas が文章の最後にまゐりますが、エスペラント語には、他の歐州語の樣に最後に置いてはならないといふ規則はありませんから、假りに日本語風に

ESPERANTA

エスペラント講座

伊藤徳之助

ANTAŬPAROLO

エスペラント語の字母の發音（elpa ro lado エルパろラード）は、既に廣田氏が前號に悉しく述べられてゐますから、更めてこゝに説明しませんけれども、特に注意すべき點は、

1）文字は發音通りに綴り、發音しない字はない。

2）揚音（akcento アクツェーント）の位置は一定してゐて、終から第二番目の節（silabo スィラーボ）にある。

〔發音を假名で表はす便宜上、揚音を長音の樣に書く人も多いし、又私もさう書くことにしましたが、決してその音を特に長くのばすのではなく、その音節を强めて言ふのです、エスペラント語の音は、餘り長くなく短くなく、中頃に發音するのです例へば Esperanto をエスペらーントと書いても、ra を外の音より長くするのではありません。

次に l と r, ĥ と h の音を、片假名と平假名で區別することにします。

l（ロー）, r（ろー）, h（ホー）, ĥ（はー）

二重音 aj, ej, oj, uj, aŭ, cŭ は夫々アイ エイ……で表はします〕

揚音節（强音節）は太い文字で示します、そこは音を强めて發音して下さい。

語學を習ふのに文法（Gramatiko グラマティーコ）は寔に大切でありますが、然し文法をよく心得てゐたからと云つて、それで上手に話をし、讀み、書くことは出來ません。文法を知つてゐなくては、正しく書くことは出來ませんが、それは畢竟筌蹄であり瓦子であつて、吾々はそれよりも早くエスペラント文に慣れ、母國語のやうに、その意味を（譯さないで其の儘）つかめるやうにしたいのです。

エスペラント語の文法は、ザメンホフ先生の定められた、十六條の規則だけで、これを覺えるのは極めて容易いことでありますが、何れにしてもエスペラント語は、吾々の國語とは緣の遠いものでありますから、これを上手に使ひこなす

校正室から

◆不足は滿足へ——未成品は完成へ——の輝く未來を持つて居ります。多くの不備缺陷は永遠に若い本誌の將來と、悲壯な努力に對して愛してやつて下さい。創刊號に對しいろ〳〵有益の御注意を感謝します。

◆いふまでもなく『女性改造』は單なる雜誌屋の所有ではなく、飽くまで、凝固した歴史の殼層を破つて、この屛息せんとする男性文化を救ひ、更らに新しき生命によつて、光輝ある至高き文化を仰いで飛躍しようとする、勇ましき女性前衞隊の群團の所有でなければなりません。

◆諸姉妹の强い脈搏は、本誌の上を搏ち、必ずや人類の黎明を遙かに呼ぶでありませう‥。この意味に於いて廣く皆樣のお聲を聴かして頂きたいと存じます。

◆厨川氏の婦人解放論は、例によつて洋々たる海流を思はせるやうな淸新で偉大なものです。十八世紀の終末に忽焉として、曉天の星のやうに閃めいた女性、ウオルストンクラフトは今また私達の上に甦つて參りました。私は一人の彼女でなく、多くのウオルストンクラフトの出現を熱望して止みません。

◆ストーナー博士の『自然敎育の提唱』は錆びついて終つた現代敎育に鬱勃たる憤懣を抱いてゐる新人を狂喜させ、百年一日の蓄音機連に痛い一撃を加ふるものでありませう。「蓄音機の革命！」それを爲さしめ得ない根本の鍵は何か？　小さなものを虐殺する範疇を一日も早やく破壞しなければなりません。

◆『‥‥あたしはまた人生の悲哀を癒やすために踊る』といふ美しいパヴロア夫人の印象記はまた更に、夫人の自由の流動そのものゝやうな肉體から撒き散らされるにほひ高い藝術觀が窺はれます。

◆回々敎と基督敎の對立は、換言すれば白人と有色人との對抗です。被征服者と征服者との鬪爭です。搾取されたるものを取戻すは當然だ、なるなら血を流さぬ道を選べ。本世紀の最大記錄たる本記事は熟讀して下さい。

◆加藤一夫氏の別離の悲しき詩、ただ一讀しただけで涙がこぼれます。われ等はかく眞實の詩を喜ぶ。人間の眞のこもれる歌を喜ぶ。

◆本社の招聘にて來朝する大偉人アインスタイン氏の神戸着もいよ〳〵十一月十六日になりました。われ等も一萬年に一人——さうも生れぬ——大偉人の來朝が眞理の探究にどれだけ意義を與へてくれるかを刮目し、そしてその人を憧憬る。

〝菊池寛氏の「溺愛の沼」は筆者の意に充たないため打切り一月號より更に同氏の麗筆を揮はるゝ約ですから讀者諸君に斷つて置きます。

女性改造 定價表

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	壹錢五厘
六册	參圓	郵稅共
十二册	六圓	郵稅共

注文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇注文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の注文は壹部郵稅拾六錢を申受く（但し支那を除く）
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料（一等 百圓／二等 七拾圓）

㊞本社廣告取次所　博報堂　弘盛舍　日本電報通信社

大正十一年十月十七日印刷納本
大正十一年十一月一日發行
（十一月號六拾錢）

東京市芝區伊皿子町四十番地
編輯兼發行者 印刷者　平田貢一郎

東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　株式會社 博文館印刷所

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一
改造社
電話芝 長 一六三八・二八五四
振替東京 四三〇三・八四〇二

吉田絃二郎作

小說 ダビデと子たち

定價貳圓廿錢

送料十七錢
四六判布製

最新刊

「神靈の前には俺は乞丐だ」とダビデは自分の精神的空虛を認識した、彼は外世界に對つては一國の國王であり、一世の英雄兒として人間光榮の絕頂を窮めたが、しかも愛慾のために肉親の幾多實子たちと戀の鬪爭をつゞけ、これがため幾人もの有爲な實子を嬲り殺しにした。かく不義・非道を辿つたため老忠臣も昔戀しき南の草原へと去つた、曾つては全ユダの娘たちから美の化身、力の化身とまで崇められ、歡樂の中心となつた彼ダビデも、積惡の報いは覿面にて腫物の膿血と異臭とが王者としての權威を損するばかりでなく兒を失ひ、戀を逸した家庭的の温かき血も流れず、寂しき、悲しい魂の持主として神の愛をも受入るゝことの出來ぬ孤獨者となつた人生愁嘆の感激を宗教的に裏づけたものだ、本書によりて人生を見出し・愛慾によりて自己を發見せんとする者の一讀をお薦めする。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

VIRINA REKONSTRUO
(MONATA REVUO PLEJ ALTAKLASA POR VIRINOJ EN JAPANUJO)
UNU EKZ. 50 SEN; JARABONO 6 JEN.
ELDONEJO: KAIZO-SHA, TOKIO, SHIBA KU, ATAGOSHITA-MACI 1.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十一年十月十七日印刷納本
大正十一年十一月一日發行（毎月一日一回）
第壹卷第貳號
十一月號
特價金六拾錢

復刻版　女性改造（じょせいかいぞう）〔戦前編〕
第1回配本（第1巻～第3巻）

2007年6月25日　発行

揃定価（本体60、000円＋税）

発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03（3812）4433
印刷所　三　進　社
製本所　青木製本

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN978-4-8350-6069-9（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6068-2）